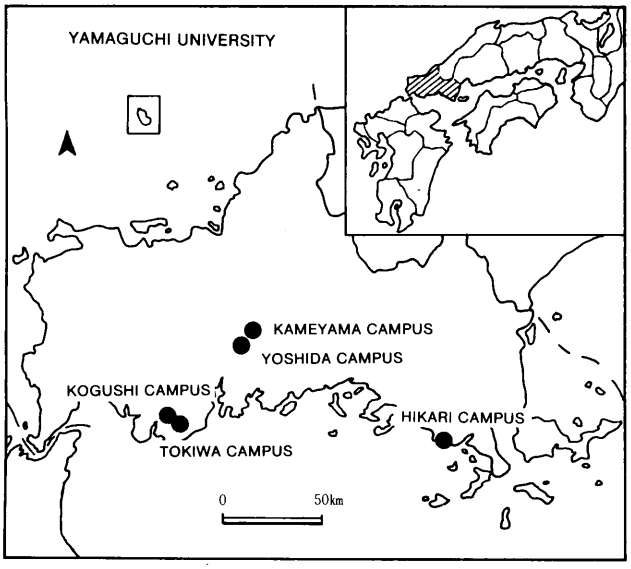
山口大学構内遺跡調査研究年報IX

1991

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学構内遺跡調査研究年報IX



1 9 9 1

山口大学埋蔵文化財資料館

例　　言

1．本書は、山口大学埋蔵文化財資料館が埋蔵文化財資料館運営委員会の指示を受けて、平成元年度に山口大学構内で実施した調査の報告書である。また、付篇Ｉとして昭和54年度に実施した吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査の成果、付篇IIとして吉田構内遺跡保存地区の総括、付篇IIIとして、「山口県内のミニチュア土器と模造品」を報告する。

2．現地における調査は、資料館員河村吉行・木村元浩（現 滋賀県栗東町文化体育振興事業団）が担当し、吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査は山口市教育委員会と合同で担当し、人文学部考古学研究室・山口県教育委員会の協力を得た。遺構の実測は、河村・木村が行なった。

3．調査・研究における事務一般は事務局庶務課庶務係・学事係が統括し、実施面においては各関係部局の事務部があたった。

4．出土遺物の整理は資料館員古賀真木子（旧姓小川）・同則近和佳代が行なった。

5．遺物の実測は、第２章・第３章・第５章を古賀、石器および付篇Ｉを河村が行なった。

6．製図は、主に則近が行なった。

7．本文の執筆は、第３章の３の土器・付篇IIIを古賀、第５章第１節１・６を木村、その他は河村が行なった。

8．現地における写真撮影は付篇Ｉを松岡睦彦（現 柳井市立柳井南中学校）その他および遺物の写真撮影は河村が行なった。

9．本書の編集は館員が協力して行なった。

10．調査・研究においてはカラースライドを作成しており、出土遺物とあわせ埋蔵文化財資料館が保管している。広く活用されることを希望したい。

11．調査組織は次のとおりである（平成元年度・平成２年度）

調査主体	埋蔵文化財資料館	館　長	近藤　喬一〔平成元年６月７日～〕
		館　員	河村　吉行
		〃	木村　元浩〔～平成元年10月15日〕
		〃	古賀真木子
		〃	則近和佳代〔平成２年４月16日～〕
事務局		事務局長	有地　成光
	本部庶務部	部　長	菊池　洋男
	庶務課	課　長	佐野　　紀〔～平成２年８月31日〕

	課　長	久保　鉄男〔平成２年９月１日～〕
	課長補佐	宮原　　毅
庶務係	係　長	野村　宗成〔～平成元年７月31日〕
	〃	楠元　敏胤〔平成元年８月１日～平成２年３月31日〕
		小野　静生〔平成元年４月１日～平成２年３月31日〕
		本田　正春〔～平成元年５月28日〕
		三浦　勝弘〔～平成２年３月31日〕
		坪井　厚子〔～平成２年３月31日〕
		山下　京子〔～平成２年３月31日〕
学事係	係　長	池田　圭介〔平成２年４月１日～〕
		多賀谷勇治〔平成２年４月１日～〕

12. 調査・研究にあたって下記の方々の多大な御協力と援助を受けた（官職は平成元年度）。

山口大学事務局庶務部　人事課長　石川恒雄、同課長補佐　森屋　守、同係長　有吉明、同係　藤井純朗、高藤裕行

経理部　部長　真塩　実、主計課長　本間　実、同課長補佐　兵頭欣二、経理課長　七木田晧亮、同課長補佐　河野繁之、総務係長　森本茂雄、監査係長　田中善人、管財係長　小林和生、用度係長　石川恒夫、用度主任　小室和輝、同係　須藤　馨

施設部　部長　藤岡　巌、企画課長　竹田忠文、建築課長　東山邦雄、同課長補佐　萩尾次男、設備課長　久芳　稔、総務係長　松永次郎、総務主任　栗谷年夫、企画係　三浦幸一、建築第一係長　稲垣實造、同係　河田徹也、武市佳人、建築第二係長　川西智信、同係　澤谷弘美、電気係長　吉永峯生、同係　松田清司、岡野友資、機械係長　鈴木輝美、同係　鹿嶋正則、板垣健一

学生部　部長　日高照晃、次長　大島隆治、学生課長　岡本昭夫、同課長補佐　林　威、学生係長　佐藤正治、同係　松重康次、金重達也、大学会館主任　端野輝昭

教育学部　事務長　吉岡隆夫、同補佐　中村義満、庶務係長　松本正史、会計係長　梅村　馨、同主任　林喜久雄、同係　安食一二三、

船木一顕、尾川加代子、岡田茂生、山口附属小学校長　田中稔穂、同副校長　平野愼吾、附属幼稚園長　川口政宏、同副園長　志熊淑子、山口附属学校係長　末成和憲、同係　山本恭子、片山美津枝、佐村順子

医学部　事務部長　吉田博次、同次長　宮脇照男、総務課長　原　國正、同課長補佐　廣石輝男、管理課長　出口小太郎、同課長補佐　林宏行、西野雅博、庶務係長　森田義富、管理係長　中村文穂、経理係長　伊藤敏穂、施設係長　小川賀津夫、設備係長　山本安雄、環境係長　山本直行

工学部　事務長　元永道徳、事務長補佐　柳　等、庶務係長　原　和男、会計係長　山本隆嗣

人文学部考古学研究室

山口県教育委員会

柴崎文男（現 防府市立野島中学校）、戸成崇和（現 山口県立大嶺高等学校）

山口市教育委員会

松岡睦彦（現 柳井市立柳井南中学校）、山田義男（現 山口市役所）

宇部市シルバー人材センター

末広産業

調査補助員

＜吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査＞

石井龍彦（現 山口県埋蔵文化財センター）、井上直明（現 日本通運）、岩崎仁志（現 山口県埋蔵文化財センター）、梶原　洋、亀谷尚子（旧姓藤井）、別府洋二（現 兵庫県教育委員会）、渡辺泰子（旧姓松尾）、渡辺　晃（現 日本旅行）〔人文学部考古学研究室〕

作業員

＜亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査＞

石川範子、石川好江、石津彰子、岡屋知子、上村八重子、重富惇子、谷川美彩世、永田久江、平田雪江、藤井松江、古谷安江、松尾秀子、森近冴子、宮家静代、山縣初子、吉岡千恵子

＜吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査＞

池田愛子、池田　博、石川美津子、石田保子、浦山正子、木村金吾、中井小梅、中廿満子、中村キヨ子、松沢正子、宮家　進

凡　　例

1．吉田構内における調査地区および層位、遺構の位置は国土座標を基準として北から南へ１～24、西から東へＡ～Ｚの番号を付して50m 方眼に区画した構内地区割のＡ―24区南西隅を起点（構内座標 x＝０，y＝０）とする構内座標値で表示する。なお、平面直角座標系第III系における座標値（X，Y）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

　　x＝X＋206,000

　　y＝Y＋ 64,750

2．各遺構は下記の記号で表記することがある。
竪穴住居跡……SB，土壙……SK，井戸……W，溝……SD，河川跡……NR

3．本書に使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他構内では磁北を示す。

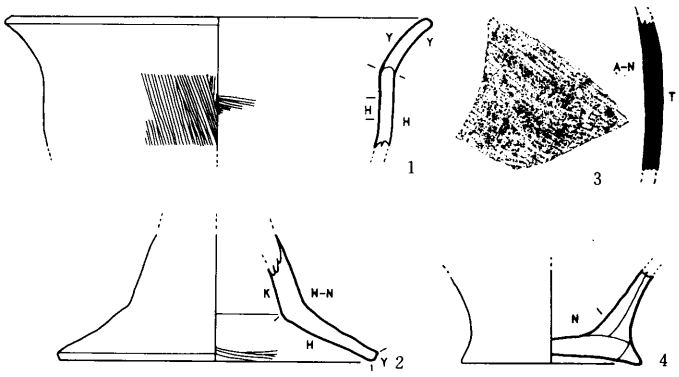
4．標高数値は海抜標高を示す。

5．本文中の遺物番号は、挿図・図版・遺物観察表の番号と一致させた。

6．遺物・土層の色調は農林省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1976）に準拠した。

7．土器の実測図は下記のように器種分類した。
断面黒ぬり……須恵器、須恵質土器，断面白ぬり……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、瓦，断面網目……陶磁器

8．土器の器面調整については、断面周囲に調整の境界を記し、境界間に下記の略記号により明示した。ただし、風化等による不明部分は無記入とした。



【土器実測図の調整凡例】
〔種類〕
N……ナデ（Nh ヘラナデ）
Y……横ナデ（Yh ヘラ横ナデ）
H……刷毛目、M……ミガキ
K……ケズリ、T……タタキ
A……タタキ当て具痕、C……カキ目
J……条痕、U……施釉、X……条線
HK……底部ヘラ切り、IK……底部糸切り
I……板目圧痕、Oy……指オサエ
〔先後関係〕
H―N……刷毛目のちナデ

1：口縁部内外面横ナデ。胴部は外面縦刷毛目、内面は横刷毛目が一部みられるが調整不明。

2：外面刷毛目のちナデ。裾端部は横ナデする。内面は、脚柱部へラケズリ、裾部横刷毛目。

3：外面平行タタキ、内面はのち当て具痕をナデ消す。

4：底部内面のみナデが観察できるが、あとは内外面とも調整不明。

本　文　目　次

第１章　平成元年度山口大学構内遺跡調査概要 ……（河村）… 1

第２章　吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査 ……（河村）… 5
1　調査の経過 …… 5
2　層位 …… 5
3　遺構 …… 7
4　出土遺物 …… 7
5　小結 …… 8

第３章　亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査 ……（古賀・河村）… 11
1　調査の経過 …… 11
2　層位・遺構 …… 17
3　出土遺物 …… 27
4　小結 …… 34

第４章　小串構内医学部附属病院 MRI 棟新営に伴う試掘調査 …（河村）… 41
1　調査の経過 …… 41
2　層位 …… 41
3　出土遺物 …… 44
4　小結 …… 45

第５章　平成元年度山口大学構内の立会調査 ……（木村・河村）… 47
第１節　吉田構内の立会調査
1　椹野寮ボイラー設備改修に伴う立会調査 …… 47
2　野球場防球ネット新営に伴う立会調査 …… 48
3　防火水槽配管布設に伴う立会調査 …… 49
4　吉田寮ボイラー設備改修に伴う立会調査 …… 50

5　体育施設系給水管改修に伴う立会調査 …… 51
6　大学会館前記念植樹に伴う立会調査 …… 52
7　吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修に伴う立会調査 …… 53
8　第二武道場排水溝新営に伴う立会調査 …… 55
9　案内標識設置に伴う立会調査 …… 56
10　本部車庫給水管改修に伴う立会調査 …… 57
11　大学会館前庭環境整備に伴う立会調査 …… 58
第2節　常盤構内の立会調査
1　工学部夜間照明装置および防球ネット設置に伴う立会調査 …… 59
2　工学部記念植樹に伴う立会調査 …… 60
第3節　亀山構内の立会調査
1　教育学部附属幼稚園バレーボールコート支柱設置に伴う立会調査 …… 61
2　教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う立会調査 …… 62
第4節　その他構内の立会調査
本部1号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査 …… 66

付篇

付篇　I
吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査 ……（河村）… 67
1　調査の経過 …… 67
2　層位 …… 68
3　遺構 …… 68
4　出土遺物 …… 74
5　小結 …… 88

付篇　II
吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括） ……（河村）… 95
1　調査の経過・概要 …… 95

2　遺構 …… 96
(1)　竪穴住居跡 …… 96
(2)　土壙 …… 102
(3)　溝 …… 103
(4)　河川跡 …… 105
(5)　土器溜り …… 105
(6)　その他の遺構 …… 105
3　遺物 …… 106
4　集落構造 …… 107
(1)　弥生時代 …… 107
(2)　古墳時代 …… 110
5　おわりに …… 112

付篇　III
山口県内のミニチュア土器と模造品 ……（古賀）… 115
1　はじめに …… 115
2　ミニチュア土器 …… 115
3　石製模造品と製塩土器 …… 119
4　土製模造品 …… 119
5　遺跡・遺物の性格 …… 121
6　おわりに …… 121

山口大学構内遺跡調査要項
山口大学埋蔵文化財資料館規則 …… 131
山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則 …… 132
山口大学構内の主な調査 …… 134
Summary …… 141

図 版 目 次

＜吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査＞　本文対応頁

ＰＬ．１　吉田構内全景（北西から）

ＰＬ．２(1)　Ａ区溝状遺構遺物出土状況（西から）……7

(2)　Ａ区溝状遺構（西から）……7

ＰＬ．３(1)　Ｂ区土壙（西から）……6

(2)　Ｂ区北壁土層断面（南から）……6

(3)　出土遺物

＜亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査＞

ＰＬ．４(1)　Ａ区西半部河川跡（南西から）……17

(2)　Ａ区東半部河川跡（北東から）……17

ＰＬ．５(1)　Ａ区拡張部河川跡（南西から）……17

(2)　Ｄ区西壁南端部土層断面（東から）……19

ＰＬ．６(1)　Ｇ区東端部第１号土壙（南西から）……19

(2)　Ｇ区西端部第２号土壙（南から）……19

(3)　Ｐ区柱穴・溝切り合い状況（北から）……19

(4)　Ｐ区柱穴・溝（北から）……19

ＰＬ．７(1)　Ｐ区土壙（北から）……19

(2)　Ｒ区柱穴（北西から）……21

(3)　Ｓ区全景（北東から）……21

ＰＬ．８(1)　Ｓ区西半部地山落ち込み状況（南西から）……21

(2)　Ｓ区南壁西端部土層断面（北西から）……21

ＰＬ．９(1)　Ｔ－１区土壙（南西から）……22

(2)　Ｔ－１区土壙土層断面（北東から）……22

(3)　Ｔ－１区南端部地山落ち込み状況（北東から）……22

(4)　Ｔ－２区西壁中央部土層断面（北東から）……22

ＰＬ．10(1)　Ｔ－３区東半部遺構検出状況（南西から）……22

(2)　Ｔ－３区西半部遺構検出状況（北東から）……22

ＰＬ．11(1)　Ｔ－３区東半部完掘状況（南西から）……22

(2)　T－3区西半部完掘状況（北東から）　……　22
PL．12(1)　T－3区第1号土壙（南東から）　……　22
(2)　T－3区第2号土壙（北から）　……　22
(3)　T－4区完掘状況（南東から）　……　23
PL．13(1)　T－5区北半部遺構検出状況（南東から）　……　23
(2)　T－5区北半部完掘状況（南東から）　……　23
PL．14(1)　T－5区南半部遺構検出状況（南東から）　……　23
(2)　T－5区第1号土壙（北西から）　……　24
(3)　T－5区第2号土壙（南東から）　……　24
PL．15(1)　U区遺構検出状況（北東から）　……　24
(2)　U区完掘状況（北東から）　……　24
PL．16(1)　U区第1・2号竪穴住居跡および第1・2号溝検出状況（北西から）　25～27
(2)　U区第1号竪穴住居跡および第2号溝（北西から）　……　25・27
PL．17(1)　U区第2号竪穴住居跡および第1号溝（北西から）　……　25・26
(2)　U区土壙（南西から）　……　26
PL．18　出土遺物(1)
PL．19　出土遺物(2)
PL．20　出土遺物(3)
＜小串構内医学部附属病院MRI棟新営に伴う発掘調査＞
PL．21(1)　小串構内(医学部、同附属病院、医療技術短期大学部)全景(南西から)
(2)　調査区全景（北から）
PL．22(1)　Aトレンチ全景（東から）　……　41
(2)　Bトレンチ南半部全景（西から）　……　42
(3)　Bトレンチ北半部全景（北から）　……　42
(4)　Cトレンチ南半部全景（南から）　……　42
PL．23(1)　Cトレンチ北半部全景（西から）　……　42
(2)　Aトレンチ南壁中央部土層断面（北から）　……　41
(3)　Bトレンチ南東隅土層断面（北から）　……　42
(4)　Cトレンチ北東隅土層断面（西から）　……　42
PL．24(1)　出土遺物（表）

(2)　出土遺物（裏）
(3)　出土遺物（石核）
＜平成元年度山口大学構内の立会調査＞
ＰＬ．25(1)　亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う立会調査溝状遺構検出状況(北東から)　……　62
(2)　亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う立会調査溝状遺構完掘状況(北東から)　……　62
ＰＬ．26(1)　亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う立会調査出土遺物
(2)　吉田構内体育施設系給水管改修に伴う立会調査出土遺物
(3)　吉田構内吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修に伴う立会調査出土遺物

付篇　Ⅰ
＜吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査＞
ＰＬ．27(1)　調査区近景（北東から）
(2)　調査区全景（北東から）
ＰＬ．28(1)　溝完掘状況（北東から）　……　68～73
(2)　第１号土壙（北西から）　……　74
(3)　第２号土壙（南東から）　……　74
ＰＬ．29(1)　第１号溝遺物出土状況（北から）　……　68
(2)　第１号溝遺物出土状況（南西から）　……　68
(3)　第１号溝遺物出土状況（北東から）　……　68
(4)　第２号溝遺物出土状況（南東から）　……　68
ＰＬ．30　出土遺物(1)
ＰＬ．31　出土遺物(2)
ＰＬ．32　出土遺物(3)
ＰＬ．33　出土遺物(4)
ＰＬ．34　出土遺物(5)
ＰＬ．35　出土遺物(6)
ＰＬ．36　出土遺物(7)
ＰＬ．37　出土遺物(8)
ＰＬ．38　出土遺物(9)

ＰＬ．39　出土遺物(10)
付篇　II
＜吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）＞
ＰＬ．40(1)　昭和57年度調査区北端部全景（東から）
(2)　昭和57年度調査区西端部全景（東から）
ＰＬ．41(1)　昭和57年度調査区南端部全景（東から）
(2)　昭和59年度調査区全景（東から）
ＰＬ．42(1)　昭和60年度調査区全景（東から）
(2)　昭和61年度調査区全景（東から）
ＰＬ．43(1)　第９号竪穴住居跡（東から）…… 99
(2)　第13号竪穴住居跡（北西から）…… 100
ＰＬ．44(1)　第19号竪穴住居跡（南西から）…… 101
(2)　第20号竪穴住居跡（北西から）…… 101
ＰＬ．45(1)　第21号竪穴住居跡（北東から）…… 102
(2)　第21号竪穴住居跡環濠（第６号溝）（北西から）…… 102
ＰＬ．46(1)　第13号竪穴住居跡桁材縦断面（南東から）…… 100
(2)　第13号竪穴住居跡桁材横断面（北東から）…… 100
(3)　第20号竪穴住居跡出入口状施設（南から）…… 101
(4)　第20号竪穴住居跡出入口状施設（西から）…… 101
ＰＬ．47(1)　第67・69号土壙（北東から）…… 103
(2)　河川跡土層断面（南東から）…… 105
(3)　土器溜り遺物出土状況（西から）…… 105
(4)　性格不明の遺物出土状況（東から）…… 105

挿　図　目　次

＜平成元年度山口大学構内遺跡調査の概要＞
Fig.　1　山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図 …… 3
Fig.　2　山口大学小串・常盤両キャンパス位置図 …… 4

＜吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査＞
Fig. 3　調査区位置図 …… 5
Fig. 4　土層断面実測図 …… 6
Fig. 5　溝状遺構実測図 …… 6
Fig. 6　出土遺物実測図 …… 7
＜亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査＞
Fig. 7　調査区位置図 …… 11
Fig. 8　調査区設定図 …… 12
Fig. 9　土層断面実測図(1) …… 13・14
Fig. 10　土層断面実測図(2) …… 15・16
Fig. 11　A区河川跡実測図 …… 17
Fig. 12　遺構配置図 …… 18
Fig. 13　G・P・T－1・T－3区遺構実測図 …… 20
Fig. 14　T－5区遺構実測図 …… 24
Fig. 15　U区遺構配置図 …… 25
Fig. 16　U区第1号竪穴住居跡実測図 …… 26
Fig. 17　U区第2号竪穴住居跡実測図 …… 26
Fig. 18　U区土壙実測図 …… 27
Fig. 19　出土遺物実測図(1) …… 29
Fig. 20　出土遺物実測図(2) …… 30
Fig. 21　出土遺物実測図(3) …… 31
Fig. 22　出土遺物実測図(4) …… 33
＜小串構内医学部附属病院MRI棟新営に伴う試掘調査＞
Fig. 23　調査区位置図 …… 41
Fig. 24　トレンチ設定図 …… 42
Fig. 25　土層断面実測図 …… 43
Fig. 26　出土遺物実測図 …… 45
＜平成元年度山口大学構内の立会調査＞
吉田構内の立会調査
Fig. 27　調査区位置図 …… 47

Fig. 28　調査区位置図 …… 48
Fig. 29　調査区位置図 …… 49
Fig. 30　調査区位置図 …… 50
Fig. 31　調査区位置図 …… 51
Fig. 32　出土遺物実測図 …… 51
Fig. 33　調査区位置図 …… 52
Fig. 34　調査区位置図 …… 53
Fig. 35　土層断面実測図 …… 54
Fig. 36　出土遺物実測図 …… 54
Fig. 37　調査区位置図 …… 55
Fig. 38　調査区位置図 …… 56
Fig. 39　調査区位置図 …… 57
Fig. 40　調査区位置図 …… 58
常盤構内の立会調査
Fig. 41　調査区位置図 …… 59
Fig. 42　調査区位置図 …… 60
亀山構内の立会調査
Fig. 43　調査区位置図 …… 61
Fig. 44　調査区位置図 …… 62
Fig. 45　土層断面実測図 …… 63
Fig. 46　溝状遺構実測図 …… 63
Fig. 47　出土遺物実測図(1) …… 63
Fig. 48　出土遺物実測図(2) …… 64
その他構内の立会調査
Fig. 49　調査区位置図 …… 66

付篇　I

＜吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査＞

Fig. 50　第１次試掘調査地点位置図 …… 68
Fig. 51　第２次試掘調査地点位置図 …… 68

Fig. 52　調査区位置図 …… 69
Fig. 53　遺構配置図 …… 70
Fig. 54　溝断面実測図 …… 72
Fig. 55　土壙実測図 …… 74
Fig. 56　第１号溝出土遺物実測図(1) …… 76
Fig. 57　第１号溝出土遺物実測図(2) …… 77
Fig. 58　第１号溝出土遺物実測図(3) …… 78
Fig. 59　第１号溝出土遺物実測図(4) …… 79
Fig. 60　第２号溝出土遺物実測図(1) …… 82
Fig. 61　第２号溝出土遺物実測図(2) …… 83
Fig. 62　第２号溝出土遺物実測図(3) …… 84
Fig. 63　第２号溝出土遺物実測図(4) …… 85
Fig. 64　第２号溝出土遺物実測図(5) …… 86
Fig. 65　第３・７号溝出土遺物実測図 …… 86
Fig. 66　第２号土壙出土遺物実測図 …… 87
Fig. 67　石器実測図 …… 88

付篇　II

＜吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）＞

Fig. 68　調査区位置図 …… 95
Fig. 69　第９号竪穴住居跡実測図 …… 96
Fig. 70　遺構配置図 …… 97・98
Fig. 71　第13号竪穴住居跡実測図 …… 99
Fig. 72　第19号竪穴住居跡実測図 …… 100
Fig. 73　第20号竪穴住居跡実測図 …… 101
Fig. 74　第21号竪穴住居跡実測図 …… 102
Fig. 75　第67号土壙実測図 …… 103
Fig. 76　第69号土壙実測図 …… 103
Fig. 77　第６号溝実測図 …… 104
Fig. 78　性格不明の遺物出土状況実測図 …… 105

付篇　III

＜山口県内のミニチュア土器と模造品＞
Fig. 79　吉田構内本部２号館・西遺跡第26号土壙出土土器の法量分布 …… 115
Fig. 80　ミニチュア土器・模造品出土遺跡分布図 …… 116
Fig. 81　壺・甕・鉢の法量分布と分類 …… 117
Fig. 82　ミニチュア土器の分類表 …… 118
Fig. 83　製塩土器出土遺跡分布図 …… 120

Fig. 84　山口大学吉田構内地区割および調査区位置図 …… 143・144
Fig. 85　山口大学小串構内調査区位置図 …… 145・146
Fig. 86　山口大学常盤構内調査区位置図 …… 147・148
Fig. 87　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図 …… 149・150
Fig. 88　山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図 …… 151・152
Fig. 89　山口大学光構内調査区位置図 …… 153・154

表　目　次

＜平成元年度山口大学構内遺跡調査の概要＞
Tab. 1　平成元年度山口大学構内遺跡調査一覧表 …… 1
＜吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査＞
Tab. 2　出土遺物観察表 …… 9
＜亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査＞
Tab. 3　出土遺物観察表 …… 37～39
＜小串構内医学部附属病院 MRI 棟新営に伴う試掘調査＞
Tab. 4　出土遺物観察表 …… 45
＜平成元年度山口大学構内の立会調査＞
　亀山構内の立会調査
Tab. 5　出土遺物観察表 …… 64

付篇　I

<吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査>

Tab. 6　出土遺物観察表 …… 90～94

付篇　III

<山口県内のミニチュア土器と模造品>

Tab. 7　主に塩の消費地と考えられる製塩土器出土地地名表 …… 120・121
Tab. 8　石製模造品・土製模造品出土地地名表 …… 122・123
Tab. 9　ミニチュア土器出土地地名表 …… 123～130

Tab. 10　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員 …… 133
Tab. 11　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員 …… 133
Tab. 12　山口大学構内の主な調査一覧表 …… 134～140

第１章　平成元年度山口大学構内遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口・宇部・光の県内各市に分散している。各構内には、縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての複合集落遺跡として著名な吉田構内をはじめとして、周知の遺跡が埋存している。山口大学埋蔵文化財資料館は学内共同利用施設として、これら各構内において現状変更を伴う諸工事に対し、埋蔵文化財保護の立場から調査・研究を行っている。各構内において、埋蔵文化財の調査を必要とする場合は、工事地域周辺における既往の調査結果や工事の内容、埋蔵文化財に対する影響の度合等を勘案し、埋蔵文化財資料館運営委員会の議を経て、立会・試掘・事前の三種の調査方法によって調査を実施している。

平成元年度は事前調査２件、試掘調査１件、立会調査16件の計19件の調査を実施した。

Tab. 1　平成元年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	調査面積(㎡)	調査期間	挿図番号
事前	水銀灯新営	吉田構内	K・L—15	4	6月10日～6月12日	Fig.84—106
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設	亀山構内		260	8月21日～10月22日	Fig.87—9
試掘	医学部附属病院MRI棟新営	小串構内		45	6月26日～7月6日	Fig.85—19
立会	椹野寮ボイラー設備改修	吉田構内	O・P—19・20	25	4月3日	Fig.84—107
	野球場防球ネット新営	吉田構内	I・J・K—21 H・I・K—22	7	4月3・4日	Fig.84—108
	防火水槽配管布設	吉田構内	K—21・22	15	4月4・5日	Fig.84—109
	吉田寮ボイラー設備改修	吉田構内	L—8	4	4月6日	Fig.84—110
	体育施設系給水管改修	吉田構内	G・H—16	50	6月19日	Fig.84—111
	大学会館前記念植樹	吉田構内	M—13	6	6月8日	Fig.84—112
	吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修	吉田構内	L・M—8	45	10月2・3日	Fig.84—113
	第二武道場排水溝新営	吉田構内	G・H—15・16	2	10月9日	Fig.84—114
	案内標識設置	吉田構内	I—14 L—18	0.5	1月4日	Fig.84—115
	本部車庫給水管改修	吉田構内	L—13	6.5	1月10日	Fig.84—116
	大学会館前庭環境整備	吉田構内	L・M・N—14・15	35	3月7日	Fig.84—117
	工学部夜間照明装置および防球ネット設置	常盤構内		2	2月21日	Fig.86—7

立会	工学部記念植樹	常盤構内		2.5	3月22日	Fig.86—8
	教育学部附属幼稚園バレーボールコート支柱設置	亀山構内		0.3	11月22日	Fig.87—10
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設	亀山構内		170	1月8日～3月14日	Fig.87—11
	本部1号職員宿舎公共下水道切替			1	3月5日	

吉田構内の調査(本部、人文・教育・経済・理・農の各学部、教養部:山口市大字吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在)

事前調査1件、立会調査11件の計12件の調査を実施した。

水銀灯新営に伴う事前調査では、5世紀代の溝・柱穴および遺物包含層を検出した。同時期の竪穴住居跡は、調査地域の北東の丘陵頂部付近に立地する大学会館前庭部および第二学生食堂敷地で十数棟が検出されており、集落の分布範囲がさらに南西に広がっていることを示唆した。遺物包含層は3層存在し、調査地域の北側に隣接する大学会館前庭部分で検出したものと同一層である。各層とも弥生時代から平安時代のものを包含しており、一時期の遺物によって構成されていない。出土遺物のうち、六連式製塩土器は構内遺跡では初例で、8～9世紀における塩の需要・供給関係、流通経路を解明するための基礎資料となった。

立会調査では6件の調査で、遺構もしくは遺物包含層を検出し、遺物が出土した。

吉田構内の北端部で行われた吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修工事では、遺物包含層から古墳時代を主とした遺物が出土した。出土遺物のなかには縄文時代にさかのぼるものも含まれており、周辺の丘陵縁辺部に縄文時代から古墳時代にかけての居住地が存在する可能性がある。

構内の南西部で行われた野球場防球ネット新営および防火水槽配管布設工事では、柱穴などの遺構を検出した。調査地域は「遺跡保存地区」の南側に位置しており、「遺跡保存地区」と一連の弥生時代から古墳時代にかけての集落関連遺構が南方の野球場にも広範囲に分布していることが明かとなった。

構内の西部で実施した体育施設系給水管改修、および中央部よりやや北で実施した大学会館前庭環境整備工事に伴う立会調査では溝を検出した。前者は、北東－南西に走行し、幅約4.8mの規模をもつ。遺物は出土しなかったが、埋積土の色調・粒土・組成などから弥生時代から古墳時代のものと考えられる。なお、この溝は関係部局との協議の結果、現地保存されることとなった。後者は、中世のものと思われ、幅約40cmの規模をもち、東－西

に走行する。

構内の北部で行われた本部車庫給水管改修工事では、遺物包含層の客土から弥生土器が若干出土した。

小串構内の調査(医学部、同附属病院、医療技術短期大学部:宇部市大字小串 1144 所在)

構内のほぼ中央部で医学部附属病院ＭＲＩ棟新営に伴い、試掘調査を実施した。遺構は検出できなかったが、旧水田耕作土以下の二次堆積層から、削器、二次加工のある剥片、細石刃、石核など 12 点が出土した。新営予定地の北東に隣接する病棟敷地では、先の調査でナイフ形石器、削器、二次加工のある剥片、石核などがまとまって出土しており、剥片剥離技術、石材も共通する要素が多い。

常盤構内の調査(工学部、工業短期大学部:宇部市常盤台 2557、尾山宿舎:同上野中所在)

北西部のグラウンドおよび西端部で 2 件の立会調査を実施した。両調査地点とも造成による構内の削平が著しく、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

亀山構内の調査(教育学部附属幼稚園:山口市白石三丁目 1-2、同山口小学校:同三丁目 1-1、同山口中学校:同一丁目 9-1 所在)

幼稚園・山口小学校敷地で事前調査 1 件、立会調査 2 件の計 3 件の調査を実施した。

汚水排水管布設に伴う事前調査では、階段状に二段にわたって造成されている小学校敷地の上位面を中心に、今回、はじめてまとまって遺構が検出された。遺構は幼稚園敷地で庄内段階の河川跡、小

Fig. 1　山口大学吉田・亀山両キャンパス位置図

学校敷地で弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡1棟、土壙10基のほか溝・柱穴などがある。特に、小学校運動場南縁部では、弥生時代中〜後期および庄内段階の2棟の竪穴住居跡を検出した。先の調査では検出地点のすぐ南西で5世紀の竪穴住居跡が検出されているが、検出面には約50㎝の標高差がある。両遺構の時期差はあまりなく、旧耕作土が残存していることから、この付近で地山が西に下降しているか、階段状にカットされている可能性がある。

遺物包含層は構内の南半部を中心に検出し、低学年棟周辺の谷状の落ち込みから古墳時代を主とした遺物が多量に出土した。

2件の実施した立会調査のうち、汚水排水管布設工事では柱穴、溝状遺構を検出した。いずれも小学校運動場の東縁で検出したもので、溝状遺構は幅約5.9m以上の規模をもち、東－西に走行する。やや時期幅のある遺物が混在して出土したが、主体は弥生時代後期後半〜終末のものである。小学校運動場の北西縁では先に、弥生時代終末〜古墳時代初頭の溝状遺構が検出されているが、検出地点が離れており、また、流路方向が異なることから一連のものかどうかわからなかった。

なお、亀山構内の北端部に位置する、幼稚園運動場でのバレーボールコート支柱設置に伴う立会調査では、顕著な遺構・遺物は認められなかった。

その他構内の調査

山口市水の上町6-1に所在する本部職員宿舎において立会調査を実施したが、顕著な遺構・遺物は認められなかった。 （河村）

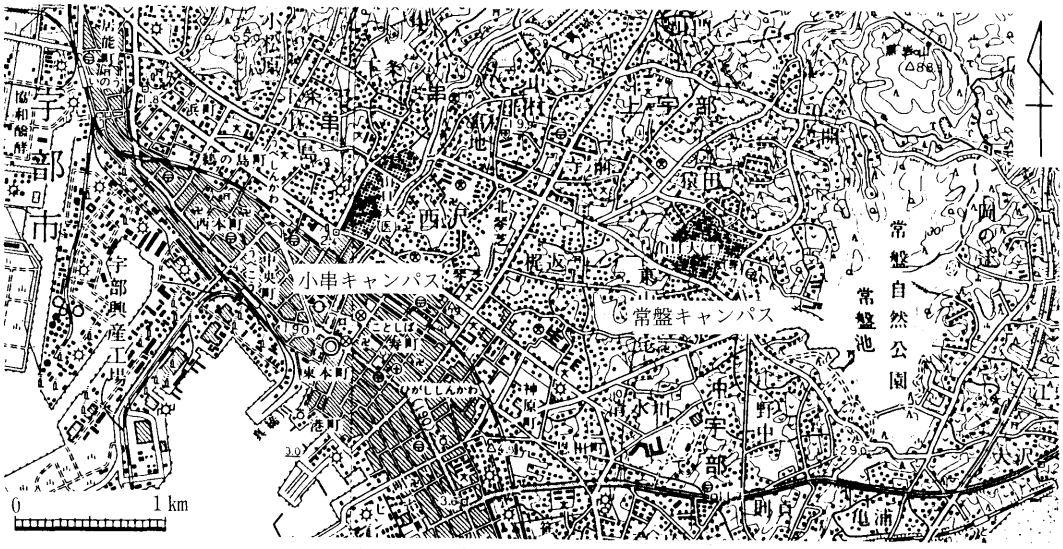


Fig. 2 山口大学小串・常盤両キャンパス位置図

第２章　吉田構内水銀灯新営に伴う発掘調査

１　調査の経過

本部１号館および大学会館前庭南側を東西に貫通する構内循環道路に、視覚障害者用の点字ブロックの新営が計画された。点字ブロックの新営に伴う工事は、現地表面からわずか 18 cmの掘削であったため、直接、埋蔵文化財に影響をおよぼす規模ではなかったため、調査対象から除外した。しかし、付随工事として、循環道路に沿った歩道部分３ヶ所に水銀灯の新設が予定されていたため、工事規模および過去の調査結果を勘案して、立会調査を実施した。

その結果、本部１号館の南西部分および大学会館前庭の南西部分の計２ヶ所で遺物包含層が検出された。調査結果をうけて関係部局と協議の結果、工事の性格上、掘削規模および設置地点の変更が困難なことから、新設地点について事前に発掘調査を実施することとなった。

調査は電気ケーブルの埋設地点２ヶ所について実施し、本部１号館の南西に位置する２m×１ m の調査区をＡ区、大学会館前庭部の南西に位置する 1.5m×1.3m の調査区をＢ区と呼称した。調査期間は平成元年６月 10 日から 12 日までで、調査面積は約４㎡である。構内造成による埋め土は重機を使用して排除し、以下は手掘りによる分層発掘を行った。

２　層位（Fig. 4，PL. 3(2)）

Ａ区

南東隅は撹乱によって消失している。現地表面の標高は約 19.10m で、構内造成時の埋め土が厚さ約 90 cmにわたって客土されている。その直下には、オリーブ黒色土の遺物包含層が堆積しており、須恵器１点出土した。層厚は約 5～15 cmで、東側に厚く堆積している。旧耕作土・床土は認められない。遺物包含層の下位は黄褐色粘土の地山で、調査区の東端部で柱穴および５世紀代の溝状遺構を検出した。

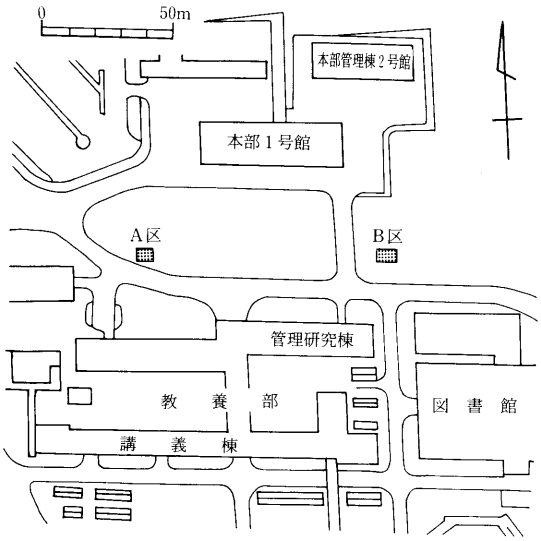


Fig. 3　調査区位置図

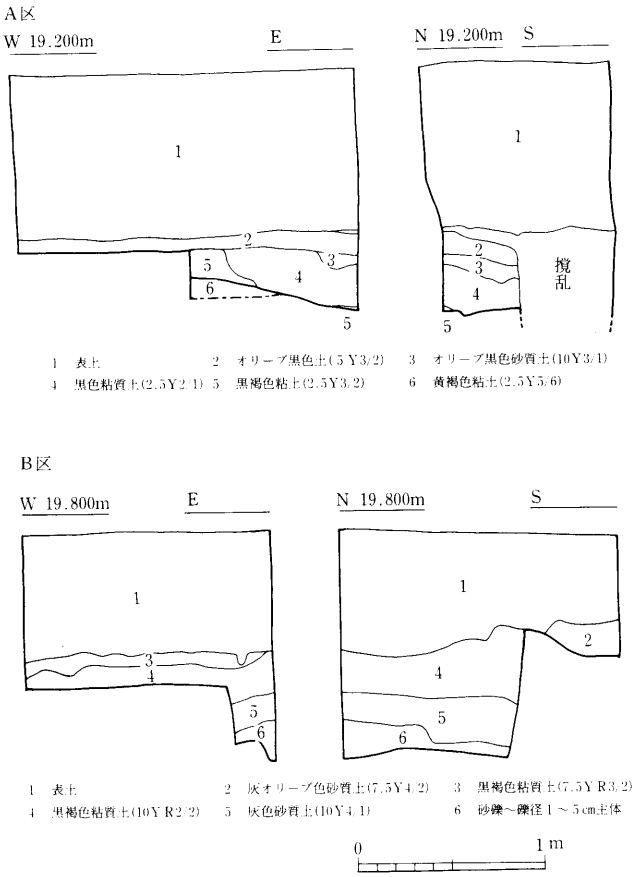


Fig. 4　土層断面実測図

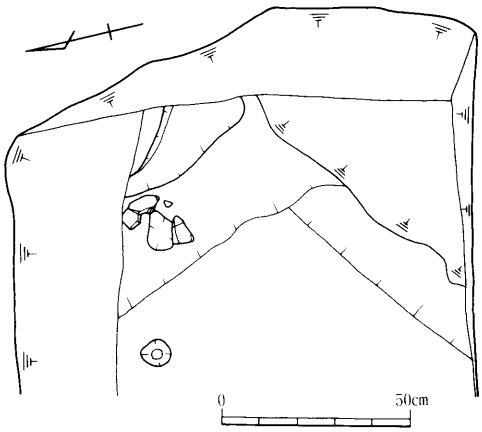


Fig. 5　溝状遺構実測図

B区

A区の東方、約65mに位置する。現地表面の標高は約19.70mで、構内造成時の埋め土は東側で約45cm、西側で約65cmの厚さにわたって客土されている。A区同様、旧耕作土・床土は認められない。

埋め土の直下には、3層にわたって遺物包含層が堆積する。

最上層は、層厚約5～10cmの第3層：黒褐色粘質土（Hue7.5YR3/2）で、東端部には堆積していない。弥生土器、土師器、須恵器を包含する。その下位には、弥生土器、土師器、須恵器、歴史時代土師器、六連式製塩土器を包含する第4層：黒褐色粘質土（Hue10YR2/2）が堆積する。層厚は平均約20cm、最大約40cmで、他の2層の包含層に比べて、遺物の包含量は多い。南東隅では、同層を掘り込んだ灰オリーブ色砂質土の充填した土壙が検出された。南への延長部分は調査区外におよぶため完掘しておらず、また、出土遺物もないため、規模、時期等ははっきりしない。最下層は、弥生土器、須恵器等を若干含む第5層：灰色砂質土である。層厚は平均約15cm、最大約25cmで、植物遺体を含む。遺物包含層の下位は、無遺物層である砂礫を介在

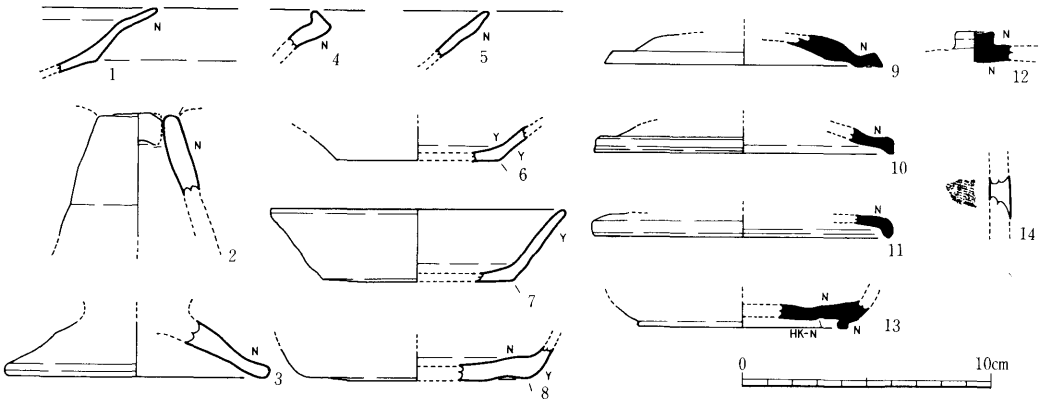


Fig. 6　出土遺物実測図

して、黄色粘土の地山となる。

なお、表土中から弥生土器、土師器、須恵器数点が出土した。

3　遺構

溝状遺構（Fig. 5，PL. 2）

A区の東端部で検出したが、東への延長部分は調査区外にあたるため完掘しておらず、規模は明かでない。撹乱によって南半部を消失している。検出面の標高は約18.15mで、中央部で屈曲して走行しており、2基の遺構が重複している可能性がある。深さは溝底と思われる北東部で27cmである。埋積土は、上層がオリーブ黒色砂質土（Hue10Y3/1）、下層が黒色粘質土（Hue2.5Y2/1）である。

遺物は、下層を中心に土師器高坏・台付椀などが出土したが、量的には多くはない。5世紀代。

柱穴

溝状遺構のすぐ西側で検出した。上面径約7cm、深さは2cmを残すにすぎない。埋積土は黒色粘質土（Hue2.5Y2/1）で、溝状遺構の下層と同色調である。

出土遺物はない。

4　出土遺物（Fig. 6，PL. 3(3)）

1～3はA区の溝状遺構出土の土師器。1・2は高坏。1は浅い坏部が弱く反転し、口縁部はさらに「く」の字に屈曲して外弯ぎみに開く。口縁端部は尖る。2は円盤充塡法の脚柱部で、外方への開きがやや大きい。3は台付椀の脚台部で、器壁が厚く、成形は極めて粗雑に行われている。

4～14はB区の遺物包含層出土のもので、弥生土器、土師器、須恵器、歴史時代土師

器、六連式製塩土器などがある。

4は跳ね上げ口縁をもつ弥生土器の甕。5～8は歴史時代土師器。5～7は皿。5は極めて粗雑な調整による口縁部で、端部は尖りぎみに終わる。6・7は底部と体部の境が明瞭で、7は直線的に立ち上がる体部から、口縁部は内面の強い横ナデによって、外反ぎみに開く。8は坏。底部と体部の境は極めて不明瞭で、体部は内弯して立ち上がる。5～8とも風化著しいが、7の器形・法量からみて糸切り底であろう。9～13は須恵器の坏。9～12は坏蓋。口縁部が鳥嘴状を呈し、口縁部付近で水平に近く開き、接地点が口縁端部とその内側にあるもの(9)、体部から口縁部にそのままゆるやかに移行し、口縁端部で接地するもの（10）や口縁部が外弯して短く下降するもの（11）などがある。12は撮み部で、上面はわずかに窪む。13は高台を有する坏身。底部と体部の境にいびつな高台を貼付する。外底面はヘラ切りののち、軽くナデている。14は六連式製塩土器の胴部。小破片のため、外面の調整がわかりにくいが、指頭による成形ののちナデているものと思われる。タタキの有無は不明。内面には極細の布目痕が明瞭に残る。胎土には粗い砂粒を多く含む。二次的な加熱痕はみられない。

6は第3層、5・7～14は第4層、4は第5層出土。

5　小結

A区周辺は、その北東に位置する本部1号館敷地および大学会館前庭部に比べて約2.5～3m低くなっている。本部1号館敷地の南西部分ではこれまで散発的な立会調査を行っているが得られる知見に乏しく、調査前には、統合移転に伴う造成工事によってすでに大規模に削平を受け、遺物包含層、遺構が消失した地域であろうと想定されていた。しかし、今回、溝状遺構、柱穴などの遺構を検出したことによって、集落関連遺構が残存していることが明かとなった。

北東から南西に延びる丘陵の頂部付近に立地する、本部1号館敷地や第二学生食堂敷地などでは、過去の調査で4～5世紀代の竪穴住居跡が十数棟検出されている[1]。A区で検出した溝状遺構、柱穴は、これらの竪穴住居跡群とほぼ同時期で、一連の集落を構成しているものと考えられ、当該期の集落の分布範囲がさらに西側に広がっていることを示唆している。

遺物包含層はA・B両区で検出した。A区では、出土量は極めて小量であったが、B区では、3層にわたって堆積する遺物包含層から比較的多量の遺物が出土した。各層とも、弥生時代から平安時代にかけての遺物が混在しており、単一時期の遺物によって構成され

小　　結

Tab. 2　出土遺物観察表

法量(　)は復原値

番号	器　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎　土	焼　成	備　考
A区						
1	土師器　高坏		にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良　好	やや不良	
2	土師器　高坏		にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良　好	不　良	
3	土師器　埦	②(10.4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	良　好	やや不良	
B区						
4	弥生土器　甕		灰白色 (2.5Y8/2)	良　好	良　好	跳ね上げ口縁
5	土師器　皿		灰白色 (5Y7/1)	不　良	不　良	
6	土師器　皿	②(6.6)	淡黄色 (2.5Y8/3)	不　良	不　良	
7	土師器　皿	①(11.9) ②(7.7) ③2.9	灰白色 (2.5Y8/2)	不　良	不　良	
8	土師器　坏	②(9.0)	①淡黄色 (2.5Y8/3) ②橙色 (2.5YR7/6)	不　良	不　良	
9	須恵器　坏蓋	②(11.2)	①青灰色 (5B6/1) ②暗青灰色 (5B4/1)	良　好	良　好	
10	須恵器　坏蓋	②(12.1)	青灰色 (10BG5/1)	良　好	良　好	
11	須恵器　坏蓋	②(11.9)	①灰白色 (N7/0) ②暗青灰色 (10BG3/1)	良　好	やや不良	
12	須恵器　坏蓋		青灰色 (5BG6/1)	良　好	良　好	
13	須恵器　坏身	②(8.4)	青灰色 (5B6/1)	良　好	良　好	
14	六連式製塩土器		淡黄色 (2.5Y8/3)	良　好	良　好	

ていない。同様な色調・遺物組成をもつ遺物包含層は、B区の北側に位置する大学会館前庭部分[2]、および南側に位置する附属図書館敷地[3]でも検出されており、一連の遺物包含層として捉えられる。附属図書館敷地の南側の地域での調査は進展していないが、大学会館前庭部分から教養部敷地にいたる周辺一帯に遺物包含層が広範囲に分布していることが予想される。

遺物のうち、第4層：黒褐色粘質土から出土した六連式製塩土器は、構内遺跡はもとより椹野川流域の内陸部でははじめての出土例で注目される。第4層の主体を占める遺物は8～9世紀のもので、本学南縁を巡る家畜病院周辺の市道でも、同時期と考えられる細かい布目をもつ1例の六連式製塩土器の出土例がある[4]。構内遺跡では今回の調査地点の北側に位置する大学会館敷地で、墨書のある須恵器、緑釉陶器、木簡、円面硯、石銙など古代の政治勢力の存在を想定させる遺物が出土している[5]。六連式製塩土器の出土は予想される政治機構の存在と決して無縁ではないと考えられ、古代における土器製塩、塩の需要・供給関係、流通経路を解明する上で貴重な資料となった。　　(河村)

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学構内吉田遺跡の概略」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

3）山口大学埋蔵文化財資料館「中央図書館増築予定地M－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』、1985年）。

4）山口大学埋蔵文化財資料館「市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

5）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、1985年）。

第3章　亀山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査

1　調査の経過

幼稚園・山口小学校敷地では、昭和61年度に汚水排水管布設に伴い試掘調査を実施している[1]。両敷地では、小学校グラウンド部分[2]を除いて、それまでほとんど地下の状況が把握できていなかった。そのため、試掘調査は、予定された管路および集水桝の埋設地点のうち、校舎の存在する地域について重点的に行い、幼稚園敷地で4ヶ所、小学校敷地で12ヶ所の計16ヶ所を選定して、2 m×2 mを基本規模とするトレンチを設定して行った。

幼稚園敷地では、グラウンド部分から室町時代およびそれ以前の新旧二時期の土壙状の遺構、また、園舎棟と管理棟間の地点では、弥生土器を含む遺物包含層が検出されている。

小学校敷地では、低学年棟周辺で遺物包含層から4世紀代の遺物が多量に出土した。

試掘調査の結果を受け、埋蔵文化財資料館運営委員会は遺構、遺物包含層が検出された地点を中心に、周辺も含めた地域について工事前に事前の発掘調査を実施することとした。

調査は幼稚園敷地から開始し、調査順位に従って、A・B・C区……と呼称した。調査区は当初、幼稚園敷地で10ヶ所、小学校敷地で15ヶ所設定したが、本年報では、遺物包含層・遺構が全く認められなかった、幼稚園敷地7ヶ所、小学校敷地6ヶ所を除いた計12

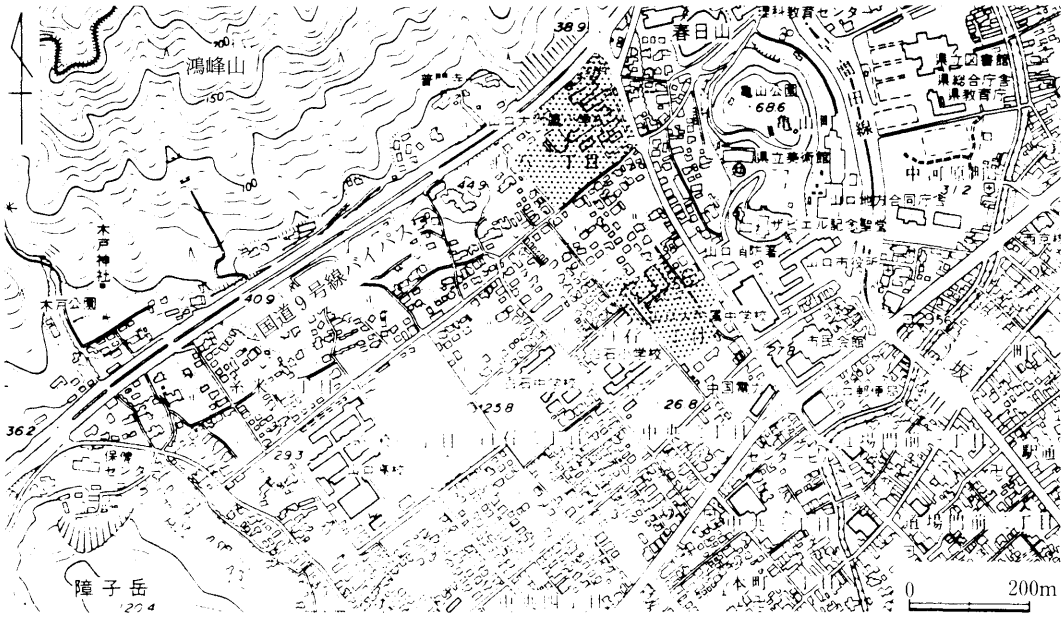


Fig. 7　調査区位置図

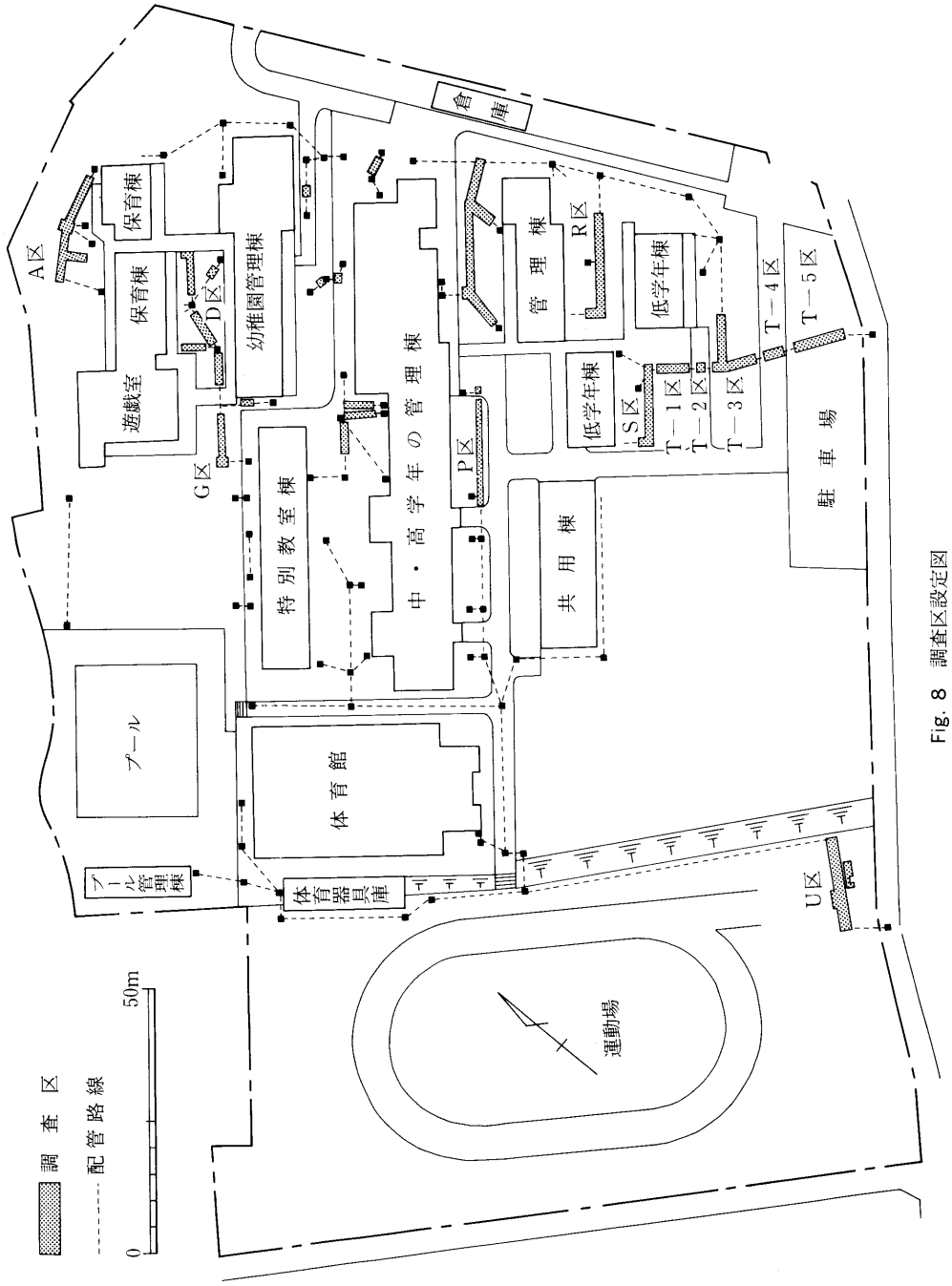

調査区
配管路線
0
50m
A区
保育棟
保育棟
遊戯室
D区
幼稚園管理棟
G区
特別教室棟
プール
プール管理棟
体育館
体育器具庫
中・高学年の管理棟
P区
共用棟
倉庫
管理棟
R区
低学年棟
低学年棟
S区
T－1区
T－2区
T－3区
T－4区
T－5区
駐車場
U区
運動場

Fig. 8　調査区設定図

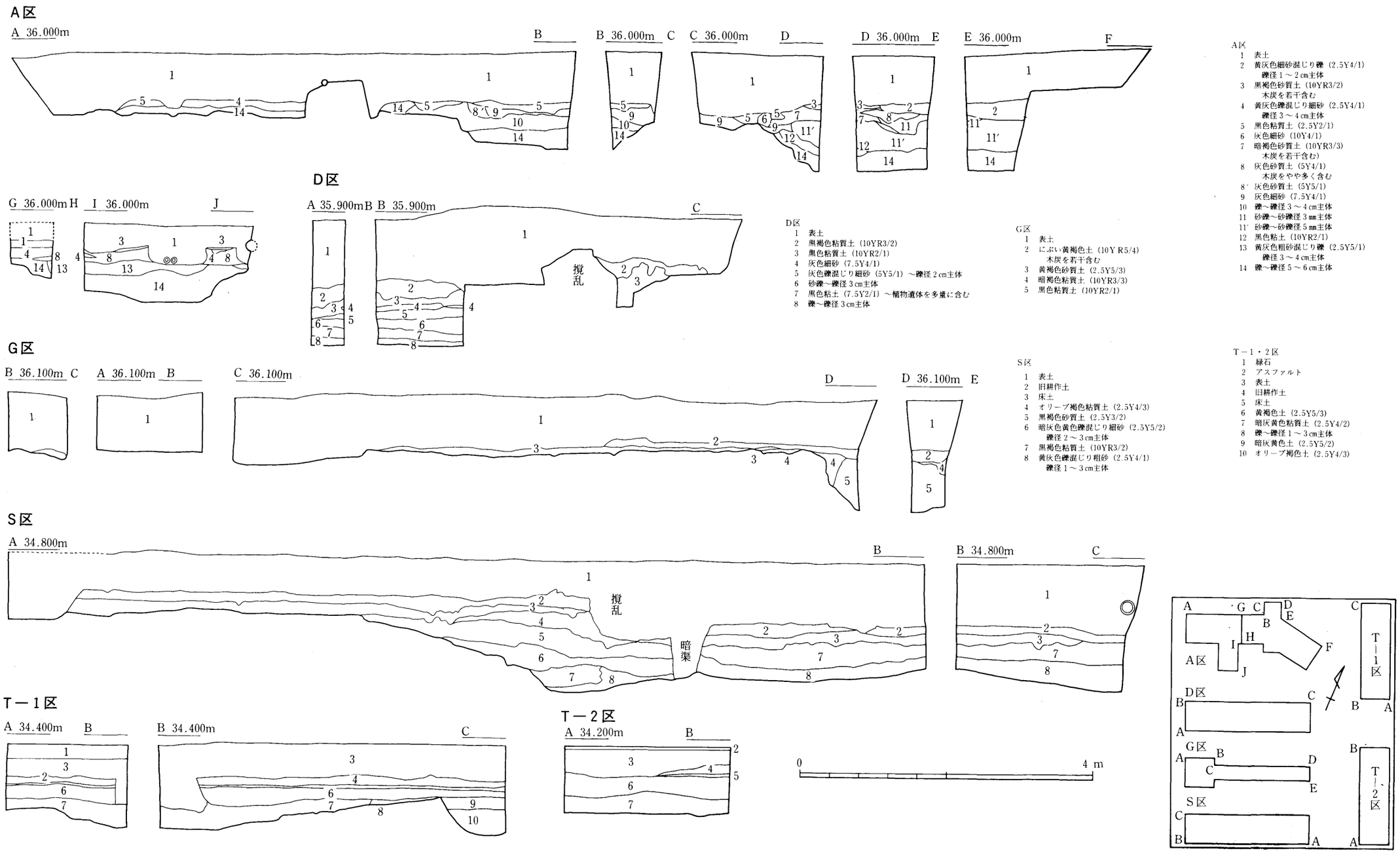
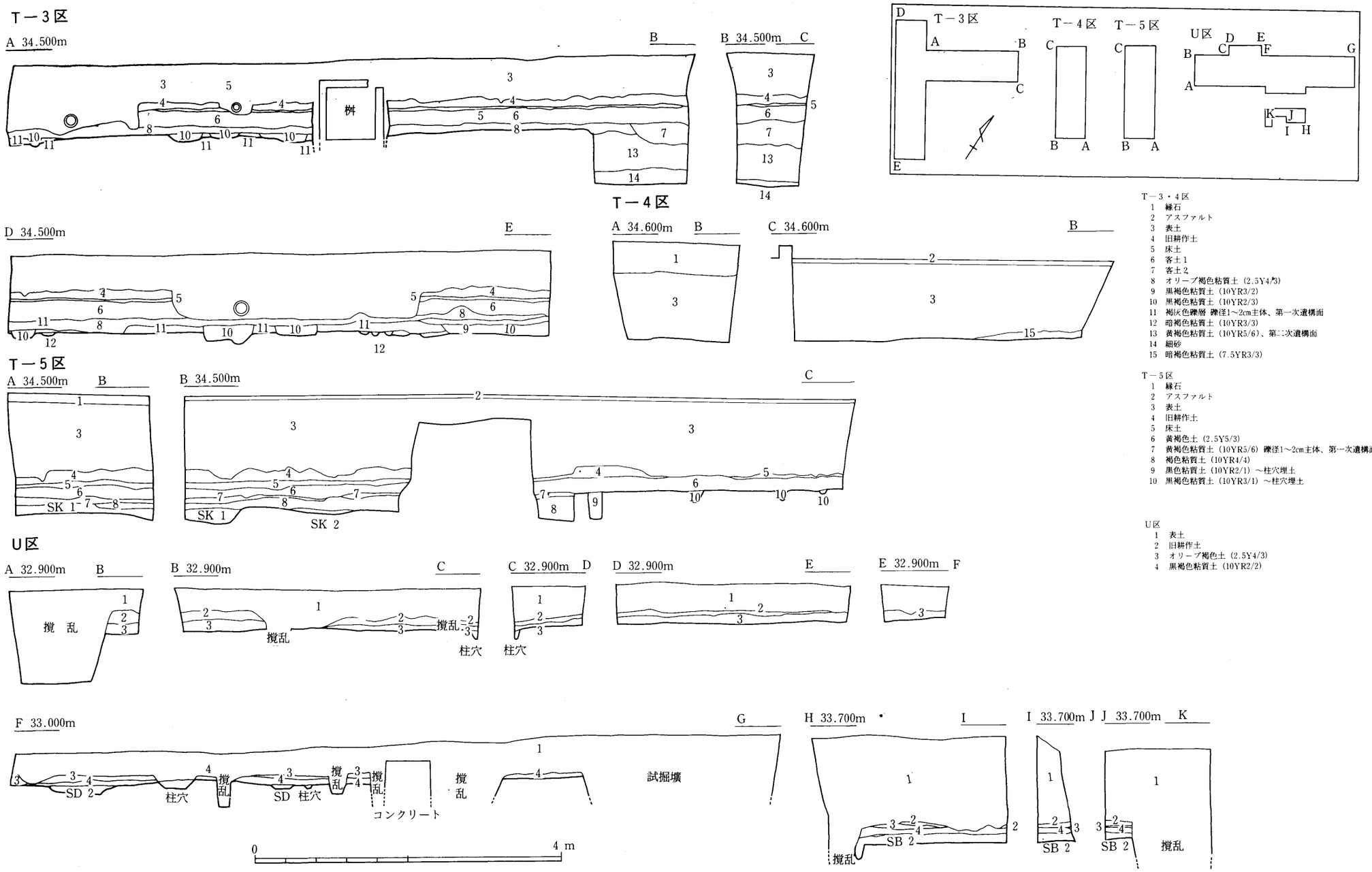


Fig. 9　土層断面実測図(1)



T－3・4区
1 縁石
2 アスファルト
3 表土
4 旧耕作土
5 床土
6 客土1
7 客土2
8 オリーブ褐色粘質土（2.5Y4/3）
9 黒褐色粘質土（10YR3/2）
10 黒褐色粘質土（10YR2/3）
11 褐灰色礫層 礫径1～2cm主体、第一次遺構面
12 暗褐色粘質土（10YR3/3）
13 黄褐色粘質土（10YR5/6）、第二次遺構面
14 細砂
15 暗褐色粘質土（7.5YR3/3）

T－5区
1 縁石
2 アスファルト
3 表土
4 旧耕作土
5 床土
6 黄褐色土（2.5Y5/3）
7 黄褐色粘質土（10YR5/6）礫径1～2cm主体、第一次遺構面
8 褐色粘質土（10YR4/4）
9 黒色粘質土（10YR2/1）～柱穴埋土
10 黒褐色粘質土（10YR3/1）～柱穴埋土

U区
1 表土
2 旧耕作土
3 オリーブ褐色土（2.5Y4/3）
4 黒褐色粘質土（10YR2/2）

Fig. 10 土層断面実測図(2)

ヶ所の調査区について報告することにする。

調査期間は平成元年8月21日から10月22日までで、調査面積は約260 m²である。

2　層位・遺構

A区

幼稚園舎棟の北東に位置する1 m×12mの調査区。層厚約60～70 cmの構内造成時等の埋め土の直下が青灰色および浅黄色粘土の地山で、北東から南西に走行する河川跡を検出した。

河川跡（Fig. 11，PL. 4・5(1)）

調査区内全域が河川跡の流路にあたる。調査区東部の屈曲部で溝底を検出しているが、肩部の落ち込み、規模、流路方向が把握できなかったため、障害物・既設管のない調査区中央部よりやや西の地点で、南方側に1m×2mの規模で調査区の拡張を行った。

その結果、拡張区の中央部で溝底と思われる最深部を検出した。両溝底の標高差は西側が約20 cm低くなっており、北東から南西への流路が想定される。両溝底を結んだラインを中心にすると、幅約3.6m以上の規模が算出されるが、拡張区南端部での地山の立ち上がり状況から、それ以上あまり規模は大きくならないものと考えられる。検出面からの深さは、西側の最浅部分で約20 cm、同じく西側の溝底部分で約90 cmである。

埋積土は、上層が黒色粘質土および黒褐色・黄灰色砂質土で、中・下層が礫径3～5 cmを主体とした砂礫・礫の互層である。

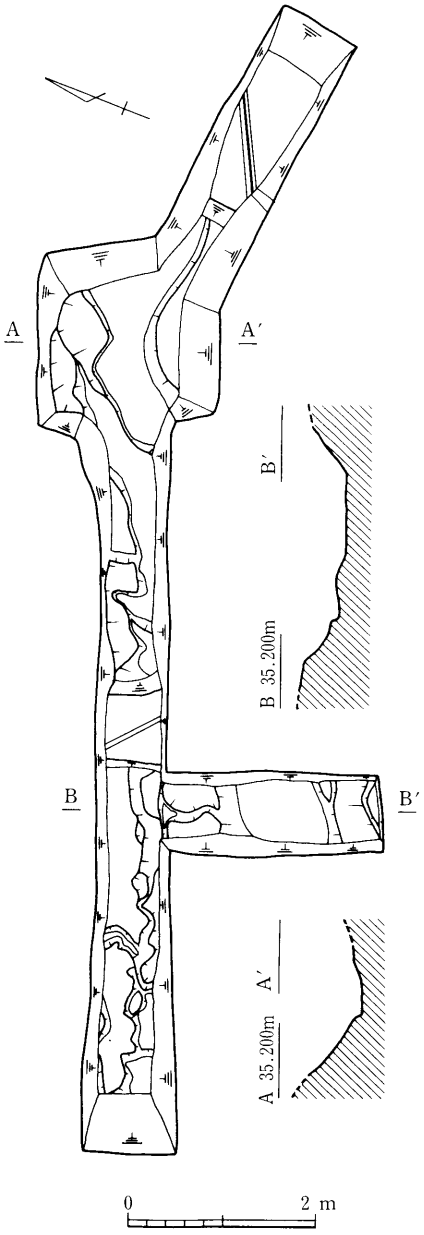


Fig. 11　A区河川跡実測図

遺物は、弥生土器壺・甕・鉢、土師器甕・高坏、剝片などが出土したが、溝底付近からは土師器に限定され、また、さほど新しい遺物も含まないため、庄内段階の比較的短期間に機能した河川跡と考えられる。

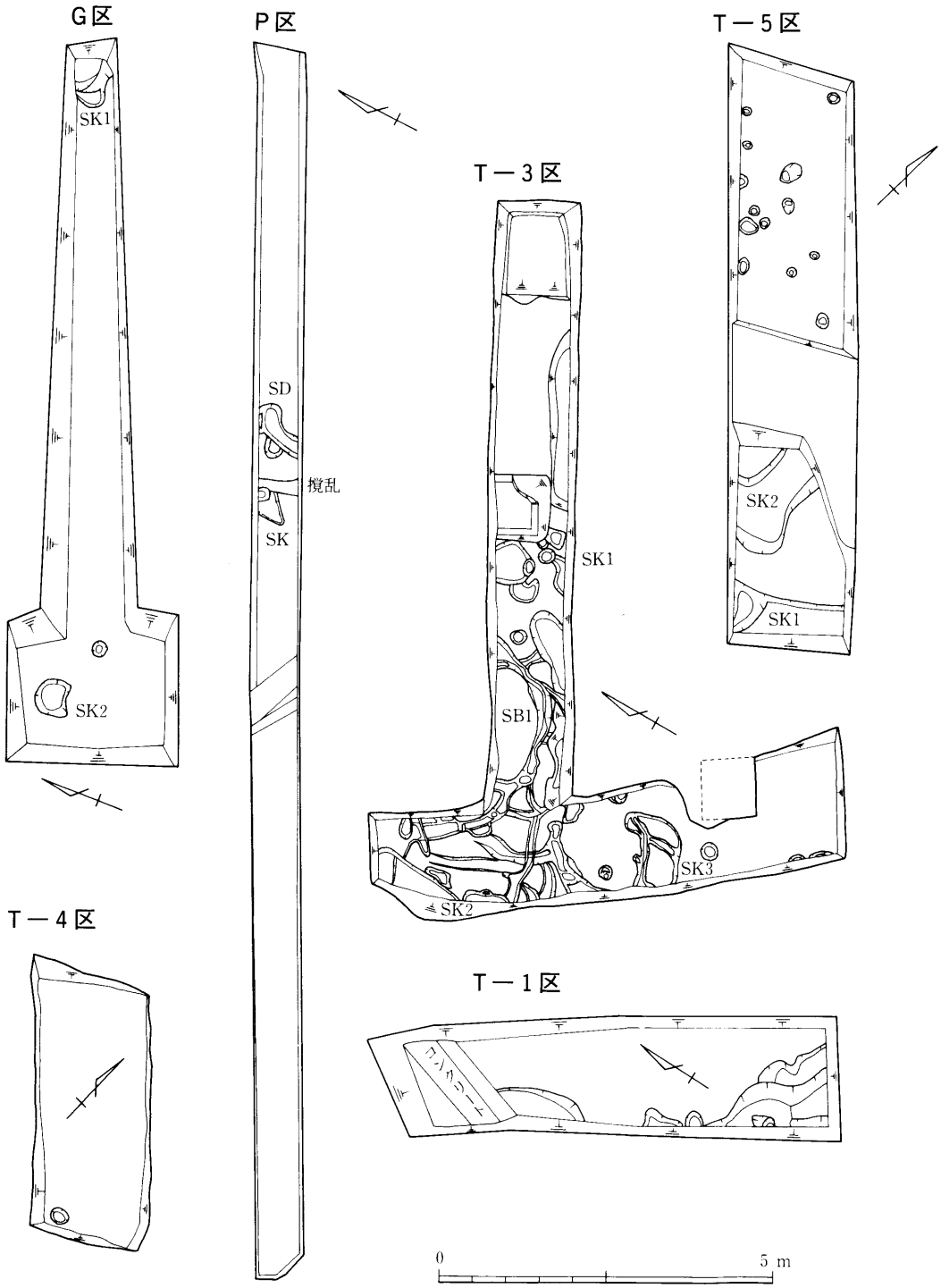

G区
SK1
SK2
P区
SD
撹乱
SK
T－3区
SK1
SB1
SK2
SK3
T－5区
SK2
SK1
T－4区
T－1区
コンクリート
0
5 m

Fig. 12　遺構配置図

D区（PL. 5(2)）

A区の南約25m、園舎棟と管理棟間に位置する1 m×5.5mの調査区。旧建物の基礎が調査区の中央部付近に存在するため、南端部を中心に調査した。層厚約60～90 cmの構内造成時等の埋め土の下位には、上位から、層厚約40 cmの黒褐色・黒色粘質土、層厚約20 cmの細砂、層厚約40 cmの砂礫が順次堆積している。河川跡の埋積土と考えられるが、A区で検出した河川跡と同一のものかどうかわからない。

出土遺物には土師器、縄文土器などがあり、土師器を主体とする。

G区

D区の西約12m、幼稚園グラウンドに位置する1 m×11mの調査区。堆積層順は、東半部では、層厚約60 cmの構内造成時等の埋め土の下位に、木炭を若干含む第2層：にぶい黄褐色土、第3層：黄褐色砂質土が堆積し、地山に達する。西端部付近では、層厚約85 cmの埋め土の直下が地山である。遺構は東西両端部で土壙各1基、西端部で柱穴を検出した。柱穴は、上面径約15～20 cm、底面径約10 cm、検出面からの深さ6 cmの規模をもつ。埋積土は黒褐色砂質土（Hue2.5Y3/2）で、出土遺物はない。

遺物は第3層から縄文土器、須恵器、歴史時代土師器、剝片など若干が出土した。

土壙

第1号土壙（Fig. 12・13，PL. 6(1)）

調査区の東端部で検出した。完掘しておらず、平面形態、規模は明かでないが、検出面からの深さは最深部で約50 cmである。埋積土は、上層が暗褐色粘質土、下層が黒色粘質土で、土師器若干が出土した。

第2号土壙（Fig. 12・13，PL. 6(2)）

調査区の西端部で検出した。平面形態は不整形な円形で、上面径約50 cm、底面径約35～40 cm、検出面からの深さ3 cmの規模をもつ。埋積土は灰オリーブ色砂質土（Hue5Y5/2）で、歴史時代土師器が出土したが、詳細な時期はわからない。

P区

中・高学年棟の南に位置する1 m×20mの調査区。堆積層順は単純で、層厚約40～45 cmの構内造成時等の埋め土の直下が地山である。遺構は、調査区の中央部からやや東で土壙、溝状遺構を検出した。

土壙（Fig. 12・13，PL. 7(1)）

平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長軸50 cm以上、短軸35 cm、検出面からの深さ8

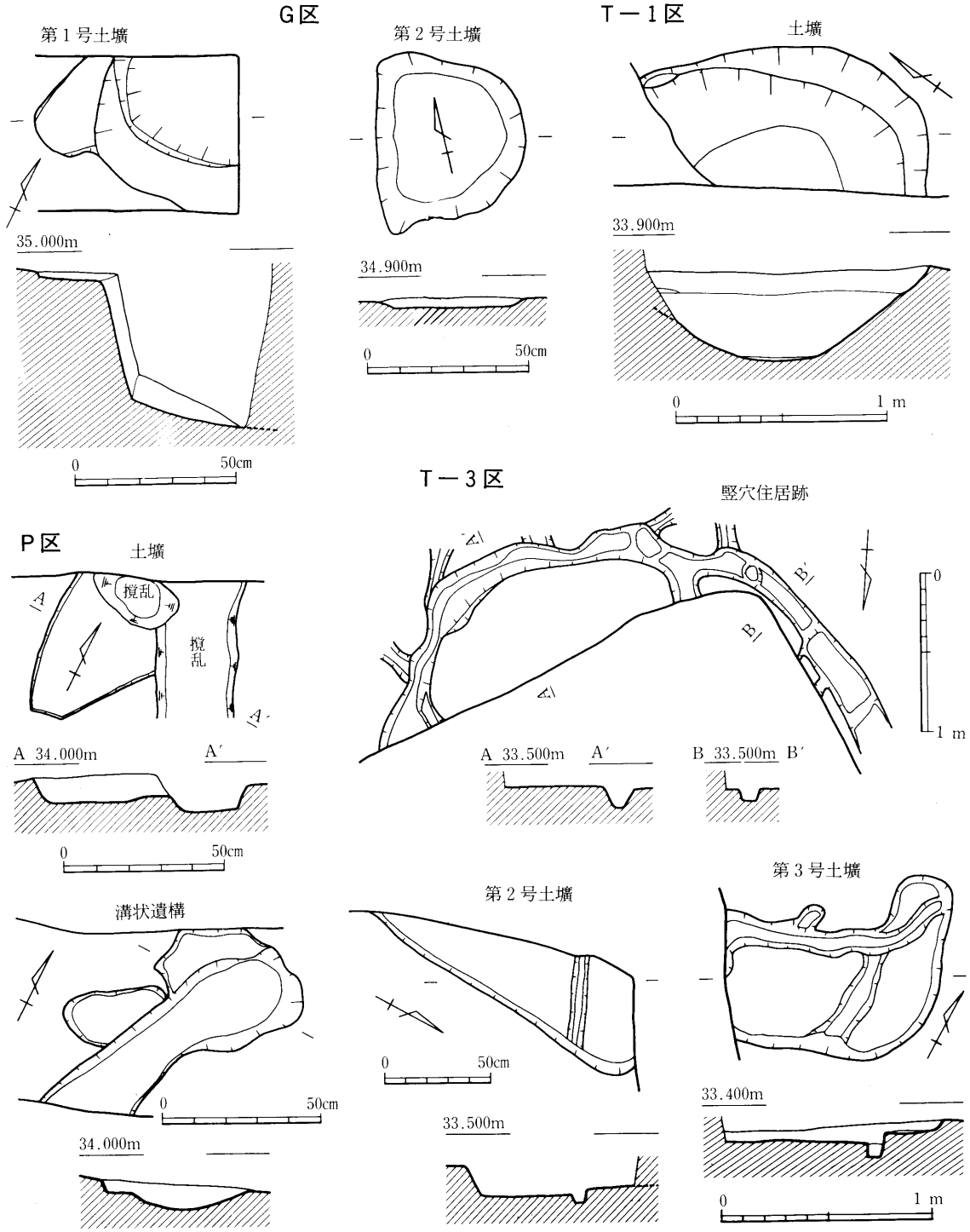


Fig. 13　G・P・T－1・T－3区遺構実測図

cmの規模をもつ。埋積土は暗褐色土（Hue10YR3/3）である。出土遺物はない。

溝状遺構（Fig. 12・13，PL. 6(3)(4)）

土壙のすぐ東を北－南に走行する溝で、黒褐色砂質土（Hue10YR2/2）を埋積土とする柱穴状の掘り込みに切られている。検出長は約90 cmで、溝幅約20～30 cm、検出面からの深さは最深部で8 cmである。埋積土は灰黄色砂質土（Hue2.5Y6/6）で、出土遺物はない。

R区（PL. 7(2)）

旧特殊学級棟と低学年棟間に位置する1 m×21mの調査区。堆積層順は単純で、層厚約40～50 cmの構内造成時等の埋め土の直下が地山である。遺構は、調査区の西端部で柱穴を検出した。上面径約20 cm、底面径約10 cm、検出面からの深さ約30 cmの規模をもつ。埋積土は黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）である。出土遺物には土師器の小片1点がある。

S区（PL. 7(3)・8）

R区の南約10m、低学年棟の西に位置する1.5m×13mの調査区。層厚約50～80 cmの構内造成時等の埋め土の下位に、旧水田耕作土、床土が残存し、調査区中央部より東側はその直下が地山となる。西側では、地山が西方に幅7 m以上にわたって約1 m近く急激に落ち込んでおり、計4層におよぶ遺物包含層が堆積している。

最上層の第4層：オリーブ褐色粘質土は最大層厚約30 cmで、黒色土器、瓦質土器、土師器を包含するが、量的にはきわめて少ない。第5層：黒褐色砂質土は最大層厚約40 cm、平均約20～30 cmの層厚をもち、第4層同様、落ち込みの東半部に分布する。出土遺物には土師器、須恵器、二次加工のある剝片・使用痕のある剝片などがある。第7層：黒褐色粘質土は約20～30 cmの層厚をもち、弥生土器、土師器、須恵器などを包含する。第8層：黄灰色礫混じり粗砂は最大約40 cm、平均約20 cmの層厚をもち、地山直上に堆積する。弥生土器、土師器などが出土した。各包含層とも主体となる遺物は4世紀代のものであるが、時期の隔たる遺物が混入しており、一時期の堆積層とは考えられない。

なお、調査区中央部に存在する旧水田に伴う暗渠から土師器、須恵器が出土した。

遺構は、調査区東端部で黒褐色砂質土を埋積土とする柱穴2個を検出した。いずれも上面径約25 cm、底面径約15 cm、検出面からの深さ6 cm前後の規模をもつ。埋積土はオリーブ褐色粘質土である。出土遺物はない。

T－1区

S区のすぐ南東に位置する1.5m×7 mの調査区。層厚約50cmの構内造成時等の埋め土の下位に、旧水田耕作土、床土が残存する。その下には、上位から歴史時代土師器、瓦質土

器を若干包含する層厚約20cmの黄褐色土、層厚約20～30cmの暗灰黄色粘質土の2層の遺物包含層が堆積し、地山に至る。地山は南に向かって下降しており、北端部で土壙を検出した。

土壙（Fig. 12・13，PL. 9(1)(2)）

旧建物の基礎によって完掘できなかった。平面形態が円形系統の土壙で、壁面は壙底からゆるやかに立ち上がり、検出面からの深さは約40cmである。埋積土は、上層が暗灰黄色土、下層がオリーブ褐色土で、両層から土師器、瓦質土器などが出土した。15～16世紀。

T－2区（PL. 9(4)）

T－1区のすぐ南に位置する1.5m×7 mの調査区。堆積層順はT－1区と同様で、埋め土もしくは床土の下位に、歴史時代土師器、瓦質土器を若干包含する黄褐色土、暗灰黄色粘質土の2層の遺物包含層が堆積する。層厚は各層とも約20～30cmである。

T－3区

T－2区のすぐ南に位置する南北1.5m×7 m、東西1.5m×9 mの調査区。層厚約50cmの構内造成時等の埋め土の下位に、旧水田耕作土、床土が残存する。その下には、厚さ約20cmの客土をはさんで、層厚約10～15cmのオリーブ褐色・黒褐色粘質土（Hue10YR3/2）の無遺物層が堆積する。その下位には2枚の遺構面が存在する。上位の遺構は褐灰色礫層を掘り込む竪穴住居跡、土壙、溝状遺構、柱穴で、下位の遺構は黄褐色粘質土を掘り込む土壙、溝状遺構、柱穴である。

竪穴住居跡（Fig. 12・13，PL. 10(2)・11(2)）

上位の遺構面で検出した。調査区の西部に位置し、弧状に巡る溝を竪穴住居跡の壁溝と判断した。平面形態が円形系統の住居跡で、完掘していないが、径約4 m前後の規模をもつものと考えられる。壁溝は幅約20cm、検出面からの深さ約10～15cmで、埋積土は黒褐色粘質土（Hue10YR2/3）である。調査区内で柱穴は検出していない。

出土遺物はないが、平面形態、埋積土などから弥生時代中～後期のものであろう。

土壙

第1号土壙（Fig. 12，PL. 12(1)）

上位の遺構面で検出した。調査区の北西隅に位置する、平面形態が方形系統の土壙である。東辺1.4m以上、検出面からの深さ15cmの規模をもつ。埋積土は黒褐色粘質土（Hue10YR2/3）で、土師器、掻器が出土した。古墳時代。

第2号土壙（Fig. 12・13，PL. 12(2)）

上位の遺構面で検出した。第1号土壙の南西約4.5mに位置する。平面形態は不整形な楕

円形状を呈し、長軸1 m以上、短軸約60 cm、検出面からの深さ20 cmの規模をもつ。出土遺物はないが、埋積土が第1号土壙同様、黒褐色粘質土（Hue10YR2/3）であることから、古墳時代のものと考えられる。長軸方向は南－北。

第3号土壙（Fig. 12・13，PL. 10(1)・11(1)）

下位の遺構面で検出した。第2号土壙の南東約3.5mに位置する。平面形態は不整形な楕円形状を呈し、長軸1 m以上、検出面からの深さ15 cmの規模をもつ。埋積土は暗褐色粘質土で、出土遺物はなく、時期不明。

T－4区（Fig. 12，PL. 12(3)）

T－3区のすぐ南に位置する1.5m×4 mの調査区。層厚約90 cmの構内造成時等の埋め土の下位は、南半部では地山となる。北半部では土師器、歴史時代土師器を若干含む層厚約10 cmの暗褐色粘質土が堆積し、地山へと移行する。遺構は調査区の南隅で、柱穴を検出した。上面径約25 cm、底面径約15 cm、検出面からの深さ16 cmの規模をもつ。埋積土は暗褐色粘質土で、土師器が出土した。古墳時代。

T－5区

T－4区のすぐ南、小学校敷地の南西端部に位置する2 m×9 mの調査区。調査区中央部は旧建物の基礎のため調査できなかった。層厚約90～100 cmの構内造成時等の埋め土の下位には、旧耕作土、床土が残存する。その下には、3層の遺物包含層が堆積し、包含層の下位は砂礫となる。

包含層の上層は、層厚約10～20 cmの第6層：黄褐色土で、須恵器、歴史時代土師器、土師質土器、瓦質土器、陶器、使用痕のある剝片などが出土した。中層は、層厚約10 cmの第7層：黄褐色粘質土で、弥生土器、須恵器、歴史時代土師器、土師質土器、瓦質土器、陶器を包含する。下層は、層厚約10～30 cmの第8層：褐色粘質土で、土師器、須恵器、歴史時代土師器、土師質土器、使用痕のある剝片・石核などを含む。各包含層とも単一時期の遺物で構成されていない。

遺構面は第7層、砂礫層の時期差のある上下2面が存在する。上位の遺構には、調査区の北半部で検出した12個の柱穴がある。上面径は10 cm前後のものと20 cm前後のものとがあり、深さは15 cm前後のものが大半である。埋積土は、黒色粘質土、黒褐色粘質土、灰オリーブ色土（Hue5Y5/2）の3種がある。遺物は、黒色粘質土を埋積土とする4個の柱穴から歴史時代土師器が出土した。下位の遺構は、調査区の南半部で検出した2基の土壙状の遺構である。

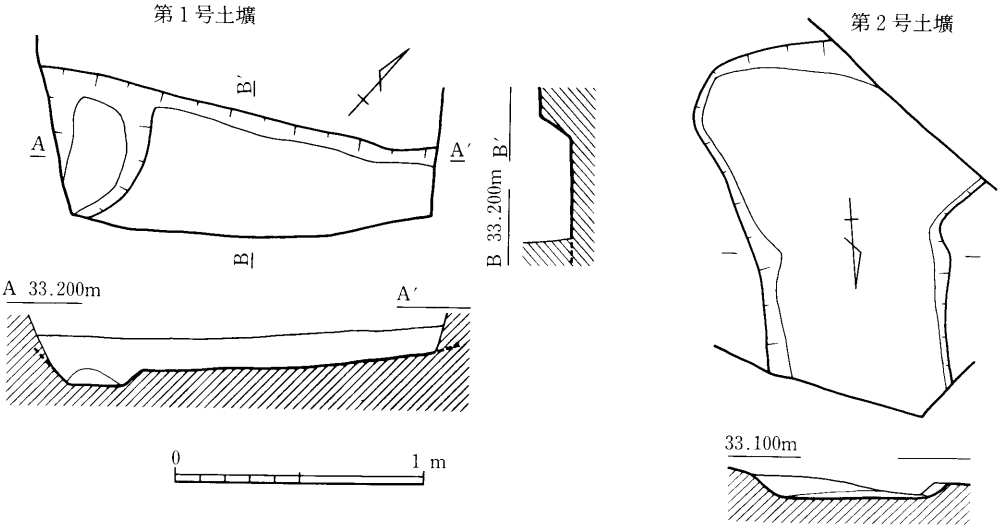


Fig. 14　T－５区遺構実測図

土壙

第１号土壙（Fig. 12・14，PL. 14(2)）

調査区の南端部に位置する、長辺 160 cm以上、短辺 60 cm以上の土壙である。壙底は北東から南西にゆるやかに下降し、西端部でやや落ち込む。検出面からの深さは平均で 13 cm、最深部で 20 cmである。埋積土はにぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）で、歴史時代土師器が若干出土した。

第２号土壙（Fig. 12・14，PL. 14(3)）

第１号土壙のすぐ北西に位置する。長軸 140 cm以上、短軸 80 cm、検出面からの深さ５～８cmの規模をもつ。埋積土は第１号土壙同様、にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）である。出土遺物はない。長軸方向は北－南。

U区

小学校グラウンドの南西端部に位置する２ m×17m の調査区。層厚30～40cmの真砂および構内造成時等の埋め土の下位には、旧耕作土が残存する。その下には第３層：オリーブ褐色土、第４層：黒褐色粘質土の２層の遺物包含層が堆積し、地山へと続く。包含層の層厚はそれぞれ約10cmで、第３層から土師器、須恵器、第４層から土師器、砥石が出土した。

遺構は、竪穴住居跡２棟、土壙１基、溝４条のほか、柱穴６個を検出した。

なお、竪穴住居跡を検出した地点では、調査区を可能な限り南側に拡張して調査を行った。

竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（Fig. 15•16, PL. 16）

調査区のほぼ中央部に位置する平面形態円形の住居跡で、第2号竪穴住居跡に切られている。大半が調査区外にあたるため、規模、内部構造、主柱数などは判然としない。検出面からの深さは8cmである。建て替えが行われたと考えられ、壁溝が二重に巡る。内側の壁溝は幅約20cm、床面からの深さ6～8cm、外側の壁溝は幅約10cm、床面からの深さは3cm。埋積土は黒褐色粘質土（Hue10YR2/2）で、弥生土器甕などが出土した。甕の底部の形状から弥生時代後期でも新しい時期から庄内併行期のものであろう。

第2号竪穴住居跡

（Fig. 15・17, PL. 16(1)•17(1)）

平面形態が方形系統の住居跡で、第1号竪穴住居跡を切っている。西辺3.6m以上、検出面からの深さ10cmの規模をもつ。壁溝は認められず、床面の北西隅および中央部より西側に、2基の不整形な楕円形状の掘り込みが存在する。前者は、長軸140cm、短軸65cm、床面からの深さ約20cmの規模をもち、壁面に接している。後者は、長軸95cm以上、短軸90cm、床面からの深さは約30cmである。床面に柱穴が6個存在するが、主柱数は判然としない。埋積土は黒褐色粘質土で土師器甕、埦などが出土した。庄内古段階。

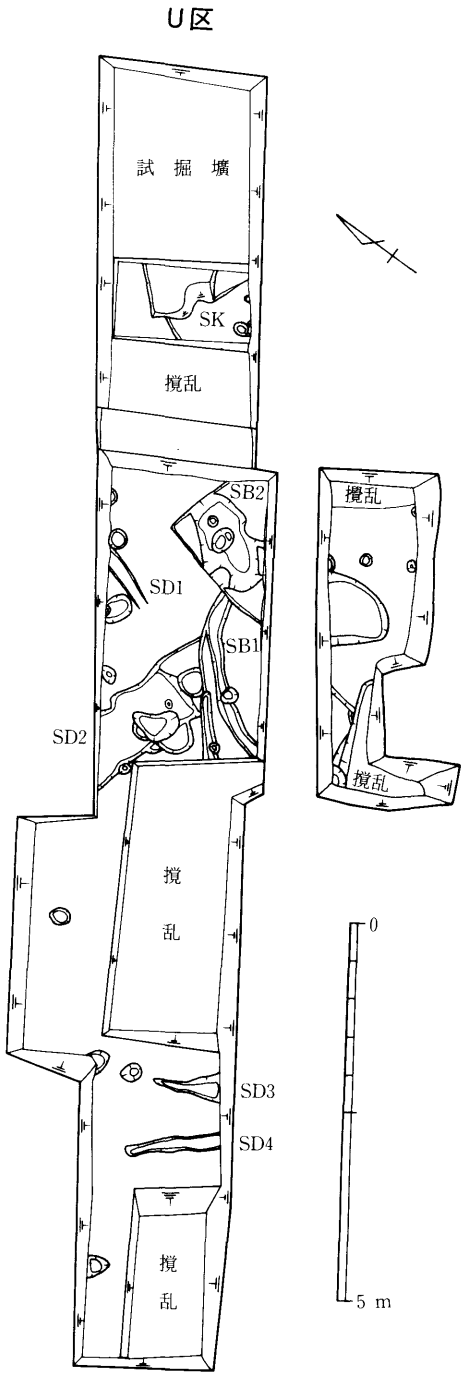


Fig. 15　U区遺構配置図

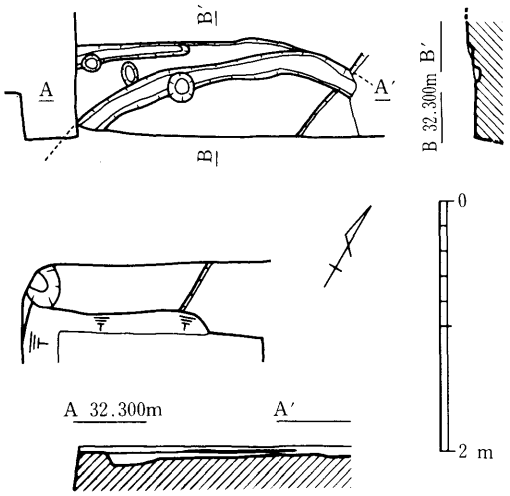


Fig. 16　U区第1号竪穴住居跡実測図

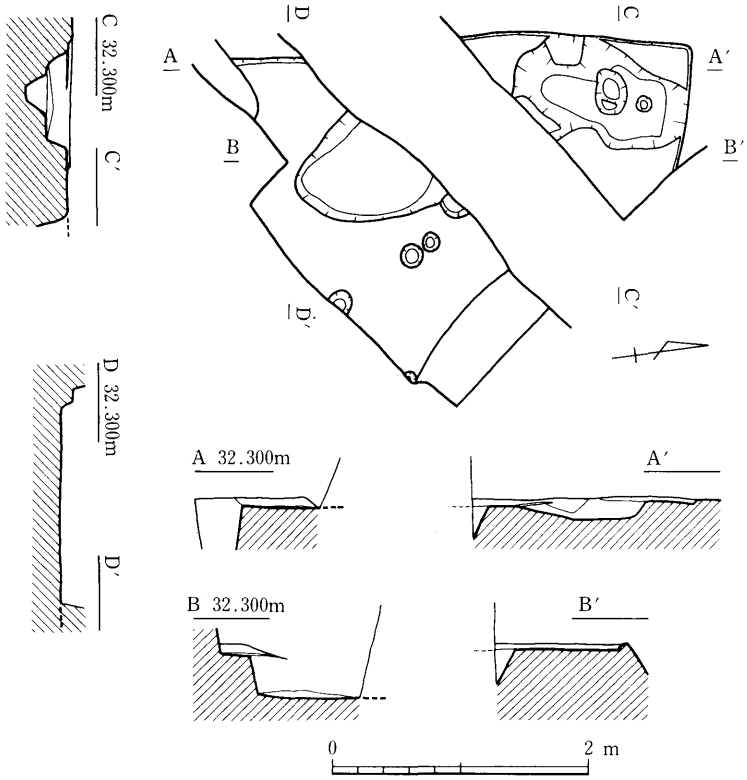


Fig. 17　U区第2号竪穴住居跡実測図

土壙

(Fig. 15•18, PL. 17(2))

調査区の東端部に位置する。北隅が後世の撹乱によって消失しているが、方形系統の平面形態をもつものと考えられる。東辺130 cm以上、検出面からの深さ10 cmの規模をもつ。東西両辺が直線的であること、および床面が平坦で内部に柱穴が存在することから、竪穴住居跡の可能性がある。

出土遺物には土師器の小片若干があるが、埋積土が黒褐色粘質土(Hue10YR2/3)であることから、第2号竪穴住居跡と時期的に大差ないものであろう。

溝

第1号溝

(Fig. 15, PL. 16(1)•17(1))

第2号竪穴住居跡のすぐ西を北－南に走行する。検出長は約90 cmで、溝幅約20 cm、検出

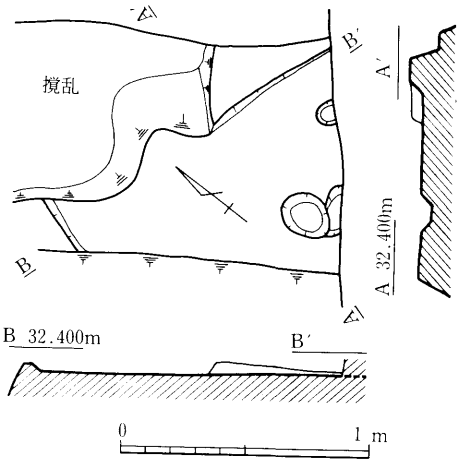


Fig. 18　U区土壙実測図

面からの深さは最深部で約5cmの規模をもつ。埋積土は黒褐色粘質土（Hue10YR2/3）である。出土遺物はない。

第2号溝（Fig. 15，PL. 16）

第1号溝のすぐ南西に位置し、北西－南東に走行する溝で、第1号竪穴住居跡に切られている。検出長は約2 mで、溝幅約60 cm、検出面からの深さは最深部で約15 cmの規模をもつ。埋積土はオリーブ褐色粘質土（Hue2.5Y4/3）である。出土遺物はない。

第3号溝（Fig. 15，PL. 15）

調査区の西端部付近に位置し、北西－南東に走行する溝である。検出長は約90 cmで、溝幅約15～40 cm、検出面からの深さは最深部で約10 cmの規模をもつ。埋積土はオリーブ褐色粘質土（Hue2.5Y4/3）である。出土遺物はない。

第4号溝（Fig. 15，PL. 15）

第3号溝のすぐ西を北西－南東に走行する。検出長は約1.3mで、溝幅約15～25 cm、検出面からの深さは最深部で約10 cmの規模をもつ。埋積土は暗褐色粘質土（Hue10YR3/3）である。出土遺物はない。

3　出土遺物

土器

A区（Fig. 19—1～15，PL. 18）

1は弥生土器の壺。やや上げ底の底部。2～5・13は弥生土器の甕。2～4は底径が小さく、上げ底。5・13は平底。5は内底面に指頭圧痕が残る。6は弥生土器の鉢。体部は内弯して立ち上がり、口縁は外反しながら外傾する。口縁端部はやや尖る。

7～12・14は土師器の甕。7は頸部に明瞭なくびれがない。口縁端部は丸い。体部内面は風化しているが、ケズリと思われる。9はやや厚い器壁をもち、丁寧なナデを施す。8は口縁中位がやや膨らみ端部は外面に面をもつ。体部内面に横方向に板状工具による擦過が、体部外面に右上がりのタタキが施される。外面頸部には、刷毛目がナデ残される。10は体部外面に横方向のタタキが施される。8・10は畿内系。11・12・14は山陰系。11は器壁が厚く、口縁端部は丸い。体部内面は右上がりのケズリ。外反する口縁を下向きになで、

頸部との境の稜に粘土の盛り上がりが見られる。12 も体部内面にケズリを施すが方向は不明。器壁は薄く、ナデの部分は丁寧。体部外面に煤が付着する。14 は口縁の器壁の凹凸が大きい。口縁を外側に引き出し、端部は丸味を帯びる。15 は土師器の高坏。体部はわずかに外反し、口縁端部は外側に面をもつ。

遺物はすべて河川跡から出土。

D区(Fig. 19—16～18, PL. 18)

16 は縄文土器の甕。口縁はほぼ直立し、口縁端部のやや下に突帯を貼付け、ヘラで刻み目を施す。

17・18 は土師器の高坏。17 は坏部。上部外面は、粗い刷毛の後ナデを施し、屈曲部には上から寄せられた粘土が盛り上がる。18 は脚部。端部は外面が肥厚し、丸い。

遺物はすべて河川跡から出土。

G区 (Fig. 19—19, PL. 18)

19 は歴史時代の土師器の皿。器壁が風化し、外底面の調整は不明。体部はナデ。第 3 層出土。

S区 (Fig. 20, PL. 18・19)

20 は弥生土器の壺。頸部に突帯を貼付け、布を巻き付けた指頭で刻み目を施す。21・23 は弥生土器の甕。やや上げ底の底部。23 は内面に明瞭な指頭圧痕がある。

24・25 は土師器の小形丸底壺。24 は体部は球形。口縁は内弯し、端部は丸い。体部内面には横方向のケズリを施す。25 はやや器壁の厚い口縁で、直線的に伸びる。22・26～36 は土師器の甕。22・26・30 は口縁端部がやや肥厚し、外側に面をもつ。27 は口縁中位で屈曲し、口縁端部内面はケズリによる面をもつ。布留系。28・31・33 は口縁が肥厚し、端部は丸い。29 は口縁に丁寧なナデを施し、端部はやや尖る。32 は体部内面にケズリを施し、口縁端部はやや尖る。34 は体部内面に横方向のケズリを施し、やや器壁の厚い口縁は外反して外傾し、端部はやや尖る。35 は体部内面に横方向のケズリを施し、口縁は直線的に伸び、端部は丸い。36 はタタキの施された胴部の破片。器壁は薄く丁寧な作り。畿内系。37 は土師器の鉢。体部はゆるく内弯して立ち上がり、口縁は外側につまみ出される。端部は外面に竹管状の工具を押し当て口縁部を作り出す。38 は土師器の椀。内弯した体部から直立して伸びる口縁に続く。口縁端部はやや尖る。内外面に幅広のミガキを施す。39～49 は土師器の高坏。39 は坏部。体部は直線的に伸び、口縁端部はわずかに外につまみ出し、尖る。40 は坏部。内面はなだらかなカーブを描くが外面は屈曲部をもつ。41 は坏部～脚部。

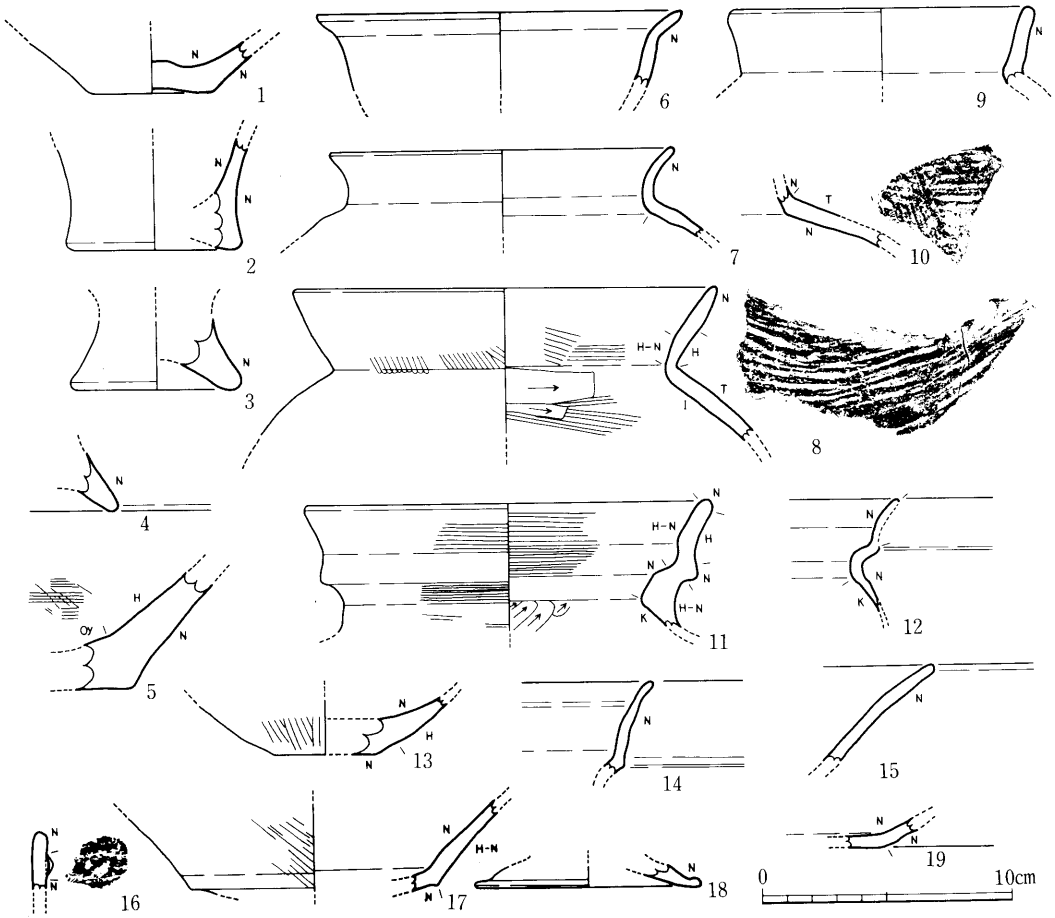


Fig. 19　出土遺物実測図(1)

体部の下部を浅い皿状に成形した後に上部に粘土帯を接合して作り、接合面は擬口縁をなす。内外面ともヘラ状工具によるミガキを施し、平らで滑らか。脚基部は、脚の接合のためにナデを施す。45 は 42 同様に坏部を粘土帯の接合によって成形。42 は、坏部～脚部。円筒形の脚を坏に貼付けて成形するが、脚内面中央を充塡したものか、坏部から引き出したものかは不明。43・44 は脚部。いずれも穿孔は残存部が少なく不明。44 は、内面上部に横方向のケズリを施すと思われる。46～49 は脚部。46 は脚部が直線的に伸び、端部は尖る。47～49 は裾部で明瞭に屈曲する。47 は内外面にきわめて丁寧なナデを施し、49 は内面上部に横方向のケズリを、外面にはミガキを施す。

50 は須恵器の坏蓋。口縁はゆるく内弯。端部はつまみだして段をもち、やや尖る。

51・52 は黒色土器の椀。内面のみをいぶすいわゆる内黒である。高台は断面三角形を呈

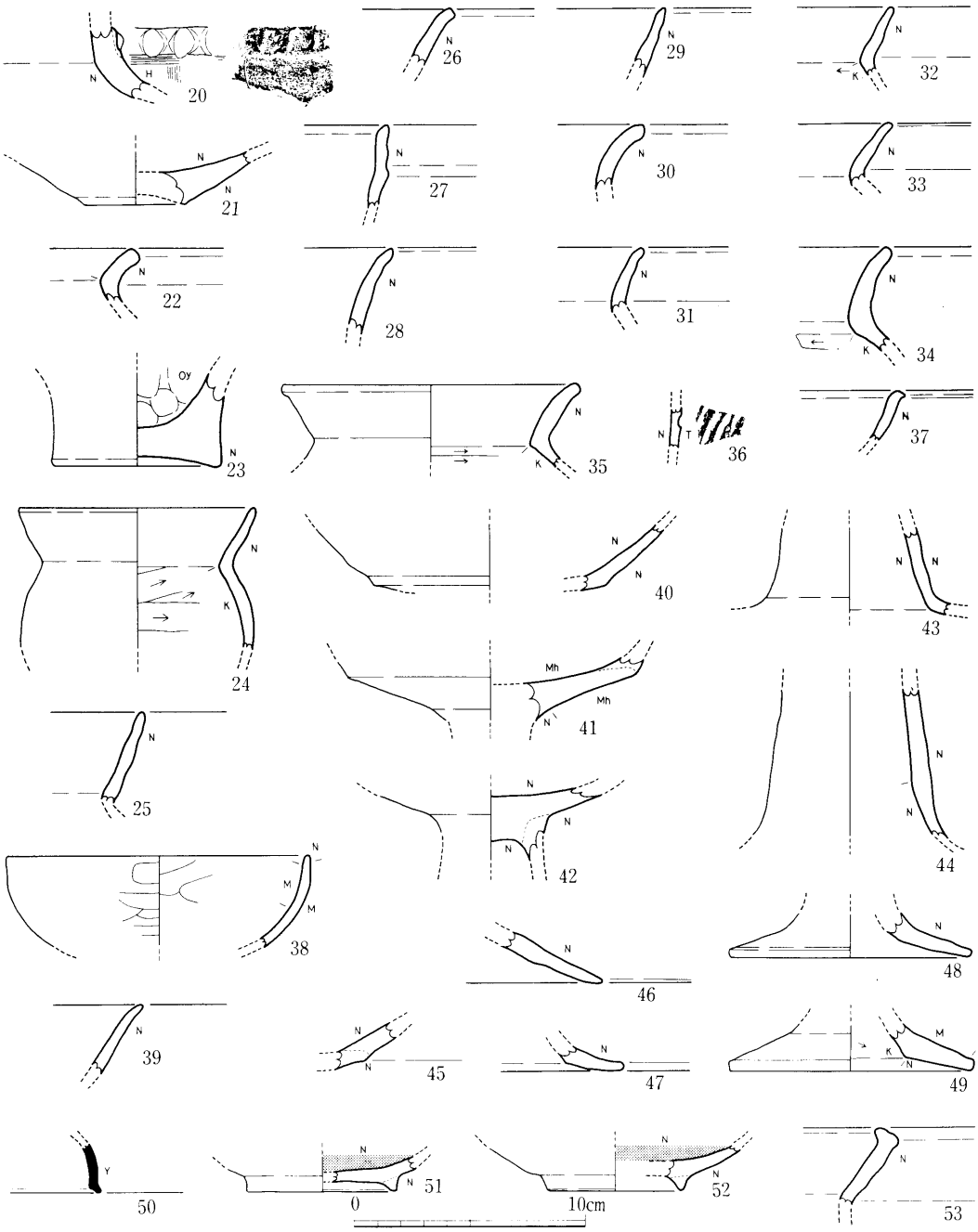


Fig. 20　出土遺物実測図(2)

し、やや外に転ぶ。第4層出土。

53は瓦質土器の鍋。口縁端部を引き出し、内側に屈曲させる。第3層出土。

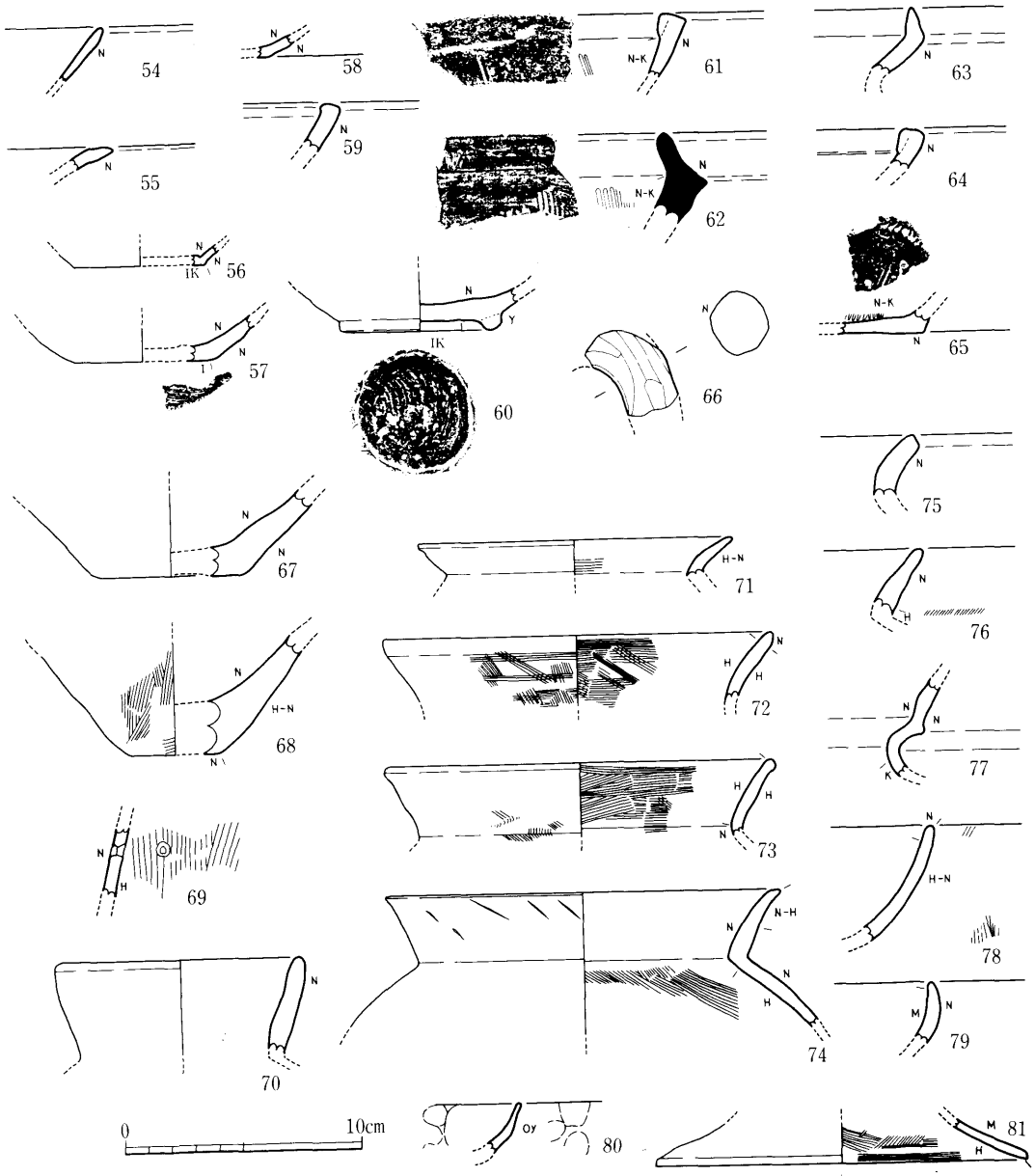


Fig. 21　出土遺物実測図(3)

26・42・43 は第 5 層、20～22・30・33・39～41・44・47・48・50 は第 7 層、23～25・28・29・31・32・34・36～38・49 は第 8 層出土。27・46 は暗渠出土。35・45 は表採。

T－1区（Fig. 21—55・59・60・63・66，PL. 19・20）

60 を除いた 4 点は第 1 号土壙から出土。55 は土師器の皿。器壁はやや厚く端部でやや膨

らみ先端は急に細くなる。大内氏館跡でいうB式土師器にあたる。59は土師質土器の鍋。端部は内側が肥厚する。63・66は瓦質土器の鍋。63は口縁端部を引き出し、内側に屈曲させる。15世紀代。66は脚部。断面はほぼ円形を呈し、表面はナデによる凸凹が明瞭。

60は土師器の椀。高台の断面は五角形を呈し内側が接地する。底部は静止糸切り。撹乱層出土。

T－5区（Fig. 21—54・56～58・61・62・64・65，PL. 19・20）

54・56～58は土師器の皿。54は体部が直線的に伸び、口縁はやや肥厚し端部は丸い。56は内面の底部と体部との境にロクロ成形時の凹線が巡る。底部糸切り。57は、外底面に板状圧痕がつく。61は土師質土器の擂鉢。口縁端部は内面に折り返し肥厚させる。おろし目は2本しか確認できない。64・65は瓦質土器の擂鉢。64の口縁端部は61と同じく、内面に折り返し肥厚させる。65は内底面にもおろし目を施す。単位は5本。62は須恵質陶器の擂鉢。口縁を引き上げ内傾させる。おろし目の単位は6本以上。

56・58・61・65は第6層から、62・64は第7層から、54・57は第8層から出土。

U区（Fig. 21—67～81，PL. 20）

67・68は弥生土器の甕。平底の底部。69は弥生土器の甕もしくは壺の胴部。器壁に焼成後の両面からの穿孔がみられる。

70は土師器の壺。口縁端部の上面に面をもつ。71～77は土師器の甕。71は口縁端部が肥厚し、外面上部に煤が付着する。72は口縁端部の上面に面をもつ。73は口縁端部が肥厚する。口縁内面にも刷毛を施し、刷毛の単位は10本以上。74は口縁端部が外方につまみ出される。口縁外面には、ナデの後ヘラ状工具で不規則な右下がりの斜線を刻む。75は口縁が外反し、端部は外面に面をもつ。76は口縁が直線的に伸び、頸部外面には刷毛目がナデ残される。77は胴部内面にケズリを施す。外面には煤が付着する。山陰系。78・79は土師器の碗。体部はゆるく内弯して立ち上がる。78は口縁端部が丸い。79は口縁端部が尖り、内面にミガキを施す。81は土師器の高坏。外反気味に伸びる脚部で、端部は外面に面をもち、尖る。80は土師器の鉢。手捏による成形で、指頭圧痕が明瞭に残る。端部は薄く尖る。

71・78は第1号竪穴住居跡、68・69は第2号竪穴住居跡、79は第3層、他は第4層出土。

石器（Fig. 22，PL. 20）

掻器（1）

厚手の横長剝片を素材とし、下縁に腹面側から調整加工を施し刃部とする。腹面側が主要剝離面で、下半部左方向からの加撃によって打点を除去する。T－3区第1号土壙出土。

Fig. 22　出土遺物実測図(4)

二次加工のある剝片（2）

縦長剝片を素材とし、上下両縁に調整加工を施す。背面右側縁上半部は腹面側からの加撃によって素材を変形させる。背腹両面とも剝離方向は上からである。S区第5層出土。

使用痕のある剝片（3～6）

3は寸づまりの小形の横長剝片を素材とし、背面右側縁中央部に連続する微細な剝落痕が認められる。背腹両面の剝離方向は同一で、打点が残存する。4は大半を欠損するが、リングから素材は縦長剝片であろう。背腹両面とも剝離方向は上からであるが、主要剝離面はわからない。背面右側縁に使用痕が認められる。5は縦長剝片を素材とし、腹面左側縁の大部分に使用痕が認められる。腹面側が主要剝離面で、打面、打点が残存する。6は素材の大半を欠損する。背面下縁に連続する剝落痕が認められる。腹面側が主要剝離面で、左側縁上部の剝離面は剝片剝離後のものである。背腹両面の剝離方向は90°もしくは180°ずれる。3・4はS区第5層、5はT－5区第6層、6はT－5区第7層出土。

剝片（7～11）

縦長剝片と横長剝片がある。背腹両面の剝離方向が同一のもの（10・11）と大きくずれるもの（7・9）などがある。7・11には原礫面が存在する。7はA区河川跡、10はG区第3層、その他はS区第5層出土。

石核（12）

剝片剝離作業は打面を転位しながら、各作業面を打面として行われる。打面は主として上面に設定される調整打面で、目的剝片は横長もしくは寸づまりな縦長剝片である。T－5区第7層出土。

砥石（13）

上下両面を研砥面とする、仕上げ砥。U区第4層出土。

4　小結

前回の試掘調査では、遺物包含層の堆積している工事路線については大まかにその分布範囲を把握していたが、遺構は幼稚園グラウンドのわずか1ヶ所で確認していたにとどまっていた。今回の調査では幼稚園敷地で10ヶ所、小学校敷地で15ヶ所設定した調査区のうち、幼稚園敷地では3ヶ所、小学校敷地では9ヶ所で遺構もしくは遺物包含層を検出した。

検出した遺構には竪穴住居跡、土壙、溝、柱穴などの集落関連遺構と河川跡がある。大半の遺構は小学校敷地の南部および西部のグラウンドに分布している。

幼稚園の敷地では河川跡、土壙、柱穴および遺物包含層を検出した。河川跡は幅約3.6m以上、検出面からの深さは最大で約90cmの規模をもち、北東から南西に走行する。今回はじめて検出したが、検出長が十分でないため、構内のどの部分を貫流するのか現時点ではわからない。出土遺物にはやや時期的に遡るものも含まれるが、庄内併行期のものが主体

を占める。

南部に位置する小学校低学年棟周辺のＳ区では、北東から南西に向かって地山が大きく落ち込んでおり、谷状の地形を呈する。このような地山の落ち込みは周辺ではみられず、構内の南西端部付近では東から西に延びる丘陵が局部的に樹手状に張りだしていることを示唆している。埋積土は数層に分層されるが、同一層に弥生時代中期に遡る可能性がある壺や庄内併行期から布留式併行期の遺物が混在しており、単一時期の遺物によって構成されておらず、一括性に乏しい。

竪穴住居跡は小学校低学年棟周辺のＴ－３区で１棟、小学校グラウンドのＵ区で２棟の計３棟を検出した。Ｔ－３区で検出した住居跡は壁溝が残存しているにすぎず、平面形態は円形である。出土遺物はないが、周辺の調査区から弥生時代中期に遡る遺物が出土していることなどからも弥生時代中期～後期のものと考えられる。Ｕ区の住居跡は切り合い関係にあり、平面形態が円形のものと方形系統のものとがある。前者は時期決定の決め手を欠くが、甕の底部の形状から弥生時代後期でも新しい時期から庄内併行期のものであろう。後者の出土遺物も少ない。上層の遺物包含層からは口縁端部の形状はわからないが、口縁部外面の立ち上がり部に櫛描き凹線文がみられない山陰系の甕や胴部内面がヘラケズリされず刷毛目を用いる甕など、明らかに布留式にまで下がる遺物を含まないことから、庄内式の古い段階に位置づけられよう。

小学校運動場ではＵ区のすぐ南西で布留式併行期の竪穴住居跡が検出されている[3]。したがって、幼稚園・小学校敷地では弥生時代中期～後期、庄内式併行期、布留式併行期の少なくとも３時期の住居が営まれていたことになる。Ａ区の河川跡、Ｓ区の谷状の落ち込みなどからも同時期の遺物が出土することも傍証となろう。居住地はグラウンド南半部から以東が選地されており、庄内式～布留式併行期が集落の主体となる時期である。弥生時代中期～後期の遺構は幼稚園・小学校敷地のすぐ東側に存在する亀山西麓に所在する亀山遺跡[4]でも検出されており、リンケージする集落構成遺構がさらに分布している可能性がある。

なお、小学校低学年棟の南側に位置するＴ－１区では、室町時代の土壙が検出されている。幼稚園・小学校敷地でははじめて検出した中世の遺構で、布留式併行期以後、散発的に遺物は出土しているが基本的には15～16世紀まで遺跡の断絶期間がある。Ｔ－５区でも15～16世紀の遺物が出土しており、当該期の集落が存在していることが予想される。

出土遺物のうち注目しておきたいものがいくつかある。

まず、Ｄ区で出土した突帯文の甕は幼稚園・小学校敷地でははじめて出土した縄文土器

である。周辺での当該期の遺跡は、亀山を挟んだ北東約500mに位置する後河原(松柄)遺跡[5]が知られているにすぎない。遺物は遺跡の東側を南北に走行する一の坂川の堆積作用に起因する二次堆積層からの出土で、出土状態が異なる。幼稚園・小学校敷地の南約200mに位置する中学校敷地でも後・晩期の遺物が遺物包含層から出土しており[6]、亀山西方の地域にも新たな縄文時代後・晩期の遺跡が存在することが予想される。

また、S区では内面に炭素を吸着させる黒色土器A類が出土した。断面三角形の低い高台をもつ底部の資料で、おおよそ10世紀代に比定される。県内では宮衙、寺院跡などを除いて一般の集落跡からの出土例は少なく、一般集落への流入・流通経路はいまだ不明瞭な部分が多い。亀山構内での当該期の遺構の検出が期待される。また、T－1区で出土した土師器の皿はいわゆる大内氏館「B式土師器」[7]で、14世紀後半～16世紀中頃にかけて存続した大内氏館の後半期に、大内氏内部で独自に生産・流通・消費した土師器である。従来、大内氏館跡[8]や大内氏の別邸である築山跡[9]および大内氏臣下の集団墓である瑠璃光寺跡遺跡[10]などの大内氏関連の諸施設や供養施設から特徴的に出土することが知られていた。附属中学校敷地でも出土例[11]があり、亀山構内一帯に大内氏関連施設が存在していた可能性がある。

(古賀・河村)

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「亀山構内教育学部附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、1987年)。
2) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年)。
3) 前掲注2)。
4) 小野忠熙「本州西端地方における古代の墨・濠遺跡」(『古代学』第5巻第2号、古代学協会、1956年)。
5) 浜田清吉『山口市後河原の遺物発見地』(山口大学教育学部、1953年)。
6) 前掲注1)。
7) 山口市教育委員会『大内氏館跡VII－大内氏遺跡発掘調査概報VIII・概要－』(1987年)。
8) a 山口市教育委員会『大内氏館跡I』(1981年)。
   b 山口市教育委員会『大内氏館跡II』(1980年)。
   c 山口市教育委員会『大内氏館跡III』(1981年)。
   d 山口市教育委員会『大内氏館跡IV』(1982年)。
   e 山口市教育委員会『大内氏館跡V』(1983年)。
   f 山口市教育委員会『大内氏館跡VI』(1984年)。
   g 山口市教育委員会『大内氏館跡VII』(1986年)。
   h 前掲注7)。
9) 山口市教育委員会『大内氏築山跡I』(1986年)。
   山口市教育委員会『大内氏築山跡II』(1988年)。
   山口市教育委員会『大内氏築山跡III』(1989年)。
   山口市教育委員会『大内氏築山跡IV』(1990年)。
10) 山口市教育委員会『瑠璃光寺跡遺跡』(1988年)。
11) 前掲注1)。

出土遺物観察表

Tab. 3　出土遺物観察表

法量(　)は復原値

番号	器　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　考
A区						
1	弥生土器　壺	②(4.8)	①黄灰色 (2.5Y6/1) ②灰黄褐色 (10YR6/2)	不　良	良　好	
2	弥生土器　甕	②(7.0)	①にぶい橙色 (7.5YR7/4) ②灰黄褐色 (10YR4/2)	不　良	良　好	
3	弥生土器　甕	②(6.6)	橙色 (2.5YR7/8)	不　良	良　好	
4	弥生土器　甕		にぶい黄橙色 (10YR3/6)	不　良	良　好	
5	弥生土器　甕		①橙色 (2.5YR7/6) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	やや不良	良　好	
6	弥生土器　鉢	①(14.8)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	やや不良	良　好	
7	土師器　甕	①(13.8)	淡黄色 (2.5Y8/3)	不　良	不　良	
8	土師器　甕	①(16.8)	①橙色 (2.5YR6/6) ②にぶい橙色 (5YR7/4)	やや不良	良　好	畿内系
9	土師器　甕	①(11.8)	①橙色 (5YR7/6) ②淡黄色 (2.5Y8/3)	良　好	良　好	
10	土師器　甕		①灰黄褐色 (10YR6/2) ②淡黄色 (2.5Y8/3)	やや不良	良　好	畿内系
11	土師器　甕	①(16.1)	①灰褐色 (5YR5/2) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	山陰系
12	土師器　甕		にぶい橙色 (7.5YR7/3)	良　好	良　好	山陰系
13	弥生土器　甕	②(4.2)	①橙色 (2.5YR6/6) ②明赤褐色 (2.5YR5/6)	やや不良	良　好	
14	土師器　甕		①赤橙色 (10R6/6) ②橙色 (2.5YR7/8)	やや不良	良　好	山陰系
15	土師器　高坏		①にぶい橙色 (5YR7/4) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	
D区						
16	縄文土器　甕		黒褐色 (10YR3/1)	不　良	良　好	
17	土師器　高坏		橙色 (5YR7/6)	良　好	良　好	
18	土師器　高坏	②(9.2)	橙色 (5YR7/8)	良　好	良　好	
G区						
19	土師器　皿		①浅黄橙色 (2.5Y7/3) ②灰色 (5Y5/1)	良　好	良　好	
S区						
20	弥生土器　壺		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	
21	弥生土器　甕	②(4.3)	①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②淡黄色 (2.5Y7/2)	良　好	良　好	
22	土師器　甕		①にぶい黄橙色 (10YR7/3) ②淡黄色 (2.5Y8/3)	やや不良	良　好	
23	弥生土器　甕		①橙色 (2.5YR6/6) ②橙色 (7.5YR6/6)	良　好	良　好	
24	土師器　小型丸底壺	①(10.1)	にぶい橙色 (5YR7/4)	良　好	良　好	
25	土師器　小型丸底壺		橙色 (5YR7/6)	やや不良	良　好	
26	土師器　甕		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや不良	良　好	
27	土師器　甕		にぶい橙色 (5YR6/3)	良　好	良　好	布留系
28	土師器　甕		①橙色 (2.5YR7/6) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	良　好	良　好	
29	土師器　甕		にぶい橙色 (5YR6/4)	良　好	良　好	
30	土師器　甕		①黄灰色 (2.5Y4/1) ②黒褐色 (10YR3/2)	良　好	良　好	
31	土師器　甕		橙色 (2.5YR6/6)	良　好	良　好	
32	土師器　甕		にぶい橙色 (7.5YR7/4)	やや不良	やや不良	
33	土師器　甕		赤橙色 (10R6/6)	良　好	良　好	
34	土師器　甕		にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良　好	良　好	
35	土師器　甕	①(12.8)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	良　好	良　好	
36	土師器　甕		浅黄橙色 (10YR8/3)	良　好	良　好	畿内系
37	土師器　鉢		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	
38	土師器　椀	①(13.1)	暗褐色 (N3/10)	良　好	良　好	
39	土師器　高坏		橙色 (5YR7/6)	良　好	やや不良	

法量（　）は復原値

番号	器　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　考
40	土師器　高坏		橙色（5YR7/6）	良　好	やや不良	
41	土師器　高坏		①にぶい橙色（7.5YR7/4） ②にぶい黄橙色（10YR7/2）	良　好	良　好	
42	土師器　高坏		黄橙色（7.5YR8/8）	良　好	やや不良	
43	土師器　高坏		①橙色（7.5YR7/6） ②にぶい黄橙色（10YR7/3）	やや不良	良　好	
44	土師器　高坏		浅黄橙色（7.5YR8/4）	良　好	良　好	
45	土師器　高坏		①にぶい橙色（5YR7/4） ②にぶい黄橙色（10YR6/4）	良　好	良　好	
46	土師器　高坏		橙色（5YR7/6）	良　好	良　好	
47	土師器　高坏		にぶい黄橙色（10YR6/3）	良　好	良　好	
48	土師器　高坏	②(10.4)	黄橙色（7.5YR8/8）	良　好	良　好	
49	土師器　高坏	②(10.6)	淡橙色（5YR8/3）	良　好	良　好	
50	須恵器　坏蓋		灰色（N5/0）	良　好	良　好	
51	黒色土器　椀	②(6.6)	①黄灰色（2.5Y4/1） ②黒色（N1.5/0）	良　好	良　好	内黒
52	黒色土器　椀	②(5.8)	①灰白色（5Y8/1） ②黒色（N1.5/0）	良　好	やや不良	内黒
53	瓦質土器　鍋		①黒灰色（N3/0） ②灰白色（7.5Y7/1）	良　好	良　好	
T区						
54	土師器　皿		浅黄橙色（7.5YR8/3）	良　好	良　好	
55	土師器　皿		浅黄色（2.5Y7/3）	良　好	良　好	大内氏館B式
56	土師器　皿	②(5.6)	灰白色（2.5Y8/2）	良　好	良　好	
57	土師器　皿	②(5.6)	橙色（7.5YR7/6）	良　好	良　好	
58	土師器　皿		淡赤橙色（2.5YR7/4）	良　好	良　好	
59	土師質土器　鍋		淡黄色（2.5Y8/3）	良　好	やや不良	
60	土師器　椀	②(6.5)	①明褐灰色（7.5YR7/2） ②にぶい黄橙色（10YR7/2）	良　好	良　好	
61	土師質土器擂鉢		にぶい黄橙色（10YR7/4）	やや不良	良　好	
62	須恵質陶器擂鉢		①灰白色（N7/0） ②灰色（N5/0）	良　好	良　好	
63	瓦質土器　鍋		黒色（10Y2/1）	良　好	良　好	
64	瓦質土器　擂鉢		暗灰色（N3/0）	良　好	やや不良	
65	瓦質土器　擂鉢		灰色（5Y4/1）	良　好	良　好	
66	瓦質土器　鍋		①黄灰色（2.5Y5/1）	良　好	良　好	
U区						
67	弥生土器　甕	②(6.0)	①にぶい黄橙色（10YR6/3） ②暗灰黄色（2.5Y5/2）	良　好	良　好	
68	弥生土器　甕	②(3.8)	①にぶい橙色（5YR7/4） ②にぶい橙色（7.5YR7/4）	良　好	良　好	
69	弥生土器　不明		①黒褐色（10YR3/1） ②黄灰色（2.5Y5/1）	良　好	良　好	
70	土師器　壺	①(10.0)	①灰黄褐色（10YR6/2） ②黄灰色（2.5Y4/1）	良　好	良　好	
71	土師器　甕	①(13.2)	浅黄橙色（10YR8/3）	良　好	良　好	
72	土師器　甕	①(16.2)	にぶい黄橙色（105YR6/3）	良　好	良　好	
73	土師器　甕	①(16.3)	にぶい橙色（7.5YR7/3）	良　好	良　好	
74	土師器　甕	①(16.8)	にぶい黄橙色（10YR7/4）	良　好	良　好	
75	土師器　甕		浅黄橙色（10YR8/4）	不　良	やや不良	
76	土師器　甕		①橙色（2.5YR6/6） ②にぶい黄橙色（10YR7/3）	良　好	良　好	
77	土師器　甕		橙色（5YR7/6）	良　好	良　好	山陰系
78	土師器　椀		橙色（5YR6/6）	良　好	良　好	
79	土師器　椀		浅黄橙色（7.5YR8/4）	良　好	良　好	
80	土師器　鉢		橙色（7.5YR6/6）	良　好	良　好	手捏
81	土師器　高坏	②(15.7)	①橙色（7.5YR7/6） ②にぶい黄褐色（10YR5/4）	良　好	良　好	

出土遺物観察表

法量（　）現存値

番号	器　　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	石　　質	出　土　層　順
1	掻　　器	28.0	15.5	10.0	3.5	姫島産黒曜石	T－3区第1号土壙
2	二次加工のある剥片	27.5	13.0	5.5	2.5	姫島産黒曜石	S区第5層
3	使用痕のある剥片	21.0	12.5	4.0	0.8	腰岳産黒曜石	S区第5層
4	使用痕のある剥片	(14.0)	(10.0)	4.0	0.4	腰岳産黒曜石	S区第5層
5	使用痕のある剥片	29.0	17.5	6.0	2.2	讃岐岩質安山岩	T－5区第6層
6	使用痕のある剥片	(19.0)	13.5)	3.5	1.2	姫島産黒曜石	T－5区第7層
7	剥　　片	31.5	29.0	11.0	7.4	腰岳産黒曜石	A区河川跡
8	剥　　片	14.0	31.5	6.5	3.6	讃岐岩質安山岩	S区第5層
9	剥　　片	14.0	17.5	3.5	1.0	腰岳産黒曜石	S区第5層
10	剥　　片	(20.5)	22.5	5.5	2.1	姫島産黒曜石	G区第3層
11	剥　　片	(35.0)	39.0	4.5	8.0	姫島産黒曜石	S区第5層
12	石　　核	28.5	44.5	27.0	31.6	姫島産黒曜石	T－5区第7層
13	砥　　石	(56.0)	(58.0)	43.0	102.6	珪長岩	U区第4層

第４章　小串構内医学部附属病院ＭＲＩ棟新営に伴う試掘調査

１　調査の経過

小串構内のほぼ中央部、附属病院病棟の南西 40m の地域にＭＲＩ棟の新営が計画された。病棟の敷地では、昭和 62・63 年度の調査でナイフ形石器・削器・二次加工のある剝片・使用痕のある剝片・敲石・石核など、後期旧石器時代の所産と考えられる石器群が出土している[1) 2)]。これらの遺物は、病棟南西隅に堆積する灰色砂層に限定的に包含されており、新営予定地にも同層が分布していることが予想された。灰色砂層は周辺から流入した二次堆積層であったが、比較的良好な石器群を包含していることから、病棟敷地南側周辺での開発行為については埋蔵文化財保護上の手続きが必要であった。

上記の調査結果を踏まえて、埋蔵文化財資料館運営委員会はまず、予定地内の灰色砂層の堆積範囲および埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査を実施することとした。また、顕著な遺構・遺物包含層が検出された場合には、再度、同委員会においてその取り扱いについて協議することとした。

予定地は駐車場に使われていたが、慢性的な駐車場不足のため、駐車スペースを可能な限り確保したい旨の要望もあったことから、試掘調査は、既設の埋設管を回避して、予定地南辺部および北東部に幅約１～1.5m のトレンチを計３ヶ所設定して行った。

なお、病棟敷地では過去の調査で、旧水田耕作土中にも石器が含まれていることが確認されていることから、重機による排土は構内造成時等の埋め土までにとどめ、以下の堆積層は手掘りによる分層発掘を行った。

調査期間は平成元年６月26日から７月６日までで、調査面積は約45m²である。

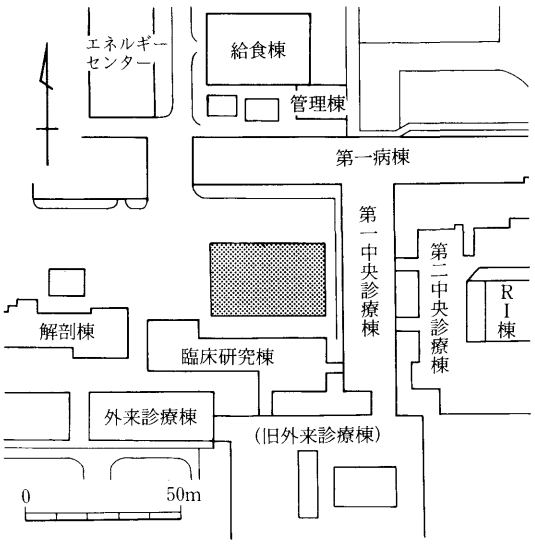


Fig. 23　調査区位置図

２　層位（Fig. 25，PL. 23(2)～(4)）

Ａトレンチ

新営予定地の南西部に東西に設定した 1.5m×4.4m のトレンチ。現地表面から約 80～95 cmまでは構内造成時等の埋め土

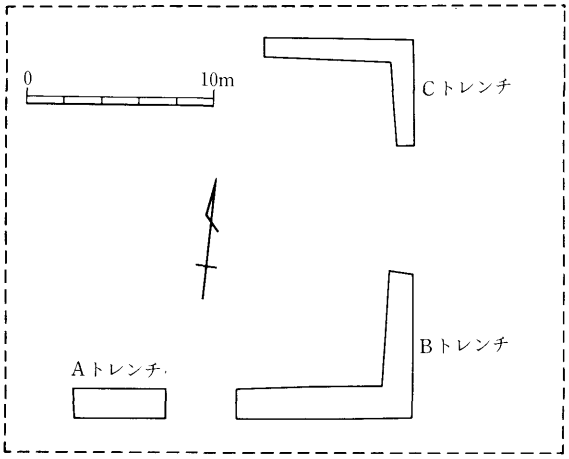


Fig. 24　トレンチ設定図

で、その下には新旧２層の旧水田耕作土が認められる。上層の第２層は層厚15～20 cmであるが、下層の第３層はブロック状に部分的に残存するにすぎない。床土相当層は存在しない。その下位には東端部にわずかに堆積する緑灰色土を挟んで、層厚約10～20 cmの黄褐色粘質土、層厚40 cm以上のオリーブ色砂に続く。黄褐色粘質土、オリーブ色砂とも植物遺体を含んでいる。

遺物は、上層の旧水田耕作土から削器、細石刃が出土した。しかし、それ以下の堆積層からの出土遺物はなく、また、病棟敷地で認められた灰色砂層相当層も堆積していないことから、掘削はオリーブ色砂までにとどめた。

Ｂトレンチ

新営予定地の南東部に設定した東西1.5m×9.5m、南北１ m× ７ mの「Ｌ」字形のトレンチ。西端部は旧建物の基礎が存在する。現地表面から約80～100 cmまでは構内造成時等の埋め土で、その下にはＡトレンチ同様、新旧２層の旧水田耕作土が認められる。上層の第２層は層厚5～20 cm、下層の第３層は最大層厚約15 cmで南半部を中心に客土されている。その下には床土をはさんで植物遺体を含む黄褐色粘質土が堆積するが、層厚は最大でも約10 cmで、南端部に分布するにすぎない。さらに最大層厚各25 cmの第９層：黄灰色土、第10層：灰色土が堆積する。その下位には最大層厚約20 cmの第11層：灰色粘質土が南東隅にブロック状に堆積し第12層：灰オリーブ色砂に続く。第11・12層は植物遺体を含む。

遺物は、旧水田耕作土から剥片、第９層から細石刃・剥片、第10層から二次加工のある剥片・剥片、第12層から剥片が出土した。

掘削は遺物を包含する第12層まで行ったが、剥片１点が同層上面で出土したにとどまったため、最大約30 cmまでの掘り込みにとどめた。

Ｃトレンチ

新営予定地の北東部に設定した東西１ m× ８ m、南北１ m×5.5mの「Ｌ」字形のトレンチ。現地表面から約90～110 cmまでは構内造成時等の埋め土で、その下には新旧２層の旧水田耕作土が認められる。上層の第２層は層厚20～25 cmであるが、下層の第３層はブロッ

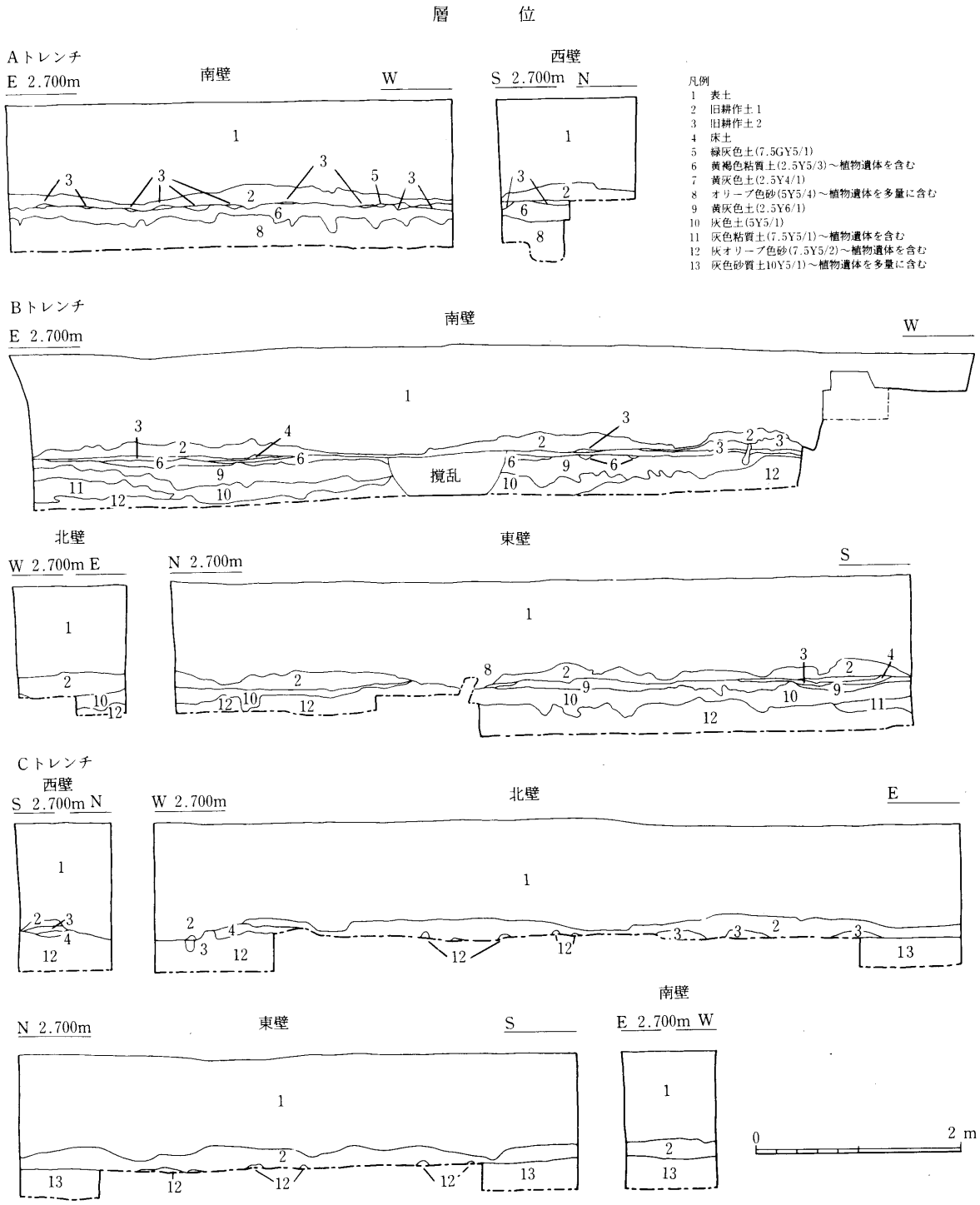


Fig. 25　土層断面実測図

ク状に部分的に残存するにすぎない。床土は西端部に存在する。その下位には植物遺体を含む第12層：灰オリーブ色砂、第13層：灰色砂質土が堆積する。

遺物は、上層の旧水田耕作土から剥片、床上から石核各１点が出土した。

３　出土遺物（Fig. 26，PL. 24）

削器（１）

縦長剥片を素材とし、背面左側縁上半および右側縁に腹面側から調整加工を施す。腹面側が主要剥離面で、原礫面を打面とし、打点が残存する。背面の３枚の剥離面と腹面の剥離方向は180°ずれている。Ａトレンチ第２層出土。

細石刃（２・３）

２は上端部が腹面からの加撃による２枚の剥離面によって打面、バルブが除去されている。背面右側縁および左側縁上半部に連続する微細な剥落痕が認められる。背面側には原礫面を残す。３は厚手で、上端部の平坦な原礫面を打面とする。原礫面付近に不純物の集中部が存在する。背面と腹面の剥離方向は180°ずれている。２はＡトレンチ第２層、３はＢトレンチ第９層出土。

二次加工のある剥片（４）

上半部を欠損する。縦長剥片を素材とするものと思われ、主要剥離相当面の腹面右側縁に、主として背面側から二次加工が施される。背面右側縁の３枚の剥離面も調整加工の可能性がある。Ｂトレンチ第３層出土。

剥片（５～７）

５は上半部を欠損し、背面と腹面の剥離方向が大きくずれている。６は不定形な縦長剥片で、平坦な打面を残す。腹面左側縁に原礫面を残し、不純物の集中部が随所に存在する。背面の左半部の剥離面と背面の右半部の剥離面および腹面の剥離方向は180°ずれている。７は小形の横長剥片で、平坦打面をもつ。６はＢトレンチ第２層、５はＢトレンチ第９層、７はＣトレンチ第２層出土。

石核（８）

上面および正面下半の各１枚の傾斜した比較的大きな剥離面を主な打面とする。打面は単剥離打面で、180°転位しながら剥離作業を行う。目的剥片は寸づまりな横長剥片である。Ｃトレンチ第４層出土。

なお、石器を包含する堆積層からは、歴史時代土師器、瓦質土器、国産陶磁器、瓦などの中～近世の遺物もあわせて出土している。

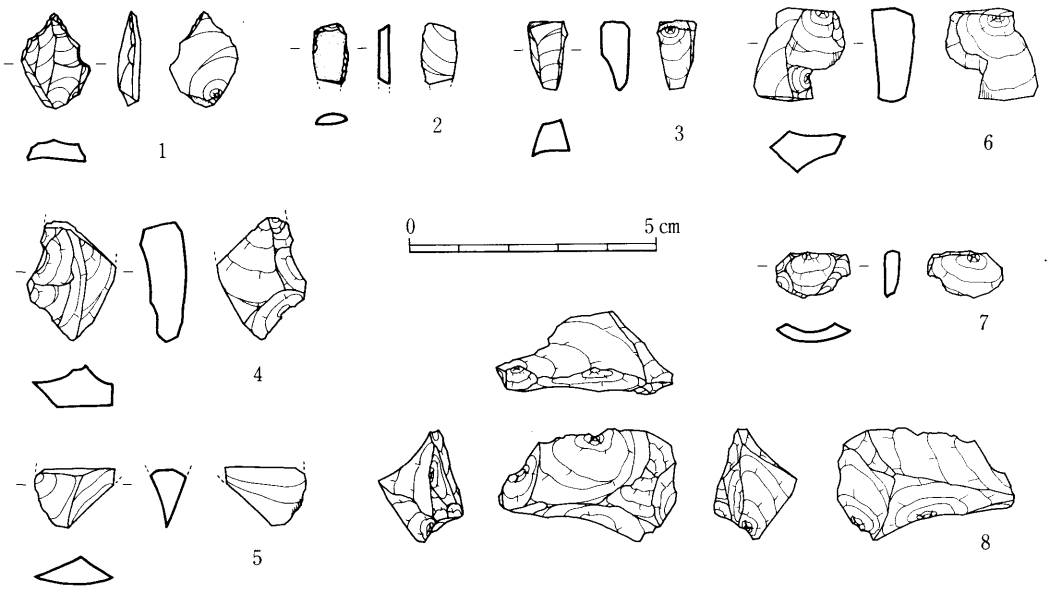


Fig. 26　出土遺物実測図

Tab. 4　出土遺物観察表

法量(　)は現存値

番号	器　　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	石　　質	出　土　層　位
1	削　　器	19.0	14.0	5.0	1.0	蛇紋岩	Aトレンチ第2層
2	細　石　刃	(1.2)	0.7	0.2	0.2	流紋岩	Aトレンチ第2層
3	細　石　刃	13.5	8.0	6.5	0.8	チャート	Bトレンチ第9層
4	二次加工のある剥片	(24.0)	18.5	8.0	2.2	玻璃質安山岩	Bトレンチ第10層
5	剥　　片	(11.5)	(17.0)	(5.5)	0.6	姫島産黒曜石	Bトレンチ第9層
6	剥　　片	18.5	19.0	8.0	2.3	チャート	Bトレンチ第2層
7	剥　　片	9.0	17.5	3.0	0.4	チャート	Cトレンチ第2層
8	石　　核	22.0	37.0	17.5	7.2	玻璃質安山岩	Cトレンチ第4層

4　小結

今回の調査では、削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核など計12点が出土したが、病棟敷地での出土点数に比べて極めて少ない。出土層順は、旧水田耕作土および床土をはじめとした各堆積層で、平面的・垂直的な集中部は認められない。また、床土より下位の堆積層は、いずれも大きく時期の隔たる遺物が混在しており、粒土・組成・色調などからも純粋な遺物包含層とは考えられず、周辺から流入した二次堆積層と考えられる。病棟敷地で検出した、多量の石器を包含する灰色砂層に相当する堆積層は、第9層もしくは第10層と考えられるが、色調が若干異なることや出土量が極めて少ないことから、同一層として把握するには躊躇する。

出土点数が少ないが、剥片剥離技術は主要剥離面と背面の剥離方向が180°ずれるものがあ

る。削器にみられるように、背面が対向する剝離面によって構成されるもので、両設打面の石核の存在が予想される。打面は、原礫面を打面とするものと調整打面をもつものとがある。

石材は、チャート、蛇紋岩、姫島産黒曜石、玻璃質安山岩、流紋岩などで、出土点数に比較して多種におよぶ。小串構内はもとより宇部台地の遺跡群に共通する石材の選択行為である。流紋岩を石材とするものは、小串構内では初例の出土である。第一次剝片で、剝片長から小ぶりな円礫素材の細石刃核が想定される。

石器類は二次堆積層からの出土であるため、明確な石器組成を反映していないが、病棟敷地でナイフ形石器を包含する堆積層に相当する堆積層から出土していることから、ここでは大きくナイフ形石器文化期から細石刃文化期にかけての所産と理解しておく。

（河村）

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「小串構内医学部附属病院病棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988 年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「医学部附属病院病棟新営に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1990 年）。

第5章　平成元年度山口大学構内の立会調査

第1節　吉田構内の立会調査

1　椹野寮ボイラー設備改修に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　O・P－20・21

調査期間　平成元年4月3日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約25㎡

調査結果　工事は、椹野寮ボイラー設備の改修に伴い、2基のため桝の新設とそれから分岐する既設桝への配管の接続を行うものである。配管部分は現地表面から約50㎝程度の掘削であったため、調査はまず、現地表面から最大約1mの掘削を行う西側のため桝部分の土層観察から実施した。現地表面から約80㎝掘り下げたところで、東に向けて走行する高圧ケーブルの存在を記したシートが見つかった。本線は少なくともその下位約30㎝に埋設されていることが確実なため、工事深度内はすでに撹乱を受けていると考えられた。東側のため桝部分は、この高圧ケーブルの延長線上にあること、また、既設桝が近接して存在することなどから調査対象から除外した。

配管部分は、既設の構築物による撹乱を免れている可能性の最も高い西側のため桝から南に分岐する部分について調査した。幅約40㎝、総延長距離約25mについて立ち会ったが、現地表面から約40㎝までは砂質の埋め土で、その下位には、地山と考えられる黄褐色粘質土を主体とした後世の撹乱による土層がブロック状に堆積している。土層の堆積状況から本学統合移転時の造成による撹乱に起因すると考えられるが、調査面積が狭く積極的な資料は得られなかった。

なお、遺物は全く出土しなかった。

（木村）

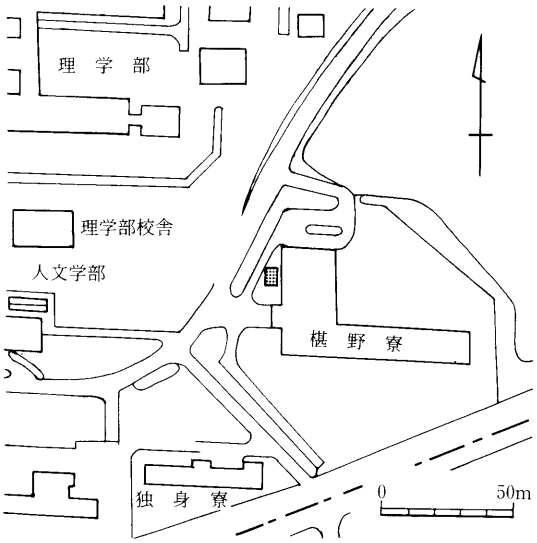


Fig. 27　調査区位置図

2　野球場防球ネット新営に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　Ⅰ・J・K－21、H・Ⅰ・K－22

調査期間　平成元年4月3・4日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約7㎡

調査結果　工事は、吉田構内の南端中央部に位置する、野球場の東西両縁に沿って防球ネットを新営するものである。調査は、支柱となるコンクリートポールの埋設地点20ヶ所について10m間隔で行ったが、工事の性格上、各土層の堆積状況は十分に把握できなかった。

遺物包含層と思われる灰オリーブ色土(Hue5Y4/2)は、北半部を中心に3ヶ所で検出した。出土遺物には土師器、須恵器、歴史時代土師器、瓦質土器、陶器など11点があるが、いずれも小破片で、時期差のある遺物が混入していることから、周辺からの流れ込みによるものと考えられる。

また、北端部では、土師器を包含する黒褐色粘質土(Hue5YR2/1)が堆積している。色調、遺物の時期などから、北側に隣接する「遺跡保存地区」の遺構[1)2)3)]と一連のものである可能性があるが、遺構の性格はわからない。

なお、野球場南縁を巡る市道部分では、弥生時代の遺物包含層が検出されており[4)]、「遺跡保存地区」から野球場にかけて、弥生時代から古墳時代の遺構、遺物包含層が広範囲に分布していることが予想される。　(河村)

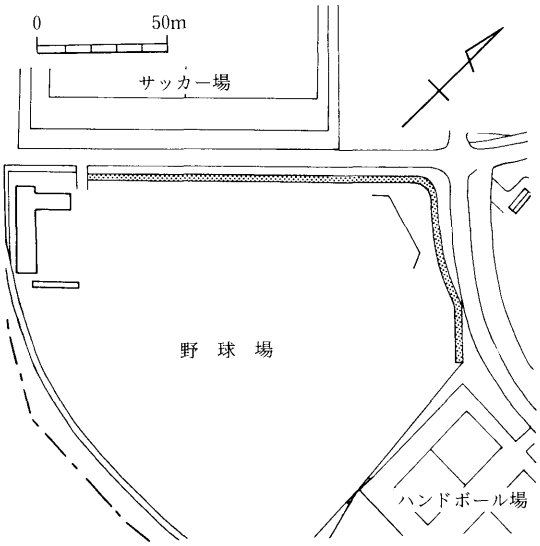


Fig. 28　調査区位置図

[注]

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和57年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年)。

2) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年)。

3) 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和60・61年度)」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1990年)。

4) 山口大学埋蔵文化財資料館「市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設に伴う立会調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年)。

3　防火水槽配管布設に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　K－21・22

調査期間　平成元年4月4・5日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約15㎡

調査結果　工事は、国際交流会館と人文学部間に存在する防火水槽への配管を埋設するために、野球場東縁部分とハンドボールコート西縁部分の総延長距離約20mについて、幅約75㎝、現地表面から約1 mの掘削を行うものである。

野球場東縁部分の基本層序は、上位から、腐植土、本学統合移転時の造成による埋め土、旧耕作土、床土、灰オリーブ色土（Hue5Y4/2）、黄褐色粘質土の地山となっている。灰オリーブ色土は現地表面から約75㎝で検出され、層厚は20～25㎝である。木炭を含んでおり、先に述べた野球場防球ネット新営に伴う立会調査で検出された遺物包含層の可能性があるが、今回の調査では遺物は出土しなかった。

遺構は西端部で、上面径約20㎝、深さ18㎝の柱穴1個を検出した。出土遺物はないが、埋積土が黒褐色粘質土（Hue5YR2/1）であることから、北側に隣接する「遺跡保存地区」で検出される弥生時代から古墳時代の遺構と一連のものである可能性がある。

ハンドボールコート部分は野球場東縁部分に比べて約80㎝高くなっており、工事基底面まで掘削したが、腐植土、本学統合移転時の造成による埋め土、旧耕作土の堆積がみられたにすぎない。

（河村）

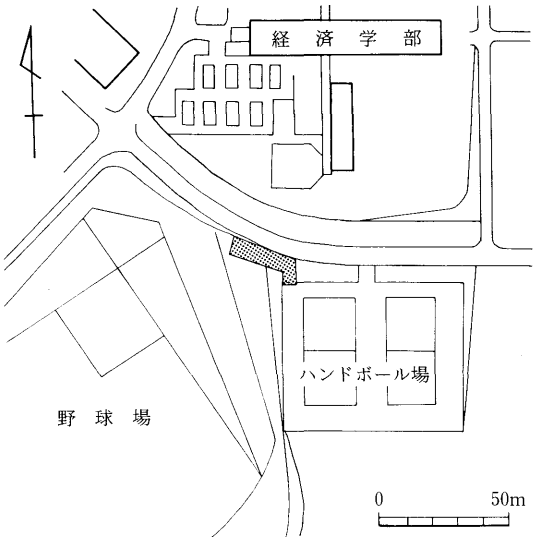


Fig. 29　調査区位置図

4　吉田寮ボイラー設備改修に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　L－8

調査期間　平成元年4月6日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約4㎡

調査結果　工事は、ボイラー棟西側に隣接してブロー桝を新設するもので、東西約1.6m、南北約2.1mの範囲内を現地表から約100㎝掘削するものである。ボイラー棟周辺は東から西へ大きく三段にわたって造成されており、調査地域は中位の段上に位置し、大規模な削平が予想された。

土層の堆積状況は、現地表面から約20㎝までは腐植土で、その下位には工事基底面まで本学統合移転時の埋め土の堆積がみられた。埋め土中にも遺物包含層と考えられる堆積層は検出されず、工事による埋蔵文化財への直接の影響はなかった。

なお、今回の調査地点の東に存在する上位の段上では、昭和58年度に学生部アーチェリー場的台設置に伴い立会調査を実施しており、現地表下約30㎝で岩盤が検出されている。[1] したがって、上位の段上では、北から南に延びる丘陵の鞍部が造成によって大きく削平を受けているが、土層の堆積状況から、ボイラー棟の存在する段は丘陵のカットによる平坦面ではなく、東方の丘陵の削平土によって谷を埋めた造成面である可能性が高い。

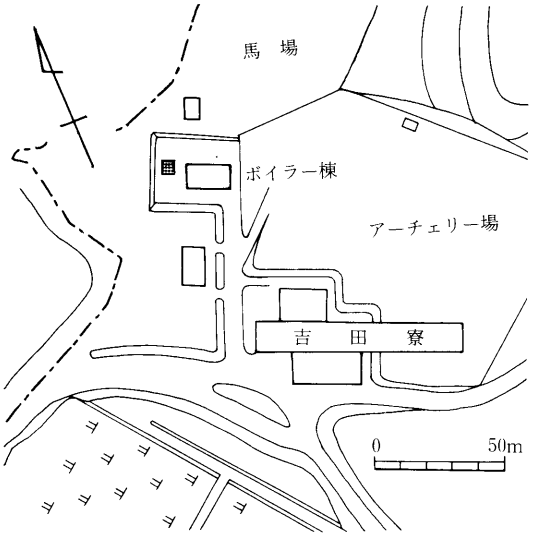


Fig. 30　調査区位置図

なお、今後、今回の掘削規模をこえる工事については、遺物包含層の存在が予想されるため、調査を実施する必要があろう。　（河村）

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「学生部アーチェリー場的台・電柱設置に伴う立会調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年）。

5　体育施設系給水管改修に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　G・H－16

調査期間　平成元年6月19日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約50 m²

調査結果　工事は、体育館の南側部分に東西方向に、総延長距離約60mについて幅約60cm、現地表面から約75cmの掘削を行い、給水管を埋設するものである。土層の堆積状態は、工事地点による層厚の差異はあるが、上位から本学統合移転時の造成による埋め土、旧耕作土、床土、弥生時代から古墳時代の遺構の検出面である黄褐色の粘質土が検出される。遺物包含層は未検出であったが、工事管路の東端部から西へ約14mの地点で、北東－南西に走行する溝を検出した。検出面は現地表面から約35cm下位で、幅約4.8m、深さ約35cmの規模をもつ。南に隣接する音楽棟敷地で検出した溝[1]と関連するものかもしれない。部分的に掘り下げたが、出土遺物はなかった。溝の取り扱いについて関係部局と協議の結果、遺構面におよばない範囲で工事を行うことで合意が得られ、遺構は保存されることになった。

なお、埋め土中から陶器の椀が出土した。

出土遺物（Fig. 32，PL. 26(2)）

萩焼の椀で、口径に比べて器高が低く、皿状を呈する。体部は内弯しながら開き、口縁部は直立して短く立ち上がる。素地は淡黄色（Hue5Y8/3）で、内面、外面上半部に淡黄色（Hue2.5Y8/3）の釉が施釉される。復原口径9.0cm、復原底径3.8cm、器高2.7cm。　（河村）

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

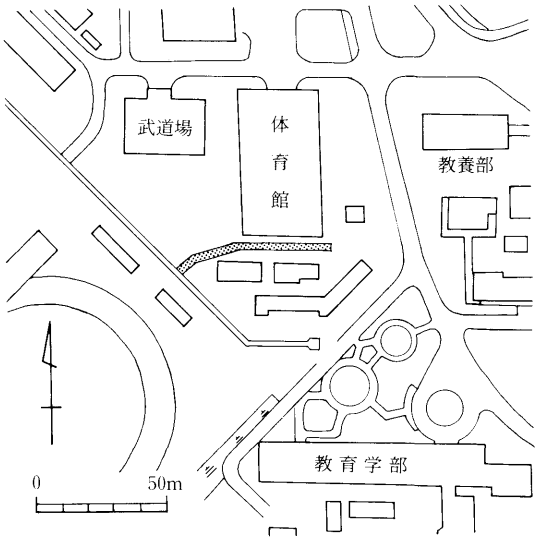


Fig. 31　調査区位置図

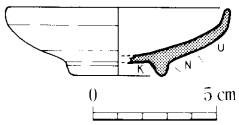


Fig. 32　出土遺物実測図

6　大学会館前記念植樹に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　M－13

調査期間　平成元年6月8日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約6㎡

調査結果　植樹は、大学会館の南東約10mの地域内に7ヶ所が計画された。うち2ヶ所は大学会館新営に伴い、発掘調査を実施した範囲内に位置するため、調査対象から除外した。掘削規模は、東西に5m間隔で、径1mの植樹壙について、現地表面から最大で約70㎝行うものである。

大学会館敷地では、昭和58年度の調査で縄文時代から江戸時代にかけての多量の遺物が包含層から出土しており[1]、本事業によって遺物包含層が掘削されるおそれがあったため、立会調査を実施した。その結果、各地点とも掘削範囲内はすべて真砂土が搬入されており、埋蔵文化財への影響はないと判断された。

なお、今回の調査地域の東方約35mの地点で実施した、大学会館へのケーブル埋設に伴う発掘調査では、遺構面が現地表下約10㎝で検出されている[2]。両地点とも現地表面の標高はほとんど差異がなく、本学統合移転時の大きな削平が行われていないことから、今回の調査地域付近では地山が大きく西へ下降していることが予想される。　（木村）

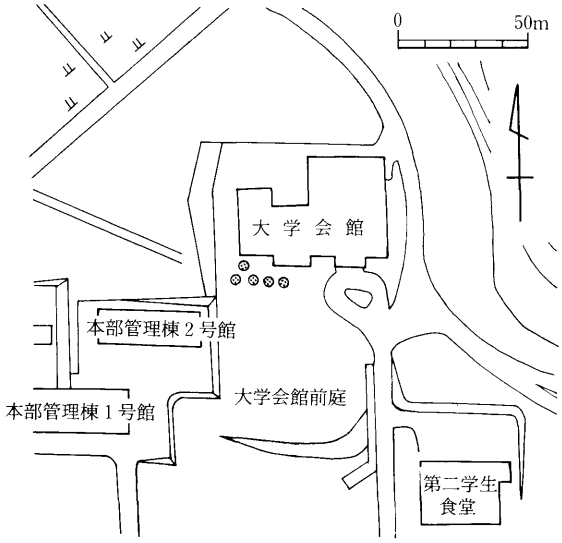


Fig. 33　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館ケーブル布設に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報IV』、1985年）。

7　吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　L・M－8

調査期間　平成元年10月2・3日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約45㎡

調査結果　工事地域周辺では過去に数件の立会調査を実施しているが、いずれも工事面積、掘削深度が小規模であったため、埋蔵文化財に対する十分なデータが得られていないのが現状であった。今回の工事は、ボイラー棟に隣接して南北約5.4m、東西約8.6mの範囲内を現地表面から約2.7m掘削するもので、吉田構内北端部の埋蔵文化財の有無を把握する良好な機会となった。

土層の堆積層順は、現地表面から約1.7mまで本学移転造成時の埋め土が厚く堆積しており、その下位には層厚約20～35㎝の旧水田耕作土が認められる。旧耕土の直下には、黒色粘質土（Hue10YR1.7/1）の遺物包含層が堆積しているが、後世の削平によって層厚は最大でも8㎝で、分布範囲も調査地域の南東隅に残存するに過ぎない。遺物包含層からは、土師器5点、須恵器、歴史時代の土師質土器各1点のほか、二次加工のある剝片・剝片各1点が出土した。同層は、大きく時期の隔たる遺物を包含していることから、二次堆積層と考えられる。遺物包含層の下位は、灰オリーブ色小礫混じり粘質土（Hue7.5Y5/2）の地山であるが、遺構は検出できなかった。

ボイラー棟の位置する地域は、先に吉田寮ボイラー設備改修に伴う立会調査の項で述べたように、東方の丘陵の削平土によって谷を埋積した造成面である可能性が高い。ボイラー棟の北側には、北から南に開く谷の周囲をとりまいて丘陵が存在する。今回出土した各時期の遺物は、丘陵縁辺部に立地する居住地から流入したものと考えられる。遺物には、縄文時代にさかのぼる可能性のある遺物も含まれており、今後の調査による縄文時代から古墳時代の遺構の検出が期待される。

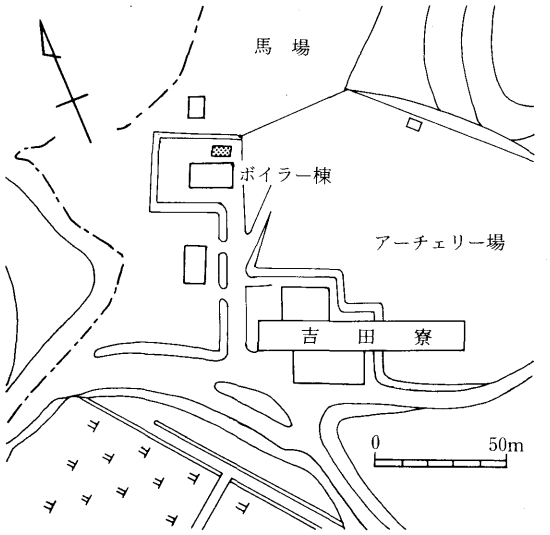


Fig. 34　調査区位置図

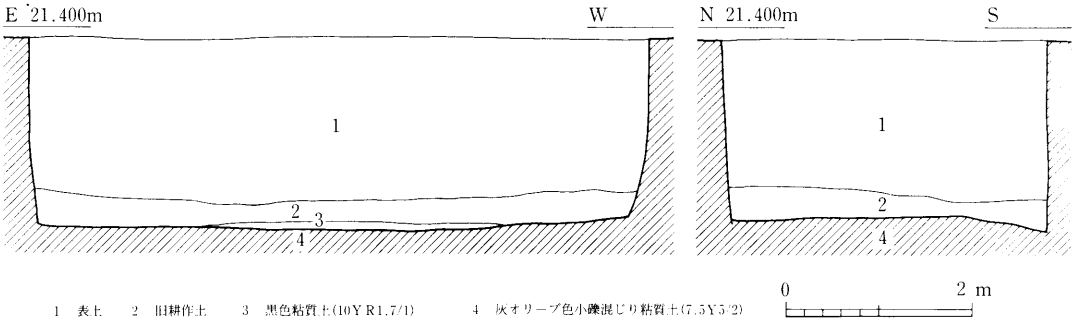


Fig. 35　土層断面実測図

出土遺物（Fig. 36,　PL. 26(3)）

1は二次加工のある剝片で、上下両端を欠損する。縦長剝片を素材とし、二次加工は背面右側縁に背面側から連続的になされる。背面は主として上方向からの加撃による3枚の剝離面から構成される。現存長2.0 cm、最大幅2.4 cm、最大厚0.65 cm、重量3.1 g。姫島産黒曜石製。

2は縦長剝片で、下半部を欠損する。打面、打点の一定しない石核から剝離されたもので、背面の三枚の剝離面および背腹両面の剝離方向が異なる。現存長1.3 cm、最大幅1.55 cm、最大厚0.85 cm、重量1.2 g。姫島産黒曜石製。

1・2とも縄文時代にさかのぼる可能性がある。

（河村）

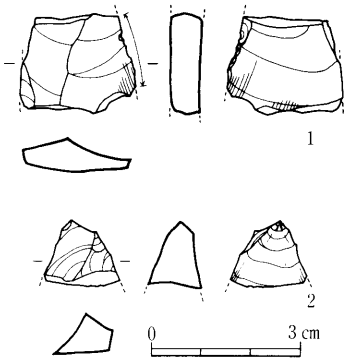


Fig. 36　出土遺物実測図

8　第二武道場排水溝新営に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　G・H－15・16

調査期間　平成元年10月9日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約2㎡

調査結果　工事は、東側を除いた第二武道場の周囲を建物から2.5mの間隔をあけて、雨水排水管およびそれに伴う集水桝の埋設を行うものである。調査は、配管部分に比べ掘削深度の深い集水桝設置地点10ヶ所のうち、5ヶ所を選定して行った。

北側東端部では、現地表下80cmまで本学統合移転時の埋め土で、西端部では、層厚115cmの埋め土の下位に旧耕作土が確認された。

西側中央部では、現地表下70cmまで本学統合移転時の埋め土であった。

南側西端部および中央部では、現地表下90cmまで本学統合移転時の埋め土で、その下位に少なくとも20cmの層厚をもつ旧耕作土が確認された。

いずれの調査地点でも、顕著な遺物は出土しなかった。

本学では、遺物包含層ないしは遺構消失の主要因は統合移転時の造成による削平で、旧耕作土が残存している場合、その下位に埋蔵文化財が埋存している可能性が高い。第二武道場周辺では、過去にほとんど調査はなされておらず、その立地、遺物包含層・遺構の分布状況については不明な点が多く、今後の調査によって明らかにしてゆく必要があろう。

（河村）

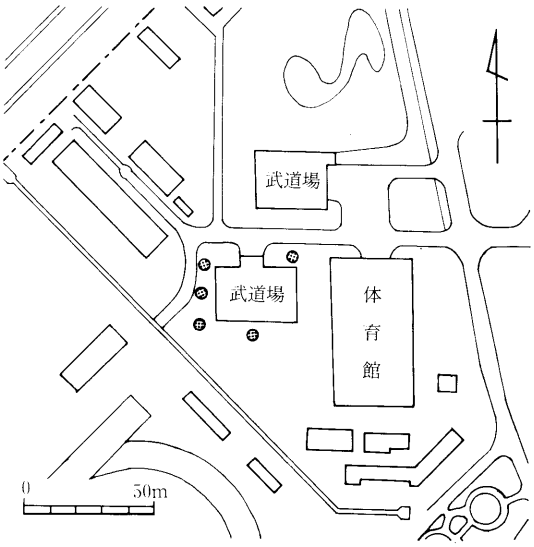


Fig. 37　調査区位置図

9　案内標識設置に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　Ｉ－14（Ａ地点），Ｌ－18（Ｂ地点）

調査期間　平成２年１月４日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約 0.5 m²

調査結果　標識設置地点は４ヶ所計画されていたが、その内２ヶ所は過去の調査結果から、埋蔵文化財に直接影響がないため、調査対象から除外した。

Ａ地点では、基礎部分２ヶ所について立会った。工事による掘削深度は、現地表面から 63 cmであったが、調査範囲内は本学統合移転時の造成による埋め土が堆積しており、工事基底面では真砂土が検出された。埋め土中には、本学では弥生時代から古墳時代の遺物包含層に相当する黒褐色粘質土（Hue7.5YR2/2）がブロック状に混入していたが、出土遺物はなかった。周辺地域では、本部２号館敷地[1]、大学会館前庭[2]で同一の色調、組成をもつ遺物包含層が検出されており、工事地域の東側から造成によって客土された可能性が高い。

Ｂ地点では、基礎部分１ヶ所について立会った。工事による掘削深度は、現地表面から 53 cmであったが、堆積層はＡ地点と同様で、顕著な出土遺物は認められなかった。工事地点は構内循環道路面より約 55 cm上位にあることから、造成による盛り土と判断される。

（河村）

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部２号館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1990 年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986 年）。

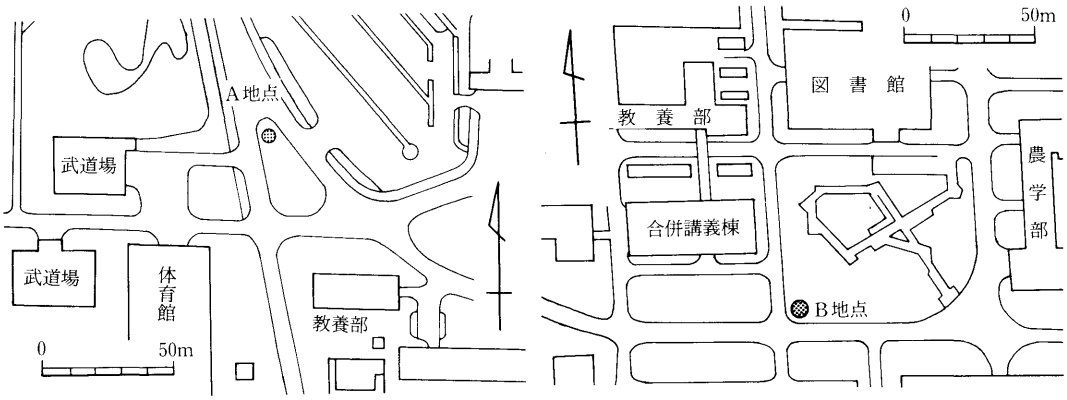


Fig. 38　調査区位置図

10　本部車庫給水管改修に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　L－13

調査期間　平成2年1月10日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約6.5㎡

調査結果　工事は、現地表面から約65㎝掘削して配管を埋設するものである。隣接する東側の本部2号館敷地の調査[1)]では、丘陵が北東から南西に大きく下降しており、建物の南西端部では地山が地表面から2.1m下位で検出されている。遺物包含層は、この落ち込みに最大で層厚約80㎝にわたって堆積していた。工事地域は、本部2号館敷地、北側の駐車場に比べて約2.5～3m低くなっているが、地山の落ち込み状況から、工事によって遺物包含層が掘削される可能性があるため、立会調査を実施した。

土層の堆積状況は、工事基底面まで本学統合移転時の造成による埋め土で、工事による埋蔵文化財への直接の影響はなかった。なお、埋め土中には黒色の粘質土がブロック状に混入しており、内部から弥生土器片5点が出土した。同層は、本部2号館敷地の調査で検出された3枚の遺物包含層のいずれかに相当するものと思われ、造成時の削平による客土と考えられる。

また、埋め土には褐色の粘質土も散在しており、遺物包含層の搬入土と考えられたが、今回の調査では遺物は出土しなかった。

（河村）

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、1990年）。

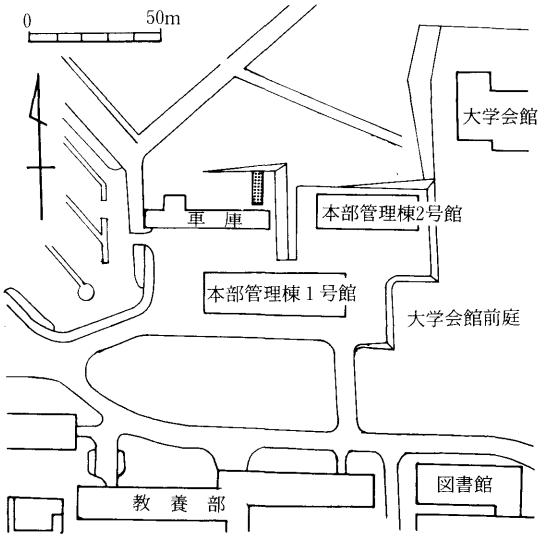


Fig. 39　調査区位置図

11　大学会館前庭環境整備に伴う立会調査

調査地区　吉田構内　L・M・N－14・15

調査期間　平成2年3月7日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約35㎡

調査結果　大学会館前庭は上下二段に造成されている。工事は、前庭の上段部分の東縁部に石積擁壁を設置するとともに、下段東縁部に自転車置場を新設するものである。

後者に伴う掘削は現地表面から20㎝で、先に実施した前庭部分の試掘調査の結果、埋蔵文化財に直接影響を与えないないため、調査対象から除外した。[1)]

前者は、総延長距離約45mについて幅70～85㎝の規模で、現地表面から最大95㎝の掘削を行うものである。

調査地域の基本層序は、地点による層厚の差異はあるが、上位から本学統合移転時の造成による埋め土、旧水田耕作土、床土、橙褐色粘土の地山の順に堆積している。遺物包含層は確認できなかったが、北端部から約11m南の地点で東西方向に走行する溝を検出した。検出面は現地表面から45㎝下位で、幅38㎝、深さ16㎝の規模をもち、断面形は「U」字形を呈する。遺物が出土しておらず、詳細な時期は明らかでないが、埋積土が灰褐色土であることから、当該地域で過去に検出されている遺構の埋積土の色調を勘案すると、中世の溝の可能性が高い。

（河村）

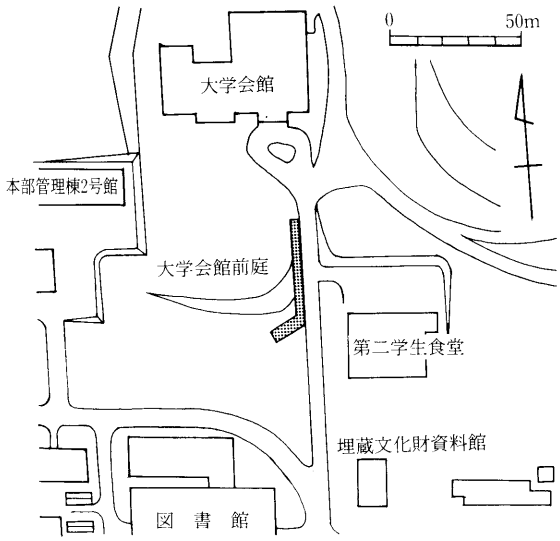


Fig. 40　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館環境整備に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

第2節　常盤構内の立会調査

1　工学部夜間照明装置および防球ネット設置に伴う立会調査

調査地区　常盤構内

調査期間　平成2年2月21日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約2㎡

調査結果　工事は、常盤構内の北西部に位置するグラウンドの南縁を除く周囲に、防球ネットを新営し、あわせて夜間照明装置を設置するものである。調査は、支柱となるコンクリートポールの埋設地点26ヶ所のうち4ヶ所を選定して行った。

北縁では、中央部分各2ヶ所について立会った。層厚15～20㎝のグラウンドの真砂土の直下が明赤褐色粘質土（Hue5YR5/8）の地山であった。

東縁では、中央部よりやや北側部分を立会ったが、層厚・層順とも北縁と大差ないものであった。

既存のグラウンド面は、西縁を除いて皿状にカットされており、周囲には土堤状の高まりが残存している。法面を観察すると、頂部はグラウンド面より約80㎝上位にあり、土堤状の高まりの約20㎝下位には明赤褐色粘土の地山が確認できた。したがって、グラウンド内部は西縁を除いて少なくとも60㎝以上削平されていることになり、グラウンド東半部では、埋蔵文化財が存在していたとしてもすでに消滅している可能性が高い。

西縁では、南端部付近を立会った。層厚15～30㎝のグラウンドの真砂土の直下には、地山の削平による客土が約30㎝の厚さに堆積し、その下位には構内造成時の埋め土が少なくとも層厚約80㎝以上搬入されている。地山は、現地表面から約1.4m掘り下げた段階でも検出されず、グラウンド西半部は東から西へ下降する丘陵の落ち込みを造成によって平坦化したものと考えられる。　（河村）

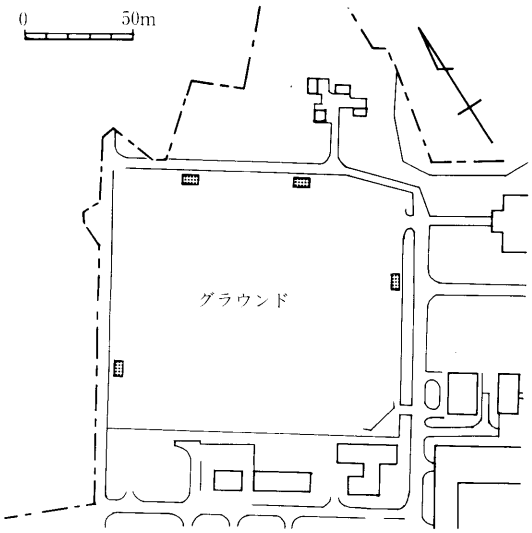


Fig. 41　調査区位置図

2　工学部記念植樹に伴う立会調査

調査地区　常盤構内

調査期間　平成2年3月22日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約2.5 m²

調査結果　植樹地点は、キャンパス中央部の化学工学科棟北側、西側の情報処理センター南側、および図書館南側の計3ヶ所が予定されていた。掘削深度は現地表面から約70 cmで、前二者については、過去の調査結果を踏まえて埋蔵文化財に直接影響がないため調査対象から除外した。

図書館南側の前庭では、径1.8mの範囲の掘削に立会った。土層は、上位から、構内造成時の埋め土、旧耕作土、明赤褐色粘質土（Hue5YR5/8）の地山の順に堆積している。地山は常盤構内で普遍的に見られる花崗岩のバイラン土で、現地表面から約50 cm下位で検出された。遺構は検出していない。

図書館西半部の増築部分では、地表面から層厚60～70 cmの構内造成時の埋め土の直下が地山であった[1]。また、常盤構内の現況が北から南へ四段にわたって造成されていることからも、図書館周辺では、すでに構内造成等によって大規模に地山が削平されおり、埋蔵文化財が存在していたとしてもすでに消滅している可能性が高い。

なお、各堆積層からの出土遺物はなかった。　（河村）

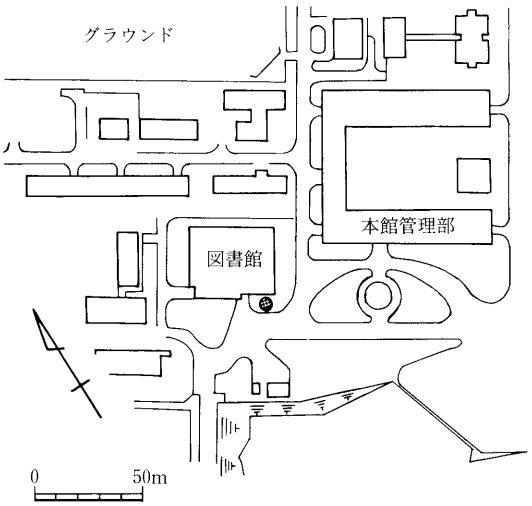


Fig. 42　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「宇部（常盤構内）工学部図書館増築に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年）。

第3節　亀山構内の立会調査

1　教育学部附属幼稚園バレーボールコート支柱設置に伴う立会調査

調査地区　亀山構内

調査期間　平成元年11月22日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約0.3㎡

調査結果　工事は、西側に存在するプールを新営した際に、撤去したバレーボールコートの支柱1本を新設するものである。工事規模は、幼稚園運動場の西側寄りの地点を1ヶ所、約50㎝四方に現地表面から約60㎝掘削するものである。

幼稚園運動場では、過去の調査で現地表面から60㎝下位に遺物包含層の可能性のある淡灰褐色粘質土が検出されている[1)]。今回の工事による掘削は、同層におよぶおそれがあったため、立会調査を実施した。

調査地点の層序は、現地表面から35㎝下位に堆積する層厚5㎝の旧運動場の真砂土をはさんで、構内造成時の埋め土が上下に観察された。先の調査で検出された旧耕作土、床土の堆積は認められず、当該地点が既設のプールに近接していることから、他の幼稚園運動場部分に比べて比較的削平が著しい地域と考えられる。

なお、工事基底面まで淡灰褐色粘質土の堆積は認められず、さらに下位に堆積しているものと考えられる。

出土遺物は皆無であった。

（河村）

［注］

1) 山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年）。

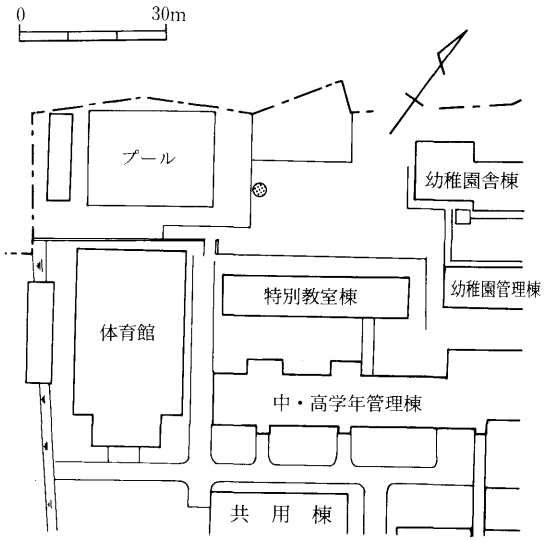


Fig. 43　調査区位置図

2　教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う立会調査

調査地区　亀山構内

調査期間　平成2年1月8日～3月14日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約170㎡

調査結果　同構内における汚水排水管布設に伴う発掘調査の成果は第3章で述べた。今回の立会調査は、試掘調査[1]の結果を受けて、埋蔵文化財の分布が希薄と予想される工事路線について行ったもので、小学校運動場東縁で柱穴、溝状遺構を検出した。

柱穴は、南端部から約26m北側の地点に位置し、現地表面から21㎝下位に存在する。オリーブ黄色砂質土（Hue5Y6/3）の地山を掘り込んでおり、上面径20㎝、検出面からの深さは12㎝である。遺物は出土しなかったが、埋積土が黒褐色粘質土（Hue10YR2/3）であることから弥生時代から古墳時代のものと考えられる。

溝状遺構（Fig. 46，PL. 25）

小学校運動場の北東縁に位置する、体育器具庫の西側で検出した。検出面は、最浅部分で現地表面から14㎝下位で、東西方向に走行する。東への延長部分は、東壁の南側が撹乱を受けており完掘できなかったが、幅約5.9m以上、検出面からの深さは最深部で20㎝の規模をもつ。溝底は東から西へゆるやかに下降しており、部分的に不整形な落ち込みが存在する。

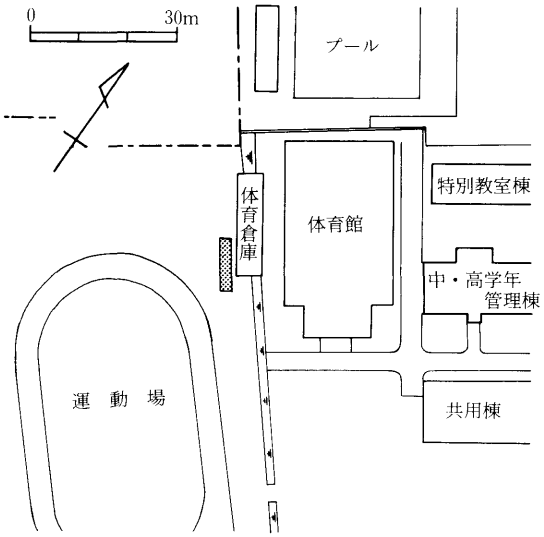


Fig. 44　調査区位置図

埋積土は、上位から黒褐色粘質土、砂礫の2層で、遺物は両層から出土したが、前者からの出土量が多い。やや時期幅のある遺物が混在するが、主体は弥生時代後期後半～終末である。

運動場の北西縁では、昭和58年度の調査で弥生時代終末の溝状遺構を検出している。しかし、流路方向、埋積土が異なり、今回検出した溝状遺構とは別種のものである可能性が高い。

出土遺物には、弥生土器、土師器、打製石斧・削器・剝片・石核などがある。

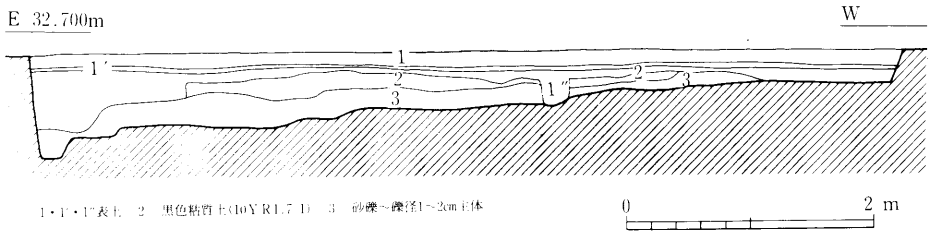


Fig. 45　土層断面実測図

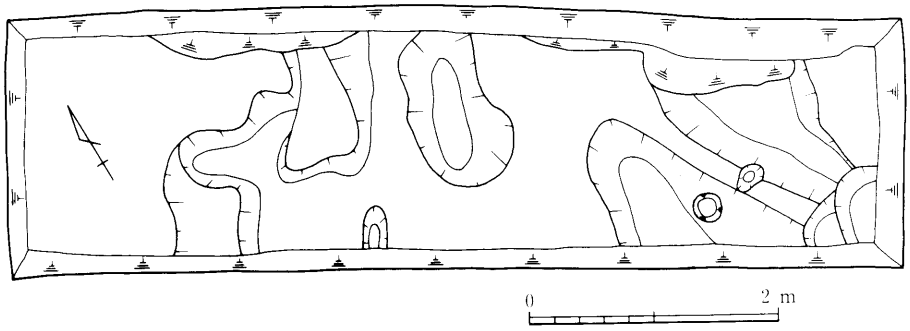


Fig. 46　溝状遺構実測図

Fig. 47　出土遺物実測図(1)

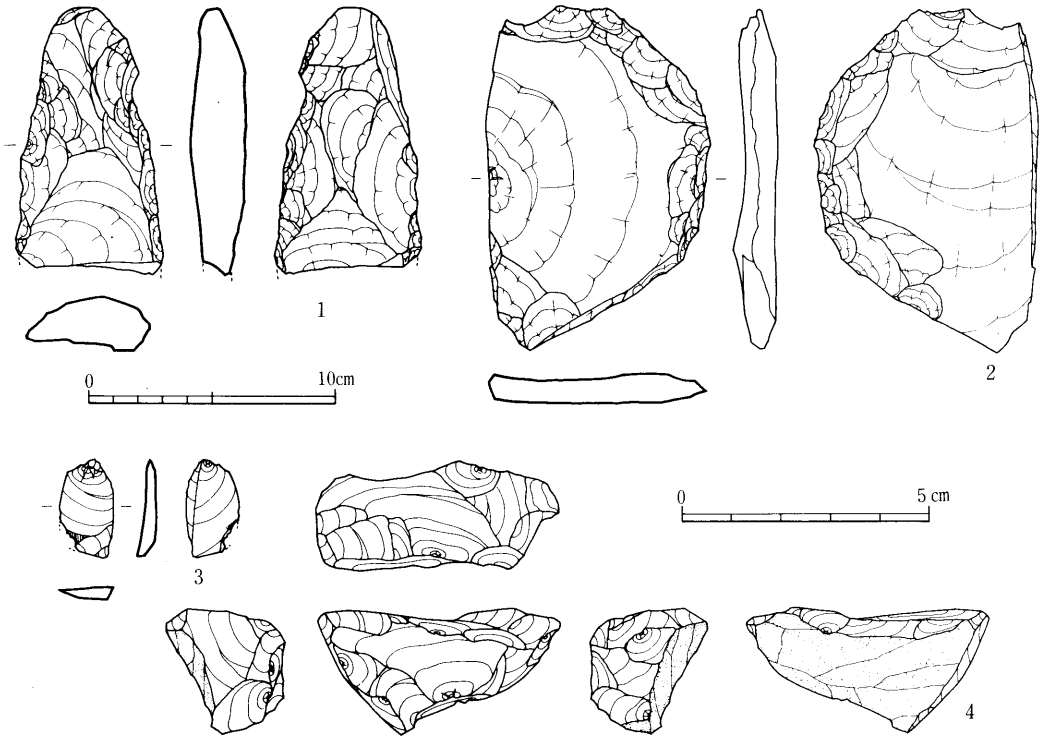


Fig. 48　出土遺物実測図(2)

Tab. 5　出土遺物観察表

法量(　)は復原値

番号	器　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　考
1	弥生土器　壺		にぶい橙色 (7.5YR7/3)	良　好	良　好	
2	弥生土器　壺	②(7.4)	①灰黄褐色 (10YR6/2) ②にぶい橙色 (5YR6/4)	不　良	良　好	
3	弥生土器　甕	①(13.4)	①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	不　良	良　好	
4	弥生土器　甕	②(4.2)	①にぶい褐色 (7.5YR7/3) ②浅黄橙色 (10YR8/4)	やや不良	良　好	
5	弥生土器　甕	②(8.0)	①褐灰色 (10YR4/1) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや不良	良　好	
6	弥生土器　甕		①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②灰褐色 (7.5YR4/2)	不　良	良　好	
7	弥生土器　高坏		①にぶい橙色 (5YR6/3) ②浅黄橙色 (10YR8/3)	やや不良	良　好	
8	土師器　坏	②(8.0)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	良　好	良　好	

法量(　)は現存値

番号	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	石　質	備　考
1	打製石斧	(106.5)	59.5	21.0	129.5	花崗閃緑岩	刃部欠損
2	削　器	68.0	45.5	6.0	29.0	讃岐岩質安山岩	
3	剝　片	19.0	11.0	2.5	0.5	腰岳産黒曜石	
4	石　核	25.0	49.0	40.0	22.4	姫島産黒曜石	

出土遺物（Fig. 47・48，PL. 26(1)）

弥生土器（Fig. 47－1～7）

1・2は壺。1は肩部で、頸部から大きく開き、複合口縁をもつものであろう。2は器壁の薄い平底の底部で、内面には幅広の粗いヘラミガキが施される。

3～6は甕。3は小形の甕で、張りのほとんどない胴部から、口縁部は外弯しながら「く」の字に短く開く。胴部内面下半はヘラ削りされる。4は不安定な平底、5は窪み底の底部。5は外底面にすのこ状の圧痕が残る。6は張りの強い胴部をもち、胴部内面は縦刷毛目仕上げされる。

7は高坏の脚部で、裾部の開きは小さく、端部は丸みをもって終わる。

1・4は砂礫層、他は黒褐色粘質土から出土。

土師器（Fig. 47－8）

糸切り底の坏の底部で、底部と体部の境は不明瞭。上層からの混入の可能性がある。

石器(Fig. 48)

1は打製石斧で、刃部を欠損する。撥形状を呈し、基部は丸く、刃部はあまり開かないものと思われる。背腹両面とも、左右両側縁からの比較的粗雑な剥離作業によって成形を行ったのち、基部を除いた両側縁に、両側縁からの調整剥離を施す。基部よりやや下位には、ノッチ状の弯曲部が存在する。刃部側の成形は、背腹両面ともおおむね下方からの加撃による1枚の大きな剥離面によってなされる。2は削器。背腹両面から調整加工を施し、弧状の刃部を作出する。大形の盤状剥片を素材としているが、ネガ、ポジ両面の剥離方向が90°ずれている。腹面側が主要剥離面で、上端の2枚の剥離面によって、打面、バルブを除去している。背面側の打面、打点は残存しており、、素材の変形度は小さい。3は縦長剥片で、下半部を若干欠損する。背面は3枚の剥離面によって構成され、ネガ、ポジ両面に打点、打面が残存する。4は石核。舟底形を呈し、、背面、左右両面および上面を主な作業面としている。打面、打点は一定しておらず、各作業面を打面として、打面を転位しながら剥片剥離作業を行っている。目的剥片は、不定形な縦・横長剥片で、腹面側は原礫面を打面として、剥離作業を行う。

1・3・4は黒褐色粘質土、2は砂礫層出土。（河村）

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部附属山口小学校・幼稚園構内の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報III』、1985年）。

第4節　その他構内の立会調査

本部1号職員宿舎公共下水道切替に伴う立会調査

調査地区　山口市水の上町6－1　本部1号職員宿舎構内

調査期間　平成2年3月5日

調査方法　工事施工時における立会調査

調査面積　約1㎡

調査結果　工事は、生活排水を公共下水道に接続するために、職員宿舎の北・東両側に排水管、排水桝を埋設するものである。調査は、掘削規模の大きい排水桝11ヶ所のうち2地点を選定して行った。

東端部に位置するA地点では、現地表面から60㎝の掘削を行ったが、工事範囲内は造成等による整地土が堆積していた。北側中央部に位置するB地点では、現地表面から30㎝下位に層厚15㎝の旧水田耕作土が存在するが、その下には、工事基底面である現地表下70㎝まで造成等による整地土が客土されていた。

両地点とも出土遺物はなく、また、周辺の畑地での表面採集でも遺物は採集できなかった。

当該地域は、市道をはさんで西側に隣接する丘陵および宅地等に比べ階段状に約3ｍ以上低くなっている。現況から推して、市道以西は後世に大きく削平を受けているものと考えられ、過去に埋蔵文化財が埋存していたとしてもすでに消滅している可能性が高い。

（河村）

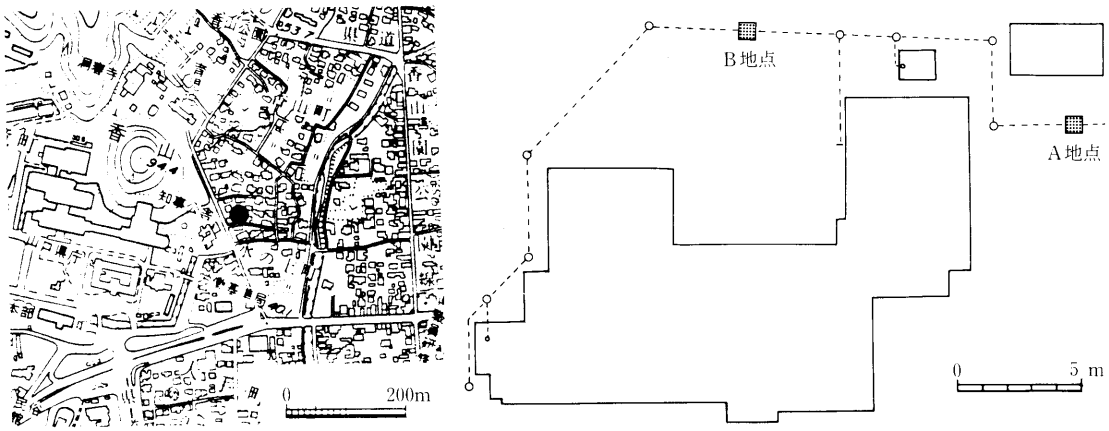


Fig. 49　調査区位置図

付篇Ⅰ

吉田構内教育学部附属養護学校新営に伴う発掘調査

1　調査の経過

教育学部附属養護学校敷地は昭和54年3月、吉田構内の西端部(山口市大字吉田3003番地）に求められた。同敷地の南西部に隣接する水田ではそれまでに土師器、瓦質土器などが表面採集されており、新営予定地にも埋蔵文化財が埋存している可能性があった。用地取得にあたっては山口市企画部企画財政課の斡旋も行われたことから、用地内の埋蔵文化財の有無および分布範囲の把握のための試掘調査は山口市教育委員会で実施することとなった。

試掘調査は昭和54年4月10日から12日にかけて、新営予定地内に存在する17筆の水田について、1 m×1 mおよび1 m×2 mの試掘壙を110ヶ所設定して行われた。調査の結果、新営予定地の中央部では顕著な埋蔵文化財は確認できなかったが、敷地の東部(A地区)・北西部（B地区）・南東部（C地区）の3地区で遺構および遺物包含層が検出された。遺構は、B地区で弥生時代から古墳時代の溝2条と平安時代以降の柱穴が検出され、新営予定地の北西縁に位置する水田6筆に分布範囲をもつことが判明した。遺物包含層は、A・C両地区で検出され、A地区では弥生時代および平安時代、C地区では弥生～平安時代の遺物が出土した。

試掘調査の結果を受けて、校舎の新営は埋蔵文化財の認められなかった予定地中央部を中心に計画されることとなった。しかし、B地区に計画が予定されていた体育館および北西縁の排水溝、擁護壁は設計の都合上変更が困難なため、山口市教育委員会は再度、8ヶ所の試掘壙を設定して試掘調査を実施し、その後の取り扱いについて関係機関と協議することとした。

調査の結果、体育館新営予定地では顕著な遺構・遺物は発見されず、建物建設については差し支えないものと判断された。しかし、排水溝、擁護壁の計画地域では、北端部を除いた地域で遺構の埋積土と思われる堆積層から弥生土器が出土し、この部分については工事前に事前に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、山口大学人文学部考古学研究室、山口県教育委員会の協力を得て、山口市教育委員会、山口大学埋蔵文化財資料館が実施した。調査期間は昭和54年11月26日から12月13日までで、調査面積は約410 m²である。

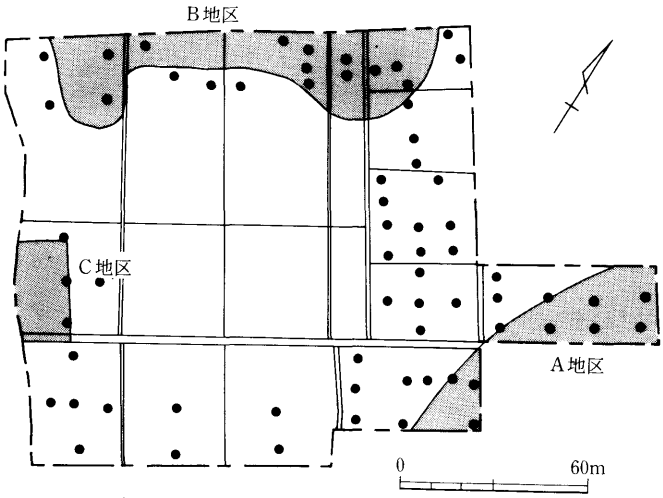


Fig. 50　第1次試掘調査地点位置図

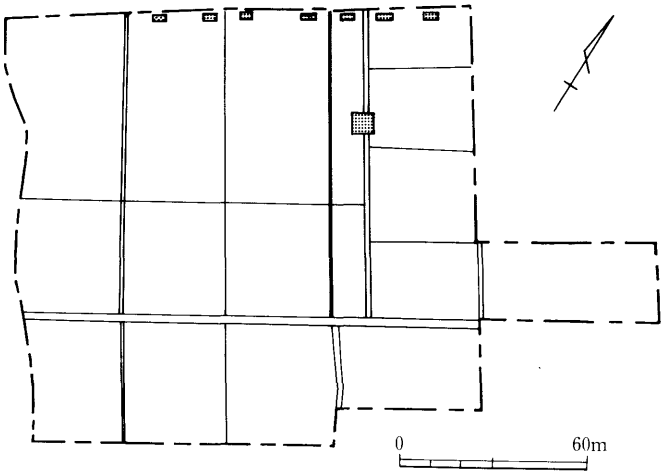


Fig. 51　第2次試掘調査地点位置図

2　層位

堆積層順は極めて単純で、層厚約15～20 cmの水田耕作土、層厚約5 cmの床土の下位が土壙・溝の検出面である橙褐色粘土の地山である。遺物包含層は堆積していない。

3　遺構

検出した遺構には、縄文時代晩期の土壙2基、弥生時代中～後期の溝7条、近世の溝8条・埋甕遺構1基がある。

溝

第1号溝　(Fig. 53・54，PL. 29(1)～(3))

調査区の東半部で検出した。東半部では蛇行しながら南西から北東に走行する溝で、第2・3号溝を切っている。検出長は約55mで、溝幅は最大約170 cm、最小約70 cmで、平均約130～140 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約30～50 cmで、東に向かうにつれて深くなる。断面形は逆台形を呈する。埋積土は自然堆積で、上層：黒褐色粘質土、中層：淡茶褐色粘質土、下層：灰色砂質土に分層される。第1層を中心に各層とも主に前期と後期の弥生土器を包含するが、主体は弥生時代後期後半である。

第2号溝（Fig. 53・54，PL. 29(4))

調査区の東半部で検出した溝で、第1号溝に切られ、第3号溝を切っている。第1号溝

とその大半が重複し、蛇行しながら南西から北東に走行する。検出長は約51mで、溝幅は最大約230cm、最小約110cmで、平均約150～160cmの規模をもつ。検出面からの深さは約50～60cmで、東に向かうにつれて深くなる。断面形はU字形に近い。埋積土は自然堆積で、基本的には5層に分層される。東側では第1層：暗灰褐色粘質土、第2層：灰褐色粘質土、第3層：淡灰色砂質土が堆積するが、西側ではその下位に第4層：灰色粘質土、第5層：淡灰色粗砂が部分的に存在する。遺物は第1～3層に弥生土器が包含されるが、第4・5層は無遺物層である。前期～後期の土器を包含し、主体は後期後半であるが切り合い関係などから、第1号溝よりやや古い時期のものである。

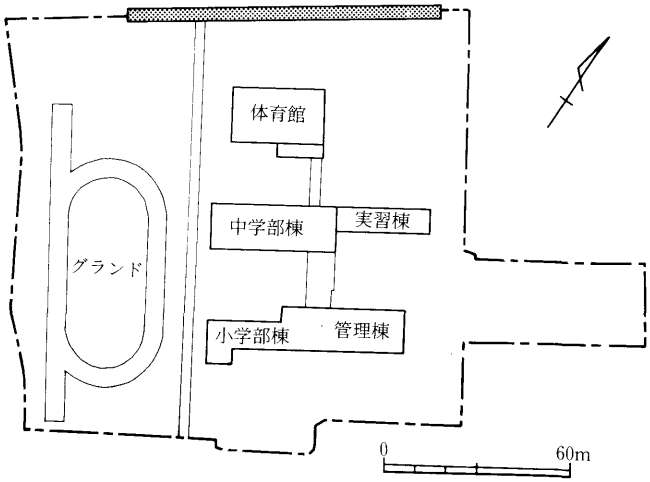


Fig. 52　調査区位置図

第3号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部よりやや東を北東から南西に走行する小規模な溝で、東部では東に弯曲する。第2号溝および第7号溝に切られている。規模・流路方向から第5号溝と一連のものと考えられたが、埋積土が異なることから別個の溝として取り扱うことにした。検出長は約22mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約60～70cm、溝底で約30～40cmの規模をもつ。検出面からの深さは約15～20cmで、西に向かうにつれて深くなる。断面形は逆台形を呈し、埋積土は黒褐色粘質土の単一土である。遺物は前期～後期の弥生土器が若干出土したが、主体となる遺物がほとんどない。切り合い関係から弥生時代中期後半～後期初頭のものであろう。

第4号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の西端部を南西から北東に走行する。検出長は約5.5mで、溝幅は上面で約90～130cm、溝底は上面に比べて狭く約15～20cmの規模をもつ。検出面からの深さは約25～35cmで、北に向かうにつれて深くなる。東辺および西辺の北側の壁面は溝底まで二段にわたって落ち込み、階段状の狭い平坦面をもつ。断面形は逆台形に近い。壁面の西辺5ヶ所、東辺4ヶ所に径約5cmの杭状の痕跡がみられる。埋積土は6層に分層されるが、出土遺物は

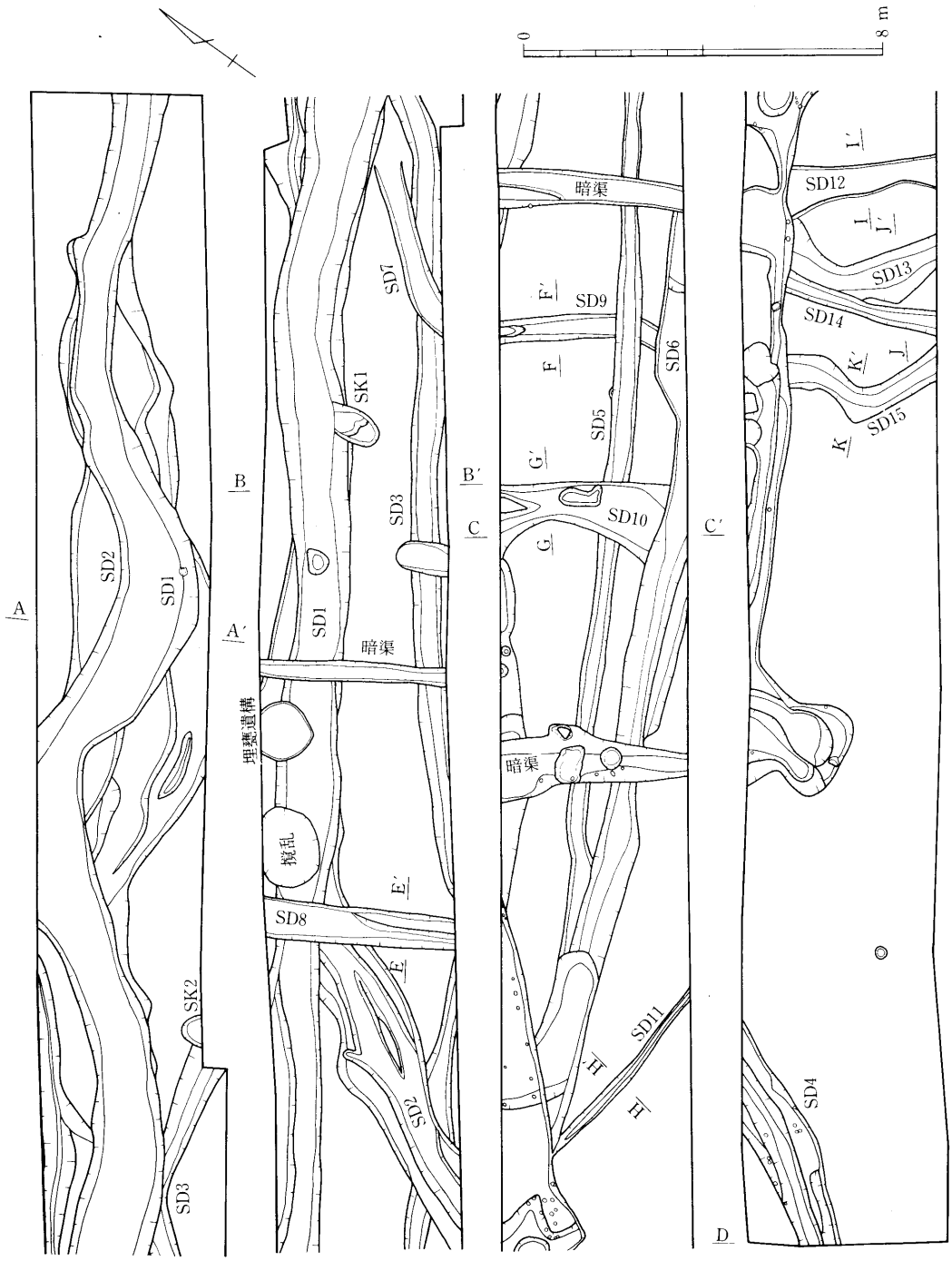

0
8 m
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
I
I′
J
J′
K
K′
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6
SD7
SD8
SD9
SD10
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SK1
SK2
暗渠
埋甕遺構
攪乱

Fig. 53 遺構配置図

弥生土器の小片ばかりで詳しい時期はわからない。

第5号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部を北東から南西に直線的に走行する小規模な溝で、第2号溝および近世の溝に切られている。検出長は約26mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約40～50cm、溝底で約20～25cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10～15cmで、西に向かうにつれて深くなる。断面形は逆台形に近く、埋積土は小礫混じりの暗茶褐色粘質土の単一土である。出土遺物には弥生土器が若干あるが、小片ばかりで詳しい時期はわからない。

第6号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部を東から西に直線的に走行する小規模な溝で、第5号溝の南側を平走するが、西端部では第5号溝によって切られている。検出長は約17mで、溝幅は最大約110cm、最小約35cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10～25cmで、西に向かうにつれて深くなる。断面形は逆台形に近い。埋積土は上層の淡茶褐色粘質土、下層の淡灰色砂の2層に分層され、弥生土器が若干出土したが、小片ばかりで詳しい時期はわからない。

第7号溝（Fig. 53，PL. 28(1)）

調査区の中央部からやや東を南西から北東に走行する溝で、第3号溝を切っている。北への延長部分は後世の削平によって消失している。検出長は約4 mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約60～70cm、溝底で約30～40cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5cmを残すにすぎない。断面形は逆台形に近い。埋積土は暗茶褐色粘質土の単一土で、弥生土器若干が出土した。弥生時代後期初頭。

第8号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部を南東から北西に走行する溝である。検出長は約4 mで、上面の溝幅は約75～85cmとほぼ一定しているが、溝底は南半部が狭く約15cm、北半部で60～75cmの規模をもつ。検出面からの深さは約15cmで、東辺の南側の壁面は溝底まで二段にわたって落ち込み、階段状の狭い平坦面をもつ。埋積土は淡褐色砂質土の単一土で、陶器の小片が若干出土した。近世。

第9号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部、第8号溝の西約12mに位置し、南東から北西に走行する溝である。検出長は約3.5mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約50cm、溝底で約20～25cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5～10cmを残すにすぎない。埋積土は暗茶褐色土の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

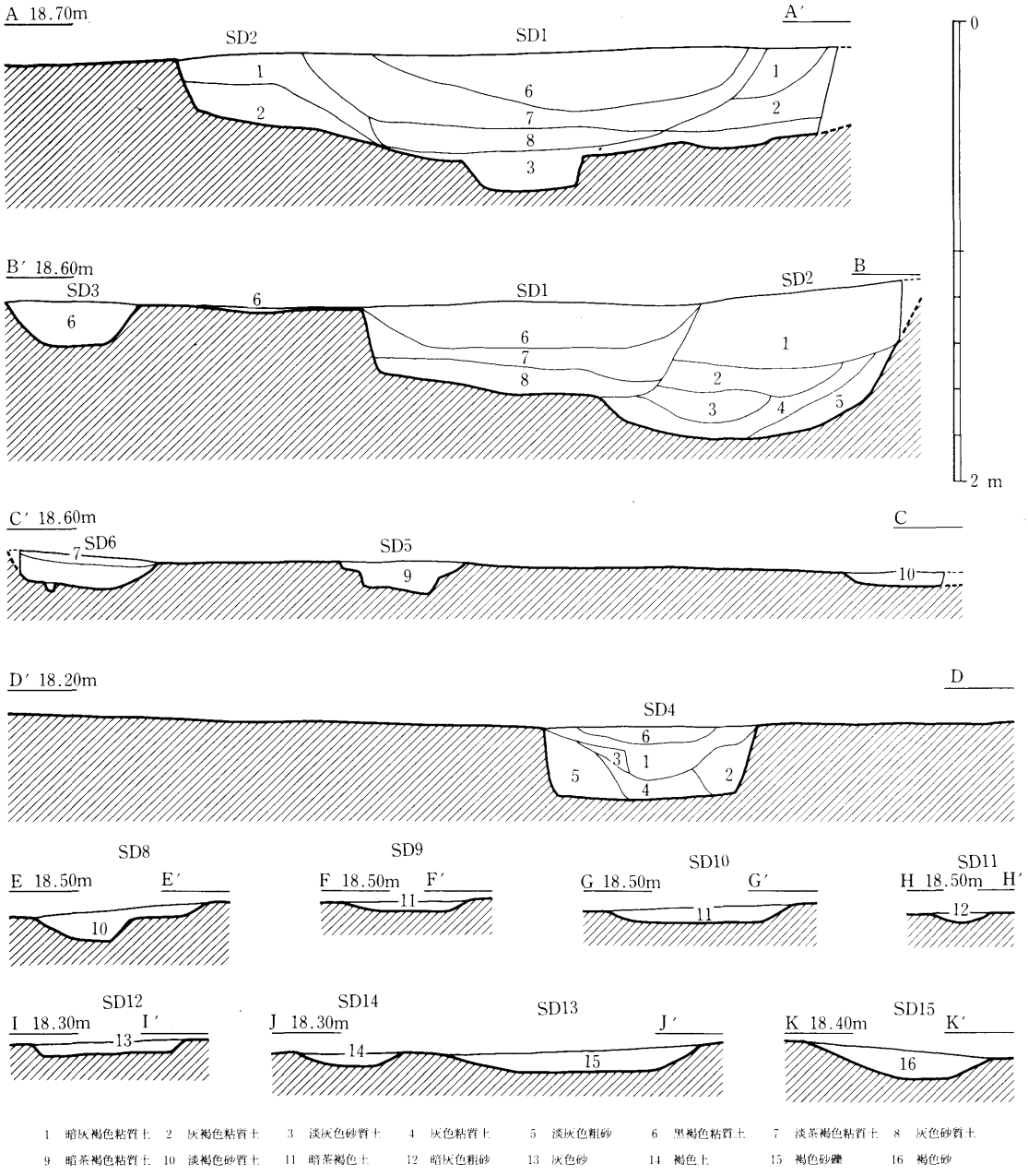


Fig. 54 溝断面実測図

第10号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の中央部、第9号溝の西約3 mに位置し、南東から北西に走行する溝である。西に弯曲し、北端部では2条に分流する。中央部の溝底には不整形な落ち込みが存在する。検出長は約4 mで、溝幅は、最大で約180 cm、最小で80 cm、溝底で約50～105 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5～10 cmを残すにすぎない。埋積土は暗茶褐色土の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第11号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の東半部、第10号溝の西約10mに位置し、東から西に直線的に走行する小規模な溝である。検出長は約4.5mで、溝幅は、上面で約15～25 cm、溝底で約10 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は暗灰色粗砂の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第12号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

調査区の東半部、第11号溝の西約3.5mに位置する。南東から北西に走行する溝で、第13号溝を切っている。検出長は約3 mで、溝幅は、上面で約50～110 cm、溝底で約40～100 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は灰色砂の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第13号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

第12号溝のすぐ西に位置し、南東から北西に走行する溝で、第14号溝に切られている。検出長は約3.5mで、溝幅は、上面で約70～110 cm、溝底で約30～60 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約10 cmを残すにすぎない。埋積土は褐色砂礫の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第14号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

南から北に直線的に走行する溝で、第13号溝を切っている。検出長は約3.5mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約30～40 cm、溝底で約20 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は褐色土の単一土で、陶器、磁器の小片が若干出土した。近世。

第15号溝（Fig. 53・54，PL. 28(1)）

第14号溝のすぐ西に位置し、南東から北西に蛇行しながらに走行する溝である。検出長は約4 mで、溝幅はほぼ一定しており、上面で約50～60 cm、溝底で約25～35 cmの規模をもつ。検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は褐色砂の単一土で、陶器、

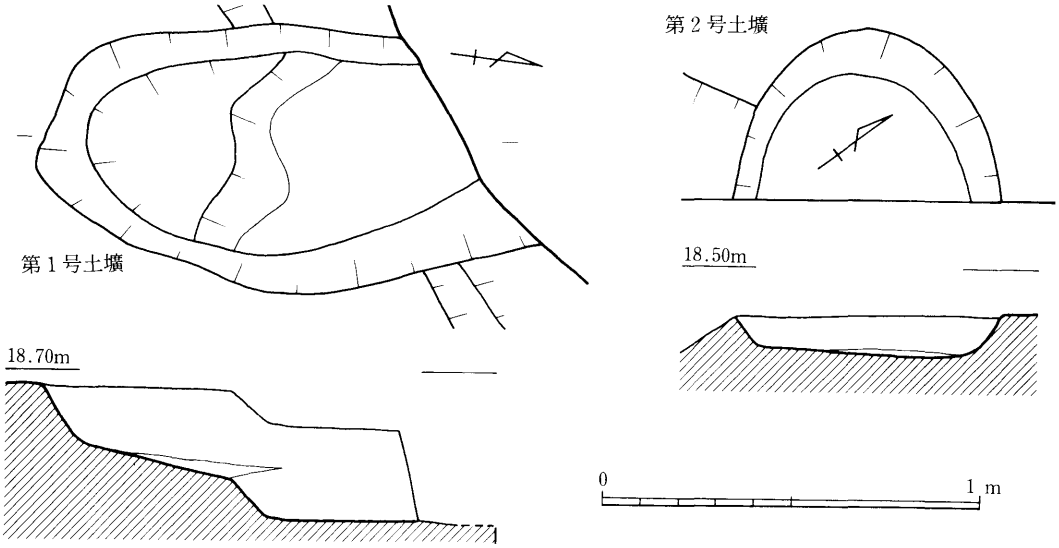


Fig. 55　土壙実測図

磁器の小片が若干出土した。近世。

土壙

第1号土壙（Fig. 55，PL. 28(2)）

調査区の中央部よりやや東に位置し、第1号溝によって切られている。平面形態は楕円形で、長軸112 cm、短軸72 cmの規模をもつ。壙底は階段状に北から南へ下降しており、検出面からの深さは約5 cmを残すにすぎない。埋積土は第2号土壙と同じ淡褐色粘質土の単一土で、使用痕のある剝片が出土した。縄文時代晩期。

第2号土壙（Fig. 55，PL. 28(3)）

調査区の東半部、第1号土壙の東約12m に位置し、第3号溝によって切られている。平面形態は円形系統で、残存部分の最大径は70 cm、検出面からの深さは約10 cmを残すにすぎない。埋積土は淡褐色粘質土の単一土で、縄文土器の浅鉢、甕もしくは深鉢が出土した。縄文時代晩期後半。

4　出土遺物

土器

第1号溝出土遺物（Fig. 56～59，PL. 30～32・37・38）

縄文土器および弥生時代前期のものも含まれるが、大半は弥生時代後期後半である。

第1層出土遺物（1～28）

1～3は壺。1・2は複合口縁をもつもの。1は拡張部が短く内傾しながら立ち上がり、

口縁端部は外反する。2は直立する拡張部の外面にヘラによる山形文を施文し、内部を斜格子で埋める。3はしまりのない頸部から口縁部が外弯ぎみに直立する。

4～21は甕。「く」の字に外反する口縁部をもち、後期のものが多い。口縁部は総じて長く、頸部内面に稜をもつもの（8・15）や頸部からゆるやかに外反するもの（7・20）などがある。口縁端部が面取り風に平坦な面をもち、尖りぎみに終わるもの（6・9・11）もある。内面は刷毛目仕上げのもの（7・21）があり、口縁部内面もしくは外面に刷毛目を残すもの（5・7・9～11・14）もある。4は端部全面にヘラによる刻目を施し、しまりのない頸部の下位には、ヘラによる少なくとも2条の沈線が巡る。5は口縁部が内弯ぎみに立ち上がり、端部は凹線状に窪む。14は口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部は丸く終わる。底部は底径の小さい平底が大半で、外面の刷毛目が底部端までおよぶもの（18）もある。

22～27は高坏。22・23は坏部で、上半部は短く屈曲する。脚部は長脚で、裾部まで直線的に移行するもの（24）や裾部が内弯ぎみに広がり、端部がわずかに内側に屈曲するもの（27）などがある。透し穴は焼成前に三方に穿孔されている。外面にヘラミガキされるもの（24）もある。

28は大形の甕の蓋であろう。

第2層出土遺物（29～49）

29～33は壺。29～32は前期のもので、29は肩部に削り出しによる段をもつ。肩部には貝殻による羽状文を施文する（30～32）。33は複合口縁をもつ後期のもので、拡張部が内傾し、口縁端部は短く外方に屈曲する。内外面はヘラミガキされる。

34～41・43～45は後期の甕。口縁部は「く」の字に外反し、外弯ぎみに開くもの（35・37・38）、直線的に開くもの（36）、内弯ぎみに開くもの（39）などがある。口縁端部が短く直立する複合口縁の甕（34）もある。35は頸部が強い横ナデにより段をもつ。内外面とも刷毛目仕上げが多く、口縁部内面をナデるもの（39）もある。38は内面の調整に細粗二種類の刷毛を用いる。40～45は底部で、安定した平底のもの（44）、不安定な平底のもの（40・41・43）、丸底のもの（45）などがある。内面はナデるもの（41・43）とヘラナデのもの（40・44・45）がある。42は縄文土器で、内面は板状工具による擦過が行われる。

46～48は高坏。46はやや深い坏部で、上半部は外弯して短く開く。47・48は脚裾部で、裾部まで直線的に開く。48は外面に右もしくは左上がりのタタキが施される。

49は大形の鉢で、口径に比べて器高が低く、埦に近い。胴部から口縁部まで内弯して立

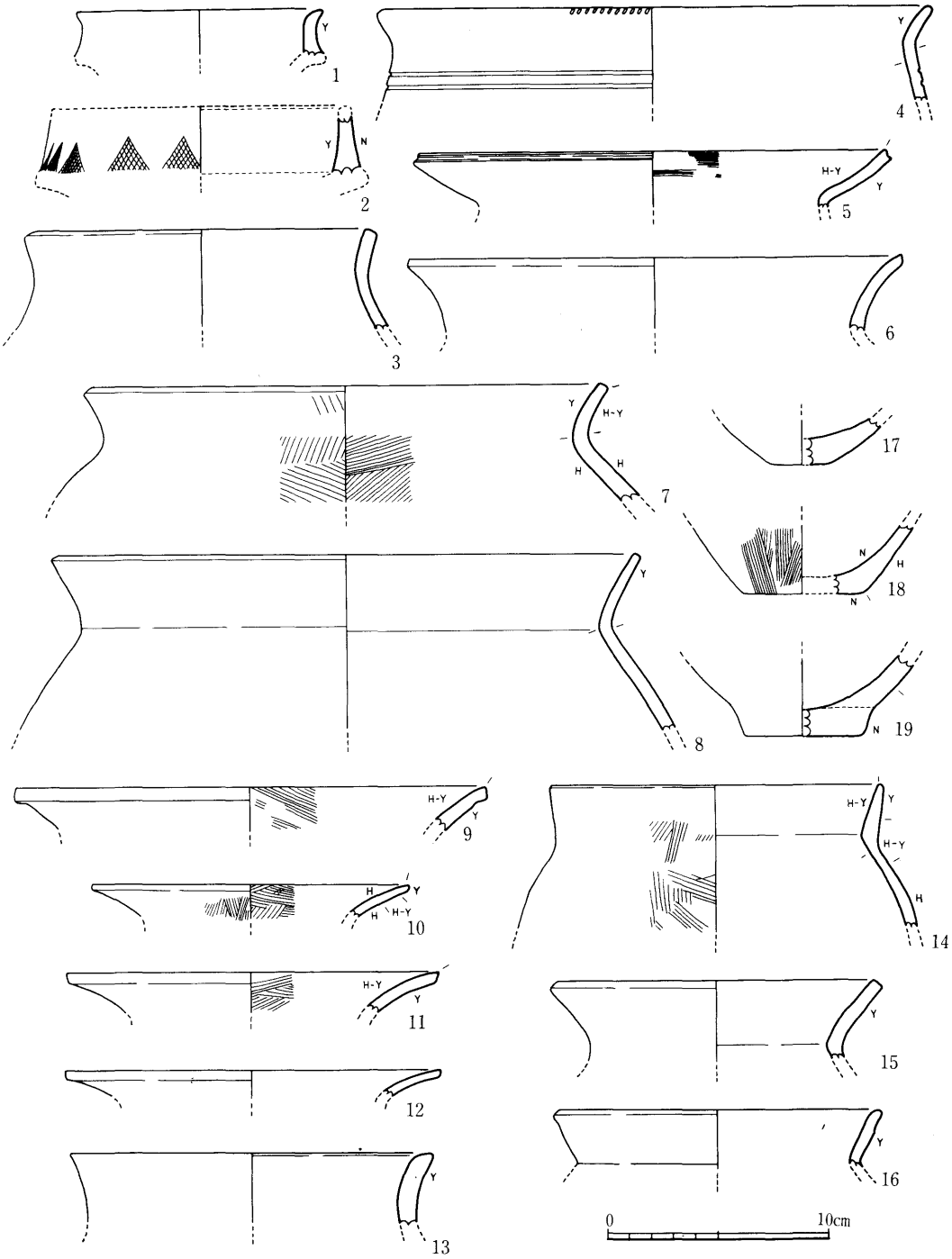


Fig. 56　第１号溝出土遺物実測図(1)

第１号溝出土遺物

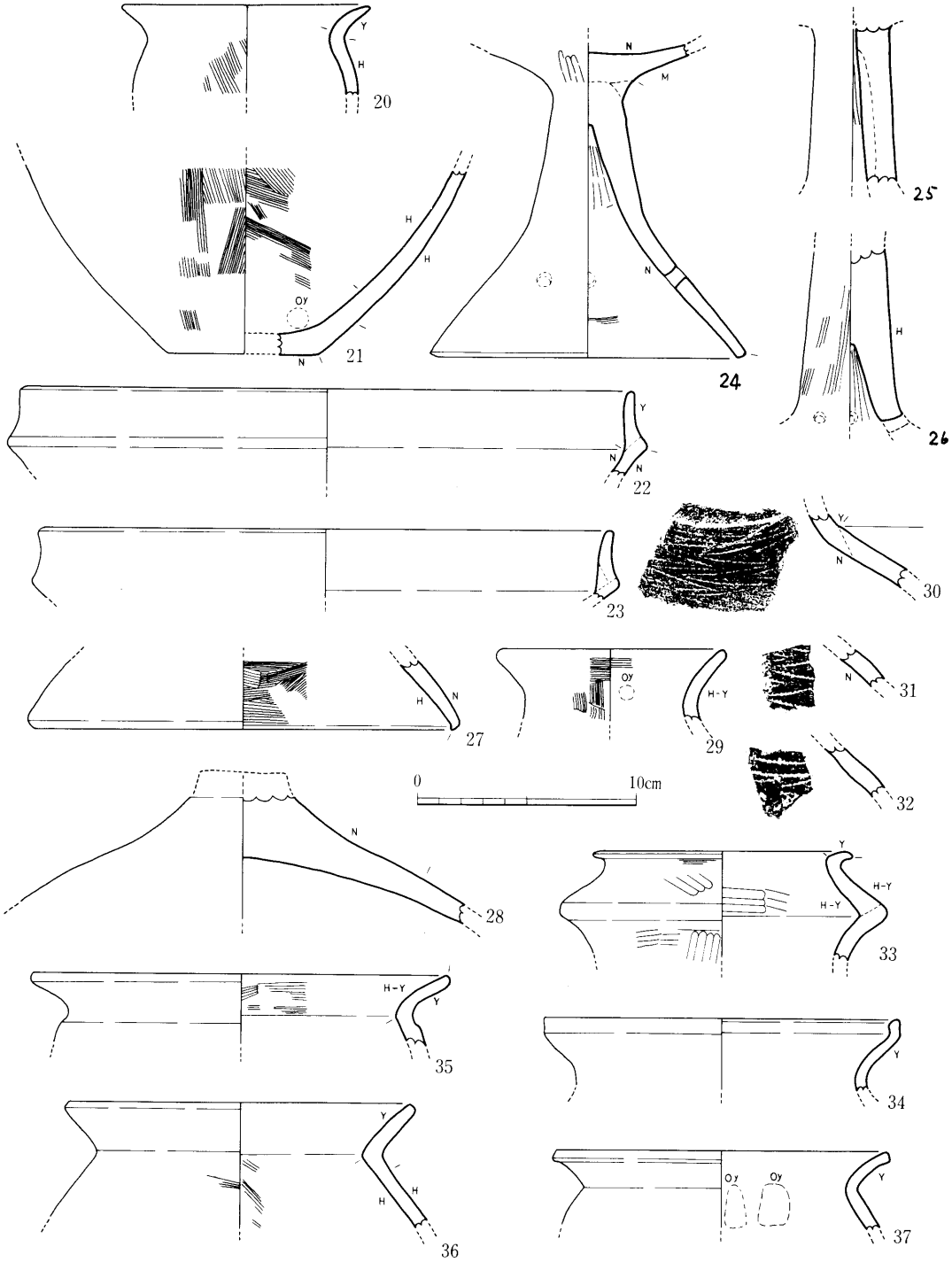


Fig. 57　第１号溝出土遺物実測図(2)

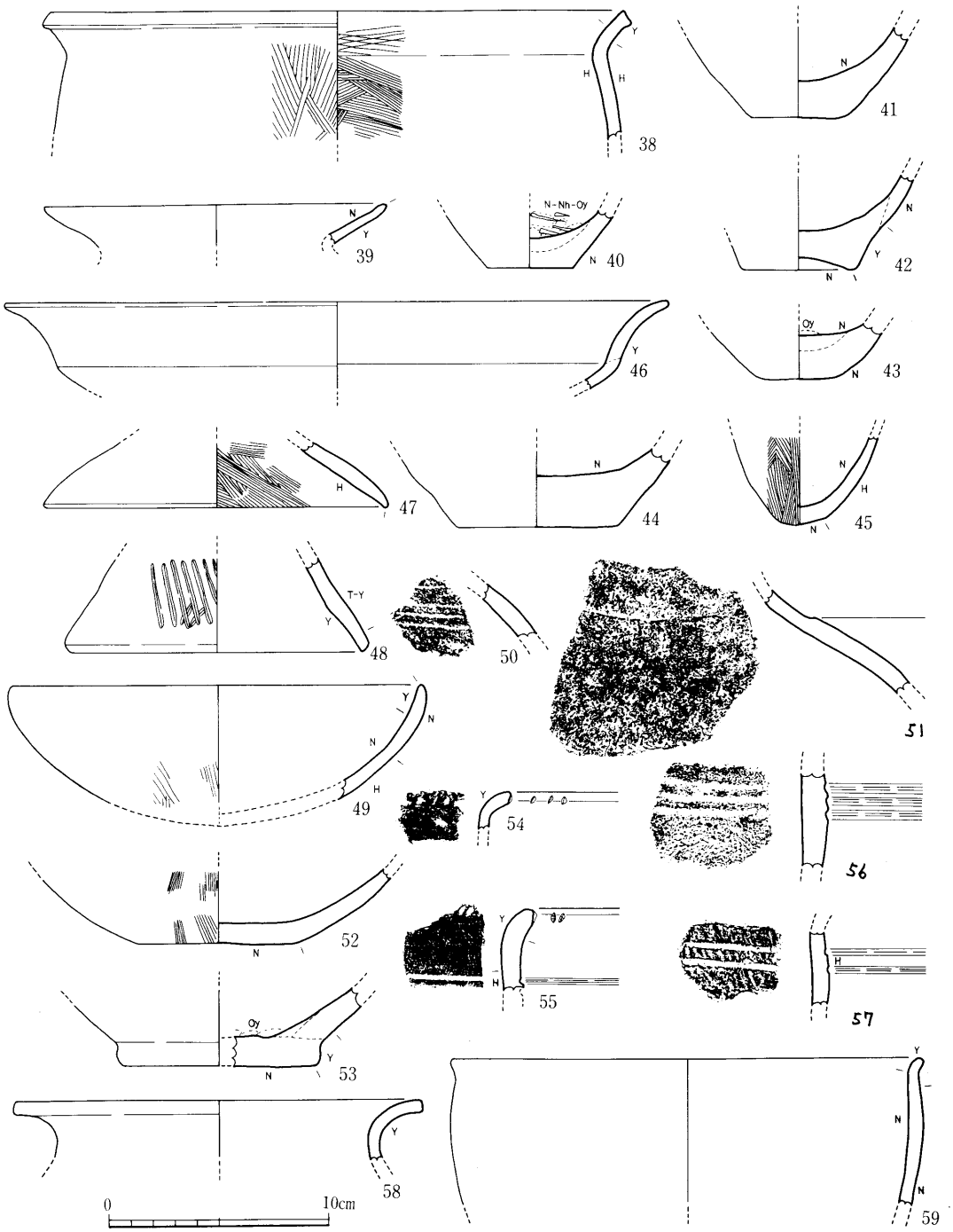


Fig. 58　第1号溝出土遺物実測図(3)

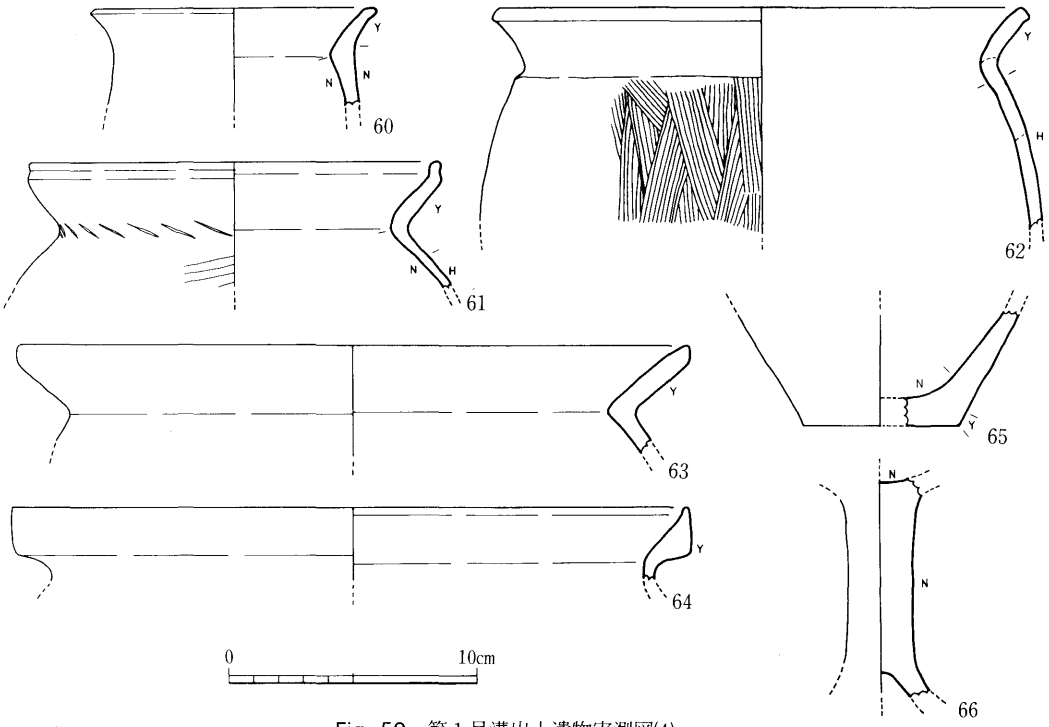


Fig. 59　第 1 号溝出土遺物実測図(4)

ち上がり、端部は尖りぎみに終わる。胴部外面下半は刷毛目仕上げ、他はナデられる。

第 3 層出土遺物（50～66）

50～53 は壺。50 はヘラによる少なくとも 4 条の沈線が巡る。51 は肩部に削り出しによる段をもつ。施文は認められない。52･53 は平底の底部。53 は円盤状の安定した底部で、内面には指圧による調整痕が認められる。

54～65 は甕。54･55 は如意形に短く外反する口縁部をもつ。54 は口縁端部下端にヘラによる粗雑な刻目を施す。55 は口縁部がゆるやかに開き、端部下端には刷毛原体による刻目を施す。胴部外面には少なくとも 2 条のヘラ描き沈線が巡り、内面は縦刷毛目仕上げされる。56 は 3 条、57 は 2 条のヘラ描き沈線が巡る。58 は大きく外弯して開く口縁部をもつ。59 は張りのほとんどない胴部をもち、口縁部は短くわずかに外反する。「く」の字に外反する口縁部をもつもののなかには、口縁部の開きが弱く、端部に平坦な面をもつもの（60）や口縁端部が短く直立する複合口縁の甕(61)、口縁部が直立ぎみに肥厚して断面三角形を呈するもの（64）などがある。61 は頸部外面にヘラによる刺突文が巡る。65 は平底の底部。66 は長脚の高坏の脚柱部。

第2号溝出土遺物（Fig. 60～64，PL. 33～39）

縄文土器および前期～後期の弥生土器があるが、主体は弥生時代後期後半である。

第1層出土遺物（67～97）

67～71は壺。68は肩部に削り出しによる低い段をもち、貝殻による2条の沈線の下位に羽状文を施文する。69は貝殻による2条の沈線間に無軸羽状文を施文する。67・70は複合口縁をもつ。67は屈曲部より内側に、内傾して直線的に立ち上がる拡張部をもつ。拡張部への施文はないが、屈曲部の下位に5条単位の櫛描き波状文が巡る。粗い刷毛目仕上げがなされるが、拡張部の外面下半は丁寧なヘラミガキが行われる。70は拡張部が短く直立して立ち上がり、口縁端部に面をもつ。拡張部の外面下半に7条単位の櫛描き波状文、口縁端部に櫛描きの直線文が巡る。71は安定した平底の底部。

72～88は甕。72は頸部直下の外面に、3条以上のヘラ描き沈線が巡る。口縁部は直線的に「く」の字に外反するものが大半で、複合口縁となるもの（81）もある。前者の中には、口縁部が直立ぎみに立ち上がり、端部外面を強い横ナデによって窪ませるもの（79）や口縁端部が面取り風に平坦な面をもち、尖りぎみに終わるもの（73）などもある。79は胴部がヘラミガキされている。施文は頸部外面にヘラによる刺突文（78・79）がみられる。81は頸部から反転して斜外方に立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は尖りぎみに終わる。82～88は底部で、底径の小さい平底で刷毛目仕上げされるものが大半を占めるが、外面の刷毛目が底部端までおよぶもの（86）もある。

89は胴部の開きぐあいから鉢と考えられる。底部側面に粘土帯を貼付し、高台状に造出する。内外面とも刷毛目仕上げ。

90～93は高坏。90・91は脚部を坏部に接合する高坏。90は長脚で、中空の脚柱部からゆるやかに開き、裾部でわずかに内弯する。透かし穴は焼成後に三方に穿孔されている。外面はヘラミガキ、内面下半は横・斜刷毛目仕上げされる。91は中位付近で屈曲して大きく開く脚部をもつ。坏部内面および脚部上端部外面はヘラミガキされる。92・93は脚裾部で、裾部でやや外反するもの（92）と直線的に裾部に移行するもの（93）などがある。93は外面が刷毛目ののち、ヘラミガキされる。

94・95は甕の蓋。94は天井部の摘み部が中窪みで、体部の三方に2個単位の焼成前穿孔が行われる。95は体部から直線的に裾部に移行する小形の蓋で、天井部内面は強い指圧によって窪ませる。体部内面はヘラミガキされる。

96・97は支脚。96は小形の土製支脚で、突起部を欠損する。上面中央部は中空の内側か

ら焼成前穿孔される。97は残存部分の平面形態が五角形で、全体の形状はわからないが、土製の支脚であろう。全体を指圧によって整形する。

第2層出土遺物（98～120）

98～107は壺。98は肩部に削り出しによる段をもち、ヘラによる2条の沈線の下位に羽状文を施文する。99は複合口縁をもつもの。直立して立ち上がる口縁部は上半部で外反し、拡張部は直線的に内傾する。拡張部への施文はない。100は大きく外反する口縁部をもつ。101は短く外反する口縁部の端部内面に平坦な広い面をもつ。102は不安定な平底に球形の胴部をもつ。口縁部は「く」に字に短く外反するものであろう。胴部内面はナデ、外面下半は縦刷毛目仕上げされる。底部側面には焼成後の穿孔がみられる。103～107は底部。103～106は円盤状の安定した平底で、底径には大小がある。107は胴部が底部から直線的にあまり開かず立ち上がり、外面は底部端までおよぶ丁寧な縦刷毛目仕上げされる。

108～113は甕。108は口縁端部下端にヘラによる刻み目を施す。109は張りのない胴部をもち、口縁部は如意形に外反する。胴部には1条のヘラ描き沈線が巡り、口縁端部のほぼ全面にヘラによる刻み目を施す。110・111は「く」の字に外反する口縁部をもつもので、外弯して開くもの（110）と直線的に開くもの（111）などがある。112・113は底部。113は外面が丁寧な縦刷毛目仕上げされ、底部側面を指圧により押える。

114～118は高坏。114は内弯して立ち上がる坏部の上半部で反転して、外弯しながらゆるやかに開く口縁部をもつ。反転部内面には稜をもつ。115～117は脚柱部で、長脚のものと短脚のものとがある。115は脚裾部が大きく外方に屈曲する。116・117は坏部を脚部の側面に接合し、外面をヘラミガキする。透し穴は三方に焼成前穿孔されるもの（115・116）がある。118は脚裾部で、裾部まで直線的にゆるやかに開く。外面はヘラミガキされる。

119・120は鉢。119は小形の鉢。窪み底の底部から胴部は内弯して立ち上がり、そのまま口縁部に移行する。底部側面は指圧により押えられ、高台状に仕上げられている。外面はナデ、胴部内面はヘラミガキののちナデている。120は口縁部が短く外反する。

第3層出土遺物（121～140）

121～130は壺。121～127は胴上半部から肩部。施文は羽状文で、貝殻によるものが大半であるが、ヘラによるもの（123）もある。無軸羽状文が多いが、有軸のもの（125）もある。126・127は肩部に削り出しによる段をもつ。内外面ともヘラミガキのもの（124・126）、ナデ・横ナデのもの（121・122）および外面刷毛目、内面ナデのもの（127）などがある。128～130は底部。128・130は安定した円盤状の平底の底部。129も平底の底部で内

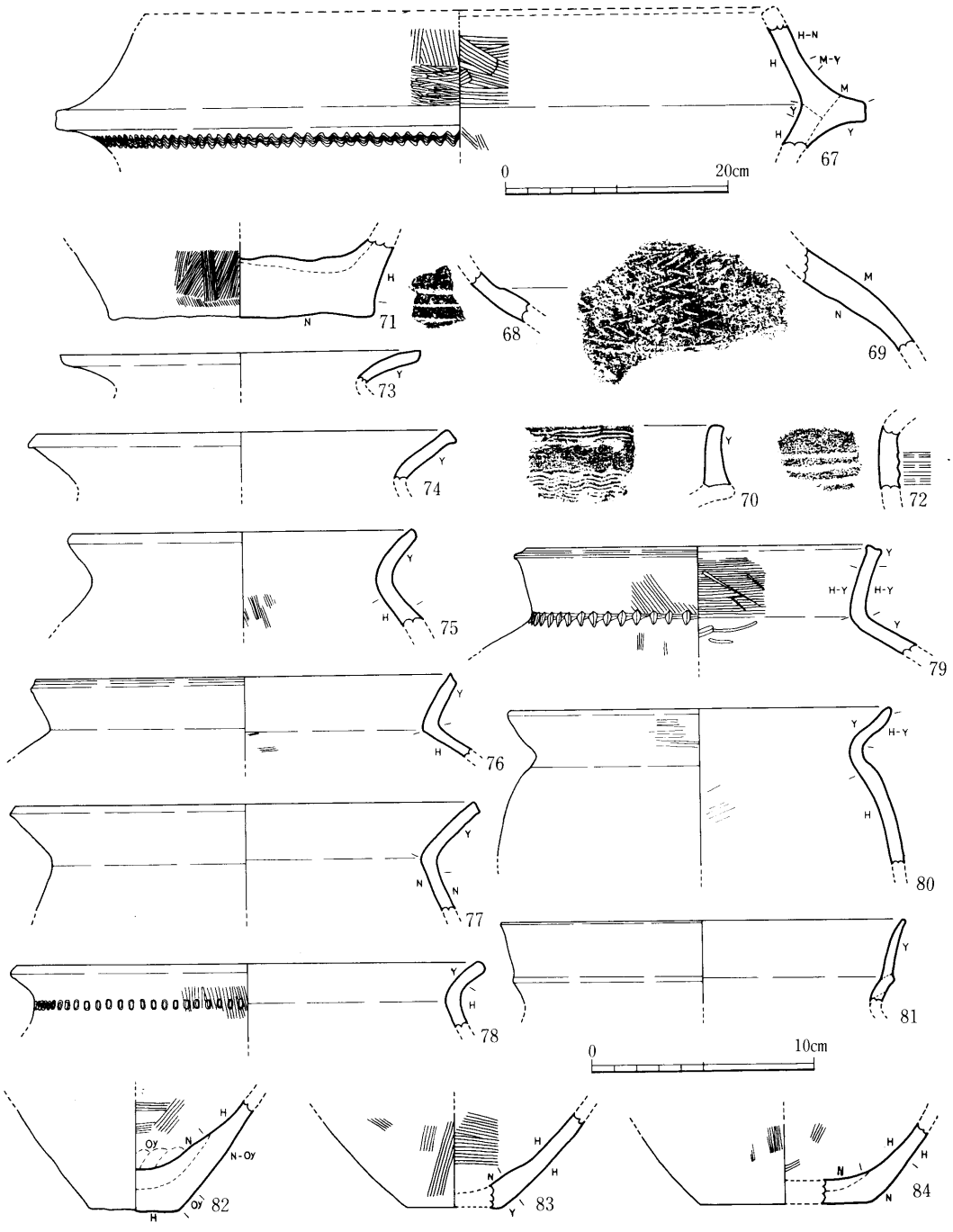


Fig. 60　第２号溝出土遺物実測図(1)

第１号溝出土遺物

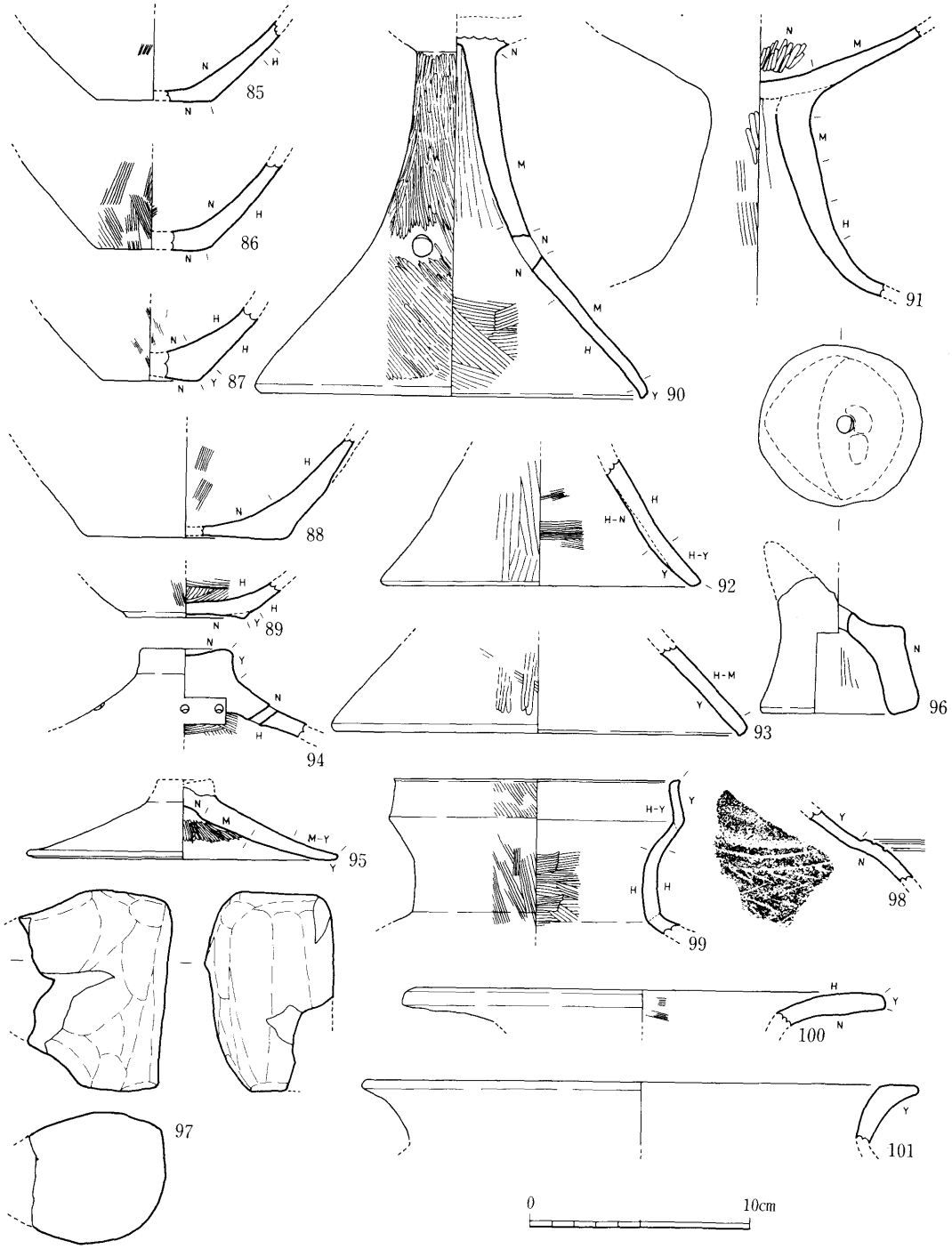


Fig. 61　第２号溝出土遺物実測図(2)

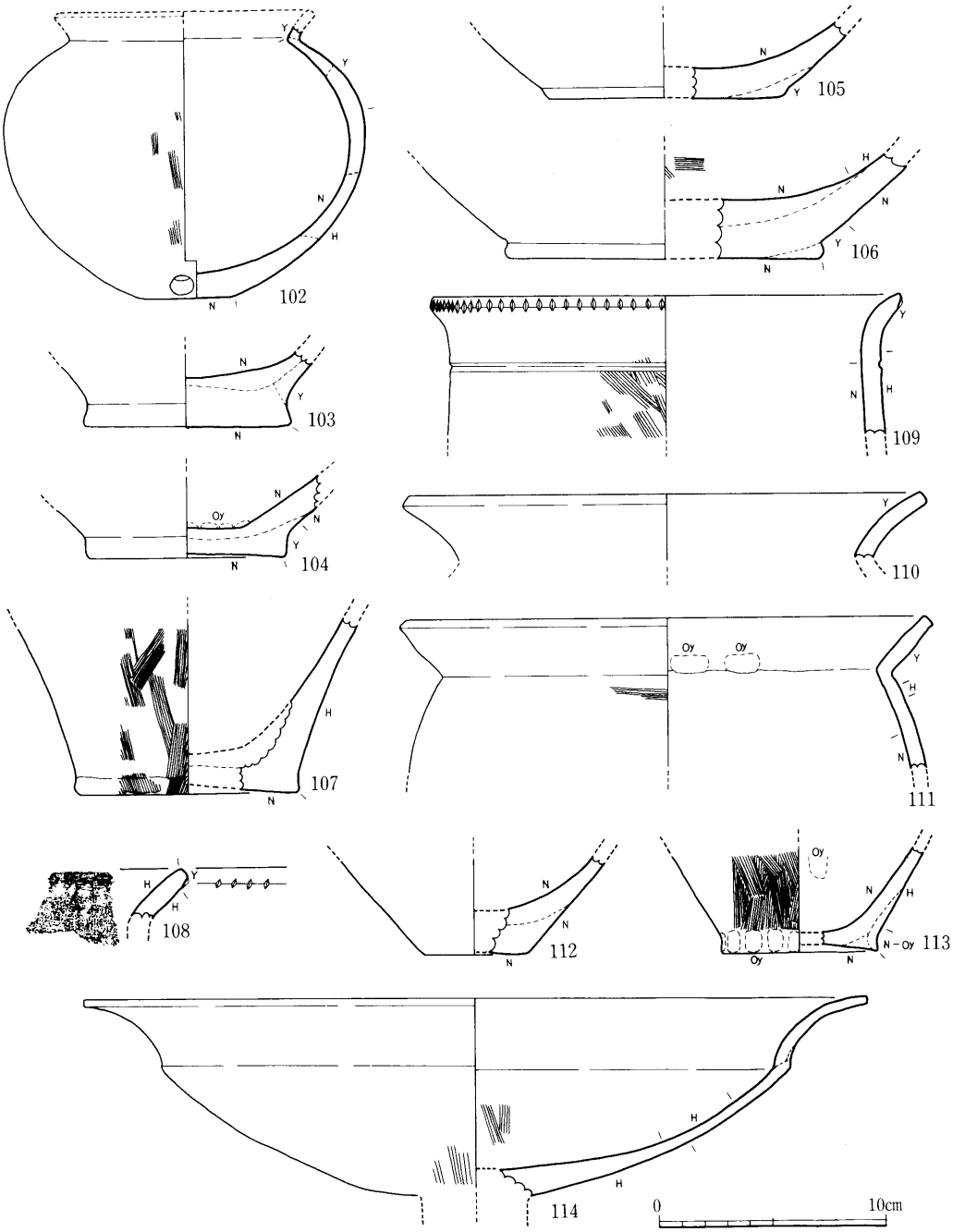


Fig. 62　第２号溝出土遺物実測図(3)

第１号溝出土遺物

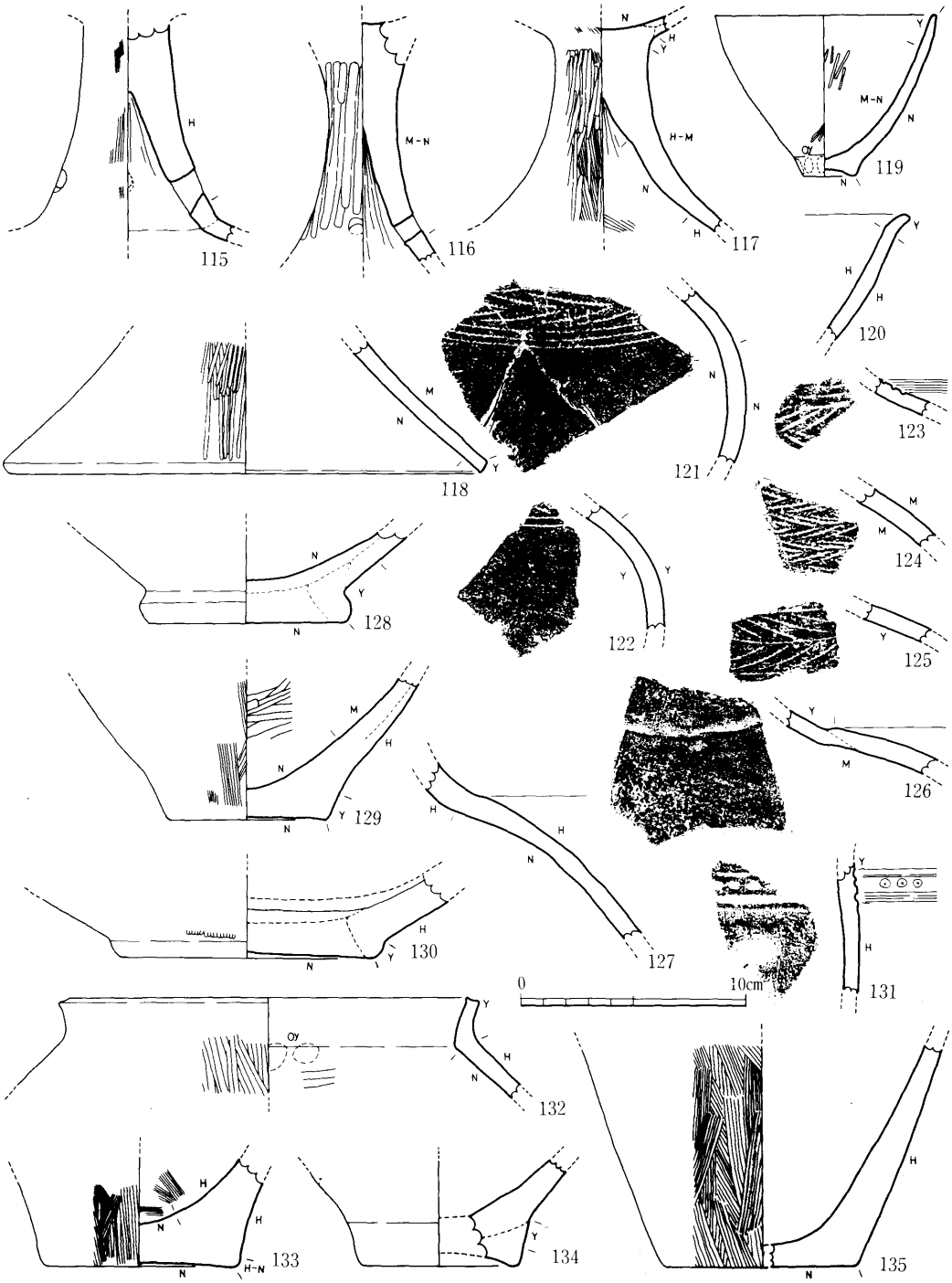


Fig. 63　第２号溝出土遺物実測図(4)

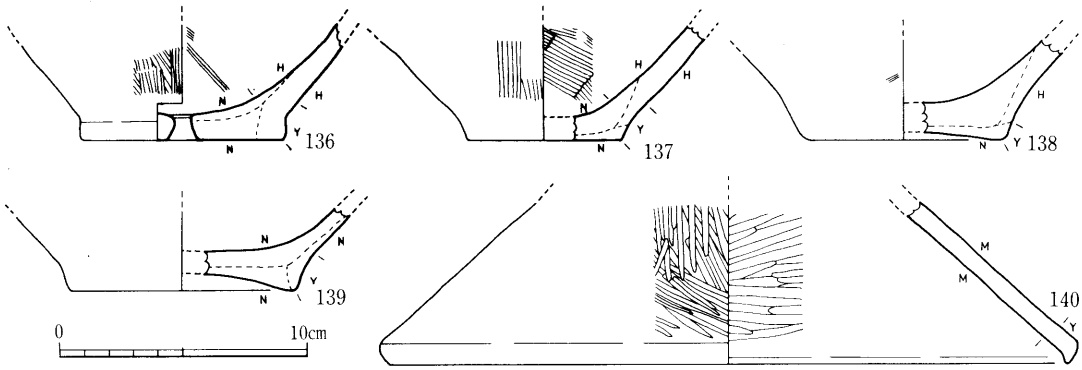


Fig. 64　第2号溝出土遺物実測図(5)

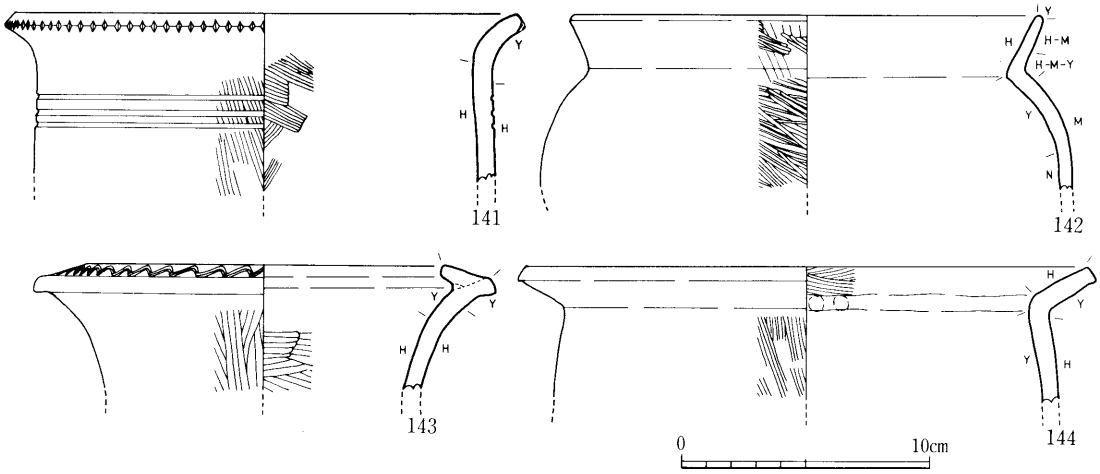


Fig. 65　第3・7号溝出土遺物実測図

面をヘラミガキする。

131～139は甕。131は胴上半部で、ヘラ描きの沈線間に刺突文を刻む。132は直立ぎみに「く」の字に外反する短い口縁部をもつ。胴部内外面は粗い刷毛目を施す。133～139は底部。平底のもの（133・135～137）とやや上げ底のもの（134・138・139）がある。134は縄文土器。135は胴部が底部から直線的に立ち上がる。136は底部中央部に外面から焼成後に穿孔される。外面は刷毛目仕上げが多く、底部端までおよぶもの(133・135)もある。

140 は高坏の脚裾部で、直線的に開き端部内面は内側に屈曲する。外面上半は縦方向、下半および内面は横・斜め方向のヘラミガキがおこなわれる。

第3号溝出土遺物(Fig. 65－141・142，PL. 36・37)

141・142 は甕。141 は張りのほとんどない胴部に如意形に外反する口縁部をもつ。胴部

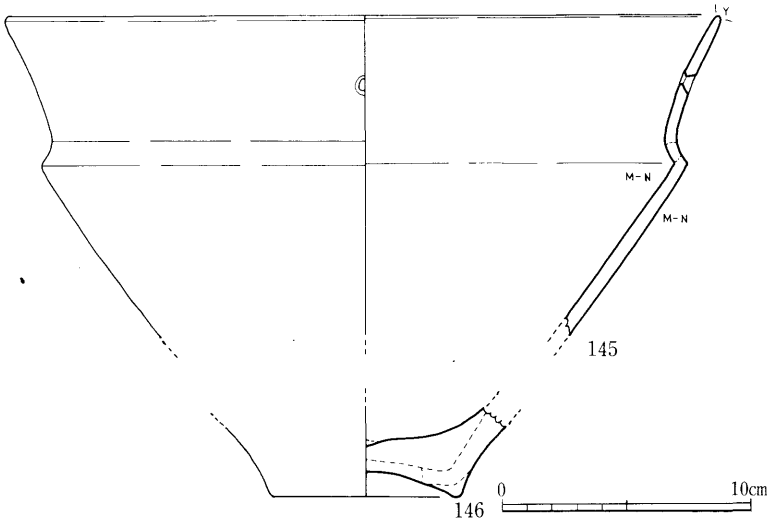


Fig. 66　第2号土壙出土遺物実測図

上半には3条のヘラ描き沈線が巡り、平坦な口縁端部の下端にヘラによる刻み目を施す。胴部内外面は縦・斜め刷毛目仕上げされる。142は口縁部が「く」の字に外反し、直線的に開く。外面は刷毛目ののちヘラミガキされる。

第7号溝出土遺物（Fig. 65－143・144，PL. 37）

143は複合口縁の壺。拡張部は未発達で短く内傾し、狭い拡張部の外面に3条単位の櫛描き波状文を施文する。内外面は粗い刷毛目仕上げされる。144は直線的に「く」の字に外反する口縁部をもつ甕で、口縁部内面には刷毛目が残る。

第2号土壙出土遺物（Fig. 66，PL. 37・39）

145・146は縄文土器。145は精製の浅鉢で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は短い頸部から屈曲して外弯ぎみに開く。口縁部は長く、端部は丸い。内外面とも丁寧なヘラミガキがなされ、口縁部の中位には焼成後，内外面から穿孔される。146は粗製、上げ底の甕もしくは深鉢の底部。

石器（Fig. 67，PL. 39）

147は局部磨製石斧。撥形を呈し、刃部は局部的に磨かれる。背腹両面の中央部は比較的大きな剥離面によって構成されているが、基部および両縁辺には丁寧な調整加工が施される。148・149・151は使用痕のある剥片。148は素材となる剥片の剥離後に、周囲から二次加工を施す。腹面下縁に使用痕が認められる。149は不定形な縦長剥片の腹面上端および中位に微細な剥落痕が認められる。背面中央部に原礫面を残す。151は複剥離打面をもつ剥片

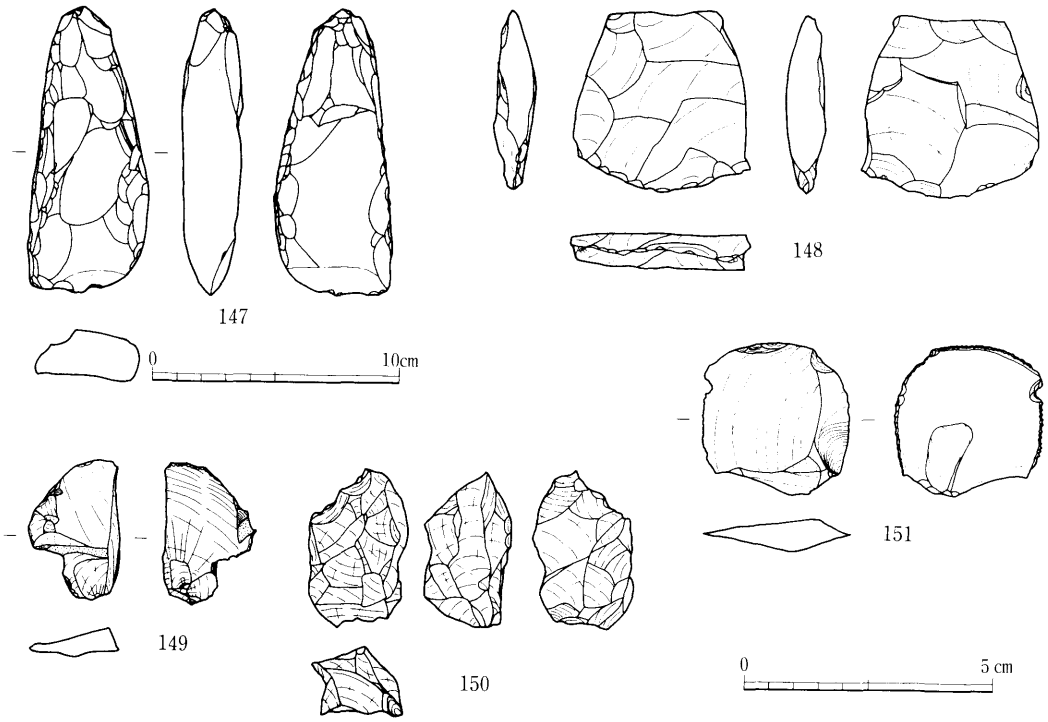


Fig. 67　石器実測図

で、下縁を除く各縁辺に連続する微細な剝落痕が認められる。150 は削器。147 は第 1 号溝中層、148～150 は第 2 号溝第 1 層、151 は第 1 号土壙出土。

5　小結

今回の調査では溝15条、縄文時代晩期の土壙 2 基などを検出した。溝の詳細な時期がわかるのは、弥生時代中期後半～後期初頭 1 条（第 3 号溝）、後期初頭 1 条（第 7 号溝）、後期後半 2 条（第 1 ・ 2 号溝）の計 4 条である。他の溝は時期決定する資料に乏しく、弥生時代 3 条、近世 8 条の溝である。

弥生時代の溝はすべて直線的もしくは蛇行しながら南西から北東の走行しており、溝幅は後期初頭までの 2 条が平均60～70cmであるが、後期後半の 2 条は平均約1.5m と規模を拡大している。第 1 号溝は流路方向・時期・規模などから第 2 号溝が埋没した後、比較的短期間のうちに再掘削されたものと考えられる。

調査地域のすぐ東側には、南にそびえる今山と高倉山の谷あいの溜池に水源をもつ大塚川が南東から北西に走行している。また、吉田構内のサッカー場からラグビー場の南西縁には、大塚川と同様に南東から北西に流路をもつ縄文時代から弥生時代にかけての河川跡

が検出されている[1]。大塚川が弥生時代まで遡るかどうか現状では判断しがたいが、弥生時代の各溝の埋積土は礫を含まず、砂質土や粘質土で構成されていることから、河川の氾濫を防御するために掘削されたものとは考えられず、両方もしくは一方の河川跡からの農業用の水利灌漑を目的に掘削されたものと想定される。

吉田構内では「遺跡保存地区」をはじめとして、弥生時代中期から古墳時代前期の集落が検出されている[2]が、生産基盤となる水田跡、また水田土壌となるグライ土壌はほとんど確認されていない。実際に、先に述べた養護学校敷地での第1次試掘調査では、褐色や青灰色のグライ土壌が随所で検出されており、養護学校敷地に当該期の水田が営まれていた可能性が十分に考えられる。吉田構内の周辺は東・南側には丘陵がせまり、また、北側は椹野川の広大な氾濫原にあたっており、養護学校敷地周辺を除いた吉田構内の他の地域は水田経営を行うことのできる立地にはないことも傍証となるであろう。

近世の溝は弥生時代の溝と直交して走行しており、現在の畦畔に沿っている。ラグビー場の南西縁では、南東から北西に流路をもつ現在の灌漑水路の下位から、古代から中世の層位的に三時期の杭列が検出されており、「上位は現在の杭で…（中略）…層位的に古い下位は矢板に似た割り材を密に打ち込んでおり、中位の杭列は小丸材を用い[3]」て構築されていたという。吉田構内周辺は古代の条里遺構の存在を示す二ノ坪、八ノ坪などの小字名が残存しており、上記の結果から、近世の水田地割は古代の条里地割線を踏襲していることが推察されるが、詳しいことはわからず今後の調査に期待したい。

吉田構内では従来、縄文時代の遺物は遺物包含層から散発的に出土していたにすぎなかったが、今回、はじめて遺構を検出した。農学部附属農場を除く主要な地域ではすでに数次にわたる調査を実施しているが、縄文時代に遡る遺構は確認されておらず、その立地から養護学校敷地に当該期の集落が埋存している可能性が指摘されるにいたった。（河村）

［注］

1）山口大学吉田遺跡調査団『山口大学吉田遺跡発掘調査概報』（1976年）。

2）山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）』（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1986年）。
山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）』（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1987年）。
山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）』（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』、山口大学埋蔵文化財資料館、1990年）。

3）前掲注1）。

Tab. 6　出土遺物観察表

法量(　)復原値

番号	器　　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　　考
第1号溝　第1層						
1	弥生土器　壺	①(11.0)	灰白色 (10YR8/2)	不　良	良　好	複合口縁
2	弥生土器　壺		①橙色 (5YR7/6) ②にぶい橙色 (5YR7/3)	やや不良	やや不良	複合口縁 ヘラ山形文
3	弥生土器　壺	①(23.5)	①浅黄橙色 (10YR8/3) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	良　好	不　良	
4	弥生土器　甕	①(24.4)	淡黄色(2.5Y8/3)	良　好	やや不良	
5	弥生土器　甕	①(21.0)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	
6	弥生土器　甕	①(22.0)	明褐灰色 (7.5YR7/2)	良　好	良　好	
7	弥生土器　甕	①(22.8)	①灰白色 (7.5YR8/2) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	やや不良	良　好	
8	弥生土器　甕	①(25.9)	①灰白色 (7.5YR8/2) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	やや不良	良　好	
9	弥生土器　甕	①(21.2)	①灰白色 (2.5Y8/2) ②淡黄色 (2.5Y8/3)	良　好	不　良	
10	弥生土器　甕	①(14.2)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	良　好	良　好	
11	弥生土器　甕	①(16.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	良　好	良　好	
12	弥生土器　甕	①(17.0)	①淡橙色 (5YR8/3) ②灰白色 (5YR8/1)	良　好	不　良	
13	弥生土器　甕	①(16.4)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	不　良	
14	弥生土器　甕	①(14.8)	①浅黄橙色 (7.5YR8/4) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精　良	良　好	
15	弥生土器　甕	①(14.0)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや不良	良　好	
16	弥生土器　甕	①(14.1)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精　良	良　好	外面煤付着
17	弥生土器　甕	②(2.5)	①浅黄橙色 (10YR8/3) ②浅黄橙色 (10YR8/4)	良　好	良　好	
18	弥生土器　甕	②(5.3)	①褐灰色 (10YR6/1) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	
19	弥生土器　甕	②(5.1)	①にぶい黄橙色 (10YR7/3) ②褐灰色 (10YR6/1)	不　良	良　好	
20	弥生土器　甕	①(11.2)	灰白色 (10YR8/2)	やや不良	やや不良	
21	弥生土器　甕	②(6.8)	①灰黄褐色 (10YR6/2) ②褐色 (10YR5/1)	良　好	良　好	
22	弥生土器　高坏	①(27.6)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	
23	弥生土器　高坏	①(25.8)	浅黄橙色 (10YR8/3)	良　好	良　好	
24	弥生土器　高坏	②(13.6)	赤橙色 (10R6/8)	精　良	良　好	
25	弥生土器　高坏		にぶい黄橙色 (10YR7/2)	不　良	良　好	
26	弥生土器　高坏		橙色 (7.5YR6/8)	不　良	やや不良	
27	弥生土器　高坏	②(19.0)	①灰白色 (10YR8/2) ②褐灰色 (10YR4/1)	良　好	良　好	
28	弥生土器 蓋(甕)		①浅黄橙色 (7.5YR8/3) ②浅黄橙色 (10YR8/3)	良　好	良　好	
第2層						
29	弥生土器　壺	①(10.0)	にぶい橙色 (5YR7/4)	精　良	良　好	
30	弥生土器　壺		灰白色 (10YR8/2)	良　好	やや不良	貝殻無軸羽状文
31	弥生土器　壺		灰白色 (10YR8/2)	精　良	良　好	貝殻無軸羽状文
32	弥生土器　壺		灰白色 (10YR8/2)	やや不良	良　好	貝殻無軸羽状文
33	弥生土器　壺	①(10.8)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	精　良	良　好	複合口縁
34	弥生土器　甕	①(16.4)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	良　好	不　良	複合口縁

出土遺物観察表

法量(　)復原値

番号	器　　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　　考
35	弥生土器　甕	①(18.7)	浅黄橙色（7.5YR8/6）	良　好	良　好	
36	弥生土器　甕	①(15.5)	①淡橙色（5YR8/4） ②浅黄橙色（10YR8/4）	良　好	良　好	
37	弥生土器　甕	①(15.1)	①橙色（5YR7/8） ②淡橙色（5YR8/4）	精　良	良　好	
38	弥生土器　甕	①(25.9)	①淡橙色（5YR8/3） ②淡橙色（5YR8/4）	精　良	良　好	
39	弥生土器　甕	①(15.4)	にぶい橙色（7.5YR7/4）	精　良	良　好	
40	弥生土器　甕	②3.8	①にぶい橙色（7.5YR7/4） ②浅黄橙色（7.5YR8/3）	良　好	良　好	
41	弥生土器　甕	②4.2	明灰褐色（7.5YR7/2）	良　好	良　好	
42	縄文土器 深鉢 or 甕	②5.0	①明褐灰色（5YR5/8） ②にぶい橙色（5YR6/3）	良　好	良　好	粗製
43	弥生土器　甕	②3.7	①にぶい橙色（2.5YR6/4） ②明褐灰色（5YR7/2）	やや不良	良　好	
44	弥生土器　甕	②7.2	①橙色（5YR7/8） ②橙色（5YR7/6）	不　良	良　好	
45	弥生土器　甕		①明褐灰色（7.5YR7/2） ②褐灰色（7.5YR5/1）	精　良	良　好	
46	弥生土器　高坏	①(30.4)	①灰白色（10YR7/1） ②にぶい黄橙色（10YR7/2）	精　良	良　好	
47	弥生土器　高坏	②(15.3)	にぶい橙色（5YR6/4）	良　好	良　好	
48	弥生土器　高坏	②(13.1)	浅黄橙色（10YR8/4）	良　好	良　好	
49	弥生土器　鉢	①(18.6)	にぶい橙色（5YR6/4）	良　好	良　好	
第3層						
50	弥生土器　壺		①灰白色（10YR8/2） ②灰褐色（7.5YR6/2）	やや不良	良　好	
51	弥生土器　壺		①灰白色（10YR8/2） ②灰白色（10YR7/2）	不　良	良　好	
52	弥生土器　壺	②(7.2)	①黒色（10YR2/1） ②灰白色（10YR7/1）	良　好	良　好	
53	弥生土器　壺	②(8.7)	淡橙色（5YR8/4）	やや不良	良　好	
54	弥生土器　甕		にぶい黄橙色（10YR7/3）	良　好	良　好	
55	弥生土器　甕		①にぶい橙色（7.5YR7/3） ②にぶい黄橙色（10YR7/3）	良　好	良　好	
56	弥生土器　甕		にぶい褐色（7.5YR6/3）	不　良	やや不良	
57	弥生土器　甕		①にぶい褐色（7.5YR6/3） ②にぶい橙色（7.5YR6/4）	不　良	不　良	
58	弥生土器　甕	①(18.4)	淡橙色（5YR8/3）	良　好	良　好	外面煤付着
59	弥生土器　甕	①(21.2)	橙色（5YR7/6）	良　好	良　好	
60	弥生土器　甕	①(11.2)	淡橙色（5YR8/4）	良　好	良　好	外面煤付着
61	弥生土器　甕	①(16.0)	淡橙色（5YR8/4）	やや不良	良　好	複合口縁
62	弥生土器　甕	①(21.2)	にぶい橙色（5YR7/3）	良　好	良　好	外面煤付着
63	弥生土器　甕	①(26.8)	橙色（5YR7/6）	不　良	不　良	
64	弥生土器　甕	①(27.3)	橙色（5YR7/6）	やや不良	不　良	
65	弥生土器　甕	②(6.2)	①褐灰色（7.5YR5/1） ②にぶい黄橙色（10YR7/2）	やや不良	良　好	
66	弥生土器　高坏		淡橙色（5YR8/4）	やや不良	良　好	
第2号溝　第1層						
67	弥生土器　壺		①淡橙色（5YR8/4） ②淡橙色（5YR8/3）	良　好	良　好	複合口縁 櫛描波状文
68	弥生土器　壺		浅黄橙色（7.5YR8/3）	良　好	良　好	貝殻羽状文

法量(　)復原値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備考
69	弥生土器　壺		灰白色（7.5YR8/2）	不良	良好	貝殻無軸羽状文
70	弥生土器　壺		浅黄橙色（7.5YR8/3）	良好	良好	複合口縁 櫛描波状文
71	弥生土器　壺	②11.8	①淡橙色（5YR8/4） ②浅黄橙色（7.5YR8/3）	やや不良	良好	
72	弥生土器　甕		浅黄橙色（7.5YR8/3）	不良	やや不良	
73	弥生土器　甕	②(16.2)	明褐灰色（7.5YR7/2）	不良	良好	
74	弥生土器　甕	②(18.4)	①橙色（5YR6/6） ②橙色（2.5YR7/6）	良好	良好	
75	弥生土器　甕	②(15.2)	橙色（2.5YR6/8）	良好	良好	外面煤付着
76	弥生土器　甕	②(18.7)	橙色（2.5YR7/8）	不良	良好	
77	弥生土器　甕	②(20.6)	にぶい黄橙色（10YR7/3）	不良	良好	
78	弥生土器　甕	②(20.7)	橙色（5YR6/6）	良好	不良	
79	弥生土器　甕	①(15.3)	①浅黄橙色（10YR8/3） ②灰白色（10YR8/2）	精良	良好	ヘラ刺突文
80	弥生土器　甕	①(17.0)	①橙色（5YR7/6） ②黒褐色（10YR3/1）	良好	不良	外面煤付着
81	弥生土器　甕	①(18.0)	淡赤橙色（2.5YR7/4）	良好	やや不良	複合口縁 外面煤付着
82	弥生土器　甕	②(4.0)	①明褐灰色（5YR7/2） ②淡黄色（5YR8/4）	良好	良好	
83	弥生土器　甕	②(4.2)	①にぶい黄橙色（10YR7/3） ②浅黄橙色（10YR8/3）	良好	良好	
84	弥生土器　甕	②(7.8)	①淡赤橙色（2.5YR7/4） ②灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	
85	弥生土器　甕	②(5.2)	灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	
86	弥生土器　甕	②(4.8)	①淡橙色（5YR8/4） ②灰白色（5YR8/2）	良好	良好	
87	弥生土器　甕	②(4.2)	①淡赤橙色（2.5YR7/4） ②灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	
88	弥生土器　甕	②(9.2)	①赤色（10R5/8） ②黒色（10R1.7/1）	不良	やや不良	
89	弥生土器　鉢	②(5.4)	灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	
90	弥生土器　高坏	②17.1	にぶい黄橙色（10YR7/3）	不良	良好	
91	弥生土器　高坏		①橙色（2.5YR7/6） ②淡橙色（5YR8/3）	やや不良	やや不良	
92	弥生土器　高坏	②(13.9)	浅黄橙色（10YR8/4）	良好	良好	
93	弥生土器　高坏	②(18.1)	にぶい黄橙色（10YR7/2）	良好	良好	
94	弥生土器　蓋		浅黄橙色（10YR8/4）	良好	やや不良	
95	弥生土器　蓋	①13.1	灰黄褐色（10YR6/2）	良好	良好	
96	弥生土器　支脚	②4.8	橙色（2.5Y7/6）	精良	やや不良	
97	弥生土器　支脚		浅黄橙色（7.5YR8/3）	精良	良好	
第2層						
98	弥生土器　壺		①灰白色（10YR8/2） ②黒褐色（10YR3/1）	良好	やや不良	ヘラ無軸羽状文
99	弥生土器　壺	①(12.9)	橙色（2.5YR7/6）	良好	良好	複合口縁
100	弥生土器　壺	①(21.0)	灰白色（10YR8/2）	やや不良	良好	
101	弥生土器　壺	①(21.8)	橙色（5YR7/8）	良好	不良	
102	弥生土器　壺	②3.8	灰白色（7.5YR8/2）	良好	良好	底部側面焼成後穿孔
103	弥生土器　壺	②9.2	①橙色（2.5YR7/6） ②にぶい橙色（5YR7/4）	良好	良好	

出土遺物観察表

法量(　)復原値

番号	器　　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　　考
104	弥生土器　壺	②(8.5)	浅黄橙色 (7.5YR8/3)	不　良	良　好	
105	弥生土器　壺	②(10.2)	①淡橙色 (5YR8/4) ②灰白色 (5YR8/1)	やや不良	やや不良	
106	弥生土器　壺	②(13.6)	浅橙色 (5YR8/3)	良　好	良　好	
107	弥生土器　壺	②(9.3)	浅黄橙色 (10YR8/3)	やや不良	やや不良	
108	弥生土器　甕		①にぶい黄橙色 (10YR7/3) ②灰黄褐色 (10YR4/2)	良　好	良　好	
109	弥生土器　甕	①(20.2)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	やや不良	やや不良	
110	弥生土器　甕	①(22.3)	①浅黄橙色 (7.5YR8/4) ②浅黄橙色 (7.5YR8/3)	不　良	不　良	
111	弥生土器　甕	①(22.5)	淡橙色 (5YR8/4)	不　良	良　好	
112	弥生土器　甕	②(4.5)	①にぶい黄橙色 (10YR7/3) ②灰黄褐色 (10YR6/2)	良　好	良　好	
113	弥生土器　甕	②(6.7)	①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②褐灰色 (5YR4/1)	良　好	良　好	
114	弥生土器　高坏	①(34.2)	①橙色 (2.5YR7/8) ②淡橙色 (5YR8/3)	不　良	良　好	
115	弥生土器　高坏		①浅黄橙色 (7.5YR8/4) ②橙色 (5YR7/6)	不　良	不　良	
116	弥生土器　京坏		橙色 (2.5YR7/6)	不　良	良　好	
117	弥生土器　高坏		淡橙色 (5YR8/3)	精　良	良　好	
118	弥生土器　高坏	②(21.0)	①にぶい黄橙色 (10YR7/2) ②にぶい橙色 (7.5YR7/3)	精　良	良　好	
119	弥生土器　鉢	①9.7　②2.3　③7.1	①灰白色 (10YR8/1) ②灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	
120	弥生土器　鉢		①淡橙色 (5YR8/3) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	やや不良	やや不良	
第3層						
121	弥生土器　壺		淡橙色 (5YR8/4)	良　好	良　好	貝殻無軸羽状文
122	弥生土器　壺		淡橙色 (5YR8/3)	良　好	良　好	貝殻羽状文
123	弥生土器　壺		浅黄橙色 (10YR8/3)	精　良	良　好	ヘラ無軸羽状文
124	弥生土器　壺		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	貝殻無軸羽状文
125	弥生土器　壺		浅黄橙色 (10YR8/3)	やや不良	やや不良	貝殻有軸羽状文
126	弥生土器　壺		①明褐灰色 (7.5YR7/2) ②黒褐色 (7.5YR3/1)	良　好	良　好	
127	弥生土器　壺		にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	
128	弥生土器　壺	②8.6	①淡赤橙色 (2.5YR7/4) ②にぶい橙色 (7.5YR7/3)	良　好	良　好	
129	弥生土器　壺	②7.0	明褐灰色 (7.5YR6/3)	良　好	良　好	
130	弥生土器　壺	②(11.2)	①にぶい橙色 (5YR7/4) ②明褐灰色 (5YR7/2)	良　好	良　好	
131	弥生土器　甕		①にぶい橙色 (5YR7/3) ②灰褐色 (5YR6/2)	不　良	不　良	ヘラ刺突文
132	弥生土器　甕	①(17.5)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良　好	良　好	
133	弥生土器　甕	②(8.4)	①淡橙色 (5YR8/4) ②明褐灰色 (5YR7/2)	やや不良	良　好	
134	縄文土器　甕	②(6.9)	①にぶい橙色 (5YR7/4) ②にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	粗製
135	弥生土器　甕	②(8.2)	①にぶい橙色 (7.5YR7/3) ②明褐灰色 (7.5YR7/2)	良　好	良　好	
136	弥生土器　甕	②(8.2)	①灰白色 (10YR8/1) ②灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	底部焼成後穿孔
137	弥生土器　甕	②(6.4)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	良　好	
138	弥生土器　甕	②(8.0)	灰白色 (10YR8/2)	良　好	やや不良	

法量(　)復原値

番号	器　種	法　量(cm) (①口径②底径③器高)	色　調 (①外面　②内面)	胎土	焼成	備　考
139	弥生土器　甕	②(9.0)	淡橙色 (5YR8/3)	良　好	良　好	
140	弥生土器　高坏	②(27.6)	浅黄橙色 (7.5YR8/4)	精　良	良　好	
第3号溝						
141	弥生土器　甕	①(20.1)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	良　好	良　好	外面煤付着
142	弥生土器　甕	①(18.6)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	精　良	良　好	外面煤付着
第7号溝						
143	弥生土器　壺	①(14.3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	良　好	良　好	複合口縁 櫛描波状文
144	弥生土器　甕	①(22.8)	①浅黄橙色 (10YR8/3) ②にぶい黄橙色 (10YR7/2)	精　良	良　好	
第2号土壙						
145	縄文土器　浅鉢	①(28.8)	①にぶい黄橙色 (10YR7/2) ②褐灰色 (10YR4/1)	良　好	良　好	精製
146	縄文土器 深鉢 or 甕	②(7.6)	①浅黄橙色 (7.5YR8/3) ②にぶい黄橙色 (10YR7/2)	やや不良	やや不良	粗製

番号	器　種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重　量(g)	石　質	備　考
第1号溝　中層							
147	局部磨製石斧	114.0	47.0	19.0	165.9	泥岩ホルンフェルス	
第2号溝　第1層							
148	使用痕のある剥片	36.0	35.0	7.0	11.2	安山岩	背腹両面に調整加工
149	使用痕のある剥片	28.0	19.0	6.0		腰岳産黒曜石	
150	削　器	31.0	20.0	14.0	11.1	姫島産黒曜石	
第1号土壙							
151	使用痕のある剥片	30.0	30.0	7.0	5.1	姫島産黒曜石	

付篇II

吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）

1　調査の経過・概要

遺跡保存地区は吉田構内の南西部、サッカー場と第一学生食堂間に位置し、約2000m²の指定地内に弥生時代中期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡21棟が現地保存されている。調査の概要を記す前に調査の経過を若干述べることにする。本学統合移転に伴う諸工事が進められていた昭和41年、遺跡保存地区の東に隣接する第一学生食堂の新営工事中に弥生時代中期の土器が出土した。サッカー場、ラグビー場等のグラウンドの造成範囲が明かとなった昭和42年１月、大学からの要請を受けて当時、教育学部で教鞭をとっていた小野忠凞氏を中心として組織された吉田遺跡調査団は、埋蔵文化財の有無・分布範囲を確認するために当該地域一帯の試掘調査を実施した。その結果、一帯には弥生時代から古墳時代を主体とした集落跡が埋存していることが判明した。移転計画全体の都合上、グラウンド部分は遺構面までおよぶ削平が不可避であったため、事前に発掘調査を行うこととなった。調査の結果、サッカー場の一部に予定されていた地域（現在の遺跡保存地区）から弥生時代中期から古墳時代前期の竪穴住居跡が多数検出された[1)]。各竪穴住居跡は住居および集落の時期的な変遷過程が一定地域内で把握できる、良好な分布状況を示していることから「遺跡保存地区」として現地保存されるに至った。しかし、吉田遺跡調査団はその後、統合移転に伴う調査に忙殺され、遺跡保存地区全域の発掘調査は容易に実施できない状態であった。

昭和56年、遺跡保存地区の北側で実施した教育学部校舎増築に伴う発掘調査で、遺跡保存地区と一連の集落を構成する竪穴住居跡が検出された[2)]。これを契機に、遺跡保存地区の重要性が再認識されるとともに、吉田構内における弥生時代以降の集落像を明らかにするための不可欠なモデルとなること、また、将来的に環境

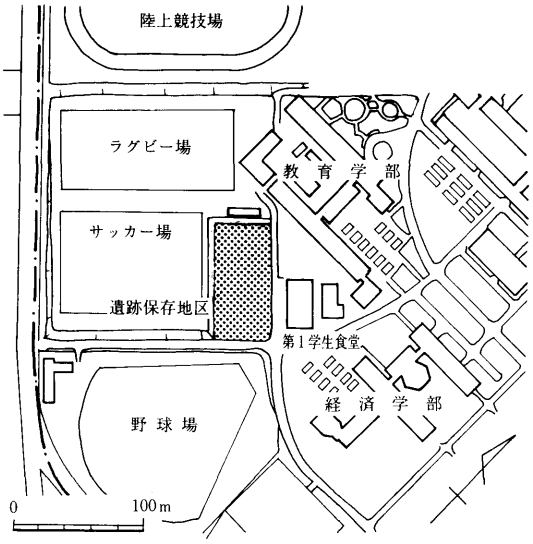


Fig. 68　調査区位置図

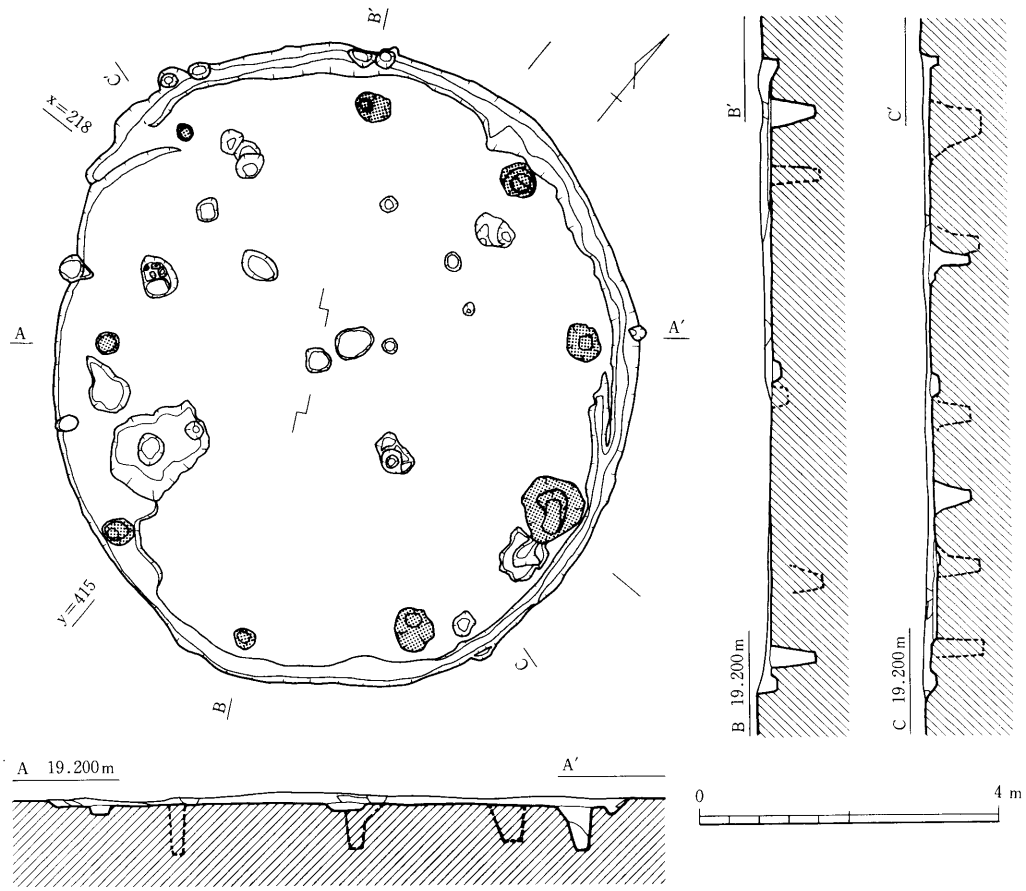


Fig. 69　第９号竪穴住居跡実測図

整備を進める上からも発掘調査による全域の個別具体的な資料の収集が急務であることが痛感された。以上の経過を踏まえて、昭和57年度以降、３ヶ年にわたり発掘調査を実施することとなった。しかし、構内の施設整備等に伴う調査が優先されたため、実際の調査は昭和57・59・60・61年度の４次にわたって実施することになった。

検出した遺構には、弥生時代中期前半から古墳時代中期の竪穴住居跡21棟、弥生時代中期前半から古墳時代前期の土壙50基、弥生時代中期中頃から古墳時代前期の溝14条、古墳時代後期から奈良時代の河川跡および柱穴多数がある[3)]。以下では、特徴的な遺構・遺物について個別的に述べることにする。

２　遺構

(１)　竪穴住居跡

竪穴住居跡は弥生時代中期前半から古墳時代中期の21棟を検出した。壁溝をとどめるに

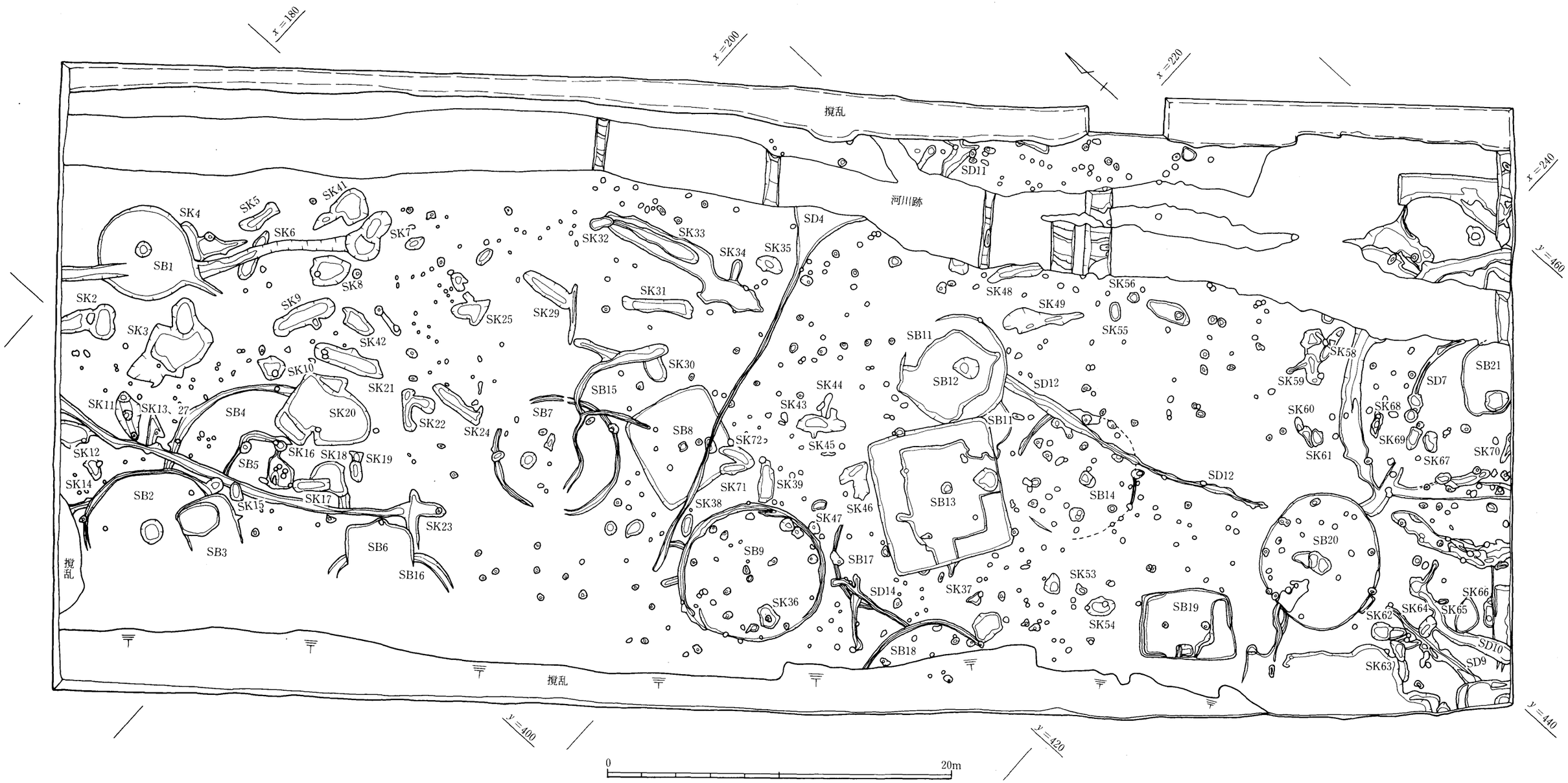

x＝180
x＝200
x＝220
x＝240
y＝400
y＝420
y＝440
y＝460
撹乱
河川跡
SD11
SD4
SK4
SK5
SK41
SK6
SK7
SB1
SK8
SK2
SK3
SK9
SK42
SK10
SK21
SK11
SK13、27
SB4
SK20
SK12
SK14
SB5
SK16
SK18
SK19
SB2
SK15
SK17
SK22
SK24
SK23
SB3
SB6
SB16
SK25
SK29
SK32
SK33
SK34
SK35
SK31
SK30
SB15
SB7
SB8
SK72
SK71
SK39
SK38
SK47
SB9
SK36
SK46
SK43
SK44
SK45
SB11
SB12
SD12
SK48
SK49
SK56
SK55
SB13
SB14
SB17
SD14
SK37
SK53
SK54
SB18
SB19
SB20
SK58
SK59
SK60
SK61
SK68
SK69
SK67
SD7
SB21
SK70
SK66
SK64
SK65
SK62
SK63
SD10
SD9
撹乱
0
20m

Fig. 70　遺構配置図

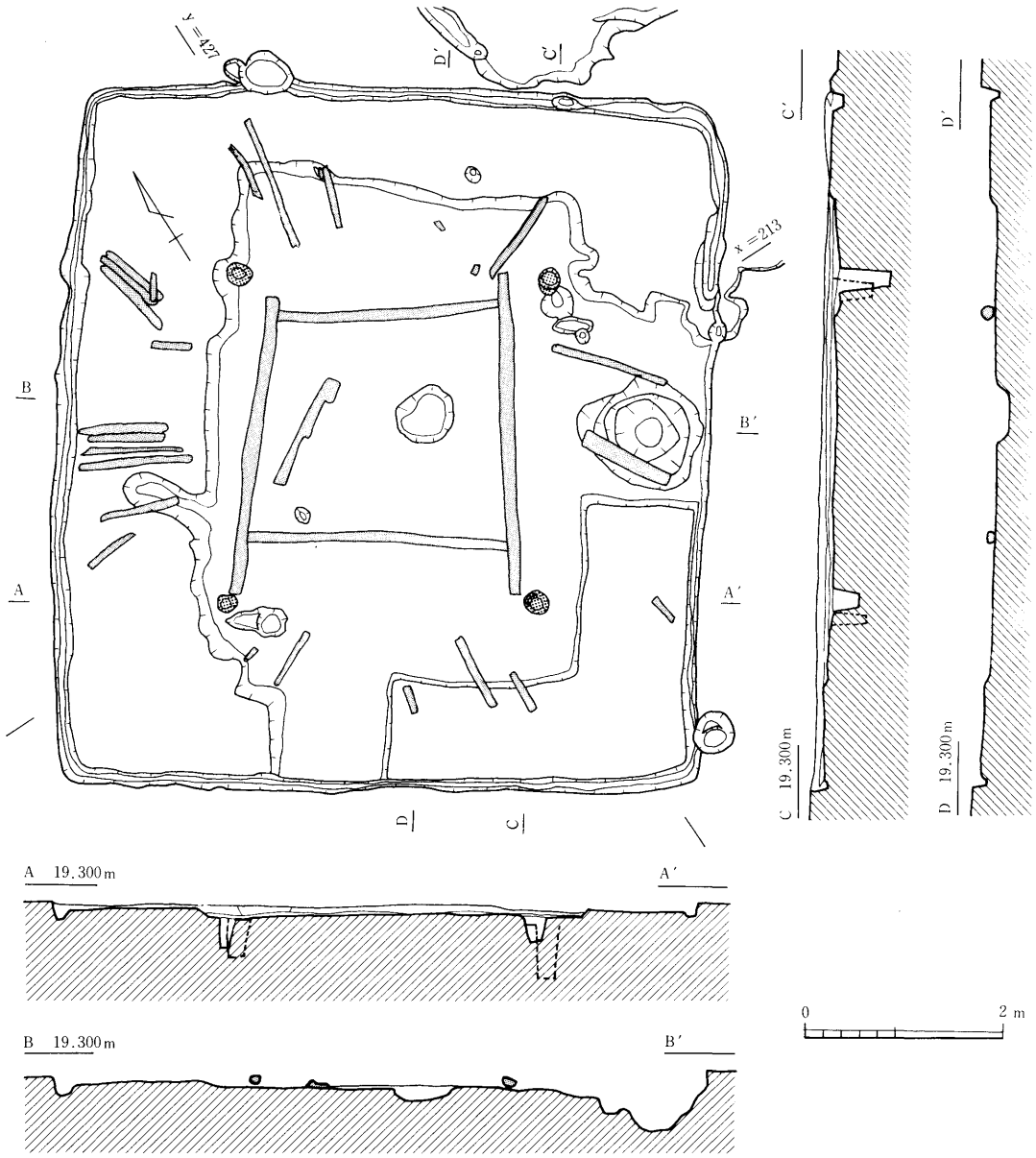


Fig. 71　第13号竪穴住居跡実測図

すぎないものも存在しており、ここでは残存状態が比較的良好で、平面形態、規模、主柱配置、内部構造、附属施設などが看取できる、代表的な住居跡について列記する。

第9号竪穴住居跡（Fig. 69，PL. 43(1)）

遺跡保存地区のほぼ中央部に位置する弥生時代中期後半の住居跡。平面形態はやや楕円

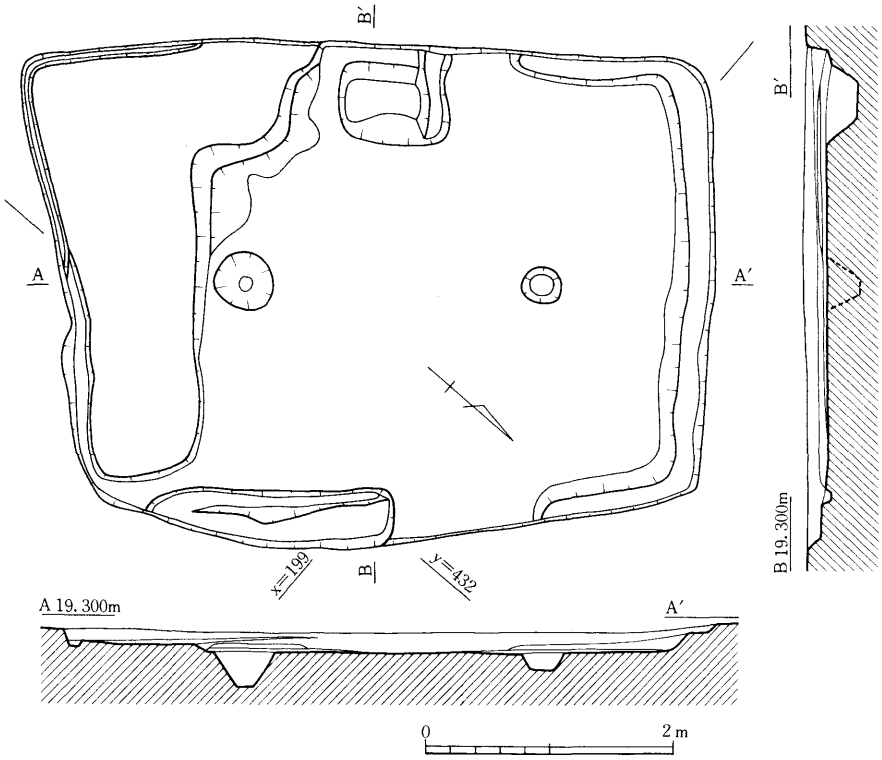


Fig. 72　第19号竪穴住居跡実測図

形状を呈する円形で、上面径約7.8～8.6m、床面積約48.4m²の規模をもつ。主柱は９本で、約2.3m～3.0m 間隔で周壁に極めて近接して配置されている。床面中央部の中央穴を挟んで２ヶ所に支柱穴が認められる。壁溝は南西部を除いて全周に巡るが、住居外への張り出しが存在する西縁の一部では途切れており、出入口が造出された可能性がある。

第13号竪穴住居跡（Fig. 71，PL. 43(2)・46(1)(2)）

遺跡保存地区の中央部よりやや南に位置する古墳時代初頭の住居跡。平面形態は方形で、東西辺約7.6m、北辺約7.1m、南辺約7.1m、床面積53.6m²の規模をもつ。主柱は４本である。屋内施設として周壁に沿ってベッド状遺構、壁溝が巡るが、ベッド状遺構は東・南両辺の中央部では途切れている。東辺ではこの空間部分に周壁に接して炉跡が営まれており、カマドが出現する前段階の施設と考えられる。また、南辺では幅約1.2m の空間地が造出されており、出入口としての機能が想定される。この住居跡は火災住居で、床面上には桁・梁と思われる径12～15cmの４本の炭化材が方形に組まれたまま焼け落ちた状態で検出された。また、桁・梁の内部の床面上には主柱の一部、また、桁・梁の周囲には棰木と推定さ

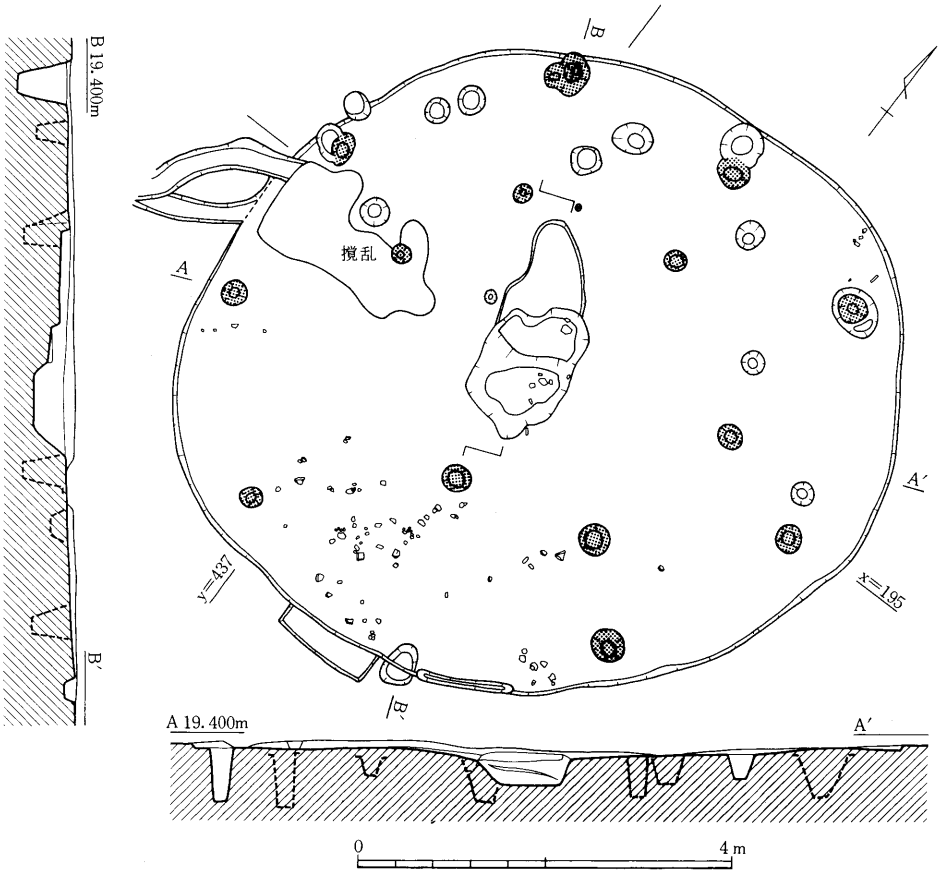


Fig. 73　第20号竪穴住居跡実測図

れる約20本の炭化材が床面中央に向かって放射状に確認されており、寄棟造屋根が想定される。

第19号竪穴住居跡（Fig. 72，PL. 44(1)）

遺跡保存地区の南東部に位置する弥生時代終末の住居跡。平面形態は長方形で、東辺約4.8m、西辺約5.5m、北辺約3.4m、南辺約3.6m、床面積約19.3m²の規模をもつ。主柱は長軸に沿って２本が配置される。第13号竪穴住居跡と同様に周壁に沿ってベッド状遺構が巡るが、南北長辺の中央部２ヶ所で途切れており、炉跡およびそれと対峙する位置に出入口と想定される空間地が存在する。

第20号竪穴住居跡（Fig. 73，PL. 44(2)・46(3)(4)）

遺跡保存地区の南東部、第19号竪穴住居跡の東に位置する弥生時代中期前半の住居跡。平面形態はやや楕円形状を呈する円形で、上面径約6.9～7.8m、床面積約43.7m²の規模をも

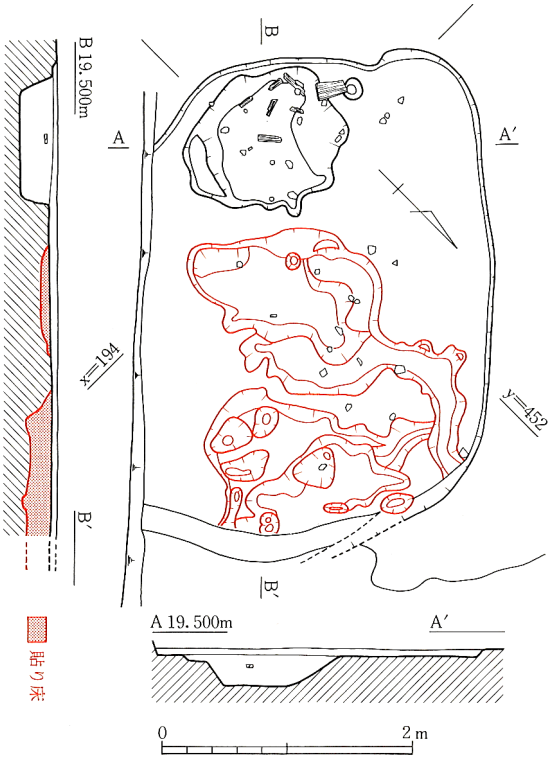


Fig. 74　第21号竪穴住居跡実測図

つ。主柱は８本で、第９号竪穴住居跡と同様に約2.0m～3.0m 間隔で周壁に極めて近接して配置されている。また、主柱の内側には同心円状に６本の補助柱が存在する。南縁部には幅約110cm、長さ約20～35cmわたって住居外への階段状の張り出し部分が認められ、出入口と考えられる。壁溝は存在しない。

第21号竪穴住居跡

（Fig. 74，PL. 45(1)）

遺跡保存地区の南東隅、第20号竪穴住居跡の東に位置する弥生時代中期後半の住居跡。東半部は遺跡保存地区外にあたるため完掘していないが、平面形態は不整形な隅丸方形状を呈するものと考えられ、長軸5.3m 以上、短軸3.7m 以上の規模をもつ。床面は貼り床され、南辺に接して柱穴１個が存在するが、床面からの深さが２cmで主柱穴とは考えられず、床面上には主柱穴は存在しない。住居の附属施設として、径約16m の規模で周囲を弧状に巡る溝（第６号溝）や溝と住居の空間地に２基の土壙（第67・69号土壙）が存在する。

（２）土壙

土壙は弥生時代中期前半から古墳時代前期の70基を検出した。大半が弥生時代のもので竪穴住居跡に付随すると考えられるが、出土遺物が少なく詳細な時期がわからず、帰属関係は明かにしがたいものが多い。

内訳は弥生時代中期前半～中頃５基、中期後半13基、後期前半５基、後期後半～終末７基で、同時期の土壙が一定範囲内に集中分布する傾向はみられない。平面形態は各時期とも定形化した形態をもたず、不整形な楕円形状を呈するものが通有で、中期後半以降は長楕円形を呈するものが出現する。規模、長軸方向は各時期ともバラエティに富み、基本的に規模の大小による時期差はあまりないが、後期にいたって大形化する傾向にある。各土壙とも機能が終了した段階で、投棄壙として再利用された数基の土壙（第３・９号土壙）

を除いて、機能を推定できる遺物は出土していない。

なお、土壙のうち調査区の南東隅で検出した第67・69号土壙は注目される。

第67号土壙（Fig. 75，PL. 47(1)）

21号竪穴住居跡の周囲を弧状に巡る溝（第６号溝）の内部に位置し、第69号土壙と並列する。平面形態は不整形な隅丸長方形もしくは楕円形状を呈し、長軸104cm、短軸61cmの規模をもつ。長軸方向は北東－南西である。

第69号土壙（Fig. 76，PL. 47(1)）

第67号土壙の東約30cmに位置し、第67号土壙と長軸方向を同じくする。平面形態は不整形な隅丸長方形もしくは楕円形状を呈し、長軸127cm、短軸61cmの規模をもつ。検出地点、時期、配列状況、規模などから、第67号土壙と２基一対で第21号竪穴住居跡に付設する土壙と考えられる。

（３）溝

溝は14条検出した。残存状態が極めて悪く、出土遺物がないものが多いが、時期の明かな溝の内訳は弥生時代中期後半５条、後期終末１条、古墳時代初頭２条で、竪穴住居跡や土壙の存在する弥生時代中期前半の溝はない。中期の段階では北－南および北西－南東に流路をもつものが多いが、後期になると東－西に走行する溝も掘削されるようになる。遺跡保

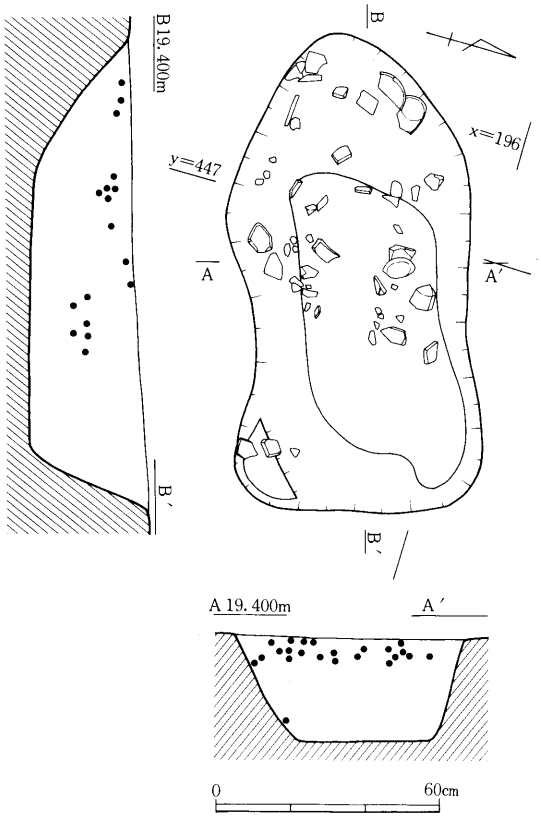


Fig. 75　第67号土壙実測図

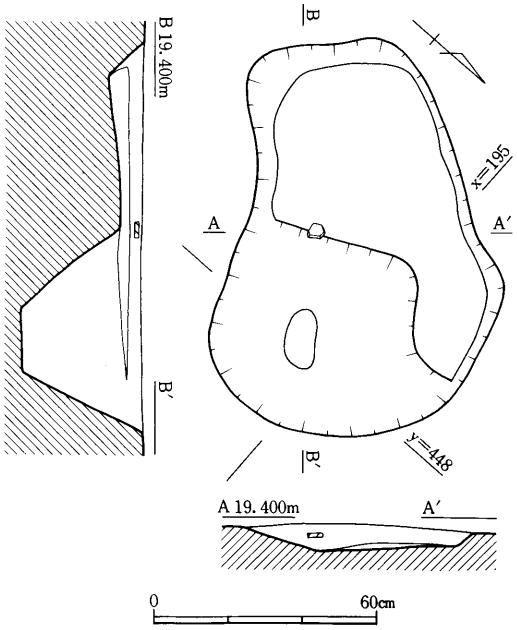


Fig. 76　第69号土壙実測図

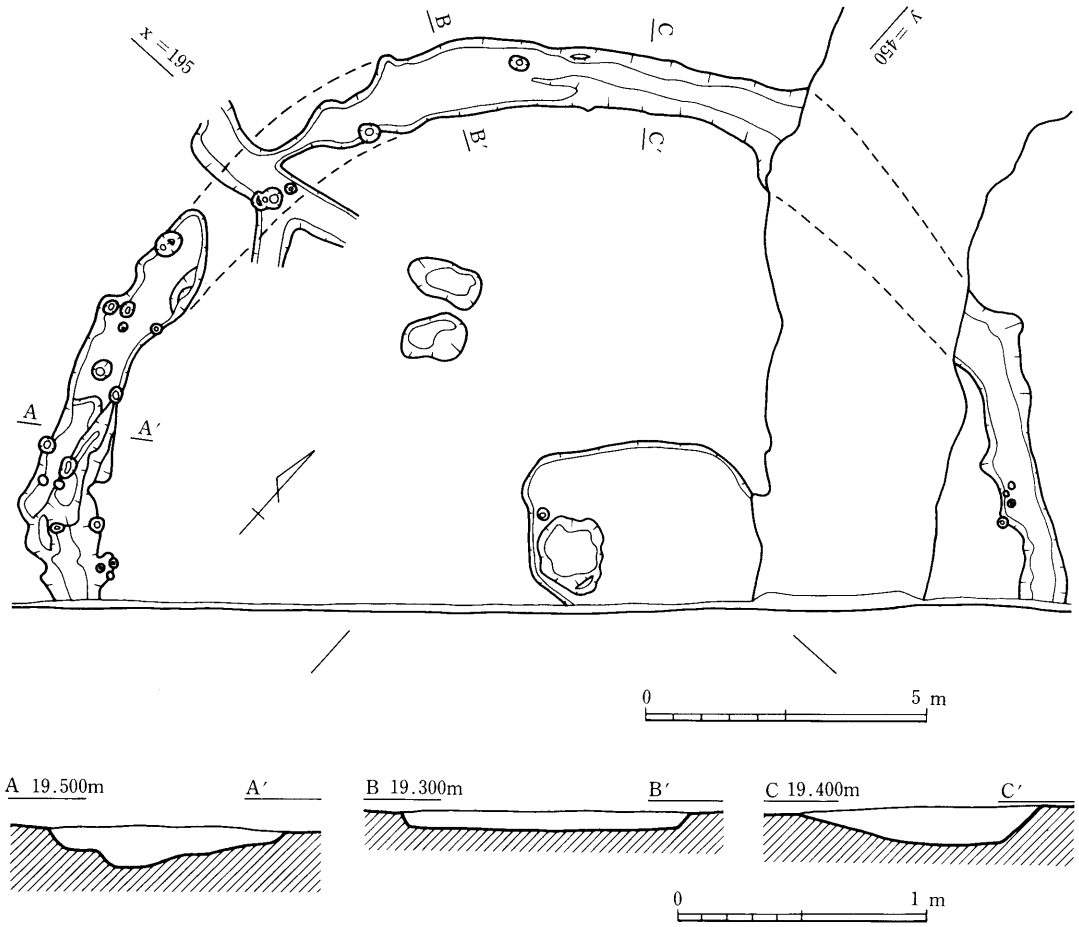


Fig. 77　第6号溝実測図

存地区の東縁を走行する、古墳時代後期から奈良時代の河川跡から取水したと考えられる溝は検出していない。

溝のうち、遺跡保存地区の南東隅で検出した第6号溝は特筆される。

第6号溝（Fig. 77, PL. 45(2)）

弥生時代中期後半の溝で、東への延長部分は調査区外にあたるため完掘していないが、内径約16～17m、外径約18m、上面幅約100～120cmの規模をもち、21号竪穴住居跡の周囲を弧状に巡っている。住居と溝の内縁との距離は、西辺から約7.6m、北辺から約5.9m、東辺から約4.6mで、住居は円形に区画された空間の中央部からやや西寄りに位置する。弥生時代の集落における同時併存の住居間には、最低20m前後の距離が必要であると想定されており[4]、住居と溝との空間地に同時期の他の住居の併存は考えられない。また、この空間地

には住居に付設すると考えられる２基の土壙が並列して存在しており、この溝で区画された約250m²のエリアが、遺跡保存地区でみられる弥生時代中期後半の集落における一軒あたりの住居の占有面積と考えられる。

（４）河川跡（PL. 47(2)）

遺跡保存地区の東縁を南東から北西に走行する。古墳時代後期から奈良時代にかけて機能した河川跡で、南半部では２条に分流するが、中央部付近では１本の河川となる。検出長は約90m で、上面幅は平均約２～３ m、南東部では最大約10 m の規模をもつ。埋積土は上層が砂質土および粘質土であるが、底面付近では径３～４cm前後の河床底礫が厚さ約40～50cmにわたって堆積しており、古墳時代後期のある時期に小規模な洪水が起こったことを示唆している。同時期の遺構は、遺跡保存地区およびその周辺の地域でも検出されておらず、河川跡をめぐる水利関係の追求は今後の残された課題である。

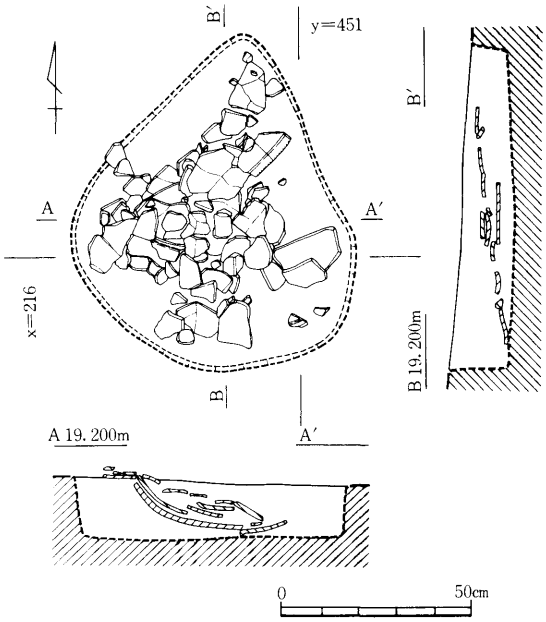


Fig. 78　性格不明の遺物出土状況実測図

（５）土器溜り（PL. 47(3)）

遺跡保存地区の南東隅に位置し、河川跡のトレンチで検出した。第６号溝に近接して存在し、弥生時代中期後半の遺物が比較的多量に出土した。規模は未確認であるが、底面には不整形な落ち込みが連続する。祭祀に使用されたと考えられる遺物は含まれておらず、窪地状の自然地形に周辺から遺物が流入したものと思われる。

（６）その他の遺構（Fig. 78，PL. 47(3)）

遺跡保存地区の中央部からやや東で検出した、弥生時代前期末の甕一個体分が集積した掘り込みがある。他の遺構と検出面は同じであるが、それに伴う遺構の掘り方が見あたらず、性格がよくわからない。甕の出土範囲は東西約65cm、南北約80cm、検出面から18cm下位までに集中分布する。出土した甕は口径40.3cm、器高43.3cmの大形のもので、如意形に短く外反する口縁部の下端にヘラによる刻目を施し、頸部に断面三角形の貼付突帯が１条巡る。内外面とも刷毛目仕上げされる。

弥生時代前期に遡る遺構は遺跡保存地区では検出していないが、野球場の南東縁付近では当該期の竪穴住居跡や遺物包含層が検出されており、前期の集落が野球場から遺跡保存地区にかけての一帯に存在していることが明かとなった。

3　遺物

出土遺物のうち、注目しておきたいものが若干ある。

まず、弥生時代中期後半の第９号竪穴住居跡の埋積土から出土したナイフ形石器があげられる。原位置から遊離した資料であるが、対向する打面をもつ石核から剝離された縦長剝片を素材として作出された一側縁加工のナイフ形石器である。メノウ製で、先端部を若干欠損するが、現存長4.2cm、最大幅1.9cm、最大厚0.7cm、重量6.2ｇである。山口盆地内では旧石器の出土例は極めて少なく、また、共伴する石器もないため詳しい時期はわからないが、当資料が比較的大形の部類に属するナイフ形石器であることから、時期的にやや遡る要素をもつ。弥生時代以降の遺構の検出面を形成する黄褐色粘質土が、縄文時代晩期中頃から後半の遺物包含層であることは、すでに教養部複合棟敷地[5]や教育学部附属教育実践研究指導センター敷地[6]で確認されており、遺跡保存地区でも縄文土器が遺構の検出面に貼り付いた状態で出土している。出土したナイフ形石器は、出土状況から住居掘削時に旧石器時代の遺物包含層から遊離した可能性があり、黄褐色粘質土が分層され、旧石器および縄文時代の二時期の遺物包含層を構成する堆積層であることが想定される。

次に、下城式系統の甕があげられる。典型的な下城式の甕ではないが、第20号竪穴住居跡や第69号土壙から出土した。第20号竪穴住居跡からは、口縁端部を上下両方あるいは下方にややつまみ出し、狭い口縁端部外面にヘラによる鋸歯文を刻む壺や口縁部の未発達な鋤先状口縁をもつ須玖Ⅰ式でも古い要素をもつ壺が伴出している。前者は、中期後半に周防部に通有な口縁部が下垂する壺の祖形で、中期前半でも古い時期のものである。この段階で上方への突出度の小さい跳ね上げ口縁をもつ甕も出現している。下城式の甕は、吉田構内の南西約2.8kmに所在する山口市西遺跡[7]、および内陸部の阿武郡阿東町突抜遺跡[8]で中期初頭のものが、防府市大崎遺跡[9]で中期後半のものが出土しており、周防部では中期全般を通じて断続的に東九州の文化が流入したと考えられる。

また、山陰系文化の伝播もみられる。第３号土壙からは短くゆるやかに外反する口縁部をもち、肥厚させた端部外面にヘラによる凹線を刻む弥生時代後期前半の甕や第13・19号竪穴住居跡などからはいわゆる複合口縁をもつ弥生時代終末の山陰系の甕が出土している。前者は遺跡保存地区の北西に隣接する教育学部校舎敷地でも同タイプの甕が出土しており[10]、

後期の段階では確実に、複合口縁をもつ壺に代表される防長独自の文化とともに西部瀬戸内系の文化と山陰系の文化の土器分布圏が形成されていたことを示唆している。

4　集落構造

ここでは、吉田構内を含めた弥生時代から古墳時代にかけての県内の竪穴住居跡について、平面形態・床面積・主柱数・屋内施設などの構造的属性の変遷過程を通観する。

（1）弥生時代

遺跡保存地区では弥生時代中期前半から後期終末の竪穴住居跡16棟を検出した。内訳は中期前半～中頃3棟、後半5棟、後期後半1棟、終末3棟のほか中期に属すると考えられるもの4棟である。

遺跡保存地区では前期に遡る竪穴住居跡は未検出である。県内では豊浦郡菊川町坂ノ上遺跡[11]で平面形態が隅丸方形の前期末の住居が検出されている。前期末～中期初頭の西遺跡[12]突抜遺跡[13]、および前期後半～末の豊浦郡菊川町上原遺跡[14]ではこの時期の住居すべてが円形で、中期後半にいたるまで方形の住居がみられないことから、前期末が方形から円形への平面形態変化の第一の画期として位置づけられる。

平面形態は中期中頃まではすべて円形であるが、中期後半になると円形4棟に加え、遺跡保存地区第21号竪穴住居跡のように隅丸方形状を呈するものも出現する。吉田構内教育学部校舎敷地で検出された第1号竪穴住居跡[15]や山口盆地内の山口市朝田墳墓群第II地区[16]、同大内氏築山跡[17]などの県内のこの時期の竪穴住居跡は円形が一般的である。しかし、大崎遺跡[18]、熊毛郡熊毛町岡山遺跡[19]、宇部市北迫遺跡[20]では隅丸方形の住居が出現しており、中期後半が円形から方形への平面形態変化の第二の画期として捉えることができる。しかし、この段階では防府市井上山遺跡[21]にみられるように方形住居の出現率は極めて低い。

後期前半の住居跡は遺跡保存地区内には存在しないが、後期後半から終末には方形もしくは長方形3棟、円形1棟と円形系統と方形系統の出現率が逆転し、円形のものもわずかながら残存する。このような円形から方形への変化は山口盆地内の朝田墳墓群第II地区、山口市堂道遺跡[22]でうかがえるような平面形態変化の流れに連動している。なお、後期後半には突抜遺跡DW15[23]、防府市右田一丁田遺跡の第3・6・20号住居跡[24]のように一辺が胴張りになる隅丸方形の住居や、突抜遺跡DW11[25]、下松市宮原遺跡の第1号住居跡[26]のように上面が円形で床面を方形に掘り下げる、円形から方形への過渡的な形態をもつものも存在する。このような折衷形態の住居は内陸部に顕著にみられ、比較的ルーズな形態変化をたどることができる。しかし、長門部の下関市伊倉遺跡[27]、同石原遺跡[28]では、後期後半～終末に

は先進的にすでにすべて方形へと変化しており、内陸部の様相とは対照的である。

では、このような平面形態の変化は床面積・内部施設などの変化とどのような相関関係をもつのであろうか。

床面積は中期前半～中頃には、遺跡保存地区第10号竪穴住居跡のように約10m²前後の規模をもつ住居とともに、約43m²（遺跡保存地区第20号竪穴住居跡）、50m²以上（遺跡保存地区第４号竪穴住居跡）の規模をもつ大形の住居が存在している。中期後半になっても平面形態が円形の住居の場合、住居規模には20m²前後のもの（遺跡保存地区第１号竪穴住居跡）と50m²前後の（遺跡保存地区第２・９号竪穴住居跡）の大きく大小２群の住居が存在し、大形住居が主体を占める傾向がある。しかし、中期後半までが朝田墳墓群第II地区の第５・６号竪穴住居跡[29]、大崎遺跡ＳＢ５[30]、井上山遺跡の第９号竪穴住居跡[31]などにみられるように大形化のピークと考えられる。それ以後、山口盆地内では後期終末までに大形化は収束し、床面積は方形住居で朝田墳墓群第II地区の第11号竪穴住居跡[32]、西遺跡の第16号竪穴住居跡[33]などの約10～20m²のもの、円形住居で朝田墳墓群第II地区の第10号竪穴住居跡[34]、西遺跡の第10号竪穴住居跡[35]などの約20～40m²のものに規模が規格化する。県内では、長門部の方形の平面形態をもつ石原遺跡の第３・４号竪穴住居跡[36]や円形の平面形態をもつ大津郡日置町高畑遺跡のＤＷ１・３[37]、周防部の熊毛郡平生町松尾遺跡の第１・３住居跡[38]のように、格段に大形化した住居の一群が特徴的に存在する地域を除いた普遍的な傾向である。これらの大形の住居からは高畑遺跡のＤＷ１、松尾遺跡の第１・３住居跡のように一般の集落構成員ではもちえないガラス小玉が出土しており、集落構成員の主体的な力量関係による住居規模の相違として理解できる。

平面形態と床面積の関係からは、円形住居と方形住居で同一の床面積を確保する場合、円形住居の径は方形住居の辺長よりも計算上約１割長くとる必要がある。このことは、床面積が必ずしも居住人員の容量を規定する絶対的な条件ではないことを示している。すなわち、円形住居が中央部から周壁までが等分の距離に保たれ、かつ、方形住居の辺長よりも約１割長くとられた円形住居の径が、限定された空間を効率的に使用し、収容人員の拡大をはかるための不必要なスペースを解消する手段として採用された結果と考えられる。前期後半～末にかけての方形から円形への平面形態変化の第一の画期は、稲作受容期以後、水田経営を主とした生産基盤の安定化がもたらしたゆるやかな人工増加がその要因のひとつとしてあげられないであろうか。中期後半における円形住居の大形化は、都出比呂志氏が述べるように[39]、「倭国大乱」の緊張時に戦闘に備えて集住を余儀なくされた結果、一棟ご

との収容面積の大幅な拡大を伴い、円形住居の盛行を招いたものと理解できよう。

中期後半以降の平面形態が円形から方形へと変化する第二の画期は、住居構造とりわけ上屋構造の変化がもたらしたものと考えられる。具体例をあげると、中期後半の大崎遺跡ＳＢ２[40]は平面形態が隅丸方形で、床面中央部の中央穴を挟んで対峙する小規模な２個の柱穴が検出されている。また、西遺跡でも同様な平面形態をもち、床面中央部付近に主柱穴とは考えられない小規模な２個の柱穴が存在する。これらは棟持柱を立てるため柱穴と考えられ、前代の主柱のみで上屋を支える構造から変化し、同時に屋根を高く保つ住居構造へと転換したものと理解される。

主柱は円形住居の場合、基本的には住居規模に応じた本数が配置され、床面積約40m²以下で４～６本、それ以上の規模をもつ住居では７～９本が通例である。方形住居の場合は、中期後半以降、床面積の規格化が進み、大半が２本もしくは４本が配置される。主柱の本数、配置場所は居住空間の利用形態に少なからぬ意識が反映していたと考えられ、以下では主柱に囲繞された床面空間とそれ以外の床面空間の分化のありかたについて検討する。

円形住居の場合、弥生時代全般を通じて約30m²以下の床面積をもつ住居は、主柱間に囲繞された床面積は全床面積の45％ないしはそれ以下のものが大半で、４～５本の主柱をもつ中期後半の防府市奥正権寺遺跡[41]，右田・一丁田遺跡、井上山遺跡などの竪穴住居跡において顕著にみられる。しかし、35％以上の床面積をもつ住居では、７～９本におよぶ主柱の増加とあいまってこの割合が45％を超え、後期終末の宮原遺跡の第７号住居跡[42]では79％にも達し、主柱がより周壁近くに配置されたことを示している。

方形住居の場合、後期の資料に限られるが、床面積はすべて35m²以下で、主柱間に囲繞された床面積は全床面積の20～40％が一般的である。なお、円形住居のうち、中期～後期にかけては主柱間に囲繞された床面積は、突抜遺跡ＤＷ８・19[43]などの約35m²前後のものと、西遺跡第14号竪穴住居跡[44]や宇部市北迫遺跡のＢ地区第II区第１号住居跡[45]などの約20m²前後のものとがあり、方形住居のうちの大形・小形の各グループの床面積に対応している。したがって、大形の円形住居の主柱間に囲繞された床面積は、方形住居の全床面積に対応していることになり、円形住居においては方形住居では確保できない空間利用の方法が採用されている。

屋内施設のうち、ベッド状遺構は北迫遺跡のＢ地区第II区第２号住居跡[46]では中期後半にすでに出現しているが、ベッド状遺構が先進的に造出される北部九州でも中期後半以降であり、極めて異例である。県内では石原遺跡のＢ地区第１号住居跡[47]、遺跡保存地区の第13・

19号竪穴住居跡、玖珂郡玖珂町清水遺跡の第２・５号住居跡[48]、熊毛郡熊毛町追迫遺跡の第22号竪穴住居跡[49]などにみられるように、平面形態が方形へと変化する後期後半～終末にかけて一般化する屋内施設である。

また、竪穴住居の出入口の造出方法は資料数が少ないため、時期的な特徴、変遷過程は抽出できないが、出入口としての施設を積極的に作り出すものと他の屋内施設と配置関係によって出入口を設けるものとの大きく２手法に区分されると考えられる。前者には、中期前半の遺跡保存地区の第20号竪穴住居跡、中期後半の同教育学部校舎敷地の第１号竪穴住居跡、吉敷郡阿知須町青畑遺跡[50]、後期前半の西遺跡第16号住居跡にみられるように、周壁の一部に住居外への階段状の張り出しを設ける例と、中期前半の朝田墳墓群第II地区の第５号竪穴住居跡、後期終末の突抜遺跡ＤＷ15のように周壁の一部に住居内に張り出す平坦面を有する例の２タイプがある。後者には、中期後半の遺跡保存地区第９号竪穴住居跡、後期終末の同19号竪穴住居跡、豊浦郡菊川町下七見遺跡の第２地区ＳＢ１[51]、清水遺跡第６号住居跡[52]のように、全周に巡る壁溝を出入口を設ける位置で一部分途切れさせ、その部分の床面には主柱を配置しない場合がある。その他の場合は、炉の位置、風向、住居の立地、集落内での位置関係などによって出入口の位置が決定されたと考えられる。

（２）古墳時代

遺跡保存地区では古墳時代初頭の第12・13号竪穴住居跡の２基があり、また、吉田構内ではキャンパスの中央部に位置する、第二学生食堂敷地からは同時期の５基の住居跡の検出例[53]がある。平面形態はすべて方形で、床面積は約50m²の規模をもつ遺跡保存地区第13号竪穴住居跡を除いて約10～30m²の範囲内におさまる。主柱は２本のものと４本のものがある。４世紀代の住居跡は、平面形態方形の下関市秋根遺跡ＬＳ004[54]、山口市下東遺跡ＫＰＤ－１[55]など比較的少なく、いまだ資料不足である。平面形態は５世紀以降、県内の竪穴住居跡はすべて方形、隅丸方形、長方形、隅丸長方形の方形系統の住居で占められ、４世紀代、遅くとも５世紀には円形から方形への画一的な平面形態変化の画期が認められる。では、方形系統４種の住居は古墳時代を通じてどのような出現、占有率を占めているのであろうか。県内の101の竪穴住居跡を分析すると、方形住居は弥生時代終末～３世紀代では、全住居の約44％、５世紀代で約45％と方形系統の住居の半数に満たず、出現率はほぼ同じである。しかし、６世紀代では全住居の約57％、７世紀代で約67％と全住居の約７割を占めるようになる。また、隅丸方形住居は弥生時代終末～３世紀代では、全住居の約34％であるが、５世紀代には出現頻度が急増し、55％を占めるようになるが、その後、６世紀代では

全住居の約36％、７世紀代で約33％と安定した採用率を示すようになるとともに棟数が減少する。すなわち、弥生時代終末～３世紀には方形住居が隅丸方形住居よりも棟数的に優位を占めていたが、５世紀代には両者の出現頻度が逆転し、それとともに次第に、長方形、隅丸長方形の住居が減少する。しかし、６世紀代を境に再び方形住居が集落内での棟数を増し、７世紀代では全住居の約７割を占めるようになり、隅丸方形住居を圧倒的に凌駕する。上記のように、古墳時代の住居の平面形態は方形系統のうちでの方形への画一化として理解でき、その時期は５～６世紀代に求めることができる。

床面積は、弥生時代終末～３世紀代では方形系統の住居は、大きく約10～30㎡、約35～40㎡、50～60㎡の３群に区分されるが、約10～30㎡の規模のものが多い。伊倉遺跡、秋根遺跡、石原遺跡などの住居跡に顕著にみられ、この傾向は５世紀代まで存続する。しかし、６世紀代ではいっそう顕著となり、遺跡保存地区第13号竪穴住居跡や５世紀代の右田・一丁田遺跡の第２・19号住居跡のような35㎡をこえる床面積をもつ住居は姿を消し、床面積はすべて約10～30㎡の規模に縮小してしまう。この時期に縮小化した住居はさらに床面積が約10～15㎡のものと約20～30㎡のものの二群に分化している。特に、７世紀代では美祢郡秋芳町中村遺跡[56]、山口市毛割遺跡[57]の住居のように、約10～15㎡の極めて画一化した床面積をもつ一群が出現する。このように古墳時代における床面積変化の画期は、住居規模の小形化・画一化として捉えられ、その時期は平面形態が隅丸方形から方形へと変化し、画一化する６世紀代にあたる。

主柱数は方形系統の住居が定着した弥生時代終末～３世紀代から６世紀までは基本的に、０、２、４本の三種に限定される。しかし、５世紀代までは４本柱と他の主柱数をもつ住居がほぼ同数に近いが、６世紀代では２本柱が激減し、４本柱を配置する住居が他の主柱数をもつ住居に比べて約２倍近い出現率を示している。主柱数においても６世紀代がひとつの画期にあたる。

主柱間に囲繞された床面積の全床面積に占める割合変化の画期は５、７世紀代に求められる。弥生時代終末～４世紀代では17～41％の範囲内に分散しているが、５世紀代には遺跡保存地区の第13号竪穴住居跡、西遺跡第４・12号住居跡[58]、下右田遺跡ＤＷ－２[59]などで22～26％、６世紀代では秋根遺跡第３～６号住居跡[60]、中村遺跡ＤＷ－20[61]、下東ＫＰＤ－７[62]などで21～31％で、床面上で一定の割合の空間を占めるようになる。５世紀代では前代にみられた分散傾向が収束し、ほぼ一定の占有率をもつようになり、住居内の空間分割意識が固定化したものと考えられる。この傾向は６世紀代まで続くが、７世紀代では秋根遺跡

ＬＳ014[63]、中村遺跡ＤＷ－17・23・30[64]、毛割遺跡第８～10号住居跡[65]などのように17～42％のバラエティのある占有率をもつ住居が出現する。住居規模の拡大と主柱間に囲繞された床面積の全床面積に占める割合の拡大は必ずしも比例しておらず、各住居単位すなわち集落の構成単位で独自に主柱間に囲繞された床面積の全床面積の選択行為が行われたものと考えられる。

以上のように、古墳時代における住居の平面形態・床面積・主柱数の変化は画一化・規格化現象として把握でき、その画期の時期は６世紀代に認められることが明かとなった。こうした変化をもたらした社会的要因のひとつには、時期を同じくして県内各地で造営された群集墳の盛行の背後にある被葬者の質的変化があげられよう。群集墳は規模・構造とも多様で家族墓的色彩が強く、造営母体は住居数棟でひとつのまとまりをもつ「世帯共同体」と理解できる。福岡県行橋市竹並遺跡では、埋葬された人骨数、年齢、性別などから横穴墓の被葬者の性格は５世紀段階では特定の人に限定されていたが、６世紀段階になると「一横穴墓への埋葬は傍系を含む夫婦単位を基調とした小家族で、それがいくつか集まった単位が家父長制的な世帯共同体を作っている」とされている。また、それ以降は、「一横穴墓への埋葬は直系の小家族のみとなり、細分化されてくる」いう[66]。６世紀代に認められた竪穴住居の各属性の画一化・規格化は、このような細分化された小家族に対応するもので、自立化しつつある家長を紐帯とした小家族単位の新しい世帯共同体原理の反映ではないであろうか。

５　おわりに

小稿では、昭和57年度以降、４次にわたって実施した遺跡保存地区の発掘調査の成果を整理し、山口盆地内および県内の弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡の構造的な変遷を概観した。なお、竪穴住居跡の具体的な構造上の属性数値については先の年報で詳述しており[67]、参照されたい。

遺跡保存地区は調査後埋め戻され、公開・活用は全くなされていないのが現状である。遺跡保存地区のもつ教育・研究資料としての固有な学術的価値を抽出し、歴史を追体験できる新しい付加価値をもった遺跡の公園化など、大学独自の積極的な利用方法を模索する時期にきているのではあるまいか。

最後に、調査にあたって御理解、御尽力を惜しまれなかった関係各位に衷心より御礼を申し上げる所存である。

注

［注］

1）山口大学吉田遺跡調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）　。

2）山口大学埋蔵文化財資料館「教育学部構内H－16区の発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』、1982年）。

3）a 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和57年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』、1986年）。

b 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1987年）。

c 山口大学埋蔵文化財資料館「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』、1990年）。

4）藤田憲司「単位集団の居住領域―集落研究の基礎作業として―」（『考古学研究』、第31巻第2号、考古学研究会、1984年）。

5）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。

6）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内教育学部附属教育実践研究指導センター新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』、1988年）。

7）山口市教育委員会『西遺跡』（1986年）。

8）山口県教育委員会『よみがえる弥生のムラ－突抜・馬場遺跡』（1985年）。

9）山口県教育委員会「大崎遺跡」（『奥正権寺遺跡Ⅱ・大崎岡古墳群・大崎遺跡』（1984年）。

10）前掲注2）。

11）山口県教育委員会『坂ノ上遺跡』（1974年）。

12）前掲注7）。

13）前掲注8）。

14）菊川町教育委員会『上原遺跡』（1976年）。

15）前掲注2）。

16）山口県教育委員会編『朝田墳墓群Ⅵ』（1983年）。

17）山口市教育委員会『大内氏築山跡Ⅳ』（1990年）。

18）前掲注9）。

19）山口県教育委員会編『岡山遺跡』（1987年）。

20）小野忠熙「北迫遺跡」（『宇部の遺跡』、宇部市教育委員会、1968年）。

21）井上山遺跡発掘調査団『井上山』（1979年）。

22）山口県教育委員会「堂道遺跡」（『堂道・五反地遺跡』、1973年）。

23）前掲注8）。

24）山口県教育委員会編『右田・一丁田遺跡』（1973年）。

25）前掲注8）。

26）山口県教育委員会「宮原遺跡」（『宮原遺跡・上広石遺跡』、1973年）。

27）山口県教育委員会『伊倉遺跡』（1973年）。

28）山口県教育委員会「石原遺跡」（『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、1973年）。

29）前掲注16）。

30）前掲注9）。

31）前掲注21)。
32）前掲注16)。
33）前掲注7)。
34）前掲注16)。
35）前掲注7)。
36）前掲注28)。
37）山口県教育委員会・(財）山口県教育財団『たかはた』(1986年)。
38）山口大学人文学部考古学研究室「平生町松尾遺跡の発掘調査」(『西部瀬戸内における弥生文化の研究』、1984年)。
39）都出比呂志「弥生時代の東と西」『日本語・日本文化研究論集』(大阪大学文学部、1984年)。
40）前掲注9)。
41）山口県教育委員会編『奥正権寺遺跡Ⅰ』(1984年)。
42）前掲注26)。
43）前掲注8)。
44）前掲注7)。
45）前掲注20)。
46）前掲注20)。
47）前掲注28)。
48）山口県教育委員会編『清水遺跡』(1989年)。
49）山口県教育委員会編『追迫遺跡』(1988年)。
50）阿知須町教育委員会『青畑遺跡調査概報』(1983年)。
51）菊川町教育委員会『下七見遺跡Ⅰ』(1989年)。
52）前掲注48)。
53）前掲注1)。
54）下関市教育委員会『秋根遺跡』(1977年)。
55）山口県教育委員会編「下東遺跡」(『下東遺跡・荻峠遺跡』、1975年)。
56）山口県教育委員会・(財）山口県教育財団『中村遺跡』(1987年)。
57）山口市教育委員会『毛割遺跡』(1983年)。
58）前掲注7)。
59）ａ山口県教育委員会編『下右田遺跡第１・２次調査概報』(1978年)。
　　ｂ山口県教育委員会編『下右田遺跡第３次調査概報』(1979年)。
60）山口県教育委員会「秋根遺跡」(『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』、1973年)。
61）前掲注56)。
62）前掲注55)。
63）前掲注54)。
64）前掲注56)。
65）前掲注57)。
66）竹並遺跡調査会編『竹並遺跡』(寧楽社、1979年)。
67）前掲注３）ａ、３）ｂ。

付篇Ⅲ

山口県内のミニチュア土器と模造品

古　賀　真木子

1　はじめに

『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』で報告した本部２号館の調査では、包含層からではあるが、ミニチュア土器、手捏土器、土製模造品、滑石製模造品を出土した。これをもとに祭祀遺物と言われる他の生活必需品や道具を模倣して作られた土製品や石製品を、時代を限定せず取り上げ、山口県内の遺跡で検討した。勾玉・臼玉・管玉などの玉類、紡錘車、分銅形土製品は、材質からみればここで問題とする遺物と同じく、祭祀的要素が大きいとされるが、それ自体独自の形をもち実用非実用の境目がはっきりしないので今回は除外した。

2　ミニチュア土器

土器は実用的な土器や埴輪などと土製模造品とに分類できるが、集合関係で示すと重なり合い、その重なりに当たる部分が、ミニチュア土器である。ミニチュア土器は、大きさに着眼した呼称であり、手捏土器は成形手法に基づいた呼称である。そのため手捏土器は、必ずしも小型の土器に限られず、一般の土器にも土製模造品にも見られる。その結果、ミニチュアの土器は、ミニチュアの手捏土器と、ミニチュアの器面調整（ハケ、ミガキなど）を施した土器の２

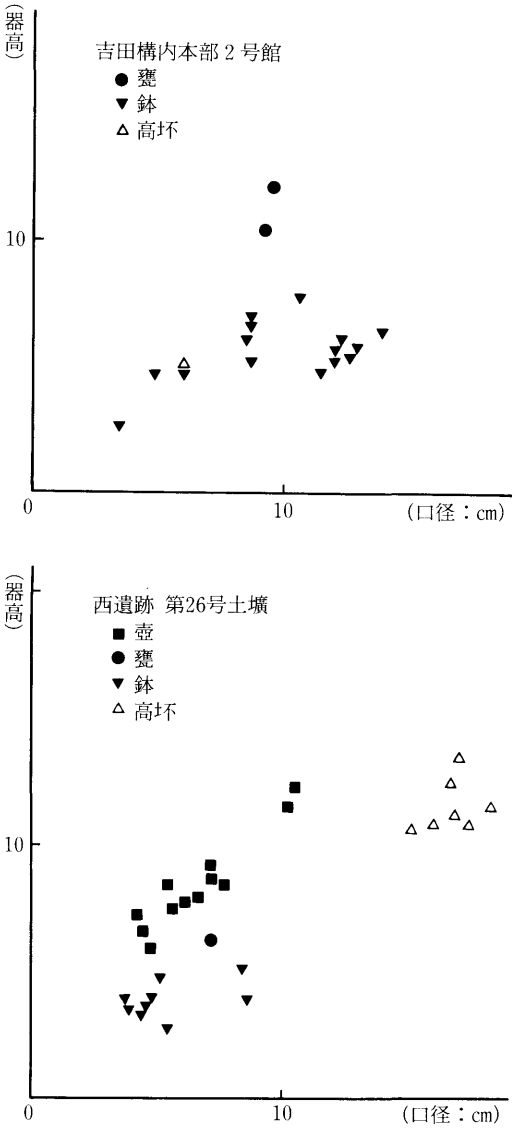


Fig. 79　吉田構内本部２号館・西遺跡第26号土壙出土土器の法量分布

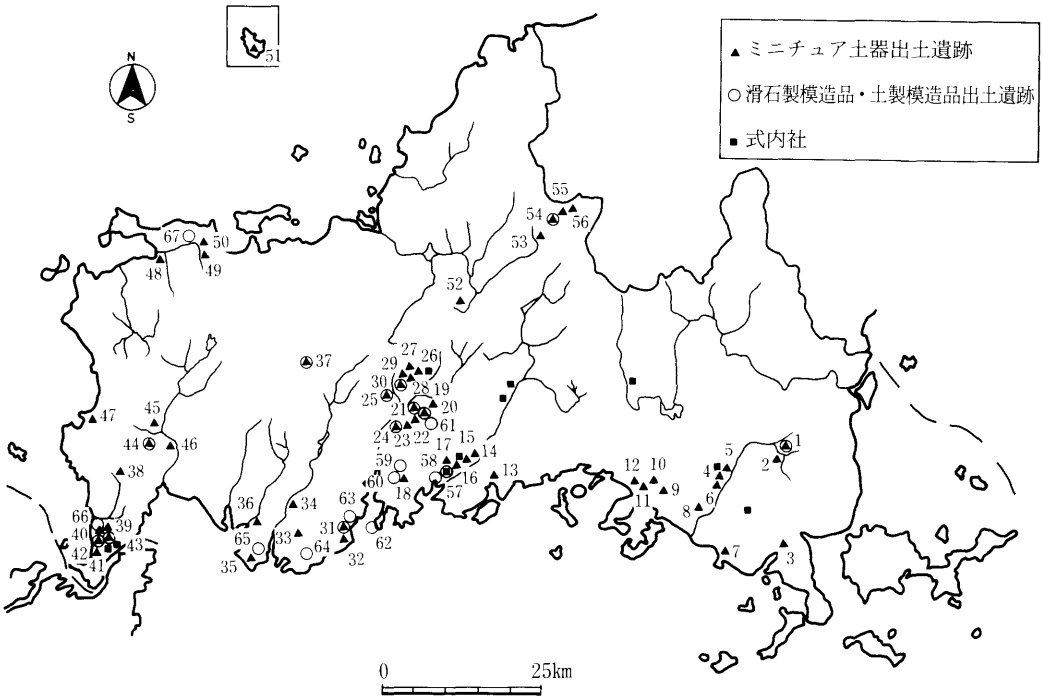


Fig. 80　ミニチュア土器・模造品出土遺跡分布図

種類があり、土器は2種類のミニチュア土器と、普通サイズの手捏土器、そしてごく普通の土器の4種類に分けられる。

まず、吉田遺跡（本部2号館）と、吉田遺跡から約3km離れた山口市西遺跡の5世紀中葉の第26号土壙の出土遺物で、法量のわかる全ての土器の口径と器高の関係を求めた。その結果、口径・器高とも9cm以下の部分に点の集まりが見られ、これをミニチュア土器と考えた。遺跡を限定したので、データが十分でなく、幅をもたせ口径または器高が10cm前後までのものを取り出した。底径は、平底、丸底、尖り底があり考慮していない。

ミニチュア土器の鉢は、大きさにより区分すると北九州市の長野A遺跡の分類と基本的に同じであり[1]、特小が口径2.0～3.5cm、器高2.0～4.0cm、小が口径3.0～6.0cm、器高2.0～5.0cm、中が口径5.0～8.0cm、器高3.0～5.5cm、大が口径7.0～10.0cm、器高4.5～8.0cmの範疇に入りさらに、数は少ないが口径が中と同じで、器高が小と同じ1グループが考えられる。大を除く口径8cm以下、器高5cm以下のものは手捏土器が多数を占める。

壺や甕は、それぞれ法量は2系統のグループに分かれる。甕は、口径と器高のほぼ等しい大・中・小と口径に対する器高がほぼ0.8倍の偏平大・偏平中タイプの5つに分けられ

る。偏平タイプは、体部が内弯して立ち上がり短い口縁が外傾する形で、報告書では、甕、鉢、坩などとそれぞれ記載されているが、すべて甕として取り扱った。小は、口径5.0～6.5cm、器高5.0～7.0cm、中が口径6.5～9.0cm、器高6.0～8.0cm、大が口径8.0～10.5cm、器高9.0～11.0cm、偏平中サイズは口径6.5～8.0cm、器高4.0～6.0cm、偏平大サイズは口径9.5～11.0cm、器高5.5～8.0cmである。壺は、甕と同じく口径と器高のほぼ同率のものと、口径に対する器高が1.4倍の背の高いものとの2種類がそれぞれ大と中に分けられる。背の高い中サイズは、口径3.5～5.0cm、器高5.5～7.5cm、背の高い大サイズは、口径5.0～7.0cm、器高9.5～11.0cm、平たい中サイズは、口径5.5～7.0cm、器高5.5～7.5cm、平たい大サイズは、口径7.0～10.0cm、器高8.0～10.0cmである。よって、ミニチュアの土器を器種と法量によって区分すると、鉢4種類（特小・小・中・大）、甕5種類（小・中・大・偏平中・偏平大）、壺4種類（高中・高大・平中・平大）の計13種類に分けられる。しかし、時期、地域差は見られない。

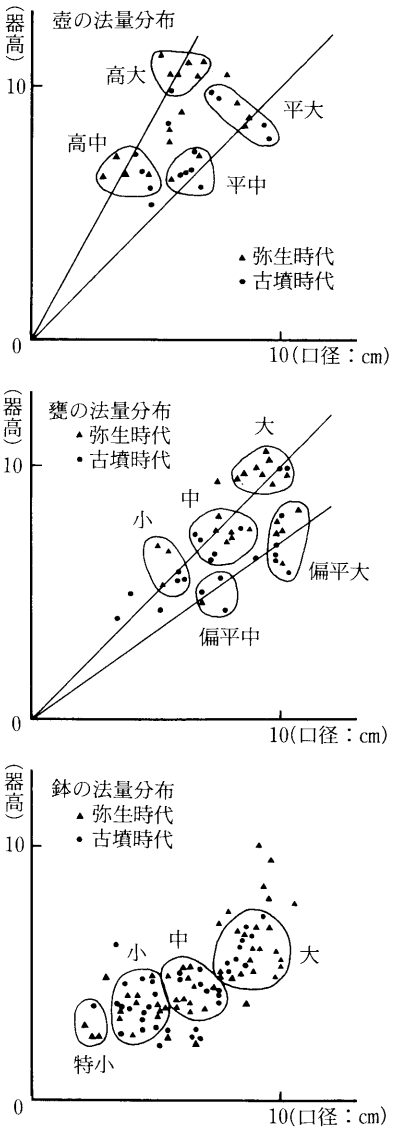
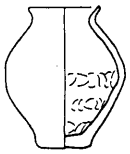
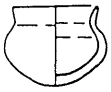
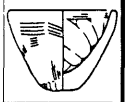


Fig. 81　壺・甕・鉢の法量分布と分類

ミニチュア土器は、縄文時代後晩期に北部九州に出現する[2)]が、山口県内では、弥生時代前期に現れる。埋葬遺跡からの出土は3例にすぎず、他は集落及び包含層・散布地からの出土である。時期別の器形の特徴は、弥生時代前期には下関市綾羅木郷遺跡の貯蔵用竪穴で鉢の大と特小、壺の高大タイプが見られる。この時期のものは調整が丁寧で、ハケ、ナデ、ヘラミガキが施されるものが多い。住居跡では弥生時代中期に初めて鉢がでる。弥生時代終末から古墳時代前期にかけては、ミニチュア土器の器種が増える。1遺構には2種類を越える器形はみられず、鉢＋壺の組合せが多く、1遺跡でとらえると壺・甕・鉢が3点セットで見られる。古墳時代後期には全遺構を通して甕も見られるが、鉢が主流となる。1遺構あたりの出土数は数個で、鉢、甕のいずれかの単一器種に限られ、土製模造品もあ

	壺				鉢			
	高　中	高　大	平　中	平　大	特　小	小	中	大
								
特徴	口径3.5～5.0 器高5.5～7.5	口径5.0～7.0cm 器高9.5～11.0cm ナデ、ミガキ多い	口径5.5～7.0cm 器高5.5～7.5cm	口径7.0～10.0 器高8.0～10.0	口径2.0～3.5 器高2.0～4.0 弥生時代前期～	口径3.0～6.0 器高2.0～5.0 手捏が多い	口径5.0～8.0 器高3.0～5.0 竪穴住居に多い	口径7.0～10.0 器高4.5～8.0 ナデ、ハケ、ミガキ多
出土遺構	追迫遺跡 22号竪穴住居	綾羅木郷遺跡 貯蔵用竪穴5318	松尾遺跡 1号竪穴住居	綾羅木郷遺跡 古墳時代包含層	下七見遺跡 14区4号土壙	林崎遺跡	吉田構内・本部2号館 第5層包含層	
収録文献	『追迫遺跡』 1988	『綾羅木郷遺跡Ⅰ』 1981	『松尾遺跡発掘調査概報』1983	『綾羅木郷遺跡Ⅰ』 1981	『下七見遺跡Ⅰ』 1989	『林崎遺跡』 1987		

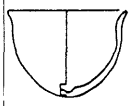
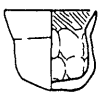
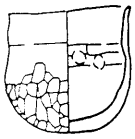
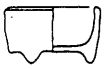
	甕					高　坏	その他	
	偏平中	偏平大	小	中	大		羽　釜	脚付小鉢
								
特徴	口径6.5～8.0 器高4.0～6.0	口径9.5～11.0cm 器高5.5～8.5cm 弥生時代後期～	口径5.0～6.5cm 器高5.0～7.0cm	口径6.5～9.0cm 器高6.0～8.0cm	口径8.0～10.5cm 器高9.0～11.0cm	弥生時代前期からあるが、数は少ない。		
出土遺構	中村遺跡 29号竪穴住居	吉田構内・ラグビー場竪穴住居	奥正権寺遺跡 4号竪穴住居	秋根遺跡 柱穴675	奥正権寺遺跡 4号竪穴住居	吉田・本部2号館2号土壙	周防国府跡28次トレンチ	今宿東遺跡13号掘立柱建物
収録文献	『中村遺跡』 1987		『奥正権寺遺跡Ⅰ』 1984	『秋根遺跡』 1977	『奥正権寺遺跡Ⅰ』 1984		『防府市文化財調査年報Ⅶ』	『今宿東遺跡』 1986

Fig. 82　ミニチュア土器の分類表（S＝1/6　吉田構内以外は報告書から転載）

る。高坏は、各時期にあるが数は少ない。奈良時代以降は、極端に少なくなるが新しい器種や器形が出現し、須恵器、瓦質土器、黒色土器の壺、脚付鉢、羽釜などがみられる。

集落内での変遷は、弥生時代後期は2～3棟に1棟が1～3個のミニチュア土器を所有し、弥生時代終末から古墳時代初頭は、溝と住居にそれぞれミニチュア土器がある。溝が数も器種も多く、溝は壺・甕・鉢の各器形の数個から10個、住居は1～2個をもつ。古墳時代前期から中期は、集落跡の中の1棟だけミニチュア土器が数個あり、4～6世紀は、ほぼ各住居が1～2個ずつ均等に所有する。これは、弥生時代のやや緩やかな階級制から古墳時代前期の権力集中期、古墳時代後期の家父長制の出現に対応すると考えられる。

以上の傾向から、山口市西遺跡の26号土壙のミニチュア土器の壺22個、鉢19個、高坏1個の計42個の出土は特異である。この土壙から勾玉が4個、近接する12号住居から滑石製模造品54個、ミニチュア土器1個出土した。この2遺構は関連があり、12号住居の貯蔵用施設として26号土壙が存在していたと考えたい。26号土壙の出土遺物は、使用状態ではな

く単なる保管状態であり、12号住居の石製模造品も使用状態でなく、製作工房でここから各住居に配られたと考えられる。ただし、この住居は遺跡の周縁部にあり、配布の指揮者はこの住居には居住せず、この住居の居住または使用者に対し指示をしていたのだろう。

ミニチュア土器の使用状況を端的に表しているのは、秋芳町中村遺跡29号住居である。5～6世紀のこの遺構では、使用を停止した住居の竈を壊し、残った支脚にミニチュア土器をかぶせている。ここでは、総計5個のミニチュア土器と甕2個埦6個が用いられ、最終的に1～2個を残して他は持ち去るものかもしれない。

3　石製模造品と製塩土器

石製模造品、土製模造品は発見例が少なく、遺構が明確なのは古墳3例、竪穴住居跡10例、土壙・柱穴5例、溝2例である。古墳に比して生活遺構の比率が高い。弥生時代と報告されている問田片川遺跡9号住居、西遺跡14号住居は埋土中で混入と考えられ、下七見遺跡は中世の遺物の可能性があり、滑石製模造品の時期は、古墳時代中期から7世紀半ばである。定型化されたものは古墳時代に終始する。

現在までに発見された滑石製模造品出土遺構の数は、剣形12、有孔円盤12、盾形7例の順であり、盾型や斧型の比率が高く、生活遺構では剣・有孔円板・臼玉のセットが一般的[3]という見解に相違する。盾形、斧形を検出する遺跡は、山口市を貫流する椹野川流域から、更に北部の徳佐盆地に分布が限られる。盾形、斧形の滑石製模造品の検出は生活からかけ離れた使用形態ではなく、地域差を生む要因があるのだろうが推論の域を出ない。

発掘調査の片寄りで分布はわかりにくいが、滑石製模造品は椹野川の両岸の山口市・秋穂町・宇部市に一番の集中域が見られ、次は、下関市の南部一帯に多くみられる。この分布には、製塩土器の出土地の分布がほぼ一致する。製塩土器は、生産地だけでなく、海岸部からやや離れた内陸部で発見されることもある。山口県内の内陸部で発見された製塩土器は、山口市毛割遺跡の調査報告でまとめられている[4]が、その後も検出例はあまり増えず、山口盆地と、奈良時代の長登銅山跡に限られる。けれども、緑釉陶器や布目瓦の出土から[5]沿岸部でも光市市延遺跡、防府市周防国衙跡、日置町堀田遺跡は官衙的要素が強く、塩の生産遺跡より消費遺跡と考えられ、内陸部で製塩土器を検出する遺跡と基本的に性格は同じと思われる。塩の生産から消費の各段階で滑石製模造品と関連することがうかがえる。

4　土製模造品

土製模造品鏡を出土した秋芳町中村遺跡は7世紀後半、菊川町下七見遺跡は弥生時代終末とされるが、この2遺跡の時期を埋めるものが今後発見されるか、2時代にわたって使

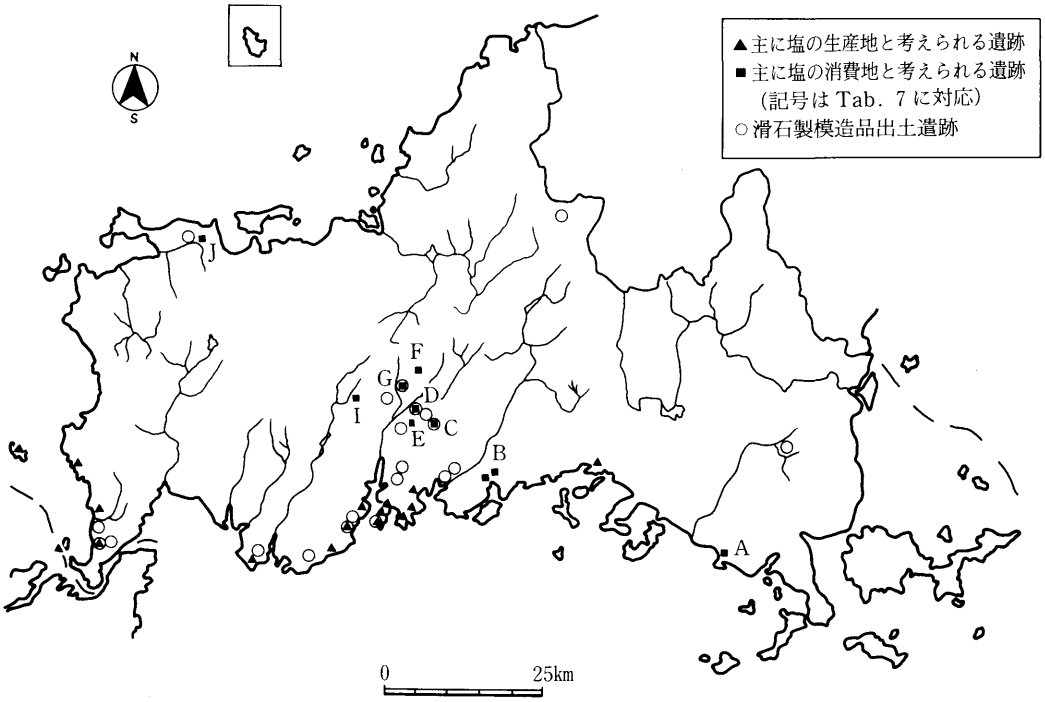


Fig. 83　製塩土器出土遺跡分布図

Tab. 7 主に塩の消費地と考えられる製塩土器出土地地名表

遺跡番号	遺跡名(所在地)	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献(発行者)
A	市延遺跡(光市市延)	表面採集	六連式製塩土器(3)		奈良時代～平安時代	光市文化センター『生産遺跡分布調査製塩』1984(山口県教育委員会)
B	周防国府跡(防府市国衙)	(東北隅)鍛冶工房跡(南)舟入り施設	六連式製塩土器(5) 六連式製塩土器(30)	須恵器	8～9世紀 9世紀初頭	防府市教育委員会『生産遺跡分布調査製塩』
C	毛割遺跡(山口市大字下小鯖字遊ヶ原)	13号竪穴住居	美濃が浜式製塩土器(2)	滑石製紡錘車・土師器・須恵器	6世紀末～7世紀前半	山口市教育委員会『毛割遺跡』1983
		14号竪穴住居	美濃が浜式製塩土器(1)	碧石製勾玉・土師器須恵器	6世紀末～7世紀前半	
D	吉田遺跡(山口市大字吉田)	M－16区第3層包含層	美濃が浜式製塩土器(1)	手捏土製円盤・弥生土器・土師器・須恵器・打製石斧	古墳時代後期	山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報II』1985
		市道神郷1号線送水管埋設立会	六連式製塩土器(1)		8～9世紀	山口市教育委員会『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』1987
		水銀灯新営	六連式製塩土器(1)		8～9世紀	山口大学埋蔵文化財資料館本報告
E	神郷大塚遺跡(山口市吉田神郷)		六連式製塩土器			山口市教育委員会1990年調査
F	白石遺跡(山口市白石3丁目)	第5層包含層	美濃が浜式製塩土器(1)		古墳時代後期	山口大学埋蔵文化財資料館1990年調査
G	下東遺跡(山口市吉敷下東)	竪穴建物跡(KBPP-1)	美濃が浜式製塩土器(1)	滑石製紡錘車・滑石塊・土師器・須恵器	古墳時代後期	山口県教育委員会『下東遺跡・荻峠遺跡』1975
		II－2層(河川氾濫による堆積層)	美濃が浜式製塩土器(6)	ミニチュア土器・紡錘車・弥生土器・土師器	弥生時代～奈良時代	

H	長登銅山跡 (美祢郡美東町長登)		六連式製塩土器		奈良時代	美東町教育委員会 1989年調査
I	堀田遺跡 (大津郡日置町堀田)	土壙・包含層	六連式製塩土器(25)	布目瓦・緑釉陶器・須恵器・土師器・鞴	奈良時代～平安時代	山口県教委。1978試掘調査『生産遺跡分布調査製塩』

用されたか今のところ答えを出せない。ただし、いずれも滑石製模造品はない。一方、土馬に系譜のつながる馬を象った滑石製品、スプーン状土製品が出土した宇部市波雁が浜遺跡は7世紀以降と考えられ、土製模造品は古墳時代後期以降を中心とすると考えられる。

5　遺跡・遺物の性格

これまで述べてきた遺物の用途は、中村遺跡29号住居のような明らかな使用状態では祭祀として良いであろう。しかし、溝の場合は使用状態か投棄か区分できない場合が多い。

西日本では、多くの式内社が古墳時代からの祭祀遺跡を核に発達したとされるが[6]、祭祀遺跡からミニチュア土器や滑石製模造品が見つかるとは言えても、その逆は言いえず用途の特定は難しい。式内社の境内地からのミニチュア土器や滑石製模造品の発見があるのは、防府市玉祖神社境内地のみである。式内社15社（実質11社）のうち、周辺にもミニチュア土器や石製模造品を出土しない所が内陸部を中心に3社にあり、将来これらの地付近での発掘調査時の成果次第では、より遺物の性格が明らかになろう。

6　おわりに

以上のことから、吉田遺跡本部2号館の出土遺物を再度考えると、吉田遺跡は集落跡と考えられる。山口市西遺跡、阿東町宮ヶ久保遺跡に次ぐ量のミニチュア土器や滑石製模造品が出土しており、通常の使用ではなく、配布の拠点を持つ遺跡であろう。1層中に遺物は含まれているが、ミニチュア土器は、圧倒的に鉢が多いことから古墳時代後期の遺物であり、一方、土製模造鏡は、下七見遺跡の時期解釈が難しいが、同一層の滑石製模造品、過去の製塩土器の出土例（Tab. 7）から7世紀後半の遺物と考えたい。滑石製模造品は、検出状況からは古墳時代後期と考えるのが妥当だが、美濃が浜遺跡の遺物の器種構成からみてやや時期が下るかもしれない。

［注］

1）（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『長野A遺跡2』（1987年）。

2）森貞次郎「新・天手抉考」（『國學院雑誌』第78巻第9号、1977年）。

3）寺沢知子「祭祀の変化と民衆」（『季刊考古学』第16号、1986年）。

4）山口市教育委員会編『毛割遺跡』（1983年）。

5）山内紀嗣「8・9世紀における内陸地域の製塩土器」（『天理大学学報』第36巻第3号、1985年）。

6）椙山林継「祭と葬の文化－石製模造品を中心として－」（『國學院大学日本文化研究所紀要』第29輯、1972年）。

Tab. 8　石製模造品・土製模造品出土地地名表

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
1	清水遺跡（玖珂郡玖珂町清水）	1号住居～2号環濠付近の包含層	滑石製模造品(3)（剣形1、未製品？2）		古墳時代	山口県教育委員会『清水遺跡』1989
		2号環濠	スプーン状土製品(1)	ミニチュア土器・紡錘車・弥生土器・石斧・砥石・鉄鏃	弥生時代後期後半～終末	
13	周防国府跡　第26次	柱穴？（小ピット）	滑石製小容器(1)		奈良時代～平安時代	防府市教育委員会　1984『防府市文化財調査年報VI』
57	玉祖神社境内遺跡（防府市大字大崎字居合）		石製模造品(2)（鏡1、盾形1）	大型石鏃	古墳時代後期～奈良時代	玉祖神社『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集　附篇　1985（国立歴史民俗博物館）
58	台ヶ原遺跡（防府市大字佐野字台ヶ原）	表面採集	滑石製模造品（鏡、盾）			『台ヶ原遺跡群』1981（山口県教育委員会）
59	糸根遺跡（山口市大字陶糸根）	包蔵地	石製模造品(3)	石斧・石鏃・弥生土器・須恵器・土師器	古墳時代後期	個人蔵『山口市の古代遺跡』1966（山口市教育委員会）
60	陶ヶ岳遺跡（山口市大字鋳銭司南陶ヶ岳）	包蔵地	石製模造品(10)	弥生土器・須恵器・土師器・石鏃	古墳時代後期	個人蔵『山口市の古代遺跡』1966（山口市教育委員会）
61	毛割遺跡（山口市大字下小鯖）	7号竪穴住居	滑石製模造品(2)（有孔円板2）	土師器・須恵器	6世紀～7世紀前半	山口市教育委員会『毛割遺跡』1983
62	美濃が浜遺跡（山口市大字秋穂二島字美濃が浜）		石製模造品(29)（鏡1、有孔円板3、無孔楕円形板1、斧形1、盾形1、盾形三角形版7、盾形短冊形1、その他）	滑石製勾玉 子持勾玉 石製紡錘車 手捏土器	7世紀	山口県立山口博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第7集　附篇』1985（国立歴史民俗博物館）
20	問田片川遺跡（山口市大内御堀）	9号竪穴住居	石製模造品(1)（有孔円板）	ミニチュア土器 弥生土器	弥生時代終末	山口市教育委員会『問田片川遺跡』1985
21	吉田遺跡（山口市大字吉田）	本部2号館第5層包含層	滑石製模造品(10)（有孔円板5、剣形1、盾形1、斧形3）土製模造品(2)（鏡2）	ミニチュア土器・土製丸玉・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石剣 or 石戈	古墳時代後期	山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』1990
24	西遺跡（山口市大字黒川字大江）	10号竪穴住居	滑石製模造品(1)（剣形）	土師器	5世紀前半	山口市教育委員会『西遺跡』1986
		12号竪穴住居	石製模造品(54)（有孔円板21、剣形9、鏃形1、盾形8、斧形1、盤形2、長方形状3、未製品7）	ミニチュア土器 土師器・須恵器	5世紀中葉～後半	
		14号竪穴住居	滑石製模造品(1)（盾形）	石鏃・弥生土器	弥生後期終末	
		8号土壙	滑石製模造品(1)（剣形）	土師器・須恵器	古墳時代後期	
		1号ピット	石製模造品(1)有孔円板		古墳時代	
		包含層	滑石製模造品(2)（有孔円板1、剣形1）用途不明滑石製品(1)		古墳時代後期～奈良時代	山口市教育委員会『西遺跡II』1990
		表面採集	滑石製模造品(3)（有孔円板2、剣形1）			
25	朝田墳墓群　II地区（山口市大字朝田）	8号横穴墓	滑石製模造品(10)（有孔方形板10）	滑石製紡錘車・臼玉管玉・刀子・鉄刀・須恵器・朱入り須恵器	6世紀後半	山口県教育委員会『朝田墳墓群V』1982
30	下東遺跡（山口市吉敷下東）	包含層？	滑石製模造品(1)（剣形）			山口県教育委員会　1975『下東遺跡・萩峠遺跡』
37	中村遺跡（美祢郡秋芳町大字別府字中村）	22号竪穴住居	土製模造品(1)（鏡）	手捏土器・須恵器・土師器・銅鉱石	7世紀後半	山口県教育委員会『中村遺跡』1987
		23号竪穴住居	土製模造品(2)（鏡2）	手捏土器・鉄製紡錘車・須恵器・銅鉱石	7世紀後半	
31	波雁ヶ浜遺跡（宇部市大字東岐波）	波浪による再堆積で砂堆に包含される	滑石製模造品(1)（石馬）スプーン状土製品(1)	滑石製勾玉・土製勾玉・土製丸玉	7世紀	宇部市教育委員会『宇部の遺跡』1968

ミニチュア土器出土地地名表

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
63	月崎遺跡（宇部市東岐波月崎）	表面採集	滑石製模造品(1)（剣形）			山口大学埋蔵文化財資料館
64	常盤池遺跡（宇部市大字沖宇部字常盤池）	池底・中洲表面採集	石製模造品(20)			個人蔵 『宇部の遺跡』1968（宇部市教育委員会）
65	東須恵遺跡（宇部市厚南東須恵）	丘陵斜面地表下４m	石製模造品(10)（剣形10）			
42	綾羅木郷遺跡（下関市大字綾羅木）	竪穴住居１号	滑石製模造品(4)（剣形１、有孔円板３）	滑石製臼玉(6)・土師器・須恵器・鉄鎌	古墳時代後期	下関市教育委員会 『綾羅木郷遺跡』1981
		古墳時代包含層	滑石製模造品(1)	手捏土器(2)	古墳時代	
43	秋根遺跡（下関市大字秋根）	O－XIX区包含層	用途不明石製品(1)		古墳時代	下関市教育委員会 『秋根遺跡』1977
		F－XV区堆積層II区	滑石製模造品(1)		古墳時代	
		Q－XVII区柱穴1632	用途不明石製品(1)（人形？・石鍋転用？）		古墳時代	
		包含層	用途不明滑石製品(1)（円板）			山口県教育委員会　1973 『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』
44	下七見遺跡（豊浦郡菊川町大字七見）	２地区２号竪穴住居（2-SB-2）	石製模造品？(1)（鏡？）※中世の石鍋の転用？	刀子	弥生時代終末	菊川町教育委員会 『下七見遺跡Ｉ』1989
		７地区１号竪穴住居（7-SB-1）	土製模造品(2)（鏡２）	ミニチュア土器？(2) 弥生土器・砥石	弥生時代終末	
		11地区３号土壙	土製模造品(1)（鏡）		弥生時代	
66	神田遺跡（下関市大字富任字神田）		石製模造品（鏡、剣形、釧形）			『山口県の考古学』1985（小野忠熙著、吉川弘文館）
67	長行古墳（大津郡日置町長行）	組合式石棺	石製模造品	須恵器・鉄	古墳時代後期	『国立歴史民俗博物館研究報告第７集　附篇』1985
68	国常古墳（大津郡日置町国常）	組合式石棺	石製模造品	須恵器・鉄	古墳時代	
55	坂手沖尻遺跡（阿武郡阿東町徳佐）	溝III	石製模造品(4)（盾形１、有孔円板１、三角板２）	ミニチュア土器・紡錘車・土師器・須恵器・鉄鎌	古墳時代後期	山口県教育委員会 『坂手沖尻・惣の尻遺跡』1978

Tab. 9　ミニチュア土器出土地地名表

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
1	清水遺跡（玖珂郡玖珂町清水）	第１環濠	ミニチュア土器(7)（壺３、甕１、鉢３）	弥生土器・石鏃・敲石・砥石・鉄鏃	弥生時代後期後半～終末	山口県教育委員会 『清水遺跡』1989
		５号竪穴住居（第１環濠内）	ミニチュア土器(1)（台付鉢）	弥生土器・砥石・錐土錘	弥生時代後期後半～終末	
		第１環濠内墓地	ミニチュア土器(2)(壺２)	弥生土器・鉄鎌・錐	弥生後期～末	
		第２環濠	ミニチュア土器(4)（甕２、鉢２）	スプーン状土製品・石製紡錘車・弥生土器・石斧・砥石・鉄鏃・素環頭刀子	弥生時代後期後半～終末	
		２号竪穴住居（第１～２環濠内）	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生時代後期後半～終末	
		２号段状遺構（第１～２環濠内）	弥生土器(1)（小型壺）	弥生土器	弥生時代後期後半～終末	
		３号段状遺構（第１～２環濠内）	ミニチュア土器(3)（鉢２、台付鉢１）	安山岩製紡錘車 弥生土器・粘土塊	弥生時代後期後半～終末	
		９号段状遺構（第１～２環濠内）	ミニチュア土器(1)（甕）	弥生土器	弥生時代後期後半～終末	
		11号段状遺構（第１～２環濠内）	ミニチュア土器(1)（甕）弥生土器・鉄鏃		弥生時代後期後半～終末	
2	河池遺跡（玖珂郡周東町上久原）	２号竪穴住居	手捏土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生時代中期後半	山口県教育委員会 『河池遺跡』1987

山口県内のミニチュア土器と模造品

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
3	岡山遺跡（熊毛町大字安田字岡山）	1号竪穴住居（A地区）	ミニチュア土器(1)（壺）	分銅形土器・弥生土器・鉄鏃・蛤刃石斧	弥生時代終末	山口大学埋蔵文化財資料館『島田川』1953（山口大学島田川遺跡学術調査団）
		方形竪穴住居（B地区3号地点）	ミニチュア土器(2)（壺1、鉢1）	弥生土器	弥生時代後期終末	
		1号建物（I地区）	ミニチュア土器(1)（高坏）	弥生土器	弥生時代中期後半	山口県教育委員会『岡山遺跡』1987
		環濠（I地区）	ミニチュア土器(12)（壺4、甕5、鉢2、高坏1）	分銅形土製品 弥生土器・紡錘車・刀子・手斧・石鏃	弥生時代中期後半	
		2号台状墓（II地区）	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器	弥生時代終末	
4	追迫遺跡（旧天王B地区）（熊毛郡熊毛町大字安田字天王追迫）	2号竪穴住居	ミニチュア土器(4)	弥生土器・砥石	弥生後期～末	山口県教育委員会『追迫遺跡』1988
		7号竪穴住居	ミニチュア土器(1)	分銅形土製品 弥生土器・鉄鏃・砥石	弥生時代中期後半～後期半	
		10号竪穴住居	ミニチュア土器(1)	弥生土器	弥生後期～末	
		21号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器	弥生中～後期	
		22号竪穴住居	ミニチュア土器(3)（壺1、鉢2）	分銅形土製品 弥生土器・砥石	弥生時代後期半～終末	
		26号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢）	紡錘車・弥生土器	弥生中～後期	
		29号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（壺）	紡錘車・弥生土器・石鏃・砥石・石斧	弥生時代中期後半～後期半	
		30号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（壺）	紡錘車・弥生土器	弥生後期～末	
		32号竪穴住居	ミニチュア土器(3)（鉢）	弥生土器・砥石・石鏃・鉄鏃	弥生時代後期半～終末	
		39号竪穴住居	ミニチュア土器(3)	土製紡錘車・弥生土器・鉄鏃・砥石		
		41号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（壺）	分銅形土製品 弥生土器	弥生時代中期後半～後期半	
		43号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器・鉄鏃・砥石	弥生時代後期半～終末	
		48号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器・鉄鏃	弥生後期～末	
		2号溝状遺構	ミニチュア土器(2)（鉢）	弥生土器	弥生時代後期	
		柱穴	ミニチュア土器(1)（壺）			
5	天王遺跡（旧天王A地区）（熊毛町安田天王）	住居跡 表面採集	弥生土器(3)（鉢3）	分銅形土製品・石製紡錘車・弥生土器・皮袋形土器・砥石	弥生時代中期初頭～中期末	山口大学埋蔵文化財資料館『島田川』1958（山口大学島田川遺跡学術調査団）
	天王遺跡（旧天王E地区）（熊毛郡熊毛町大字安田字天王）	包含層	ミニチュア土器(16)(鉢16) 手捏土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生時代後期終末	
		2号竪穴住居	ミニチュア土器(2)（鉢 or 壺の底部2）	弥生土器・砥石・鉄鏃・鉋・刀子・管玉	弥生時代後期後半～終末	山口県教育委員会『天王遺跡』1988
		5号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生後期後半	
		6号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器	弥生時代終末	
		8 or 9号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢 or 壺の底部）	弥生土器・砥石	弥生時代後期後半～終末	
		17号竪穴住居	ミニチュア土器(3)（甕・鉢 or 壺の底部2）	弥生土器	弥生時代後期後半～終末	
		22号竪穴住居	ミニチュア土器(3)（鉢 or 壺の底部3）	弥生土器	弥生時代後期後半～終末	
6	松尾遺跡（熊毛郡平生町松尾）	1号竪穴住居跡	ミニチュア土器(3)（壺2、鉢1）	弥生土器・ガラス小玉・石鏃・蛤刃石斧	弥生時代後期後葉～終末	山大考古学研究室 1988『松尾遺跡発掘調査概報』
7	市延遺跡（光市市延）		ミニチュア土器(2)(鉢2)	土師器・須恵器 朱塗りした土錘	古墳時代後期	山口大学埋蔵文化財資料館『島田川』1953（山口大学島田川遺跡学術調査団）

ミニチュア土器出土地地名表

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
8	三井岡原遺跡（光市三井中）	包含層	弥生土器(1)（小型壺９）			山口大学埋蔵文化財資料館『島田川』1953
9	花岡遺跡（下松市末武上屋根）	Ｉ－Ｎ区拡張区	小型丸底壺(1)		古墳時代後期	山口県教育委員会『花岡遺跡』1986
10	上地遺跡（下松市梁）	第２層	ミニチュア土器(21)（壺２、甕３、鉢10）	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	古墳時代後期	山口県教育委員会『上地遺跡』1973
11	宮原遺跡（下松市大字末武上字宮原）	土壙25	弥生土器(1)（小型壺）	弥生土器	弥生時代前期	山口県教育委員会『宮原・上広石遺跡』1973
		土壙35	弥生土器(1)（小型壺）	弥生土器	弥生時代前期	
		７号竪穴住居	ミニチュア土器(3)（壺１、鉢？１、甕１）	滑石製紡錘車 弥生土器・馬具・石鏃	弥生時代終末	
12	円光寺遺跡（徳山市大字久米）	撹乱層	ミニチュア土器(1)（甕）			山口県教育委員会『円光寺遺跡』1987
13	周防国府跡　第26次	土壙103（ＳＴ103）	ミニチュア土器(1)（鉢）	黒色土器	10世紀中頃～後半	防府市教育委員会『防府市文化財調査年報VI』1984
	周防国府跡　第28次（防府市国衛５丁目）	第１トレンチ耕土	ミニチュア土器１（羽釜）			
14	右田・一丁田遺跡（一丁田地区）（防府市大字下右田）	２号竪穴住居	ミニチュア土器(2)(壺２)	弥生土器	弥生後期	山口県教育委員会『右田一丁田遺跡・的場宮の馬場遺跡・久米市遺跡』1973
		10号竪穴住居	ミニチュア土器(2)（甕１、壺１）	土師器	古墳時代中期	
		11号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器・鉄製品	弥生時代終末	
		18号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（壺）	土師器	古墳時代中期	
		19号竪穴住居	ミニチュア土器(1)(壺３) 弥生土器(1)（鉢）	弥生土器	古墳時代中期	
	右田・一丁田遺跡（右田地区）	21号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（甕 or 鉢）	弥生土器	弥生時代終末	
		溝－４	ミニチュア土器(2)（壺１、鉢１）	弥生土器・須恵器	奈良時代埋没	
		Ａ－１溝	ミニチュア土器(2)（壺１・鉢１）		奈良時代に埋没	
		撹乱層	ミニチュア土器(5)（壺２、甕１、鉢１、須恵器壺１）			
15	下右田遺跡（防府市大字下右田）	溝（Ｄ－３）（第Ｉ地区）	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器	弥生時代中期	山口県教育委員会『下右田遺跡-第１・２次調査概報』1978
		河川跡（第III地区）	ミニチュア土器(1)（甕）	弥生土器	弥生後期前半	山口県教育委員会『下右田遺跡-第３次発掘調査概報』1979
		溝（Ｄ－１）（第III地区）	ミニチュア土器(2)（鉢１、高坏）	弥生土器	弥生時代終末	
		不　明	ミニチュア土器(1)（鉢）			
16	大崎遺跡（防府市大字大崎）	環濠（ＳＤ－２）	ミニチュア土器(1)（壺）	用途不明土製品	弥生時代中期	山口県教育委員会『奥正権寺遺跡II・大崎岡古墳群・大崎遺跡』1985
17	奥正権寺遺跡（防府市大字大崎字奥正権寺）	４号竪穴住居（III地区）	ミニチュア土器(5)（甕５）	土師器	古墳時代前期	山口県教育委員会『奥正権寺遺跡Ｉ』1984
		５号竪穴住居（III地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）		古墳時代前期	
		撹乱層（II地区）	ミニチュア土器(2)（甕１、鉢１）	分銅形土製品・弥生土器・須恵器・石鏃		
18	今宿東遺跡（山口市大字鋳銭司）	13号掘立柱建物（Ｂ－13）	瓦質土器(1)（脚付小鉢）	土師器	室町時代	山口県教育委員会『今宿東遺跡』1986
19	興隆寺跡遺跡（山口市大字大内御堀）	柱穴44	弥生土器(1)（小型壺）		弥生時代	山口市教育委員会『大内氷上興隆寺跡遺跡』1990
		表面採集	手捏土器(1)（壺）		古墳時代	
20	問田片川遺跡（山口市大字大内御堀）	３号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（甕）	弥生土器	弥生時代終末	山口市教育委員会『問田片川遺跡』1985
		９号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢）	石製模造品	弥生時代終末	

山口県内のミニチュア土器と模造品

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
20	問田片川遺跡（山口市大内御堀）	表面採集・表土中	ミニチュア土器(5)（壺１、鉢２、不明２）	土製紡錘車		山口市教育委員会『問田片川遺跡』1985
21	吉田遺跡（山口市大字吉田）	竪穴住居（ラグビー場）	ミニチュア土器(2)（小型丸底壺１、甕１）		古墳時代初頭	山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報III』1985
		包含層（大学会館）	ミニチュア土器(1)（鉢）		弥生時代	
		１号土壙（遺跡保存地区1882年調査）	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生時代後期終末	山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅴ』1986
		柱穴239（保存地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）			
		表土・撹乱（保存地区）	土師器(1)（鉢）			
		４号溝（保存地区）	土師器(1)（鉢）		古墳時代初頭	山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』1987
		トレンチ（昭和42年調査）	手捏土器(1)（鉢）			
		１号土壙（本部２号館）	手捏土器(2)（鉢２）	石製紡錘車・弥生土器・鉄鏃	弥生時代後半～終末	山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報VIII』1990
		２号土壙（本部２号館）	ミニチュア土器(1)（高坏）	弥生土器・砥石・打製石斧	弥生中期後半～後期初頭	
		第５層包含層（本部２号館）	ミニチュア土器(27)（鉢25、甕１、高坏１）	滑石製模造品・土製模造鏡・土製丸玉・弥生土器・土師器	古墳時代後期	
		第６層包含層（本部２号館）	ミニチュア土器(1)（鉢）	縄文土器・弥生土器・磨製石斧・砥石	弥生時代	
22	吉田岡畠遺跡（山口市大字吉田）	包含層？	ミニチュア土器(1)（壺）			山口県教育委員会『吉田岡畠遺跡・吉田大浴遺跡・下長野遺跡』1973
23	小路遺跡（山口市大字黒川）	竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢）	紡錘車（土製・石製）弥生土器・砥石・敲石	弥生時代前期前半	山口市教育委員会『小路遺跡』1988
24	西遺跡（山口市大字黒川字大江）	１号土壙（II地区）	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器・片刃石斧	弥生中期初頭	山口市教育委員会『西遺跡』1986
		９号住居（III地区）	ミニチュア土器(2)（壺１、鉢１）	土師器	５世紀前半	
		２号溝（III地区）	ミニチュア土器(5)（壺１、鉢４）	土師器	５世紀前半	
		12号竪穴住居（IV地区）	ミニチュア土器(1)（壺）	石製模造品・土師器・須恵器	５世紀中葉～後半	
		20号土壙（IV地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生時代前期末～中期初頭	
		26号土壙（IV地区）	ミニチュア土器(42)（壺22、鉢19、高坏１）	勾玉・土師器・須恵器	５世紀中葉	
		19号溝（大溝）（第V地区）	ミニチュア土器(5)（壺１、鉢４）	土師器	４世紀	
		１号竪穴住居（A地区）	ミニチュア土器(1)（甕）	土師器・弥生土器	４世紀前半	山口市教育委員会『西遺跡II』1990
		２号竪穴住居（A地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器・弥生土器・石鏃・砥石	４世紀前半	
		４号竪穴住居（A地区）	ミニチュア土器(2)（壺２）	弥生土器・土師器	４世紀前半	
		５号掘立柱建物（P２）（A地区）	土師器(1)（鉢）		４世紀	
		包含層（C－２地区）	弥生土器(1)（壺）			
		溝７（F地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器・須恵器・土師器・滑石	中世に埋没	
		溝１（G地区）	ミニチュア土器(1)（壺）		弥生時代終末～古墳初頭	
25	朝田墳墓群　II地区（山口市大字朝田）	３区C群土器群	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器	弥生時代後期終末	山口県教育委員会『朝田墳墓群VII』1986

ミニチュア土器出土地地名表

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
26	大内氏館跡（山口市野田町）	表面採集	ミニチュア土器(1)		弥生時代	山口市教育委員会 1986年調査
27	白石遺跡（山口市白石３丁目）	竪穴住居	土師器(1)（鉢）	土師器	古墳時代初頭	山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報III』1985
	白石遺跡（山口市白石１丁目）	第５トレンチ	ミニチュア土器(1)（鉢）		古墳時代初頭	山口大学埋蔵文化財資料館『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』1987
28	萩峠遺跡（山口市神田町）	土壙（ＫＰ－１）	ミニチュア土器(2)（鉢）	土師器	古墳時代	山口県教育委員会『下東遺跡・萩峠遺跡』1975
		土壙（ＹＰ－２）	手捏土器(1)（台付鉢）	弥生土器・土師器	古墳時代	
29	湯田楠木町遺跡（山口市楠木町）	土器捨場跡（第Ｉ地区落込み）	ミニチュア土器(9)（甕４、壺３、鉢２）		弥生時代終末～古墳時代初頭	山口市教育委員会『湯田楠木町遺跡第Ｉ地区発掘調査概報』1975
30	下東遺跡（山口市大字吉敷下東）	柱穴１（ＫＳＰ－１）（II地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器・鉄鏃	古墳時代	山口県教育委員会『下東・萩峠遺跡』1975
		４号竪穴住居（III地区）	ミニチュア土器(1)（壺）	土師器・須恵器	６世紀初～半	
		溝（ＫＤ－４）（IV地区）	ミニチュア土器(1)（甕）	弥生土器・土師器・須恵器・砥石	古墳時代後期	
		II－２層（河川氾濫による堆積）	ミニチュア土器(2)（壺１、鉢１）	製塩土器・紡錘車・弥生土器・須恵器	古墳時代後期	
		Ａ区包含層	ミニチュア土器(1)（鉢）			山口市教育委員会『下東遺跡』1990
		Ｂ区包含層	ミニチュア土器(1)（鉢）弥生土器(1)（甕）			
31	波雁ヶ浜遺跡（宇部市大字東岐波）	波浪による再堆積で砂堆に包含される	ミニチュア土器(4)（鉢２、高坏２）	滑石製模造品・勾玉スプーン状土製品	７世紀	宇部市教育委員会『宇部の遺跡』1968
32	花が池窯（宇部市大字東岐波）	須恵器窯	ミニチュア土器(1)（須恵器甕）	須恵器甕片の再加工品（穿孔）・須恵器	６世紀末	山口県教育委員会『花が池窯跡』1988
33	北迫遺跡（宇部市上宇部）	貝塚（Ａ地区）	ミニチュア土器(2)（壺１、甕１）		弥生時代中期後半	宇部市教育委員会『宇部の遺跡』1968
		２号竪穴住居（II地区）	ミニチュア土器(1)（壺）		弥生時代終末	
34	末信遺跡（宇部市大字末信）	１号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器	古墳時代中期	宇部市教育委員会『末信遺跡』1988
35	須賀遺跡（小野田市須恵東字浜河内）		手捏土器(1)（鉢）	弥生土器		小野田市歴史民俗資料館『国立歴史民俗博物館研究報告　第７集　附篇』1985
36	仁保の上古墳群（小野田市有帆）	仁保の上横穴（墓道に供献）	ミニチュア土器(1)（須恵器甕）	須恵器耳環・刀子（玄室内）	７世紀初	小野田市教育委員会　1990『小野田仁保の上古墳群』
37	中村遺跡（美祢郡秋芳町大字別府中村）	13号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（壺）		弥生時代中期	山口県教育委員会『中村遺跡』1987
		22号竪穴住居	手捏土器	土製模造鏡・須恵器・土師器・銅鉱石・砥石	７世紀後半	
		23号竪穴住居	手捏土器	土製模造鏡・鉄製紡錘車・須恵器・銅鉱石	７世紀後半	
		29号竪穴住居（竈の支柱にかぶせる）	ミニチュア土器(5)（甕３、鉢２）	土師器	５～６世紀	
38	寺秋遺跡（下関市内日寺秋）	５号土壙	ミニチュア土器(1)（鉢）			山口県教育委員会　1979『寺秋遺跡　湯免遺跡』
39	石原遺跡（下関市大字石原）	１号竪穴住居（Ｂ地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器・石庖丁	弥生時代終末	山口県教育委員会『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』1973
		３号竪穴住居（Ｄ地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	紡錘車・弥生土器・磨製石斧・石庖丁	弥生時代終末～古墳初頭	
40	垢田舟原遺跡（下関市垢田町）	試掘壙ＧII IV層下層	手捏土器(1)（鉢）	土師器・須恵器・焼土	古墳時代後期	下関市教育委員会『垢田舟原・柏原遺跡』1986
		試掘壙ＧIII IV層上面	手捏土器			
41	伊倉遺跡（下関市大字伊倉）	包含層（Ａ区）	ミニチュア土器(1)（鉢）			山口県教育委員会『伊倉遺跡』1973

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
41	伊倉遺跡（下関市大字伊倉）	土壙（B区）	ミニチュア土器(6)(甕6)	弥生土器・土師器	弥生時代終末～古墳初頭	山口県教育委員会『伊倉遺跡』1973
		11号竪穴住居（E区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器・石庖丁	～古墳初頭	
		包含層 or10号土壙	弥生土器(1)（鉢）		弥生時代前期末～中期初頭	山口大学人文学部考古学研究室『伊倉遺跡発掘調査概報』1982
		試掘壙ＪII III２ａ—III２ｂ境界	手捏土器	鉄鏃・破砕した土師器	６世紀中葉	下関市教育委員会　1984『伊倉遺跡　団体営伊倉地区圃場整備事業事業計画対象地域内遺構確認調査報告
		不　明	ミニチュア土器(2)			
42	綾羅木郷遺跡（下関市大字綾羅木）	貯蔵用竪穴５（ＬＮ５）（AIV地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器・鉄滓・石庖丁・石鏃・敲石	弥生時代前期	下関市教育委員会『綾羅木郷遺跡Ｉ』1981
		貯蔵用竪穴4818（LN4818）（EＩ地区）	弥生土器(1)（小型壺）	管玉・貝小玉・弥生土器・土錘・石鏃・敲石・磨石・骨角牙器	弥生時代前期末(綾羅木III)	
		貯蔵用竪穴4827（ＬＮ4827）(EＩ地区)	ミニチュア土器(1)（？）弥生土器(1)（甕）	土製円盤・弥生土器・石鏃・獣骨・魚骨	弥生時代前期（綾羅木Ｉ）	
		貯蔵用竪穴４（ＬＮ４）（FII地区）	ミニチュア土器(1)（甕）	陶塤・弥生土器・土錘・石斧・砥石	弥生時代前期（綾羅木Ｉ）	
		貯蔵用竪穴８（ＬＮ８）（FII地区）	ミニチュア土器(1)(壺２)	弥生土器・石剣・敲石・石斧・砥石	弥生時代中期前半	
		貯蔵用竪穴4116（ＬＮ4116）(FII地区)	ミニチュア土器(1)（壺）弥生土器(1)（無頸壺）	弥生土器・石庖丁・獣骨・砥石	弥生時代前期（綾羅木II）	
		貯蔵用竪穴5603（ＬＮ5603）(GII地区)	ミニチュア土器(1)(壺？)弥生土器(1)（壺）	酸化鉄入り小型壺・弥生土器・敲石・砥石・土錘・磨石	弥生時代前期末(綾羅木III)	
		貯蔵用竪穴5002（LN5002）(PＩ地区)	ミニチュア土器(1)（台付甕）	弥生土器・石庖丁・石鏃・砥石・敲石	弥生時代前期（綾羅木Ｉ）	
		貯蔵用竪穴5018（LN5018）(PII地区)	弥生土器(2)（鉢）	土製円盤・弥生土器・環状石斧・石剣・砥石・敲石・獣骨	弥生時代前期末(綾羅木III)	
		貯蔵用竪穴5411（LN5411）(RIV地区)	ミニチュア土器(5)（壺２、鉢１、甕１、？１）	土盤円盤・弥生土器・土錘・石斧・石庖丁・石鏃・砥石・敲石	弥生時代前期末(綾羅木III)	
		溝5305-1（ＬＮ5305-1）（TＩ地区）	ミニチュア土器(1)（壺４、鉢２、甕２、？３）	祭祀用石製品（線刻）・土製円盤・弥生土器・土錘・石斧・石庖丁	弥生時代前期末(綾羅木III)	
		貯蔵用竪穴5318（LN5319）（TＩ地区）	弥生土器(1)（無文土器）	弥生土器・石斧・石庖丁・石剣・石鏃・土錘・炭化植物	弥生時代前期末(綾羅木III)	
		溝5717（LN5717）（VＩ地区）	ミニチュア土器(6)（壺３、甕 or 鉢３）弥生土器(4)（鉢２、？2）	土製有孔円盤・土製円盤・土製紡錘車・弥生土器・石庖丁・石鏃・石剣・敲石	弥生時代前期（綾羅木II）	
		貯蔵用竪穴5716（LN5716）（V II地区）	ミニチュア土器(1)（？）	弥生土器・石鏃・砥石・炭化米	弥生時代前期末(綾羅木III)	
		貯蔵用竪穴6017（LN6017）（VIV地区）	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器・石鏃・敲石・石杵	弥生時代前期末(綾羅木III)	
		貯蔵用竪穴6018（LN6018）（VIV地区）	弥生土器(1)（鍔付鉢）	弥生土器・土錘・石斧・石庖丁・磨石	弥生時代前期（綾羅木II）	
		古墳時代包含層	土師器(2)（小型壺）	滑石製模造品	古墳時代	
		18号貯蔵用竪穴（P—18）	ミニチュア土器(1)（壺）	弥生土器・石剣	弥生時代前期（綾羅木II～IIIA）	山口県教育委員会『綾羅木郷台地遺跡（上ノ山地区）』1986
		１号貯蔵穴（ＳＫ—１）	ミニチュア土器	弥生土器・石斧・敲石・砥石・石庖丁	弥生時代前期末(綾羅木III)	山口県教育委員会『綾羅木郷台地遺跡（明神地区・久保地区）』1989
		20号貯蔵穴（ＳＫ—20）	ミニチュア土器	人面土製品・男根状石製品・石皿・石鎌	弥生時代前期末(綾羅木III)	

ミニチュア土器出土地地名表

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
43	秋根遺跡（下関市大字秋根）	3号竪穴住居（Ⅰ区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	滑石製紡錘車・土師器・須恵器	6世紀後半	山口県教育委員会『塚本古墳・秋根遺跡・石原遺跡』1973
		5号竪穴住居（Ⅰ区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器	6世紀後半	
		7号竪穴住居（Ⅰ区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器・須恵器	6世紀後半	
		柱穴	ミニチュア土器(1)（鉢）			
		溝66（LD066）	土師器(3)（壺1、鉢2）	土師器・鉄鎌	古墳時代前期	下関市教育委員会『秋根遺跡』1977
		谷（P・Q－XV・XIV区）	土師器(3)（台付壺1、脚付埦1、甕1）		古墳時代後期	
		柱穴675（Q－XVI区）	ミニチュア土器(1)（甕）		古墳時代初頭	
		8号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（甕）	土師器・砥石	古墳時代初頭	
		12号竪穴住居（LS012）（Q－XIX区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器	古墳時代初頭	
		柱穴（Q－XXI区）	土師器(1)（鉢）		歴史時代	
		不明	ミニチュア土器(2)（鉢1、高坏）	弥生土器	弥生時代前期	
		不明	須恵器(1)（薬壺）		奈良時代	
—	延行条里遺跡他（下関市大字延行）	LK021（2D－II区）	台付鉢(1)			下関市教育委員会『綾羅木川下流域の地域開発史』1990
		LS011（2D－II区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器		
		LK024（3K－09区）	ミニチュア土器(4)（鉢4）	土師器		
		不明（3L－11区）	ミニチュア土器			
	（下関市大字綾羅木）	不明（3C－19区）	土師器(1)（台付鉢）			
	（下関市大字有富）	包含層（3P－233～225）	土師器(3)（壺1、鉢1）		古墳時代前期	
44	下七見遺跡（豊浦郡菊川町大字七見）	7号土壙（2-SK-7）（2地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）		弥生時代前期末（綾羅木III）	菊川町教育委員会『下七見遺跡Ⅰ』1989
		1号竪穴住居（7-SB-1）（7地区）	弥生土器(2)（鉢1、高坏1）	土製模造鏡・弥生土器・砥石	弥生時代終末	
		2号竪穴住居（11-SB-2）（11地区）	弥生土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生時代終末	
		15号土壙（11-SK-15）（11地区）	弥生土器(1)（鉢）	石鏃	弥生時代前期末（綾羅木III）	
		2号竪穴住居（12-SB-2）（12地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生時代終末	
		1号溝（14-SD-1）（14地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）	弥生土器	弥生時代終末	
		4号土壙（14-SK-4）（14地区）	ミニチュア土器(1)（鉢）		弥生時代前期末（綾羅木III）	
45	坂の上遺跡（豊浦郡菊川町）	柱穴	ミニチュア土器(1)（鉢）		弥生時代	山口県教育委員会『坂の上遺跡』1974
46	上原遺跡（豊浦郡菊川町大字上大野）	47号土壙（12群－47）	弥生土器(1)（甕）	弥生土器	弥生時代前期末（綾羅木III）	菊川町教育委員会『上原遺跡Ⅰ』1976
		152号土壙（11群－152）	弥生土器(1)（壺）	弥生土器	弥生時代前期末（綾羅木II）	
47	林崎遺跡（豊浦郡豊浦町大字川棚字林崎）	1号竪穴住居（SB－1）	ミニチュア土器(2)（鉢）	土師器・須恵器	6世紀中葉～後半	豊浦町教育委員会『林崎遺跡』1987（豊浦町教育委員会・山本昌美）
48	岡の鼻遺跡（大津郡油谷町大字久富）	6号竪穴住居	ミニチュア土器(2)（甕1、鉢1）	土師器・須恵器・砥石・敲石	古墳時代初頭	山口県教育委員会『岡の鼻遺跡』1989
		7号竪穴住居	小型丸底壺(1)	土師器・砥石	古墳時代初頭	

山口県内のミニチュア土器と模造品

遺跡番号	遺跡名（所在地）	出土遺構	出土遺物	共伴遺物	時期	所有者・保管機関 収録文献（発行者）
49	高畑遺跡（大津郡日置町日置）	2号竪穴住居（DW－2）	ミニチュア土器(1)（台付鉢）	勾玉・ガラス小玉・土師器・石鏃・石斧	古墳時代初頭	山口県教育委員会『たかはた』1986
50	堀田遺跡（大津郡日置町堀田）	集落内祭祀	手捏土器(6)	土製円盤・土馬・土師器	古墳時代中期？	『国立歴史民俗博物館研究報告　第7集　附篇』1985
51	見島中学校遺跡（萩市見島本村）		手捏土器(8)	土師器	奈良時代	見島中学校『見島総合学術調査報告』1964（山口県教育委員会）
52	突抜遺跡（阿武郡阿東町地福）	6号竪穴住居（DW－6）	ミニチュア土器(2)(甕2)	弥生土器	弥生時代終末～古墳初頭	山口県教育委員会『よみがえる弥生のムラ―突抜・馬場遺跡』1985
53	羽波遺跡（阿武郡阿東町大字徳佐下字羽波）	1号竪穴住居（SB－1）	手捏土器(2)（器台）	紡錘車・弥生土器・砥石・石斧	弥生時代後期前半	山口県教育委員会『羽波遺跡・片山遺跡』1989
		2号竪穴住居（SB－2）	ミニチュア土器(1)（鉢）	石製紡錘車・ガラス小玉・弥生土器	弥生時代後期	
		8号竪穴住居（SB－8）	ミニチュア土器(1)（鉢）	紡錘車・ガラス小玉・弥生土器・粘土塊	弥生時代後期中頃	
		土壙6（SK－6）	ミニチュア土器(1)（壺）		弥生時代後期	
		柱穴2020（SP－2020）	ミニチュア土器(1)（鉢）		弥生時代後期	
54	宮ヶ久保遺跡（阿武郡阿東町徳佐）		手捏土器(50)	土製勾玉・島型木製品・木剣・石戈・石剣・砥石・弥生土器	弥生時代中期	山口県教育委員会『国立歴史民俗博物館研究報告　第7集　附篇』
55	坂手沖尻遺跡（阿武郡阿東町徳佐）	2号竪穴住居	ミニチュア土器(1)（鉢）	土師器	弥生時代終末	山口県教育委員会『坂手沖尻遺跡・惣の尻遺跡』1978
		溝Ⅰ	ミニチュア土器(2)(鉢2)	勾玉・弥生土器・石斧・石鏃	弥生時代中期	
		溝Ⅲ	ミニチュア土器(1)（鉢）	石製模造品・紡錘車・土師器・須恵器・鉄斧	古墳時代後期	
56	惣の尻遺跡（阿武郡阿東町徳佐）	15号土壙	弥生土器(1)（壺）	弥生土器・石鏃	弥生前期末	
		38号土壙	弥生土器(1)（壺）	弥生土器・石鏃・石斧	弥生前期末	

山口大学構内遺跡調査要項

山口大学埋蔵文化財資料館規則

（設置）

第1条　山口大学に山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）を置く。

（資料館の業務）

第2条　資料館は、学内の共同利用施設として、次の各号に掲げる業務を行なう。

一　山口大学構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示および調査研究

二　山口大学構内等における埋蔵文化財の発掘調査並びに報告書の刊行

三　その他の埋蔵文化財に関する必要な業務

（運営委員会）

第3条　資料館に関する事項を審議するため、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）を置く。

2　委員会に関する規則は、別に定める。

（館長）

第4条　資料館に館長を置く。館長は委員会の議を経て学長が委嘱する。

2　館長の任期は2年とし、再任を妨げない。

3　館長は、資料館の業務を掌理する。

（調査員）

第5条　資料館には調査員若干名を置く。

2　調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

3　調査員は、資料館の業務を処理する。

（特別調査員）

第6条　埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行なうため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

2　特別調査員は、委員会の議を経て館長が委嘱する。

（雑則）

第7条　この規則に定めるもののほか、資料館に必要な事項は別に定める。

山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会規則

（趣旨）

第１条　この規則は、山口大学埋蔵文化財資料館規則（以下「資料館規則」という。）第３条第２項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会（以下「委員会」という。）に関し、必要な事項を定めるものとする。

（審議事項）

第２条　委員会は次の事項を審議する。

一　山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関する基本的なこと。

二　資料館の管理運営に関すること。

三　資料館の整備充実に関すること。

四　資料館の運営に要する経費に関すること。

五　その他必要な事項

（組織）

第３条　委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　資料館規則第４条第１項の館長

二　各学部および教養部の教官各１名

三　事務局長

２　前項第２号の委員は、それぞれの部局の推薦に基づいて学長が委嘱する。

（任期）

第４条　前条第１項第２号の委員の任期は２年とし、再任を妨げない。

（委員長）

第５条　委員会に委員長を置き、委員の互選とする。

２　委員長は委員会を招集し、その議長となる。

（幹事）

第６条　委員会に幹事を置き、庶務部長、経理部長及び施設部長をもって充てる。

（委員以外の出席）

第７条　委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を委員会に出席させることができる。

（事務）

第８条　委員会の事務は、庶務部庶務課において処理する。

（雑則）

第９条　この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

Tab. 10　山口大学埋蔵文化財資料館運営委員会委員

（平成元年度）

部局名	氏　名	官　職	任　期	備　考
医学部	黄　基雄	教　授	平元．４．１～平２．３．31	委員長
人文学部	近藤喬一	教　授	平元．４．３～平３．３．31	館　長
人文学部	中村友博	助教授	平元．５．29～平３．５．28	
教育学部	川村博忠	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
経済学部	小島正己	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
理学部	遠藤克彦	助教授	平元．４．１～平３．３．31	
工学部	島　敏史	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
農学部	時本　巽	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
教養部	木村忠夫	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
事務局	有地成光	事務局長	昭63．４．１～	

（平成２年度）

部局名	氏　名	官　職	任　期	備　考
工学部	島　敏史	教　授	平元．４．１～平３．３．31	委員長
人文学部	近藤喬一	教　授	平元．６．７～平３．６．６	館長
人文学部	中村友博	助教授	平元．５．29～平３．５．28	
教育学部	川村博忠	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
経済学部	小島正己	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
理学部	遠藤克彦	助教授	平元．４．１～平３．３．31	
医学部	福本哲夫	教　授	平２．４．１～平４．３．31	
農学部	時本　巽	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
教養部	木村忠夫	教　授	平元．４．１～平３．３．31	
事務局	有地成光	事務局長		

Tab. 11　山口大学埋蔵文化財資料館特別調査員

学部等	氏　名	官　職	専　攻　等	備　考
人文学部	中村友博	助教授	日本考古学	平成元・平成２年度
教育学部	三浦　肇	教　授	地理学	平成元・平成２年度
理学部	松本徳夫	教　授	岩石学	平成元・平成２年度
農学部	勝本　謙	教　授	植物分類学	平成元・平成２年度

山口大学構内の主な調査

Tab. 12　山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	旧調査地区名又は調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L・M・N−15	1	30?	弥生竪穴住居・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当　小野忠熙	
	第Ⅱ地区家畜病院新営	S・T−19 R・S−20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	〃	
	第Ⅱ地区	P・Q−19・20	3			弥生土器、土師器	試掘	〃	
	第Ⅳ地区牛舎新営	S−10	4	300	弥生溝・土壙、古墳竪穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	
	第Ⅳ地区	S・T−9〜13	5				試掘	〃	
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区	E−20	6	1,100	杭列	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	〃	
	第Ⅲ地区南区	G・H−22・23	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第Ⅲ地区北区	I・J−20・21	8	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		〃	〃	
	第Ⅲ地区東南区	H−23 I・J・K−24	9		弥生竪穴住居	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅲ地区野球場	I−22・23 J−21・22・23 K−22・23	10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
	第Ⅴ地区学生食堂	I・J−19・20	11		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	事前	〃	
	第Ⅴ地区	H・J・K・L・M・N−18・19・20	12		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	試掘	調査担当　山口大学吉田遺跡調査団	①
	第Ⅰ地区C区大学本部新営	K・L−14	13	600	竪穴住居、溝、土壙	弥生土器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	K−13	14		溝	弥生土器、木炭屑	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第2地点	L−13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第3地点	L・M−13	16		竪穴住居、土壙、柱穴	土師器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N−13	17		弥生竪穴住居、溝、土壙	弥生土器、土師器、石器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L−13	18		弥生溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M−13	19		古墳竪穴住居、弥生溝	弥生土器、土師器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第7地点	〃	20		溝	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区E区第2学生食堂新営	N・O−15	21	900	弥生〜古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃	
昭和50年	第Ⅱ地区					弥生土器	試掘	〃	
昭和51年	第Ⅲ地区				竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃		
昭和53年	人文学部校舎新営	M・M−21	22	180			〃	調査担当　近藤喬一	未刊
	教育学部附属養護学校新営	A・B・C・D−20〜24	23	410	溝、土壙	縄文土器、弥生土器	〃	山口大学埋蔵文化財資料館・山口市教育委員会	年報IX

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和54年	理学部校舎新営	O—18・19	24	250			試掘		未刊
	農学部動物舎新営	P—18・19	25	380			〃		
	本部2号館新営	L—14	26	740	溝、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報VIII
昭和55年	経済学部校舎新営	K・L—21	27	66			〃		未刊
	農学部農業観測実験施設新営	Q—15	28	50	溝、土壙		〃		
	本部	E・F—15・16 F—20・21 G・H—12・19	29				立会		
	農学部	L・M—12・13 N・O・P—10～12 P・Q—17・18	30				〃		
昭和56年	教育学部校舎新営	H—19	31	400	弥生竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報I
	教育学部音楽棟新営	H—16	32	100	溝		〃		
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J—19・20	33	130	河川跡、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	〃		
	正門橋脚新営	H—11	34				立会		
	時計塔埋設	I—14	35				〃		
	本部構内擁壁	K—14	36				〃		
	教養部構内擁壁	I—16・17	37				〃	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J・K・L・M—15 M・N—16	38				〃		
	農学部中庭整備	O—17	39				〃		
	暖房施設改修	O—16	40				〃	工法等変更	
	学生部文化会車庫新営	L—8	41				〃	工法等変更	
	学生部馬場整備	M・N—8・9	42				〃		
昭和57年	附属図書館増築	M—16	43	600	弥生～古墳溝、土壙柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		年報II
	大学会館新営	M—14・15	44	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校プール新営	B—22	45	880			立会		
	放射性同位元素総合実験室排水桝新営	O—18	46	2			〃		
	教養部自転車置場昇降口新営	K・L—17	47	150			〃		
	教養部中庭環境整備	J・K—16	48	10			〃		
昭和58年	大学会館新営	M・N—13	49	2,000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器国産陶器、瓦質土器瓦器、緑釉陶器、木簡、石器	事前		年報III
	ラグビー場防球ネット新営	G・H—19	50	120	弥生溝、弥生～古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器、石製品	〃	竪穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M・N—20 O—19・20	51	410			立会		
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	H・I—23 I—12・13 J—13	52	180			〃		
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置	M—8	53	30			〃		
	学生部廃舎整備	L—7	54	2			〃		
	学生部野球場散水栓取設	J—21 K—22	55	1			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教養部環境整備	I－16・17 J・K－17 K・L－17・18	56	80			立会		年報III
	学生部テニスコート改修	C－18 D－17 E－16	57	12			〃		
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N－12・24	58	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	事前		年報IV
	大学会館排水管布設	K・L－13	59	180	弥生～中世遺物包含層、古墳土壙、古代～中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	〃		
	学生部テニスコートフェンス改修	B－17・18 C－16・17・18・19 D－15・16・17 E－15・16	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K－19・20・21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L－14 L・M・N－15	62	592	弥生～中世遺物包含層、弥生竪穴住居、貯蔵穴、土壙、古代～近世土壙、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、窯壁	試掘		年報V
	経済学部環境整備(樹木移植)	K－21 L－20	63	5			立会		
	農学部附属農場飼料園排水溝修復整備	R－16～19	64	30	古代末～中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、鞴口、石器、鉄滓	〃		
	農学部附属農場農道改修	V－15・16	65	325			〃		
	教育学部前庭環境整備(樹木移植)	I・J－19.20	66	430			〃		
	中央ボイラー棟車止設置	O・P－16	67	2.5		須恵器	〃		
	大学会館環境整備(樹木移植)	L・M－15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	〃		
	交通標識設置	J－20、N－14 O－18	69	3			〃		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備(実験動物運動場設置)	P・Q－17・18	70	16			〃		
	理学部環境整備(藤棚設置)	N－20・21	71	4			〃		
	農学部附属家畜病院舗装	S・T－19	72	270			〃		
昭和61年	国際交流会館新営	N－22・23	73	70	弥生～古墳河川跡 中世～近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄砲玉、加工痕のある剝片	試掘		年報VI
	山口銀行自動支払機設置(電線路埋設)	I・J－19・20	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S－20 U－19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	〃	工法等変更	
	農学部附属農場農道交通規制(施錠ポール設置)	L－10 Q－15・16	76	2			〃		
	正門横(水田内)境界杭設置	I－10	77	0.25	包含層か		〃		
	経済学部環境整備(樹木移植・記念碑建立)	M－20	78	3			〃		
	吉田構内交通標識設置	H－23、J－9 P－22、S－20 W－16	79	3		須恵器	〃		
	市道神郷1号線および間田神郷線の送水管埋設		80	2,100	古墳・古代溝、古代河川跡、杭、弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器(墨書のあるもの含む)瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	〃	山口市教育委員会・山口大学埋蔵文化財資料館	

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和61年	教養部自動販売機増設(屋根設置および観覧席移動)	K・L－18	81	3.5			立会		
	教養部身体障害者用スロープ取設	L－15・16	82	3			〃		
	経済学部散水栓取設	L・M 20	83	4			〃		
	吉田構内水泳プール改修等	E・F－16 H－15	84	26.5	包含層		〃		
	農学部附属農場水道管理設	S－12	85	3			〃		
	吉田構内汚水排水管等総改修	M 18 O－15・16	86	15.5		土師質土器	〃		年報VI
	本部身体障害者用スロープ取設	L－14	87	12			〃		
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K－20 L－18～20	88	88	弥生～古墳柱穴		〃	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設	L－16	89	8		弥生土器	〃		
	教養部37番教室改修	K 16	90	1			〃		
昭和62年	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	K 18	91	240		ブランク、削器、植物遺体	事前		
	教養部複合棟新営	J・K 17・18	92	35	埋甕土壙、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師質土器、石斧	試掘		
	教養部環境整備	I・J 16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		
	教養部複合棟新営	J・K－17・18	94	900	落し穴、河川跡、竪穴住居、土壙、溝、井戸、埋甕土壙、掘立柱建物跡、谷状遺構、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、陶磁器、石鏃、石斧、木製品	事前		
	九田川河川改修	B・C－17	95	20			立会	県教委・山大埋文	年報VII
	国際交流会館新営	M－23 N 22・23	96	195			〃		
	教育学部附属養護学校自転車置場移設	L・N 12	97	45			〃		
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡幅	L・N－12	98	45	中世土壙墓か	弥生土器、土師器、須恵器、輸入白磁、国産磁器、蔵石	〃		
	農学部植栽	N－17	99	3			〃		
	経済学部集水桝取設	K－20	100	0.5			〃		
昭和63年	教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設	I－16	101	1	包含層か		〃		
	国際交流会館新営に伴う排水管埋設	O－22	102	35	河川跡(溝か)、包含層	弥生土器、須恵器	〃		
	教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設	K－18	103	1			〃		年報VIII
	サッカー・ラグビー場改修	F－21、G－19 H－20・21	104	25	性格不明	弥生土器	〃		
	消防用水設置	K・L・M－22	105	7.5			〃		
平成元年	水銀灯新営	K・L－15	106	4	古墳溝状遺構、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、六連式製塩土器	事前		
	椙野寮ボイラー設備改修	O・P－20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	I・J・K 21 H・I・K－22	108	7	包含層	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器	〃		年報IX
	防火水槽配管布設	K－21・22	109	15	柱穴		〃		
	吉田寮ボイラー設備改修	L－8	110	4			〃		
	体育施設系給水管改修	G・H－16	111	50		陶器	〃	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M－13	112	6			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成元年	吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修	L・M－8	113	45	包含層	土師器、須恵器、土師質土器、陶器、剥片、二次加工のある剥片	立会		年報IX
	第二武道場排水溝新営	G・H 15・16	114	2	溝		〃		
	案内標識設置	I－14、L 18	115	0.5			〃		
	本部車庫給水管改修	L－13	116	0.5		弥生土器	〃		
	大学会館前庭部環境整備	L・M・N 14・15	117	35	中世溝		〃		

小串構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報III
	医学部図書館増築		2				立会		
	医学部体育館新営		3				〃		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4		近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報IV
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	〃		
	医学部基幹整備(特高受変電設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
	医学部臨床講義棟・病理解剖棟新営		7	38			〃		
昭和60年	医学部外来診療棟新営		8	409		土器質土器、瓦質土器、陶磁器	試掘		年報V
	医学部基礎研究棟新営		9	11		近世陶器	〃		
	医学部看護婦宿舎改修		10	25		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			〃		
	医学部環境整備(樹木移植)		12	40			〃		
	医学部附属病院外来診療棟新営		13	5			〃		
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等(雨水桝埋設)		14	18			〃		
昭和62年	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			〃		年報VII
	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、細石刃核	試掘		
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、敲石、礫、原石、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	立会		年報VIII
	医学部附属病院運動場整備		18	220			〃		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核	試掘		年報IX

常盤構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報III
	工学部図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報IV

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	工学部尾山宿舎擁壁取設等			65			立会		年報V
	工学部受水槽総改修		3	1.5			〃		
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管改修			6			〃		年報VI
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		
	情報処理センター(常盤センター)空調設備取設		5	30			〃		
昭和63年	工学部焼却炉上屋新営		6	225			〃		年報VIII
平成元年	工学部夜間照明装置および防球ネット設置		7	2			〃		年報IX
	工学部記念植樹		8	2.5			〃		

亀山構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小・幼稚園運動場整備		1	60	古墳竪穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報III
昭和60年	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	1			立会		年報V
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		3	2			〃		
	教育学部附属幼稚園環境整備(樹木移植)		4	1			〃		
昭和61年	教育学部山口附属学校汚水排水管布設	幼稚園・小学校部分 中学校部分	5	57 20	中世土壙か 河川跡か、杭列	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剝片、植物遺体	〃		年報VI
	教育学部附属山口小学校電柱移設		6	0.5			〃		
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張		7	40			〃		年報VII
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剝片	〃		年報VIII
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴、河川跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、須恵質陶器、黒色土器、掻器、二次加工のある剝片、使用痕のある剝片、剝片、石核、砥石	事前		年報IX
	教育学部附属幼稚園バレーボールコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		11	170	弥生溝状遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、剝片、石核	〃		

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校自転車置場移設		1	50	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報III
昭和59年	教育学部附属光小・中学校焼却炉新営		2	1			立会		年報IV

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和60年	教育学部附属光中学校外灯改修		3	1		土師器	立会		年報V
昭和61年	教育学部附属光小学校創立記念事業(ブロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報VI
昭和62年	教育学部附属光中学校グランド防球ネット設置		5	2	弥生土器、土師器、瓦質土器、土師質土器、瓦		〃	御手洗湾採集	年報VII
昭和63年	教育学部附属光小学校遊器具移設		6	10		土師器、土師質土器、陶磁器	〃		年報VIII
	教育学部附属光小学校屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶磁器、土鍾	〃	御手洗湾採集	

その他の構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(m²)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和59年	学生部ボート艇庫合宿研修所整備	宇部市小野湖		0.5			立会		年報IV
	学生部ヨット艇庫合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町		80			〃		
昭和60年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町		7			〃		年報V
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉		35	杭		〃		年報VI
	経済学部宿舎	山口市旭通り		1		土師質土器	〃	6号宿舎	
	公共下水道切替	山口市水の上町		7		瓦	〃	2号宿舎	
昭和63年	経済学部宿舎公共下水道切替	山口市白石		1		須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃	7号宿舎採集	年報VIII
平成元年	本部1号職員宿舎公共下水道切替	山口市水の上町		1			〃		年報IX

※ 文献① 山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(1976年)。

※ 昭和41年以降、吉田構内においては工事に際し、随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の調査分については調査名をすべて把握しているわけではなく、注意されたい。

Summary

This report accounts the results of archaeological researches in nineteen excavated areas located on campus in 1989.

As appendix, it carries another report of excavation in relation to the construction of the buildings at the Handicapped Children's School in 1979, summarization of the excavation at "the Preserved Site" on the Yoshida campus, and miniature clay imitations and replicas of various objects.Yamaguchi University Archaeological Museum was established as part of the cross-faculties public facilities of the University in 1978. We refer to a plan from the conference of the Management Committee first and gain approval. We then carry out the research in relation to the constuction work on campus. That's why our reserches are helpful to reconstruct the past society, environment and so on.

The current year we carried out researches as follow :

1 Researches on the Yosida campus

(1) Excavation in relation to the construction of the lighting system

We found a dicth, post hole in the middle Kofun period, and three layers contained objects from the Yayoi to the Heian period. We have discovered several dwelling pits around this area in the past, it has became a new evidence which there has been settlement enlarging for southwest in the middle Kofun period. We newly enearthed a Mutsure-type salt-making pottery to be able to make clear the relation of demand and supply, and circulation of salt from the 8A.D. to the 9A.D. on the Yosida campus.

(2) Examinations under construction

We fuond features, layers contained objects in six excavations. As for the excavation in relation to the repair of the boiler system at the Yosida Dormitory, we discovered some flakes made of Obsidian from Hime island in the Jomon period. Until now we have unknown the settlements in this time, we have carefully got to excavate at this time of construction around these areas. As for the excavation in relation to setting up nets on the baseball ground and establishment of the fireplug, we found a post hole dating from the Yaoi to the Kofun period. It was confirmed that the settlement in these time distributed "the Preserved Site" to the baseball ground. As for the excavation in relation to the repair of the drain pipes around Gymnasium and the environmental adjustment at the University Hall's garden, we discovered a ditch from

the Yaoi to the Kofun period. The former has 4.8 meters in breadth, and flows from northeast to southwest. Specially this ditch became to preserve at this point after consultation of the authorities concerned.

2 Researches on the Kogushi campus

We carried out excavation in relation to the construction of the MRI eguipment at the University Hospital, found several stone implements such as side scraper, microblades, retouched flakes, and core. At the ward land contiguous to this excavational point in the past we enearthed backed blade, side scraper, retouched flake and so on, we guessed that these stone tools belonged to the Paleolithic age by the form of stone implemnts and a great variety of the quality.

3 Researches on the Tokiwa campus

We excavated two points, but could not find any structural remains and artifacts for cutting of the ground around here.

4 Researches on the Kameyama campus

We excavated in relation to the laying drain pipes under ground at Kindergarten and Yamaguchi Elementary School. As the result of the excavation, we found a river in the early Kofun period and three dewlling pits, ten pits for burial, some ditches, post holes dating from the Yayoi to the middle Kofun period. There are many artifacts kinds of Yayoi potteries, Haji wares, Sue wares, and so on. It was confirmed that layers contained artifacts extensively distributed in the south area at Yamaguchi Elementary School. Furthermore we carried out examination under construction in relation to the laying drain pipes under ground, disovered a ditch and post in the late Yayoi period. A ditch flows from east to west more than 5.9 meters in breadth. We have discovered a ditch in the same time at the western area, but we doubted whether they were same one for flowing of opposite direction.

5 Researches on the another campus

We examined under construction in relation to the laying drain pipes under ground at the dormitory located in Mizunoue town, Yamaguchi city, but we could not any structual remains and artifacts.

By the excavation in relation to the construction of the buildings at the Handicapped Children's School , we discovered a lot of ditches mostly in the late Yayoi period, two pits for burial in the late Jomon period, and many Yayoi potteries, a few Jomon pottery and so on.

Fig. 84　吉田構内地区割および調査区位置図

Fig. 85　山口大学小串構内調査区位置図

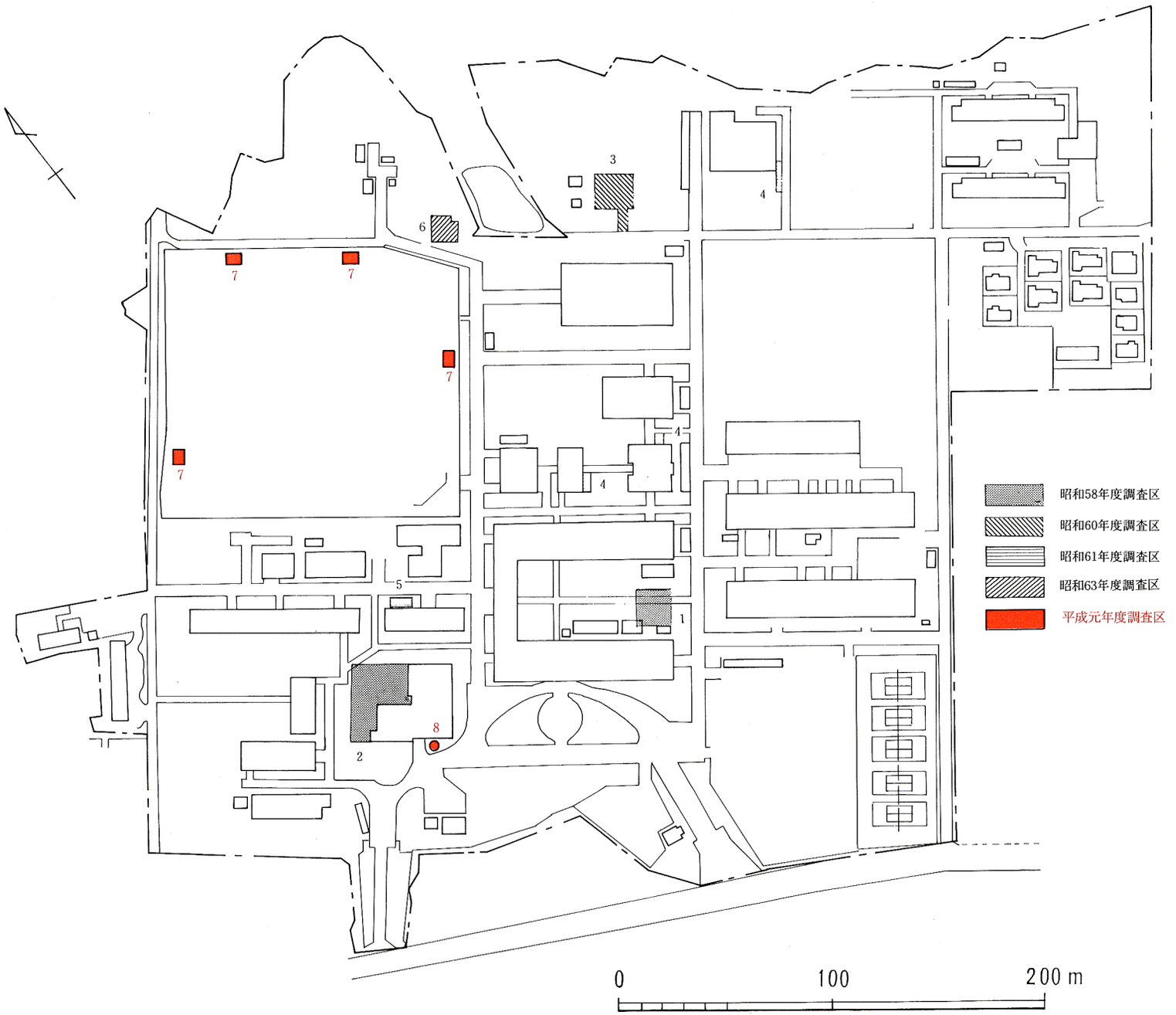


Fig. 86　山口大学常盤構内調査区位置図

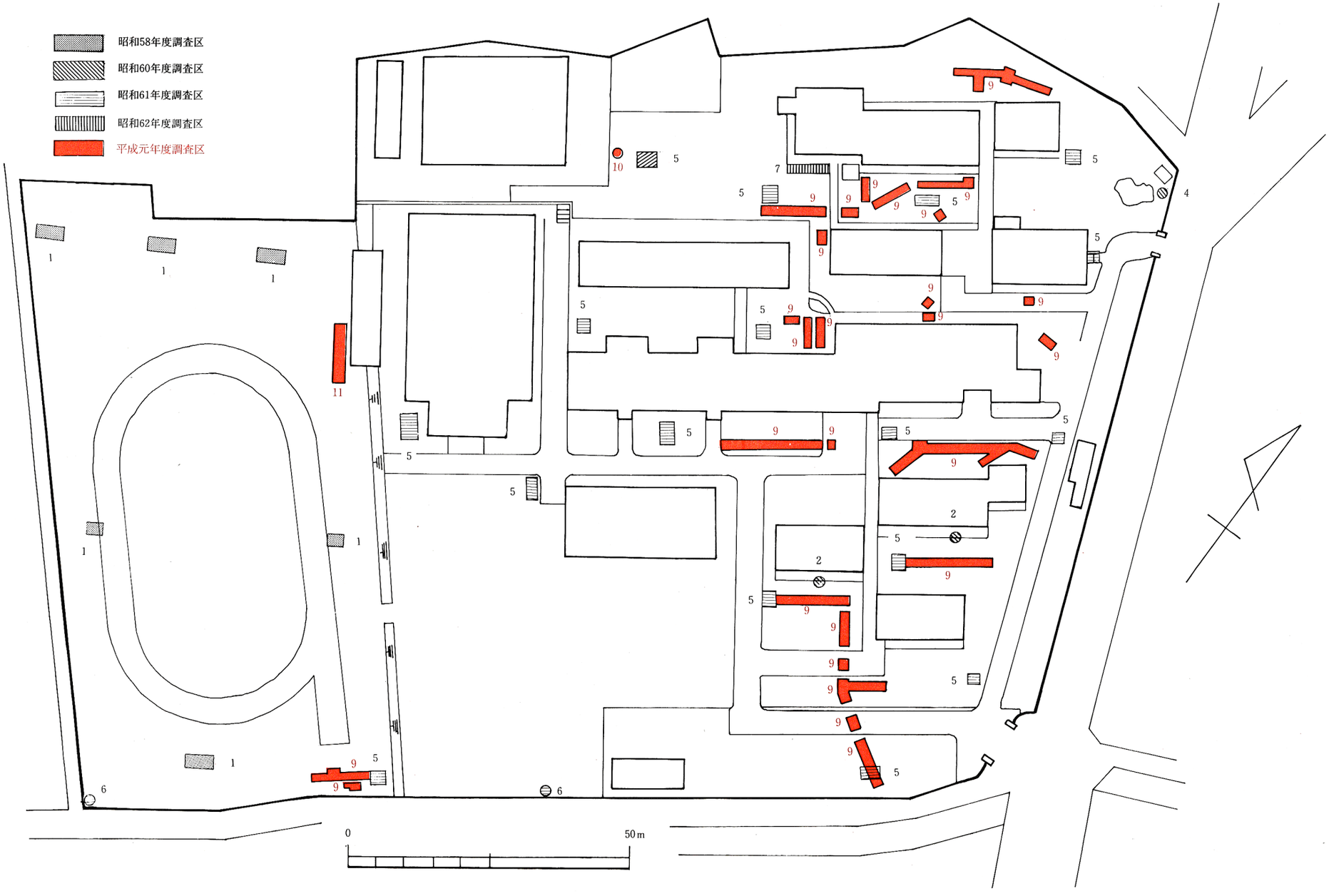


Fig. 87　山口大学亀山構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

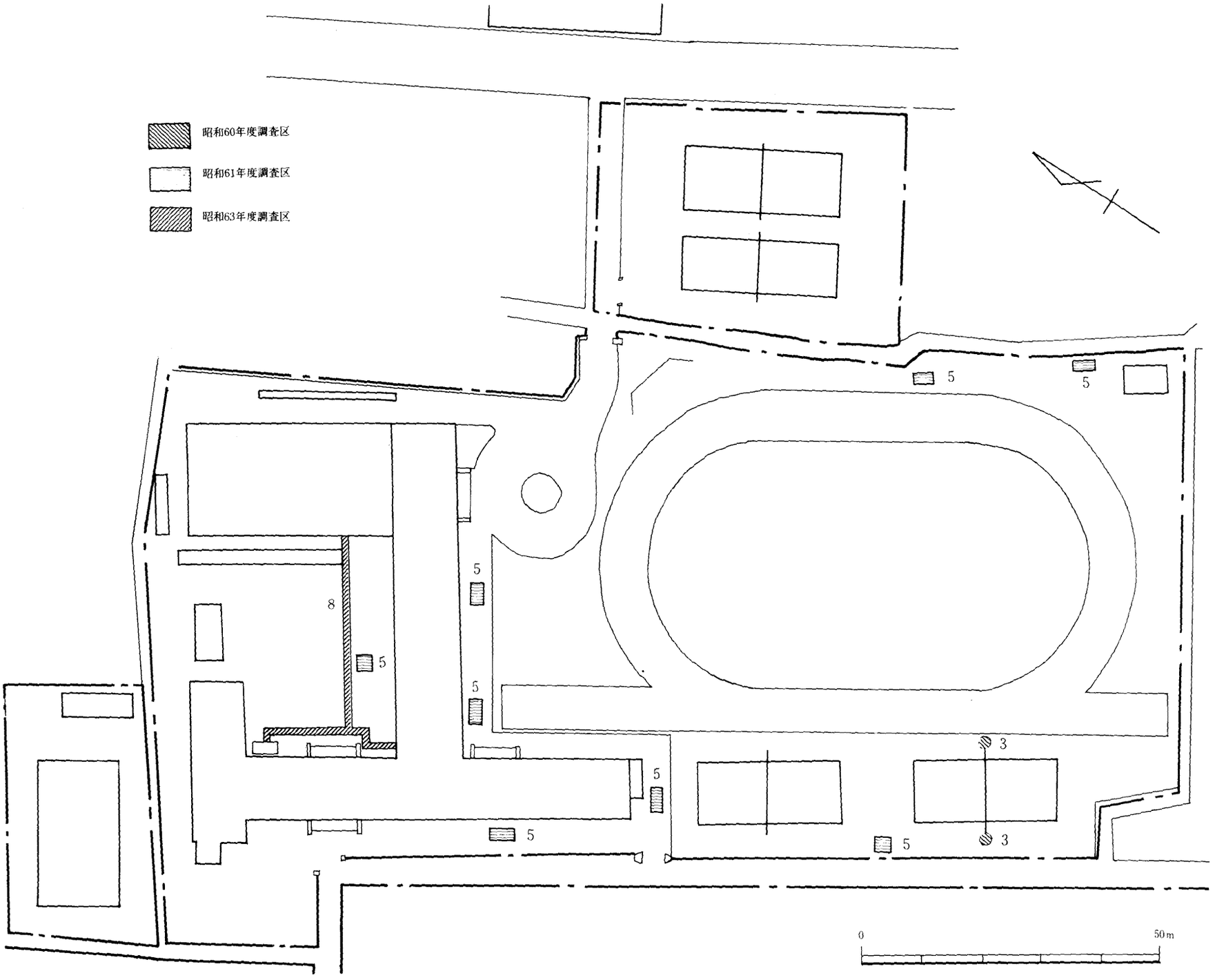


Fig. 88　山口大学亀山構内（中学校）調査区位置図

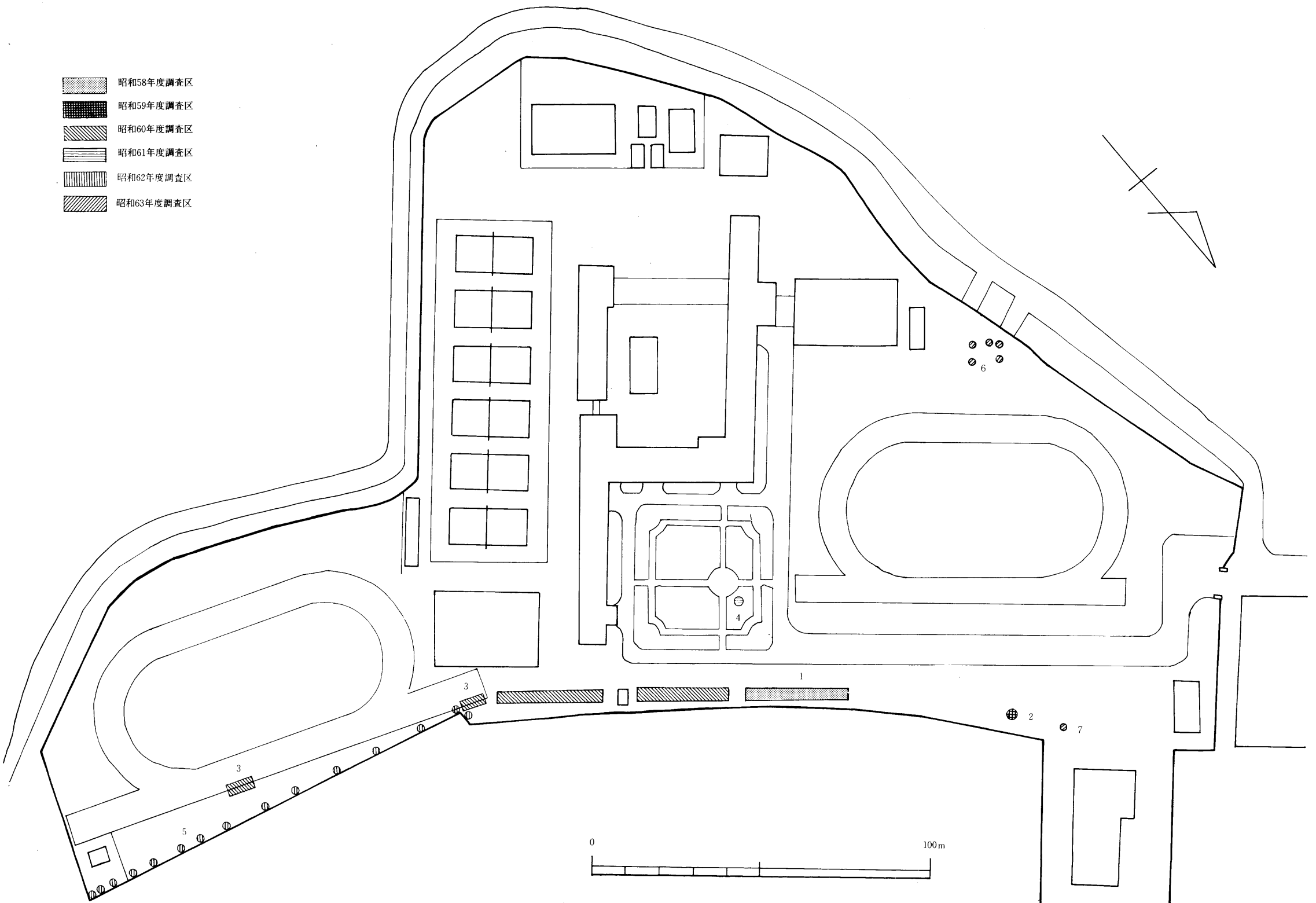


Fig. 89　山口大学光構内調査区位置図